

政治家蔣経国の原点
——ソ連経験と贛南の実践——
中村達雄

横浜市立大学大学院 国際文化研究科
2015 年度

審査委員

主査：小野寺淳 教授

副査：山田俊治 教授

高橋寛人 教授

山根徹也 准教授

松本郁代 准教授

金子文夫 名誉教授

政治家蔣経国の原点
——ソ連経験と贛南の実践——

序章	蔣経国研究の射程(3)
	緒言——蔣経国の原点を求めて(3)
	第1節 研究の課題と意義(6)
	第2節 論文の構成(9)
	第3節 先行研究および一次資料について(13)
第Ⅰ部	ソ連における留学と労働経験——第一次国共合作の成立とその崩壊下の蔣経国(22)
第1章	清末から民国前期における三つの留学行動——蔣経国の幼少年期を育んだ時代(24)
	はじめに(24)
	第1節 日本への留学行動——改良と革命、アナキズム(24)
	第2節 フランスへの留学行動——赴仏勤工儉学にみる共産主義思想の萌芽(32)
	第3節 ソ連への留学行動——共産主義者の養成(38)
	小結(43)
第2章	蔣経国のソ連における留学経験(45)
	はじめに(45)
	第1節 モスクワ孫逸仙大学——中国人トロツキストの源流(45)
	第2節 孫逸仙大学の紛争と蔣経国の政治生活(54)
	小結(65)
第3章	蔣経国のソ連における労働経験(67)
	はじめに(67)
	第1節 国内流転(68)
	第2節 毛福梅への手紙(76)
	第3節 西安事変と蔣経国の帰国(79)
	小結(84)
第Ⅱ部	ソ連経験の実践——第二次国共合作下の蔣経国(85)
第4章	蔣経国の民国二十六年一対ソ感情の動揺(86)
	はじめに(86)
	第1節 帰国の実現(87)
	第2節 民国の政治舞台に登るための共産主義の払拭(88)
	第3節 二篇の回想録に見る蔣経国の相矛盾する対ソ観(92)
	小結(95)
第5章	蔣経国の贛南における初期派閥の形成について(96)
	はじめに(96)
	第1節 新贛南の建設と派閥育成(97)
	第2節 三民主義青年団江西支団の設立準備と康澤系の介入(98)
	第3節 初期派閥の確立(104)
	小結(105)

第6章 新贛南の建設——蔣経国の江西省第四行政区における新政(108)

はじめに(108)

第1節 新政の前提(109)

第2節 新政の展開(111)

小結(121)

終章 蔣経国像の検証(124)

はじめに(124)

第1節 蔣経国のソ連経験にみる共産主義の獲得と挫折(124)

第2節 贛南の実践(127)

第3節 蔣経国の台湾統治と民主「転型」(130)

小結(146)

参考文献一覧 (148)

序章 蔣経国研究の射程

緒言——蔣経国の原点を求めて

1、蔣経国の初任地——贛州とその周辺の雩都、瑞金

江西省の南部を北流する章水と貢水に街の東西を挟まれながら中州のように存在する贛州は、蔣経国がソ連から帰国して督察専員という地方政治の役職に就いた記念すべき小都である。その東方には雩都と瑞金の小さなぎわいが暗闇に灯る孤光のように寂しく展開している。ここは中国共産党が支配する中華人民共和国の揺籃とでも称すべきもうひとつの革命の聖地¹なのだ。1927年4月12日、蒋介石が上海で発動した反共クーデターで第1次国共合作が崩壊し、地下にもぐった中共はふたつに分裂する国民政府の所在地だった武漢と南京の喉元に位置する江西省南昌市で蜂起し、その後は拠点を都市から農村に移して江西、湖南、福建の各省を中心に根拠地を設け、瑞金郊外に中華ソヴィエト臨時中央政府を構築した。瑞金周辺の雩都や贛州、そして福建省側の長汀県などにも中華ソヴィエトの遺址が散在するのはそのためだ。

蒋介石は全国統一の一環として、江西省に拠点を築いた中国共産党に対して前後5回にわたる掃共作戦（1930年12月～34年10月）を実施し、各根拠地を包囲、攻撃した。これに耐えきれなくなった共産党軍は1934年10月16日未明、中華ソヴィエトを放棄して雩都県の郊外を流れる貢水の河畔に隊列を整え、全行程1万2千キロの「長征」（ロングマーチ）と自称する新しい根拠地を模索するための行軍を開始した。兵員は複数のルートに別れて進み、1年後に陝西省保安県の黄土高原にたどりついて延安に根拠地を再構築するまで湖南、貴州、雲南、四川、青海、甘粛などの西部各省を大きく迂回し、国民党軍をかわしながら進軍した。この行軍が「大西遷」とも称される所以である。

瑞金は福建省との省境にある山あいの小都だ。黄沙河のほとりに広がる市街は河の名前のとおり黄塵にまみれ、中国の田舎町の風情を醸しだしている。西郊外には近代建築の中央蘇維埃（ソヴィエト）共和国歴史記念館が威圧するように屹立しているが、経済発展に邁進する風潮のなかでここを訪れる人の数は少ない。さらに進むと中央革命軍事委員会旧址や紅井革命旧址郡景区があり、中華ソヴィエト時代の国家機関に使われていた古い建築群が田園風景に溶け込んでいる。

雩都の町は瑞金からバスで西行すること3時間、貢水に架かる長征大橋を渡ったところからはじまる。ここは南昌蜂起直後の秋収蜂起に失敗した毛沢東が井岡山にこもって紅軍を組織し、そこで朱徳の軍隊と合流して下山し、部隊を駐屯させた地でもある。現在の雩都は中華ソヴィエトの臨時中央政府が置かれた瑞金を引き立てる影の町で、中国人でも知る人は少ない。瑞金から雩都へとつづく山岳地帯を抜けた大地はやがて平坦になり、1時間ほどでふたたび北に湾曲する貢水と遭遇し、対岸には贛州の歴史的な街並みが水面から立ち上がった霧のなかにぼんやりと見えてくる。

¹ 第一の革命の聖地は、長征後に中共が根拠地を築いた陝西省延安とするのが一般的である。

贛州は宋代に起源がある城壁や浮き橋が残る静かな古城である。この街もまた中華ソヴィエトの根拠地のひとつだったのだが、むしろ日本でもなじみの深い陽明学を確立した王陽明が活躍したところとして知られる。陽明学は明の中期に宋学（朱子学）を批判的に継承発展させた理学の思想体系だ。その理学の理論的な中核を築いたのが周敦頤で、贛州に隣接する大余県で理学の根本となる『対極図』および『対極図説』などを確立した²。朱子の理学も王陽明のそれも、ともに周敦頤の理論を下敷きにしている。つまり、孔子が考え出して国教化された儒学の最終発展形態であった朱子学や陽明学の揺籃の地は贛州だったといえよう。蒋介石は日本で陽明学と出会い、その思想に深く心酔した。

贛州市街地は広東、湖南省境の嶺南山脈に源を発する章水と福建省の武夷山脈から流れ出した貢水に西と東の岸辺を洗われ、城壁が水際をぐるりと防衛している。街を東西から包み込むように流れるふた筋の大河は街の北端に屹立する八景台の真下で合流し、贛江と名前を変えて江西省の大河となる。その岸辺を護る城壁の内側には贛南における蔣経国の旧宅が水面を俯瞰するように建っている。贛江の流れに乗って北に向えば南昌市、そして鄱陽湖を擁する九江市を通り抜け、揚子江を経由して武漢や南京、上海に達する。さらに大運河に漕ぎ入れば、天津や北京などの北方にも行くことが出来るのだ。中国南部から北に向って中国統一に乗り出した国共両党は、江西省で激しく戦火を交えた。それは贛江を育んだ江西の大地が、中国大陆の南北を内陸水路で結ぶ革命の要路だったことも原因しているのだろう³。

この街、贛州で蔣経国は夙に有名である。市民は蔣経国の名前に「先生」という尊称を付し、親しみをこめてよぶ。中国と台湾が海峡をはさんで厳しく対峙した時代の台湾の最高指導者に、この街の人々はなぜかくも厚い尊敬の念をいだいているのか。本論はこの疑問にいどむ長い作業となるだろう。

2、溪口鎮からの出発

蔣経国の故郷は浙江省の寧波郊外にある山里、奉化県溪口鎮だ。そこで蒋介石の薫陶を受けて幼年時代をすごした。そして上海、北京で中学時代を送り、革命の大志を抱いてモスクワへ向かった。

寧波市は古来、明州という港町として諸外国とつながった。華中地域においては、現在でも上海に次ぐ国際埠頭の北侖港を擁する浙江省の海の表玄関である。その寧波の市街地から内陸にむかって30キロほども南下すると、そこにはもう四明山系につらなる大地の隆起がはじまり、山麓から東シナ海にむかって流れる剡溪の清流が蔣氏一族の故郷溪口鎮の錦景に花を添えている。清国時代の古民家が櫛比するこの浙江省の片田舎を中国の名鎮に格上げしたのは民国の領袖蒋介石と、その子息蔣経国の功績にほかならない。剡溪の河畔にそってのびる鎮のメインストリート武嶺路の南端には中国の関内にある他の郷鎮とおなじように人馬の出入りを督察した武嶺門が佇立し、その傍らには蔣父子が学んだ武山学校、

² 島田虔次『朱子学と陽明学』（岩波新書、1967年）を参照。

³ 2009年3月、筆者が現地を取材して見聞した内容による。

そして数区画離れたところに蒋介石の居所であり、蔣経国の生家でもあった豊鎬房⁴がある。鎮の西郊にせまる四明山系の林間には、蔣氏一族の台湾遷占に際して移設が叶わなかった蒋介石の生母王采玉の墳墓が祭られている。蔣経国の生母毛福梅が永眠しているのは、福梅自身が仏教に帰依して溪口鎮央に建立した摩訶殿という寺廟の境内である。

大陸反攻を呼号した蒋介石はその死後、台北にほど近い桃園県郊外の慈湖畔にある陵寢に仮安置された。大陸を取り戻すまでは故郷の溪口鎮以外に埋葬することはできない、という国民党の政治的なポーズであろう。慈湖は大溪という清流に恵まれ、その風景は溪口鎮をつらぬく剡溪の美観と似ている。慈湖は大陸奪還を果たせなかった蒋介石が、生前にみずから選んだ永眠の地である。反攻奪還が叶わないなら、せめて故郷の山水を感じることのできる地で眠りたい、という懐郷心にちがいない。蒋介石が没したあとの数年間、慈湖畔の陵寢には多くの人が詣でて生前の総統を忍んだが、やがて訪れる人の数は激減した。蒋介石の13年後に永眠した蔣経国もまた、慈湖から数キロ離れた頭寮の陵寢におなじように仮安置され、そこは逝去直後ほどではないが現在も参拝の人が絶えない。没後数年で訪れる人の数が激減した蒋介石と、死後30年ちかくを経た現在も多くの人が詣でる蔣経国の陵寢風景は、両者の功罪に対する台湾人の評価が素直に表出された結果だろう。

蔣経国は、蒋介石とおなじように台湾の独裁者だった。ちがうのは蒋介石の過酷な独裁政治が大半の台湾人から「負」の烙印を押されたのに対し、蔣経国の独裁政治は多くの台湾人から「正」の評価を受けたことだ。どちらかと言えば「善政」を敷いたのである。よく台湾人の口の端にのぼる「人民が蒋介石を養い、蔣経国は人民を養った」というオーラルな謠言は、二人の独裁者が実施した政（まつりごと）の明暗をかくも見事に言い当てているのである。そしてその「善政」は、これから行論する蔣経国の12年間もの長きにわたったソ連における共産主義的な生活と、そのソ連経験を糧にして実施した江西省贛南（贛州）における新政にその源泉があると思われる。そのことは、本論を進める過程で少しずつ明らかになるだろう。

前世紀1970年代の劈頭、東アジアに覆いかぶさった冷戦構造の中で米国と中国の接触が秘密裏に重ねられ、その流れの中で1971年10月には国連でアルバニア案が通過し、中華人民共和国の国連代表権が承認された。翌年2月にはニクソン大統領が訪中し、米中共同コミュニケを発表して米中接近が劇的に実現する。いわゆる「1972年体制」⁵が始動したのだ。この結果、中華民国は国連における中国代表権を失って追放され、多くの国家との間にあった外交関係をも喪失する。蔣経国はこうした中華民国の国際的な孤立が加速する

⁴ 蒋介石は溪口鎮の玉泰鹽舗で生まれたが、翌年、鹽舗は火災で焼失し、蔣一家は溪口鎮を東西に二分する名川剡溪に沿って走る武嶺路傍の豊鎬房に引っ越した。現在は蒋介石の故居、蔣経国の生家として保存されている。

⁵ 「72年体制」とも表現される。1972年に発出された米中共同声明（上海コミュニケ）と日中共同声明などによって生じた国際社会における台湾の扱いに関するアレンジメント、すなわち①中華人民共和国と外交関係を持つ国家は台湾の「中華民国」を国家承認せず、これとの関係を「民間関係（非政府関係）」に限定する、②国連をはじめとする政府参加の国際機関は台湾の加盟を拒否し、中華人民共和国と国交のある国家も台湾のこれらの機関への参加を支持しない、という国際原則を指す。台湾研究者の若林正丈による造語である。若林正丈『台湾の政治』（東京大学出版会、2008年）5頁、367-368頁参照。

情勢下で行政院長に就任し、国際社会における台湾の存続という難題を背負った。

それまで中華民国を掌握する国民政府の正統性は、国民が政権を支持するという台湾内部からの承認というよりも、むしろ国連における中国代表権という外部要因によって強力に担保されてきた。国連の中国代表権を喪失した蒋経国は、行政院長と総統在職期間中を通じて台湾の奇跡と称賛された経済発展を誘導し、党外勢力である民進党の結党を黙認して政党、結社の自由を創出したのを皮切りに、長期戒厳令の解除、対中民間交流を部分的に解禁して「接触せず、交渉せず、妥協せず」という三不政策を放棄し、死の直前には新聞を自由化して報道規制を解くなど権威主義体制の枠組みのなかで大胆な自由化を断行した。これらの改革を通じ、それまで外部から調達していた政権の正統性を台湾内部に求めることに成功したのである。

すでに明らかなように、蒋経国は「1972年体制」という未曾有の危機に直面し、それを乗り越えるために蒋介石の権威主義体制を構成した幾多の堅牢な構造物をひとつひとつ解体してみずからの思想にもとづいた権威主義体制に再構築し、これに台湾人が好感したのである。矢継ぎ早の自由化が敢行されるなかで、蒋経国は台湾の国体護持に関わる「台湾独立」についてはこれを厳しく警戒し、容認することはなかった。これは蒋介石が呼号した大陸反攻が「1972年体制」のなかで実現の可能性をほぼ失ったあとも、第3次国共合作という形で穏やかな「祖国統一」を企図していたことの証左であろう。事実、蒋経国は香港を介してたびたび中共政権に密使を送り、鄧小平との間で「中国はひとつ」という原則にそって第3次国共合作の可能性を模索している⁶。密使を介した鄧小平との海峡対話が佳境をむかえたとき、蒋経国は持病の糖尿病が急変して彼岸に渡ってしまった。憲法の規定により本省人の李登輝が後継の総統に就任し、蒋経国が断行した自由化の土壌の上に「台湾経験」⁷と称賛される民主化の花を咲かせた。

上述した台湾の民主化を体制内から誘導した蒋経国の原点はどこにあったのか。それを探るために、本論はこれから蒋経国のソ連経験とそれにつづく新贛南の新政の舞台となった贛州にその足跡をもとめていくことになる。

第1節 研究の課題と意義

1-1 研究の課題

蒋経国は歴代総統⁸の中で台湾の経済発展と民主化に先鞭をつけたという意味では台湾社会と政治にもっとも貢献したとも評価できるが、その人物の青年期における思想や足跡、業績などに関する研究は充分とはいえない。とくに日本においては、甚だ貧弱という表現

⁶ 香港の実業家で、戦前蒋経国の直系の部下だった沈誠を複数回北京に派遣し、中共指導部と「祖国統一」について協議した事実は、中国共産党対台湾工作指導室弁公庁の主任を勤めた楊斯徳が2005年5月に中国誌に証言して明らかになった。その顛末は、魏承思『兩岸密使50年』（香港・陽光環球出版、2005年）に詳しい。

⁷ 李登輝元総統が台湾の民主化過程を指して使いはじめた言葉だと思われる。李登輝『台湾の主張』（PHP研究所、1999年）122頁参照。

⁸ 台湾の第1代総統は蒋介石（1950年3月～1975年4月）、第2代は蒋介石の残りの任期をつとめた嚴家淦（1975年4月～1978年3月）で、蒋経国は第3代総統である。

が妥当だろう。上に示したように「1972 年体制」は蔣経国の台湾に国家存亡の危機をもたらしたが、おなじように日本の台湾あるいは蔣経国を研究する環境にも打撃を与えた。国際社会が中華民国から中華人民共和国にメンバーシップを切り替えたことにより、日本の学術界もその研究の視角を中華人民協和国に移し、多くの研究者が中国大陆に研究対象をシフトしたからである。そうしたなかで少数のすぐれた才能が台湾研究の分野に踏み止まり、地道な研究活動を維持して台湾スタディの豊かな今日的成果を蓄積してきたわけだが、中国研究に比してその人的ボリュームや研究資金などに限界があったため、研究を深めることが出来なかった部分がモザイク状に残存している。それは台湾学の一部を成す蔣経国の研究にもそのまま言えることである。蔣経国研究の推進を目論む本論は、まさにそれらのいまだ陽の当らないモザイクの一片を埋めようとする小さな試みになることを目指している。

蔣経国研究が進まなかった理由として、台湾内部の事情にも言及しておくべきだろう。それは江南暗殺事件とよばれる政治テロルのことだ。江南（本名：劉宜良）は中華民国が台湾に遷占した 1949 年末から米国に移住する 1967 年までの 17 年間、2 度にわたり蔣経国の下で工作にたずさわっている⁹。その 17 年間に蔣経国は総統府機要室資料組（国家安全局の前身、1950 年代初頭に設立）や中国青年反共救国団（1952 年就任）の主任、そして国防部長などの要職を歴任した。総統府機要室資料組とは政治警察（特務）のことで、対外的な情報工作、政権内部の政敵に関する情報蒐集、監視、逮捕、拘禁、テロルなどを主要な任務とした。江南はこれらのいずれかで蔣経国の部下であったはずだ。江南が著わした『蔣経国伝』は、留学先のアメリカン大学国際関係研究院に博士論文として提出を予定していた論考がベースになっている。江南は博士論文の執筆に際して米国ニュージャージー州の中国国際基金회에奨学金を申請したが、台湾籍の理事に反対されて実現しなかった。政治的に敏感すぎる、というのが却下理由だった。学位取得をあきらめた江南が論考を評伝に書き換えて出版したのが、蔣経国研究の嚆矢とも言える『蔣経国伝』である。まだ、台湾行政院新聞局が蔣経国の著作や言論などをまとめた『蔣経国先生全集』が未刊で資料的な制約があった時期にはじめて世に問われた本格的な先行研究である。江南はこの著作のなかで蔣経国の出自について書いたわずか数行が災いし、米国サンフランシスコの自宅前で台湾の情報機関が放った黒社会の代理人に暗殺された。その後、台湾では蔣経国に関する著作や論考はなかばタブーになり、蔣経国の直系だった漆高儒の国民党史観にもとづく評伝¹⁰が出たのは蔣経国没後の 1990 年代になってからである。江南暗殺事件は、台湾で蔣経国研究を停滞させる原因のひとつとなった。

本論は、上に述べたような理由で研究が深められていない蔣経国の周辺を掘り起こすところに意義を見いだそうとするものである。その過程で考察すべき課題は多岐にわたるが、蒋介石が台湾に築いた権威主義体制を蔣経国色の豊かな権威主義体制に再構築し、さらに政治と経済の自由化を矢継ぎ早に進めるに到った蔣経国の思想的な源流を詳らかにすることを論考の中核（本論第 I 部＝蔣経国のソ連経験）とする。あわせて、ソ連経験を実践に

⁹ 江南『蔣経国伝』（美国論壇社出版、1984 年）序文 7 頁。江南の『蔣経国伝』はその後蔣経国が逝去した 1988 年の 6 月に李敖出版社から、2001 年に前衛出版社から再版されている。

¹⁰ 漆高儒『蔣経国的一生——從西伯利亞奴工到中華民國總統』（台北・伝記文学社、1991 年）、同『蔣経国評伝——我是台灣人』（台北・正中書局、1997 年）などがある。

移した江西省贛南における社会改造の軌跡（本論第Ⅱ部）を考察する。

本論は蔣経国のソ連時代および贛南在職時において思想的進化、揺らぎ、起伏、変遷などが激しく現象した事跡に着目し、蔣経国の行動、発言、他人の評価から蔣経国の政治的、思想的な心情を抉り出し、等身大の蔣経国像をあぶりだして蓄積の少ない蔣経国研究を充実させる狙いがある。蔣経国の行動とは私生活および公務のそれを指し、発言は演説、記者発表、談話、著作、私信、日記などを含むものとする。他人の評価とは、同時代人が下した蔣経国に対するオーラルな評価、あるいは活字になった雑誌や新聞記事、書籍、日記、書簡などを想定している。

1-2 研究の意義

すでに述べたように、蔣経国については未だ充分に解明されていない部分がモザイク状に残っている。そのモザイクのいちばん大きな部分が蔣経国のソ連経験であり、江西省の贛南における事績である。とくに贛南期については中国大陆にごく少数の口承資料があるだけで、学術研究はほとんど存在していない。幸い前世紀90年代に台湾行政院が大部の『蔣経国先生全集』を編集・発行し、そのなかにはごくわずかだが蔣経国がソ連時代を回想した2編の回憶録とともに、贛南時期についてはそこで実施された蔣経国の新政に関する一次資料が比較的多く採録されている。本論はこれらの資料を核とし、さらに前述した口承、あるいは二次資料のなかに散らばる関連情報を拾い集めて蔣経国の原点とも言えるソ連経験と贛南の事績を資料がゆるす範囲でつまびらかにしたい。そのことはこの分野で未だ明らかにされていないモザイク部分を学術研究面から補填することであり、蔣経国研究そのもののさらなる充実にとって意義のあることと考える。

蔣経国は国民党派遣の留学生として1925年10月19日に上海からモスクワ留学に旅立った。出発に先立ち、弱冠16歳の少年が国民党上海執行部で同党に宣誓入党している。ところが翌月末、シベリア経由でモスクワに到着し、孫逸仙大学に入学するとすぐに共産主義青年団に入団し、やがて左翼反対派（トロツキスト）の留学生秘密組織に加わり積極分子として活動をはじめた。蔣経国のソ連におけるその後の12年間は左翼反対派と袂を分ったあともソ連共産党の候補党员となり、共産主義者として生活している。蔣経国とおなじように国民党から共産思想に走った例は、たとえば邵力子（孫逸仙大学の国民党側理事、留学生）や王凡西、鄭超麟、張学良らの名前を挙げることができる。留学生からトロツキストになった者の数は枚挙にいとまがない。

蔣経国は帰国後、江西省の贛南で「新贛南の建設」という壮大な社会改造事業を実施した。それはソ連が工業化と農村の集団化を目的に行った五カ年計画を贛南の実情に合わせて模倣したものと思われる。つまり蔣経国は帰国後もソ連的な手法で贛南の改造計画を推進したことになる。このことは第5章で「新贛南の建設」を検討するなかで明らかになるはずである。この建設事業の片腕になって支えたのは、蔣経国のソ連時代の留学生仲間（ほとんどが左翼反対派）だった。蔣経国がソ連時代に共産主義者であったことや、贛南時代にソ連的な手法で社会改造建設を進めたことなども未だ明らかにされていないモザイク部分である。これを検討することも国民党と共産党の関係史、ひいては中華民国史に新たな知見を与え、台湾スタディそのもののさらなる充実にとって意義のあることだろう。

第2節 論文の構成

本論文は序章と終章を含めて2部8章に結論を加えた構成とする。それら各章の執筆意図は以下のとおりである。

第Ⅰ部 ソ連における留学と労働経験——第一次国共合作の成立とその崩壊下の蔣経国
＜第1章＞ 清末民国前期¹¹における三つの留学行動——蔣経国の幼少年期を育んだ時代

蔣経国の生涯は、国家権力の頂点をきわめたひとりの人物の栄光と蹉跌を私たちに提供してくれている。栄光とは、台湾の総統に登りつめて中華民国の台湾化に着手し、蒋介石が作り上げた権威主義体制に風穴を開け、政治の民主化を方向づけた成果のことである。これに関して、本論では終章第3節で考察した。

それでは蔣経国の蹉跌とはなにを指すのか。蔣経国はソ連に留学すると左翼反対派（トロツキスト）の秘密組織に加わり、その後トロツキーがスターリンとの権力闘争に破れてトロツキズムそのものがソ連と中国でタブーになり、そのとばっちりを受けて留学先のモスクワ孫逸仙大学の紛争に巻き込まれたり、あるいは中共モスクワ支部の王明やソ連の治安当局から幾多の迫害を受け、モスクワ近郊の貧しいシコフ村やアルタイ金鉱に送られて苦役に従事させられた。そしてやっと獲得した安定した職業とともにソ連共産党候補党員の資格も剥奪され、結局、12年間もソ連に留め置かれて苦渋をなめたのである。これら一連の苦難が蔣経国の蹉跌と言えよう。その蹉跌の部分には不明な点が多く、いまだ満足出来る系統的な研究が出ていない。それは蔣経国が在ソ12年間のいずれの時期に味わった、いかなる蹉跌だったのか。これらの問いは本論の第2章と第3章で検討する課題であり、詳細は行論の過程で明らかになるだろう。

しかし、その前に蔣経国に蹉跌をもたらしたモスクワ留学について考察するとき、そもそも蔣経国はなぜモスクワに向かったのか。当時、中国人の留学先として人気のあったフランスや米国、あるいは日本ではだめだったのか、という疑問がわいてくる。

第1章では、蔣経国に蹉跌をもたらしたモスクワ留学の動機を清末から民国中期にかけて流行した中国人の三つの留学行動¹²に求め、当時の蔣経国の思想状況とそれに由来した行動が決して偶然のなりゆきではなく、政治、社会、国際環境の中で周到に準備された必然であったことを明らかにする。

清末から民国中期までの激動した30年余年間には中国人による日本留学、フランス勤工儉学、ソ連留学という三つの大きな留学行動が起った。これらの留学行動をあつかった先行研究はいずれもそれぞれの留学行動を単独であつかい、これらを相互に関連したムーブ

¹¹ 建国（1912年）から蒋介石が南京国民政府を成立させる1928年までを前期、それ以降を後期とすることが多い。区分は研究者によって微妙に異なる。中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部、1999年）まえがき（i）、および同『民国後期中国国民党政権の研究』（同、2005年）まえがき（i）参照。

¹² 中国人の組織的な日本留学がはじまったのが1896年4月であり、赴仏勤工儉学運動は1912年5月、モスクワのスターリン東方共産主義者大学への留学が開始されたのは1921年4月、同じくモスクワの孫逸仙記念中国勤労者大学への留学が開始されたのが1925年10月である。

メントとして考察する視点を提示していない。三つの留学行動は、中体西用論を中核とした洋務、富強運動にはじまり、立憲思想、排満民族主義、アナキズム、三民主義などが浮沈するなかで相互に影響しあいながら展開し、最終的には共産主義国家ソ連の誕生に触発されてマルクス・レーニン主義、あるいは三民主義に収斂していく。その意味で、これら三つの留学行動は発生した時期は異なるものの、それらを相互に繋がりのあるひとつの流れとして検証しなおす必要がある。

本論は三つの留学行動を中国の近現代を縦断した連続性のある思想的連鎖としてとらえ、それぞれの留学行動の発端や展開、着地点、そして留学行動が最終的に中国国民党、あるいは中国共産党の成立とその後の党活動に収斂されていく過程をいくつかの論点にしばって検討し、それを蒋経国のソ連における留学経験と労働経験に関する考察の前提条件としている。

<第2章> 蒋経国のソ連における留学経験

蒋経国は孫逸仙大学に入学後すぐに中国共産党モスクワ支部の共青团組織に入団し、やがて左翼反対派（トロツキスト）の留学生秘密組織に加わった。スターリンの台頭で同大学に在籍したトロツキ派教職員と学生に対する圧力が強まり、同派の重鎮で学長だったカール・ラデックが解任され大学がスターリン派の支配下に入る。それと時をおなじくして蒋経国も左翼反対派と袂を分かち、その後は赤軍への入隊を経てレニングラードのトルマトコフ中央軍政学院（フルンゼ陸軍大学）に在籍した時期に入党申請し、ソ連共産党の候補党員資格を取得する。しかし1936年9月には左翼反対派の活動家だった過去を問われ、ソ連共産党ウラル党委員会によって候補党員資格を剥奪されるのだが、辛くも西安事変で国共関係が改善したことによりそれ以上の責めを負うことなく12年ぶりの帰国が実現した。

ソ連滞在12年間の初期において国民党派遣の留学生だった蒋経国が左翼反対派に与していったのには如何なる要因があったのか、左翼反対派の秘密組織に加わった蒋経国はどのような活動をしたのか、左翼反対派の活動家だったという事実がその後の蒋経国のソ連生活にどのような影響をもたらしたのか、などについて上海クーデターの余波による孫逸仙大学の紛争と複雑な人間関係、「江浙同郷会」事件、ソ連共産党への入党と党籍剥奪などに拠りながら考察する。あわせて、モスクワで生まれた留学生の左翼反対派が帰国したあと、中国で如何なる活動を展開したのかについても検討する。

<第3章> 蒋経国のソ連における労働経験

本章はトルマトコフ中央軍政学院を卒業したあとも帰国がかなわず、レーニン大学の中国人留学生地方訪問団の副指導員、モスクワのティナマ電気廠、おなじくモスクワ郊外のシコフ村集団農場、スヴェルドロスク（ウラル地方）の駅荷役係、アルタイ金鉱、そしてふたたびスヴェルドロスクのウラル重機械工場と六つの職場を転々とした。最終的にウラル重機械工場の副工場長と工場併設の『重工業日報』編集長の職に就いた蒋経国がスターリンの大粛清の影響を受けてソ連共産党候補党員資格と職業を剥奪され、1937年4月、失意のうちに帰国するまでの7年間に経験したいくつかの苦難をたどる。その間における蒋経国の労働経験を通じたソ連国家に対する期待と失望、挫折なども検証する。同時に、中

共モスクワ支部の王明が蒋介石を陥れて「安内攘外」政策に打撃を与え、抗日気運を醸成するために捏造したとされる蔣経国の「生母毛福梅への手紙」の真相を検討する。あわせて、蔣経国の帰国を実現した西安事変についてもその経緯に検討を加える。ここで検討する労働経験と第2章で検討する留学経験が帰国後の江西省贛南、あるいは台湾遷占後における蔣経国の政治活動の土台になっているものと思われる。

第Ⅱ部 ソ連経験の実践——第二次国共合作下の蔣経国

<第4章> 蔣経国の民国二十六年——対ソ感情の浮沈

西安事変に命運を左右された人物として張学良や蒋介石とともに、事変が中ソ関係に及ぼした影響の中で僥倖を得た人物として蔣経国の名前を挙げることができる。西安事変は、モスクワ留学以来12年間もソ連に留め置かれた蔣経国に帰国の道を開いた大事件でもあった。掃共から抗日に転じた蒋介石に好感したスターリンが、西安事変で蒋介石と交渉して事変の画策に深く関与した周恩来の依頼を受け、ソ連国内で12年間も塩漬けにした蔣経国の帰国を許可したからである。蔣経国は長期にわたって生活したソ連に別れを告げて帰国すると、それまでみずからの思想的な拠り所であった共産主義とも決別したとする見方がある。事実、蔣経国は帰国後に執筆した2篇の回想録のうちの1篇で共産主義への呪詛とともとれる激しい言葉をソ連共産党とソ連国家に投げかけている。しかしもう1篇の回想録では、同じソ連の党と国家に対する愛惜の感情をあふれさせているのだ。このように矛盾する心情を2編の回想録に並立させた意図はいったいどこにあったのだろうか。

本章は、蔣経国がスターリンに帰国願いを出してから帰国が許されるまでの過程をたどり、さらに帰国後の3ヵ月間にソ連で育んだ共産主義思想を蒋介石に払拭され、国民党の枠組みに合う三民主義の人材に再教育されていく過程を、蒋介石の書簡を使って考察する。また蔣経国が帰国後に著した2篇の回想録を検討し、帰国前後における蔣経国の意識の変遷を検証する。

<第5章> 蔣経国の贛南における初期派閥の形成について

本章は、江西省贛南における蔣経国の初期派閥の形成過程を検討するものである。蔣経国は蒋介石が国民党内における諸派閥の力関係を利用したのとおなじように、政策の実施に際してはみずからの直系派閥を積極的に活用した。国民党あるいは国民政府内の派閥構成は複雑で、自派閥を持たなければ権力の中枢に喰い込むことは難しかった。領袖の長子という圧倒的な地位は、派閥の構築を容易にもした。それでは蔣経国の権力行使を支えた直系派閥の基礎は、いつ、どこで、どのようにして構築されたのか。本章ではこのことを明らかにする。

<第6章> 新贛南の建設——蔣経国の江西省第四行政区における新政

ソ連から12年ぶりに帰国した蔣経国は故郷の浙江省奉化県溪口鎮に蟄居したあと初任

地の江西省南昌で約2年間の下積みを重ね、やがて贛南の第四行政区行政督察專員¹³に任命されて省政治の責任ある職務に就いた。蔣経国が計画立案した「新贛南の建設」は第1期（1940～43年）と第2期（1944～48年）に分けて実施された。その内容は農林業、工鉱業、商業などの各種産業建設、道路敷設や内陸水運、通信、郵便施設の整備を含むインフラ建設、教育、文化、医療衛生、救済事業、そして政治改革を含む壮大なもので、およそ地方政治にデビューしたばかりの新米職員に打ち上げることができるような簡単な政策ではなかった。では、蔣経国はなぜそのように困難な政治目標を設定したのか。国民党および国民政府の縦糸である職階と横糸として機能した派閥の縛りが厳しい状況の中で、新任の蔣経国が贛南における大胆な改革を断行して一定の成果を得ることができた社会的、政治的な環境はどこに存在していたのか。ソ連の社会発展モデルを模倣した新贛南の建設が目指した改革とは具体的にどのようなものだったのか。本章ではこれらの疑問を検討する。

終章 蔣経国像の検証

第1節と第2節で蔣経国のソ連経験を留学経験と労働経験に分け、贛南の実践を初期派閥の育成と新贛南の建設に分けて整理し、ソ連経験と贛南の実践がいかなる関係にあるのかを簡潔に考察する。ソ連経験が共産主義の獲得とソ連政治および社会の体験であり、新贛南の建設と初期派閥の育成がソ連経験を土台にして進められたことを明らかにする。

第3節では台湾時期における蔣経国の政治的な営為を簡潔に検討する。台湾の民主化は蔣経国がその最晩年に蒋介石が構築した堅牢な権威主義体制を解体し、体制内から民主「転型」を指向したことが契機となって次の李登輝政権で完成した。蔣経国はなぜ権威主義体制を放棄したのか。孫中山が定めた国家建設段階論、すなわち訓制から軍政に進み、最終的に憲政を達成するという方略に従い、期が熟したから民主憲政に踏み切ったのだ、というのがもっとも素直な見方だろう。ところが蔣経国は蒋介石とおなじように国民党の台湾統治期間における半分以上の時間を過酷な準独裁者、あるいは圧倒的な独裁者として君臨した。その蔣経国が最晩年になって、なぜ政治の民主化を目指したのか、という疑問が呈されている。これについては台湾の政治社会状況が国家権力を上まわり、蔣経国はそれに屈服したにすぎない¹⁴という見方がある。あるいは台湾社会を継続的に独裁するコストが民主化コストを大きく上まわるため、合理的に判断して民主化容認に舵をきったのだ¹⁵という考え方も提示されている。

蒋介石とおなじように過酷な独裁を敷いた蔣経国が、歴代の台湾指導者のなかでなぜ今でも圧倒的に評価が高いのか。この疑問に対しては、蔣経国の統治期間中に台湾経済が繁栄し、そのことに好感した台湾人の記憶に支えられている¹⁶という観測が存在する。あるいは独裁者が国民に受け入れられるのは、独裁者個人にとって不利な情報の公開が禁止さ

¹³ 督察專員は省政府が派遣する官員で、各県の施政指導と監督を任務とした。督察專員公署が勤務場所で、そこは政学系が牛耳り人間関係が複雑だった。蔣経国はソ連留学時代の同窓と新兵督練処勤務時の部下を連れて赴任した。

¹⁴ 吳乃徳「回憶蔣経国、懷念蔣経国」『二十世紀 台湾民主發展』（国史館、2004年）469頁参照。

¹⁵ 張博樹「蔣経国在台湾民主化進程中發揮的作用」『中国憲政改革可行性研究報告』（香港・晨鐘書局、2008年）166頁参照。

¹⁶ 前掲「回憶蔣経国、懷念蔣経国」5-6頁。

れ、有利な情報しか報道されないからだ¹⁷という指摘もある。

蔣経国が苛酷な準独裁者、あるいは圧倒的な独裁者として台湾社会に君臨した軌跡をたどりながら、最終的に政治面で各種の緩和措置を断行し、李登輝が民主社会を完成させるための土壌を準備した過程を敷衍して、蔣経国の民主「転型」に関わる思考がいかなるものであったのかを検討し、それがソ連経験と贛南の実践とどのように関係するのかを俯瞰する。

第3節 先行研究および一次資料について

蔣経国をあつかった先行研究は上述した理由から評伝的な著作にかたより、論文が圧倒的に少ないのが特徴的である。特に本論が研究対象とした蔣経国のソ連時代、帰国後の江西省贛南時代について研究した学術論文は以下に示した茅家琦『蔣経国的一生與他的思想演變』（台湾商務印書館、2003年）で部分的に触れられているだけで、それ以外は一般書として出版された評伝しか存在しない。このことが本論を書く動機にもなっている。

以下、本論の全体に関係する先行研究と一次資料を示し、以下各章ごとに使用した代表的な資史料に評価を加えながら順番に列記する。先行研究および一次、二次資料の詳細については巻末に「参考文献一覧表」を添付した。

3-1 全章に係わる先行研究と一次資料

<先行研究>

蔣経国に関する先行研究は台湾、米国、中国、日本に複数存在している。以下、それらの代表的な研究について検討する。

①江南『蔣経国伝』（李敖出版社、1988年）

先行研究の嚆矢は、台湾で出版された江南の『蔣経国伝』（李敖出版社版、1984年）〔日本語訳は、川上奈穂訳『蔣経国伝』（同成社、1989年）〕である。同伝には李敖出版社版と前衛出版社版の2種類が存在するが、本文の内容に違いはない。香港では台湾から輸入したものが市販されている。

江南は蔣経国が誕生した時代背景を蒋介石の幼少青年期の事跡を借りて記述するところから始まり、蔣経国が台湾総統に就任するまでの約60年間を清国史、中華民国史、台湾現代史にそって時系列的に叙述している。幼年期は蒋介石との関係を中心に論考し、ソ連に留学した青少年期の12年間については孫逸仙（中山）大学におけるマルクス・レーニン主義の学習やその後の流転生活を核に据えてソ連共産党、コミンテルン、中国共産党モスクワ支部との交渉や軋轢に検討を加えている。そして帰国から総統就任までは、国民党内における権力基盤の確立過程とその達成を考察している。

ソ連時代と贛南在職時に関する記述は貧弱で、細部の検討に曖昧な部分が残っているこ

¹⁷ Ronald Wintrobe, *The Political Economy of Dictatorship* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000) 337.

とは否めない。

繰り返しになるが、江南の『蔣経国伝』はもともと留学先の大学院に博士論文として提出を予定していた論考がベースになっている。奨学金の獲得が困難になったため、学位取得をあきらめて論考を評伝に改作する過程で一部の専門分野に係わる内容を捨象し、学術論文としての専門性を薄めて一般書の体裁を整えたことも内容の精緻さを欠いたひとつの原因になっているものと思われる。そのため、政治や歴史、外交、思想、哲学などの分野に特化されることがなく、その意味において研究書として読むときに隔靴搔痒の感を否めないが、後人の蔣経国研究に与えた影響は絶大である。それは本書が世に問われた以降に刊行された類書が、ことごとく江南が提示した叙述の枠組みを踏襲していることから明らかである。

②Jay Taylor, *The Generalissimo's Son: Chiang Ching-Kuo and the revolutions in China and Taiwan*, Harvard University Press, 2000

米国には、国務院の高級官僚で在香港米国領事館、在台湾米国大使館、在北京米国大使館、国家安全会議に奉職したあとハーバード大学の研究員に転じたジェイ・テイラーが著わした『総統の息子』(Jay Taylor, *The Generalissimo's Son: Chiang Ching-Kuo and the revolutions in China and Taiwan*, Harvard University Press, 2000) がある。テイラーの著作は江南が『蔣経国伝』で築いた研究成果の上に台北で蔣経国の周辺人物から取材した事柄を書き加えた内容になっている。全体的には、江南が提示した枠組みを越える内容にはなっていない。本書は米国で発行された新聞や雑誌の記事、研究所のレポート、あるいは戦後米国に亡命した中国人の回想録などを参考文献として多用しているのが特徴である。

③茅家琦『蔣経国的一生與他的思想演变』(台湾商務印書館、2003年)

南京大学の茅家琦が台湾で出版した『蔣経国的一生與他的思想演变』(台湾商務印書館、2003年)は、江南とテイラーが積み上げた研究成果を盛り込んで著されたものである。前世紀の90年代に出版された蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』全24巻及び記事年表上輯、下輯、総目次(行政院新聞局、1992年)を積極的に参照し、さらにごく一部の叙述において南京第二檔案館が所蔵する国民党関連の資料を使って論考したところにその特徴を認めることができる。

ソ連時代の行論については『蔣経国先生全集』に収録されている蔣経国の2編回想録を使い、贛南在職時に関しても同全集を積極的に参照しているので江南の『蔣経国伝』に比べると内容の厚みが増しているが、一般書の域を脱していない。

細部の行論についてはタイトルに「思想演变」の4文字が冠されているにも係わらず、蔣経国の思想領域に対する緻密な検討作業に「遠慮」がみられることを指摘しておくべきだろう。これはあるいは、茅家琦が南京大学に奉職する大陸学者として中国共産党が暗黙の了解として規定するタブーに触れなくなかったという思惑があったのではないかと考えられる。

④若林正丈『蔣経国と李登輝——「大陸国家」からの離脱?』(岩波書店、1997年)

日本で刊行された先行研究には、若林正丈の『蔣経国と李登輝——「大陸国家」からの

離脱?』(岩波書店、1997年)が存在している。これは権威主義体制の枠組みのなかで容認できる範囲の自由化を断行した蔣経国と、蒋介石の権威主義体制を解体して蔣経国が敷いた自由化の土壌の上に台湾の民主化を一般社会にまで実現した李登輝とを比較検討した著作である。それほど潤沢ではない紙幅の中に蔣経国と李登輝という二大総統の履歴と政治生活を詰め込んだために、細部まで立ち入るスペースがなかったという著者の無念がうかがえる。

ソ連留学時代の記述は蔣経国の回想録に書かれている内容だけを参照し、贛南時期についてはごく簡潔に10行足らずに止めている。

日本には若林の著作以外に、小谷豪治郎『蔣経国伝——現代中国八十年の証言』(プレジデント社、1990年)がある。これは著者みずから「中華民国との友好関係を意図的に維持発展させようとするマイノリティ・グループに身を置き、それに属することに誇りすら持ってきた」¹⁸と執筆意図を語っているように国民党史観にそって書かれた論考である。

上に挙げた先行研究以外にも、台湾、中国大陆にはさらに幾つかの「蔣経国伝」が存在している。代表的なものとして、漆高儒『蔣経国的一生——從西伯利亞奴工到中華民國總統』(台北・伝記文学社、1991年)、同『蔣経国評伝——我是台灣人』(台北・正中書局、1997年)、李松林・陳太先『蔣経国大伝』上・下(北京・団結出版社、2002年)などを挙げることができよう。漆高儒は蔣経国の側近だった人で、その記述内容はやはり国民党史観にそった内容であり、本論の先行研究として使用する際には一定の資料批判を加えたいうえで参照している。

3-2 全章にかかわる一次資料

一次資料には、蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』全24巻及び記事年表上輯、下輯、総目次(行政院新聞局、1992年)、黎明文化編『蔣總統経国先生言論著述彙編』全15巻(黎明、1981年)、中央日報編『蔣總統経国言論選集』全9輯(中央日報社、1980年)があり、関連資料として秦孝儀総編集『總統 蔣公大事長編初稿』巻一～巻十(財団法人中正文教基金会、1978～2003年)、毛思誠『民国十五年以前之蒋介石先生』(香港・龍門書店、1965年)などが存在している。以下、これらの資料について発行年代順に説明する。

① 中央日報編『蔣總統経国言論選集』全9輯(中央日報社、1980年)

中央日報社が1980-1988年、蔣経国が存命中から本格的な言論集として初めて編輯・発行された。内容は、1978年から死去するまで蔣経国が公に発表した著作、声明、挨拶文、講話、談話、指示、祝賀文、記者発表文、書簡などが含まれる。

② 黎明文化編『蔣總統経国先生言論著述彙編』全15巻(黎明、1981年)

出版社の黎明文化事業股份(株式)有限公司が1981-1988年期間中に編輯・発行した。内容は1941年＝蔣経国の贛南時期から、死去するまでの期間の演説、談話、指示、記者発表、著作、書簡、日記などが含まれる。

¹⁸ 小谷豪治郎『蔣経国伝——現代中国八十年の証言』(プレジデント社、1990年)314頁「あとがき」を参照。

③ 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』全 24 巻及び記事年表上輯、下輯、総目次（行政院新聞局、1992 年）

李登輝政権下の 1992 年、行政院新聞局が蔣経国先生全集編輯委員会を組織して編輯・発行した。内容は、1925 年＝モスクワ孫逸仙大学時期から死去するまでの著作、演説、書面指示、談話、書簡、電報、指示、公文書、雑文、日記（一部）などが含まれる。前出①、②の言論集と重複する記事の内容に移動（修正）は見られないが、タイトルに限っては一部に変更が見られる。

④ 秦孝儀総編集『總統 蔣公大事長編初稿』巻一～巻十（中華民國政府、1978-2003 年）

蔣経国政権下の 1978 年から編輯・発行が始まる。蒋介石の誕生から死去までの年譜、日記の一部、書簡の一部、電報の一部、言論の一部、談話の一部などを内容とする。2002 年から発行元が政府から中正文教基金会に変わっている。現在も続刊中である。

⑤ 毛思誠『民国十五年以前之蒋介石先生』（香港・龍門書店、1965 年）

香港の龍門書店が 1965 年に発行した。蒋介石の誕生（1887 年）から民国 15（1926）年までの年譜、言論の一部、書簡の一部、日記の一部、電報の一部、談話の一部などを内容とする。中国の南京第二檔案館が 1992 年におなじ内容のものを『蒋介石年譜初稿』として発行している。

3-2 各章に係わる先行研究と資料

<第 1 章> 清末から民国前期における三つの留学行動——蔣経国の幼少年期を育んだ時代

本章の「日本への留学行動」部分に関わる代表的な先行研究は、さねとうけいしゅう『増補 中国人 日本留学史』（くろしお出版、1970 年）、小野川秀美『清末政治思想研究』（みすず書房、1969 年）、嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』（研文出版、1994 年）、小島淑雄『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989 年）などである。

さねとうけいしゅうの論考は、清国からの留日学生を系統的に扱った研究の嚆矢として特筆すべきである。留学生の来日の起源から筆を起し、学校生活、日常生活、留学生が日本で実施した啓蒙（翻訳・出版）活動、革命運動、日本留学の変遷などを清末の資料を渉猟して精緻に論じている。

小野川秀美の研究（巻末参考文献一覧を参照）は、洋務運動以来の思想世界における康有為の変法論、章炳麟の排満思想、劉師培の無政府主義などを検討し、東京を後衛として中国と日本を往還した改良思想、共和主義、排満思想の変遷などを緻密な論理展開で後学に伝えている。

嵯峨隆（同上）の論考は、清末民初に日本とパリで活動した中国人アナキストの思想と革命運動の足跡を追い、それが中国国内の思想世界とどのようにリンクしたのかを明らかにしたところが興味深い。

小島淑雄（同上）の著作は、清朝の最末期に東京で中国同盟会などの政治団体に合流した留日学生が如何にして中国国内の政治勢力と連帯し、辛亥革命を支援したのかを究明したもので、とくに留日学生がいかに辛亥革命に加わっていったのかがわかる内容になって

いる。

この時期に東京で留学生生活を送った留学生の回想録などの一次資料には、馮自由『革命逸史』第1-5集（台湾商務院書館、1969年）、同『中華民国開国前革命史』第1-2冊（台北・世界書局、1971年）、黄尊三『三十年日記』第一冊 留学日記（長沙・湖南印書館、1933年）〔日本語版は、さねとうけいしゅう、佐藤三郎訳『清国人 日本留学日記』（東方書店、1986年）、景梅九『罪案』（北京・国風日報社、1924年）、〔日本語版は大高巖、波多野太郎訳『留日回顧——中国アナキストの半生』（東洋文庫、1966年）〕などがある。改良派から革命派への転向、アナキストへの目覚めなど当時の留日学生思想状況を知ることのできる史料といえる。

次に、「フランスへの留学行動」部分に関わる先行研究は少ない。森時彦の「フランス勤工儉学運動小史」上・下『東方学報』第50-51冊（京都大学人文科学研究所、1978-1979年）は1912年に始まり、1921年前後に終息した留仏儉学と留仏勤工儉学運動を系統的にまとめたほぼ唯一の論考である。儉学運動を提唱して留仏儉学会に始まる一連の留学支援組織を立ち上げたパリ・アナキストグループの功績よりも、同グループの支援下で派遣活動に従事した毛沢東、蔡和森ら後に中国共産党を担う湖南の「新民学会」グループの活動を過度に重視する視点は、論文執筆当時の日本国内におけるマルキシズムの横行という思想状況が加えたバイアスの結果であろう。使用に際しては同論文が挙げた参考文献にひとつひとつつひとつ当り、可能なかぎりバイアス部分を捨象して参照した。

この時期の中国国内におけるアナキスト運動の隆盛については、野原四郎『アジアの歴史と思想』（弘文堂、1966年）が「アナキストと五四運動」の1章を設けて論考していて貴重である。関連する先行研究としては、R. A. Scalapino & G. T. Yu, *The Chinese Anarchist Movement*, The University of California, 1961、あるいは清華大学中共党史教研組編『赴法勤工儉学運動史料』1-3（北京出版社、1979年）などがあり、とくに清華大学中共党史教研組の研究は勤工儉学者の実数、北京の支援団体とパリ現地とが交わした書簡など見逃すことのできない資史料にあふれている。

一次資料としては、鄭超麟『鄭超麟回憶録』上（北京・東方出版社、内部発行、2004年）〔日本語版は、長堀祐造ほか訳『初期中国共産党群像——トロツキスト鄭超麟回憶録』1（東洋文庫、2003年）〕、何長工『勤工儉学生活回憶』（北京・工人出版社、1958年）〔日本語版は、河田悌一・森時彦訳『フランス勤工儉学の回想——中国共産党の一元流』（岩波新書、1976年）〕などがある。鄭超麟の回想録が中国で研究用の「内部発行」となったのは、内容が党史研究の参考となる価値を有するが、その観点は中国共産党史観から乖離しているという理由からであり、本論の関係から言えば1921年から1930年までの中国共産党史について、共産党史観を払拭して研究するための適書の一冊というべきである。何長工の回想録は中国共産党史観にそって書かれており、使用には注意を払った。

最後の「ソ連への留学行動」を扱った代表的な先行研究としては、土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部、1999年）がある。同論文は孫中山を顕彰して1925年にモスクワで開学し、主に国民党系の中国人留学生を受け入れたモスクワ孫逸仙大学（クートカ）¹⁹の創立から

¹⁹ モスクワには孫逸仙大学以外に、主に外国の共産主義者が学んだスターリン東方大学（クートヴェ、1921年創立）があ

廃校まで5年間の歴史を中心にたどり、あわせて同大学の組織、中国人留学生の教育と生活、政治活動などをソ連崩壊後にロシアで開示され始めた資料を使って検討している。

一次資料には、蔣経国「我在蘇聯的生活」および「我在蘇聯的日子」蔣経国先生全集編集委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（台湾行政院新聞局、1992年）、王覚源『留俄回憶録』（台湾・三民文庫、1969年）、王凡西『双山回憶録』（香港・周紀行、1977年）〔日本語版は、矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録——中国革命の再発掘』（柘植書房、1979年）、盛岳著、奚博銓ほか訳『莫斯科中山大学和中国革命』（北京・東方出版社、内部発行、2004年）（本書はもともと米国ニューヨークで出版され、それを東方出版社が翻訳・内部発行したもの）、張国燾『我的回憶』第二冊（香港・明報月刊出版社、1973年）、それに前掲『鄭超麟回憶録』上などがある²⁰。

<第2章> 蔣経国のソ連における留学経験

本章に関しては、台湾中央研究院近代史研究所の余敏玲が90年代にロシアで開示された蔣経国関連の資料を使ってまとめた論考を挙げるべきだろう。それらは「俄国檔案中的留蘇学生蔣経国」『中央研究院近代史研究所集刊』第29期（中央研究院近代史研究所、1998年）、および「国際主義在莫斯科中山大学 1925-1930」『同上』第26期（同上、1996年）の2編で、モスクワ孫逸仙大学における蔣経国の恋情や中共モスクワ支部内部における内訌、あるいは中共系学生と国民党系学生の確執、スターリンとトロツキーの路線闘争が中国人留学生に与えた影響などを検討している。蔣経国の個人生活や政治生活に大胆に踏み込んだ論文であり、江南暗殺事件で瀰漫したタブーを乗り越えて達成された意欲的な研究として評価できる。第1章の「ソ連への留学行動」で使用した土田哲夫の研究も随所に余敏玲の研究成果を取り入れている。

トロツキズムについて先行研究としては、まず唐寶林『中国托派史』（台湾・東大図書、1994年）を挙げておくべきだろう。『中国托派史』は著者が北京で『中共党史研究』（双月刊）に掲載した論考を土台として、後に台湾で出版したものである。これは中国人トロツキストの揺籃から中共によって迫害、排除される歴史を検討したもので、行論の大筋は中国共産党史観の枠組みに沿った内容であることから使用に際しては関連する史資料の記述などと対照しながら注意深く参照した。斉藤哲郎『中国革命と知識人』（研文出版、1998年）はゴルバチョフによるペレストロイカ、グラスノスチの実現によって公開された文書保管所のアルヒーフを活用し、同時に欧米、中国、台湾の資史料にまんべんなく当たっており、さらに唐寶林の研究成果をも取り入れた優れた先行研究である。

一次資料としては蔣経国の「我在蘇聯的日子」および「我在蘇聯的生活」を使うとともに、蔣経国とほぼ同時期に孫逸仙大学に留学した盛岳の『莫斯科中山大学和中国革命』、さらに東方大学に留学してトロツキストの中心人物となった王凡西の『双山回憶録』、おなじくフランスで勤工儉学し、東方大学に転じて左翼反対派になった鄭超麟の回想録『鄭超麟回憶録』上・下などを使用した。北京の東方出版社が発行した『鄭超麟回憶録』は、「少年

り、多くの中国人留学生が学んだ。この大学の中国部は1928年に孫逸仙大学と合併し、1938年に廃校になった。

²⁰ 王覚源は国民党とともに台湾に遷占し、王凡西はトロツキストとして中国共産党から迫害され、香港、マカオを経て英国に亡命した。盛岳はモスクワから帰国後、中国共産党の要職を務めたが、1934年に国民党に転向し、後に米国へ亡命した。

共産党」などの中国共産党史に係わる章節がそっくり削除されているので使用には注意を要した。

<第3章> 蔣経国のソ連における労働経験

本章先行研究は第2章で使用したものとほぼ重なるので、省略する。

<第4章> 蔣経国の民国二十六年——対ソ感情の浮沈

本章に関わる系統的な先行研究は存在しない。あえて列举するとすれば、既述した江南、ジェイ・テイラー、茅家琦、若林正丈、小谷豪治郎らの著作や論文で部分的に触れられているが、この時期における蔣経国の思想的な揺らぎと変遷を過不足なく検討したものとはなっていない。

行論に際して、蔣経国の2編の回想録、および蔣経国『我的父親』（三民書局、1975年）、後に蔣経国先生全集編集委員会編『蔣経国先生全集』第二冊（台湾行政院新聞局、1992年）に収録、秦孝儀総編集『總統 蔣公大事長編初稿』卷四上冊（財団法人中正文教基金会、1978-2003年）などを一次資料として使用した。

<第5章> 蔣経国の贛南における初期派閥の形成について

大陸期における蔣経国の派閥形成過程を検討した先行研究は中国大陆と香港に存在している。中国大陆では、中華民国の本土化（台湾化）過程で李登輝を登用した蔣経国の晩年には中国共産党史観による負の評価が下され、蔣経国研究は贛南在勤時の事跡に集中している。このため、蔣経国の派閥形成過程に関する研究や回想録は比較的豊富に存在している²¹。

香港で出版された先行研究には贛南で蔣経国の部下だった蔡省三と曹雲霞夫妻が著した『蔣経国系史話』（香港・天地圖書、1988年）がある。それは蔣経国の江西省南昌市、同贛県、四川省重慶市、江蘇省南京市における7年間の政治生活を回想形式で記したものである。台湾の派閥政治を精密に論考した陳明通『派系政治與台湾政治変遷』（新自然主義、1995年）も大陸期における蔣経国の派閥形成に言及しているが、それは蔡省三と曹雲霞の著作内容をきわめて短くまとめたものにすぎず、大陸期における蔣経国の派閥構築過程の全貌を考究したものではない。

本章の執筆に際しては、蔣経国全集の第1、2、3、15、20巻に含まれる回想記や談話、演説、会議記録、行政通達文書、メディアへの投稿原稿、および記事年表（上輯）、著述年表などを使い、それらを補完する資料として上記の先行研究を活用している。中国国内で出版された先行研究は多分に中国共産党史観の影響を受けており、その使用に際しては前掲した各種の一次資料と対照するなどして細心の注意を払いながら用いた。

<第6章> 新贛南の建設——蔣経国の江西省第四行政区における新政

²¹ 郭晨『蔣経国密碼』（北京・團結出版社、2005年）、方世藻『建設新贛南』上・下（中国文史出版社、2003年）などが最近の先行研究として注目される。回想録では、黄賢度口述、文思・主編「出任專員、脱穎爾出」『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003年）があり、口述記として方世藻口述「贛南新政、面面俱到」『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003年）などが蔣経国の派閥形成過程に言及している。

新贛南の建設に言及した先行研究は、日本、台湾、中国大陆、米国などに複数存在している。その中で日本と米国、台湾の先行研究は蔣経国の一生を扱った研究の一部として同建設を簡単に叙述したもので、詳細は省かれている。日本における代表的な研究としては小谷豪治郎『蔣経国伝—現代中国八十年の証言』があるが、それには国民党史観のバイアスがかかっている。米国には江南とテイラーの著作がある。台湾で出版されたものには蔣経国の贛南在勤時の部下が著した研究が複数あり、その代表的な著作として漆高儒の『蔣経国的一生』、同『蔣経国評伝—我是台湾人』などが掲げられよう。

中国大陆には贛南在勤時における蔣経国の事跡に言及した著作や口述記などが多数存在している。研究書としては、郭晨『蔣経国密碼』(北京・団結出版社、2005年)、方世藻『建設新贛南』上・下(中国文史出版社、2003年)などが最近の先行研究として注目される。回想録では、黄賢度口述、文思主編「出任専員、脱穎爾出」『我所知道的蔣経国』(中国文史出版社、2003年)があり、口述記として方世藻口述「贛南新政、面面俱到」『我所知道的蔣経国』(中国文史出版社、2003年)などが贛南時期の蔣経国の政治生活に詳しい。

本章の執筆に際しては、一次資料として『蔣経国先生全集』第二十冊所載の新贛南の建設に関する行政通達文書や張瑞成編撰「蔣経国先生記事年表 1910～1988」『蔣経国先生全集』記事年表上輯などを使い、それを補完する資料として上記の先行研究を参照した。中国国内で出版された先行研究は多分に中国共産党史観の影響を受けており、その使用に際しては前掲の一次資料と対照するなどして細心の注意を払った。

終章 蔣経国像の検証

本章の先行研究および一次資料は潤沢に存在する。1945年以降の台湾政治史を詳述したものとして、まず若林正文『台湾の政治』(東京大学出版会、2008年)と松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』(慶応義塾大学出版会、2006年)が挙げられよう。他の追隨を許さない優れた論考である。

その他、前世紀後半に民主化した政体を考察した Samuel P. Huntington, *THE THIRD WAVE: Democratization in the Late Twentieth Century* (University of Oklahoma, 1991) [坪郷實・中道寿一・薮野祐三訳『第三の波』(三嶺書房、1995年)日本語版への序文参照]、張博樹「蔣経国在台湾民主化進程中發揮的作用」『中国憲政改革可行性研究報告』(香港・晨鐘書局、2008年)、松本充豊「台湾」岸川毅、岩崎政洋編『アクセス地域研究1 民主化の多様な姿』(日本経済評論社、2004年)、エドアルド・シェワルナゼ著、朝日新聞外報部訳『希望』(朝日新聞社、1991年)などもきわめて示唆的だった。

台湾の民主「転型」を論考したものとしては、若林正文『台湾の政治』以外に呉乃徳「回憶蔣経国、懷念蔣経国」胡健国主編『二十世紀 台湾民主發展』(国史館、2004年)、Tucker B. Nancy, *China Confidential: American Diplomats and Sino-American Relations 1945-1996*, Columbia University Press, New York, 2002 などの三書を挙げておく。

中国青年反共救国団に関しては先行研究がほとんど見つからず、中国青年反共救国団総団部編印『緑旗漂揚三十年』(中国青年反共救国団総団部、1982年)が同団と蔣経国の関係についての記述が豊富だった。

一次資料としては程玉・李福鐘編注『戦後台湾民主運動資料彙編』1～12巻(国史館、2001年)、郭柏村著、王力行採編『郭総長日記中的蔣経国先生晚年』(天下文化出版、1995

年)、蔣経国先生全集編輯委員会『蔣経国先生全集』記事年表上・下輯(行政院新聞局、1992年)などを使用した。

本論の執筆に際して使った代表的な先行研究および一次資料は上に示したとおりである。その他の史資料については必要に応じて脚注に明記してある。使用したすべての先行研究、一次資料を巻末に一覧表としてまとめた。これらの先行研究および一次資料を使用するに際しては可能な限り原著を使い、原著が入手できない場合は日本語版を使用した。中国大陸で発行されたものについては、中国共産党史観による改竄には細心の注意を払いつつ参照している。同時に年譜や年表を併用して、各著者の記憶違いなどによる事実関係の錯誤を修正してある。

次章において私たちは蔣経国が誕生し幼少年期をおくった清末と民初の時代に時空をこえて立ち戻り、日本、フランス、ソ連への三つの留学行動の動機と意義、成果をたどる過程で、蔣経国という個性を育んだ当時の政治、思想、社会状況の究明に踏み込むことにしよう。

第 I 部 ソ連における留学と労働経験——第一次国共合作の成立とその崩壊下の蔣経国

第 I 部は蔣経国がモスクワ留学を志すにいたる時代的な背景を敷衍し、孫逸仙大学に入学（1925 年）してから帰国（1937 年）するまでの 12 年間を扱う。すなわち蔣経国のモスクワ留学経験とその後の流転＝ソ連における労働経験である。

この間、中国をとりまく環境は激変した。1927 年には漸増する共産党勢力を背景にボロディンや武漢政府の国民党左派、中国共産党が企てた反蒋行動に対し、蒋介石は上海で白崇禧軍と杜月笙ら閥の勢力を使い、4・12 上海クーデターを発動して徹底した掃共を実施した。これを契機に 1924 年に構築された第一次国共合作は崩壊し、それはモスクワの小中国と称された孫逸仙大学にも波及して蔣経国の立場が極度に危うくなる。それに加えてソ連ではスターリンとトロツキーの権力闘争が激化し、左翼反対派（トロツキスト）に与っていた蔣経国は孫逸仙大学を卒業してもソ連当局から帰国を許されなかった。権力闘争に負けたトロツキーは失脚し、1928 年にモスクワから中央アジアのアルマ・アタに追放され、翌年にはソ連邦を追われてトルコのイスタンブールに亡命した。ソ連ではその後、1930 年代を通じてスターリンの政敵に対する攻撃、いわゆる大粛清が猛威をふるい、カーメネフ、ジノヴィエフ、トムスキー、ピャタコフ、ラデック、ルイコフらも政治舞台から追放された。

中国国内では上海クーデター後、地下に潜った中共黨員が中華ソヴィエトの樹立を目指し、賀竜、葉挺、周恩来、朱徳、張国燾らが合流して発動した南昌蜂起（8 月 1 日）や毛沢東の長沙における秋収蜂起（9 月 8 日）、そして彭湃や惲代英らの陸豊、海豊における中国最初のソヴィエト政権樹立——すなわち広東コミューン（12 月 11 日）などが一瞬の光を放ちながらもことごとく挫折していく。そうした情勢の中で蒋介石の北伐軍は北の都を攻めて奉天派軍閥の張作霖を駆逐し北京を占領する。張作霖は支持基盤のある東北へ移動中、奉天郊外で関東軍により列車もろとも爆殺された。息子の張学良は易幟して国民政府に降伏する。1928 年 12 月に北伐は完成し、軍閥が割拠して混戦した中国は統一される。

満州事変（1931 年 9 月 18 日、九一八事変）は奉天郊外の柳条湖付近における鉄道爆破事件に始まった。この事件を画策した関東軍は満州全土を占領し、清朝の廢帝愛新覺羅溥儀をかついで同地域に満州帝国を建国（1932 年 3 月）して日本の中国侵略、利権確保のための傀儡国家とした。これは日中十五年戦争の発端となる。

中国に進攻する日本軍よりもまず共産党軍の殲滅をめざす「安内攘外」政策を採った蒋介石は、中華ソヴィエトの中央臨時政府が所在した江西省で前後 5 回にわたる大規模な圍剿（掃共）作戦を展開する。第 1 次掃共は 1930 年 12 月 16 日～翌年 1 月 3 日で、周恩来、朱徳らが指揮する共産軍に敗退して失敗した。第 2 次掃共は 1931 年 1 月 4 日～5 月 31 日で、この作戦も 2 万人増員した 6 万 4 千人の共産勢力に押されて敗北している。第 3 次掃共は同年 7 月 1 日～9 月 20 日に実施され、この作戦は蒋介石みずから指揮をとり、毛沢東らの共産軍を壊走させて成功した。第 4 次掃共は 1933 年 1 月 1 日～4 月 29 日で、何応欽が瑞金を中心とする中華ソヴィエトを、陳誠らが南昌に侵攻する共産軍を迎え撃ったが、満州の関東軍が熱河に軍を進めたため中断のやむなきに至った。第 5 次掃共は同年 10 月 16 日～1934 年 10 月 14 日の長期にわたり、江西各地の共産軍重要拠点に打撃を与えて瑞金

放棄、大西遷（長征）を促す大成功を収めている¹。蒋介石の掃共作戦は一進一退を繰り返しながらも着実に共産軍を江西省の拠点（ソヴィエト）から駆逐しつつあったが、その日本に対する降伏主義の結果、日本軍の中国進攻が急速に進んだ。それは共産党を中心にして中国国内に抗日気運を盛り上げ、中国共産党は 1935 年、抗日八一宣言を発して全国が一致抗日して日本軍を撃退することを訴える。このことは複雑に推移しながらも、東北に傀儡国家満州国の蟠踞を許していることに苛立ちを覚えた張学良は延安で周恩来と図って中国共産党の「倒蔣抗日」政策を「聯蔣抗日」に変更させ、督戦のため西安を訪れた蒋介石を軟禁して抗日を迫る西安事変を引き起こした。蒋介石は渋々共産党の抗日統一案を受け入れ、崩壊して 9 年になる国共関係は第二次国共合作への条件を整えていく。

¹ 以上の第 1 次～第 5 次掃共作戦については、黎東方『蔣公介石序伝』（台北・聯經出版、民国 65 年）315～324 頁を参照した。

第1章 清末から民国前期における三つの留学行動——蔣経国の幼少年期を育んだ時代

はじめに

蔣経国は幼少時、父親の蒋介石から中国の伝統教育に漬けられた。少年期に在籍していた上海の浦東中学ではフランスへの「勤工儉学」運動に興味を示し、フランス留学を目指していた。やがて反帝愛国運動としての五・三〇運動が発生し、それにかかわって中学を停学になった。北京の海外補修学校に転校した蔣経国は、ソ連大使館に起居していた李大釗の紹介で在京のソ連人らと交わり左傾していく。その後、モスクワ孫逸仙大学に留学して共産主義に急接近し、スターリンの一国社会主義よりもむしろ国際主義を称えたトロツキーに心酔して左翼反対派の留学生秘密組織に加わった。

留学あるいは抑留生活の12年間を経て帰国した後は、初任地の江西省贛南できわめて共産主義的な政策を実施し、現地社会の改造に成果を上げている。蔣経国は国民党の地方組織における末端の職位からスタートし、最終的には台湾で最高職の総統にまで登りつめた。

清末から民国前期までの激動した10余年間に中国人の日本留学、フランス勤工儉学、ソ連留学という三つの留学行動があった。これらの留学行動はそれぞれが単独に発生した求学活動というよりは、むしろ連続するひとつのムーブメントとしてとらえるべきである。なぜならば、それらはこの時期に清国あるいは中華民国の救国や改革と積極的にかかわった留学生や思想家、革命家が抱いた思想と密接につながっているからである。それらの思想は、留学行動に加わった時期によって異なる。単純化して整理すれば、日本留学が隆盛した時期には大多数の漢人が抱いた反満（清朝）思想、孫中山の三民主義にもとづく革命思想、そして辛亥革命前後に流布したアナキズムが流行した。フランスへの留学行動は、その前期においてはアナキズム、中後期には共産主義によって支えられた。ソ連への留学行動は、共産主義とその分派としての左翼反対派（トロツキスト）、そして国民党派遣の留学生が抱いた三民主義によって覆われる。そしてこれらの思想の根本には、それぞれ救国と愛国の感情があった。

日本への留学行動からフランスへ、そしてフランスからソ連へと変遷した留学行動を有機的に繋いだ思想の主体は何だったのか。異なった思想がそれぞれの留学行動を支える土壌として連鎖した結果、それらは蔣経国が幼少年期を生きた民国期の政治世界に如何なる影響を与えたのか。

本章はこれら三つの留学行動を中国の近現代史を縦断した連続性のある思想的な連鎖としてとらえ、それぞれの留学行動の発端、展開、着地点を敷衍し、上述した論点にしばって簡潔に検討したい。

第1節 日本への留学行動——改良と革命、アナキズム

清国人の日本への留学行動¹は西洋の衝撃による清朝の疲弊に直面した知識人が儒教を

¹ 日本への留学行動は1896年4月（13人）に始まり、1906年に流行の頂点（約12000人）をむかえ、1911年の辛亥革命

中核とした伝統体制＝天下的世界観の保全を第一義とする硬直した政治環境を一新し、新たな社会を生み出すための知識と技術を学ぼうとする強い願望がその中心にあった。清末に日本へ渡った留学生の中にはその前期において康有為、梁啓超らの主張に傾倒し国体護持を前提とする立憲君主思想に与した勢力があった。中期以降は満州族が支配する清朝を転覆して漢民族を中心とする政権の再興を希求した孫中山らの革命思想に合流する学生が増加した。その意味で、日本への留学行動は清朝を転覆して中華民国の創出を目指した流れの中に位置づけることができる。事実、日本に滞在した多くの留学生は、辛亥革命を能動的に担った後方としてその役割を果たした。但し、その後方を支えた思想的な枠組みの中には極端な排満民族主義、三民主義、アナキズムなど複数のイズムが浮沈し、ひとつの潮流として括りにくい難しさがある。また、思想的な背景によらず軍事技術を学ぶために多数の留学生が来日し、各種の思潮に触れたことにも留意すべきだろう。

本節では、日本への留学行動が発生した時代背景と留学の動機、立憲派と革命派の主張から派生した留日学生の諸相、留学行動が辛亥革命に収斂し、その後に流行するフランスへの留学行動と如何なる関係にあったのかを考察する。

1-1 時代背景と動機

アヘン戦争で西欧列強の物質文明、すなわち軍艦や大砲など優秀な兵器の威力に苦しんだ清朝は、西洋の衝撃を払いのけて国体を護持するために中国固有の精神文明を基礎とする学問はあくまでも堅持するが、外国のすぐれた技術はこれを注意深く取り入れて国力を養うべきだと考え、西洋文明の選択的摂取がはじまった。それを理論面で支えたのが中体西用論で、曾国藩、李鴻章ら清朝の中枢をつかさどった政治家、思想家が中心となり、西洋の武器、弾薬、船舶などの国産化を図ろうとする洋務運動を展開した。これと平行して少数の留学生が米国をはじめとする西洋諸国に派遣されて清国人の海外留学がはじまり、やがて日清戦争²の敗北で日本の近代化の成果に対する再評価が起こる。日本側はこの気運をとらえ、軍事提携と利権拡張というふたつの政策効果を狙って清国政府に日本への留学生派遣を積極的に働きかけた。

清国人の組織的な日本留学は1896（光緒22、以下は西暦で表記する）年の旧暦3月にはじまる³。これを推進したのが湖広総督の高位にあり中体西用論者でもあった張之洞の『勸学篇』⁴であろう。張之洞は、①留学先として西洋は東洋におよばない、②日本は近隣にあり留学費用も節約できるので多人数を派遣でき、視察もしやすい、③日本語は中国語に似て通曉しやすい、④西学は煩雑で、日本人はすでにそれを整理し、斟酌している、⑤清日両国は風俗が近く倣うのが易しいので、留学効果は倍加する⁵、などと説き、日本留学の妥

を境として退潮していく。小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）13頁表1を参照。

² 甲午の年（1894）に勃発したので、中国では甲午戦争と呼称される。

³ 唐宝鐸、朱忠光、胡宗瀛、耿翼翬、呂烈煌、呂烈輝、馮閭謨、金維新、劉麟、韓寿南、李清澄、王某、趙某ら年齢18～32歳の13名の官費留学生が来日した。駐日清国公使の裕庚は外務大臣の西園寺公望（文部大臣兼務）に13名の教育を依頼し、西園寺は嘉納治五郎（高等師範学校長）に一任した。

⁴ 張之洞の『勸学篇』は1902（光緒28）年3月に著された。内篇、外篇あわせて24篇からなり、外篇の遊学に言及した部分で日本留学の必要を説いている。

⁵ 原文は「至遊学之国西洋不如東洋、路近省費可多遣去華近易考察、東文近於中文易通曉、西書甚繁凡西学不切要者東人已刪節而酌改之、中東情勢風俗相近易仿行事半功倍無過於此」〔沈雲龍編、張之洞著「勸学篇」『近代中國資料叢刊』第9輯（台北・文海出版社、1968年）〕、句点は中村による。

当性を強調した。日本はあくまでも西洋の代替国であり、日本に西洋を学びに行け、と主張している。

やがて科挙が廃止（1905 年）され、官吏登用の資格として新学⁶の重要性が増し、実質的には東学⁷がこれに当たると見なされ、日本留学による「洋進士」、「洋挙人」がめざされた。日本留学が官途への一手段となった⁸ことも、日本への留学行動が流行ったひとつの要因になった。

清国人が日本留学に向かったもうひとつの理由として、受入側の日本にあった状況についても言及しておくべきである。それは当時の日本で西欧列強の清国瓜分を自国への侵略の可能性と重ねて憂慮し、アジアの連帯を希求した志士やその他の知的勢力が中国文化に抱いていた関心であろう。江戸中期以来、国学は儒教や仏教伝来以前における日本固有の文化、精神の優越性を説き、中国文化を軽視する態度をとってきた。また、おなじく 18 世紀から隆盛した蘭学はヨーロッパ文明を優位に置き、中国の学問の非科学性や停滞性を批判した。しかしそうした学術的潮流の中にあっても日本社会における中国文化の影響力が目に見えて減衰することはなかった。中国文化が漢字を媒介にして日本に伝えられ、受け手の日本は漢字を中核とする言語、思考、論理体系を連綿とつちかってきたことが中国文化の減衰に歯止めをかけたのだ。それは漢籍が幕末はおろか明治、大正、昭和、そして敢えて言えば現代に至っても日本人の教養でありつづけていることなどをもって証明することができよう。

日本への留学行動がはじまる 6 年前の 1890 年、清国北洋艦隊が日本に回航し、海軍力をデモンストレーションした。その際、東大総長や文相を歴任した外山正一（1848～1900 年）が旗艦の定遠号（汀汝昌提督）を訪船し、さらに同日、日本海軍の勸めで旗艦高千穂をも訪れ、「世に支那人と日本人との比較を往々致しますが、夫れは私は致すことを好みませぬ、支那と我は兄弟の如き者である、決して支那を敵とすべき者ではありません」⁹と語っていることに注目すべきだ。この外山正一の発言は、当時の日本社会に芽生えつつあった清国に対する敵愾心とともに存在した中国文化を尊崇する気持ちから発せられたものと見ることができる。

こうした日本人の中国文化に対する関心に翳りを生じさせたのは江戸時代の国学の隆盛につづき、日清戦争である。この戦争は国際社会における近代日本の「列強」としての地歩を築き、同時に、東アジア世界に君臨した中華帝国の崩壊に手を貸すことになった。このことは清国に対する蔑視感情を抱きつつも、伝統的な中国文化を尊崇していた当時の日本人の隣国に対する認識を根底から変えることになる。その認識とは、伝統体制に執着し頑迷固陋に中国文化を停滞させている元凶は清朝の満人支配であり、その支配は取り除かれるべきだとするものだった。その意味で、伝統的な中国文化の栄光を受け継ぐ真の後継

⁶ 四書五経の暗誦など従来の伝統教育に対して、部分的に欧米伝来の西学、すなわち数学や地理、外国語など新しい内容を取り込んだカリキュラムによる教育を指す。

⁷ 新学が取り込んだ西学に対する呼称で、日本で実施された教育を指す。清朝末期の中国では、東学は西学の焼き直しであると捉えられていた。

⁸ 「奨励遊学畢業生章程」（1903 年発布）で、日本など外国に留学して高等教育機関の卒業資格を取得した学生は挙人、進士として登用される道が開かれた。山室信一『思想課題としてのアジア』（岩波書店、2001 年）320 頁などを参照。

⁹ ドナルド・キーン著、金関寿夫訳『日本人の美意識』（中公文庫、1993 年）141 頁参照。

者は清国ではなく実は日本なのだ¹⁰として、日清戦争を正当化することになる。主としてこの中国観にもとづき、日本は満人支配を打倒して新国家の創出を目指す清国留学生や亡命者を積極的に受け入れ、それは最終的に清朝を転覆し、中華民国を創出する辛亥革命の後方において間接的な役割を担うことになったのである。

1-2 留学生の諸相

立憲派の康有為、梁啓超らは戊戌の政変で清国を追われ、1898年に前後して日本に避難した。革命派の孫中山も1895年10月、最初の蜂起に失敗して同志とともに日本へ亡命している。両グループはそれぞれ横浜を拠点にして、清廷の改良かそれとも駆逐かで積極的に論陣を張り、在日華僑や留日学生に対する働きかけを開始した。この時期、両グループの活動はまず資金力のある在日華僑への工作からはじまり、それが徐々に留日学生に浸透していった。以下、留日学生の中における立憲派と革命派勢力の変遷を見ていこう。

1-2-1 立憲派と革命派

孫中山らが華僑の資金援助を得て横浜に興中会分会（横浜興中会）を設立したのは、亡命直後の1895年11月¹¹である。清国人学生の組織的な日本留学がはじまったのは翌年の1896年であり、それから2年目の1898年における留日学生の数61人（1896年＝13人、1898年＝61人）¹²で、その数は100人にも満たない。これは官費派遣生と、それに紛れるかたちで革命起義に失敗し日本に亡命した少数の偽装留学者などにその人数が限られていたからだ。このため留日学生の主体は官費派遣生で、新知識の吸収、帰国後の報国を留学目的とする学生にあり、革命思想を抱いた者はわずかだったと推察される。これは革命派が劣勢に置かれた原因のひとつである。革命派の拠点興中会の留日学生会員は1904年時点で16人だった。そのうち14人は孫中山が創立した東京革命軍事学校¹³の在学学生である。同年における留日学生の総数は2400人¹⁴だったので、清朝の転覆をねらう革命派に加わっていた留日学生数は全体のわずか150分の1にすぎなかったことがわかる¹⁵。

孫中山の人柄、あるいは孫の周辺にいた人物が留学生から敬遠されたことも革命派の劣勢を招いた原因のひとつである。孫中山は広州蜂起を起こす前年の1894年6月、天津で直隸総督兼北洋大臣の李鴻章に清廷の善政を求める意見書¹⁶を上奏して黙殺されている。これは公車上書が光緒帝の目にとまり変法自強の旗手となった挙人の康有為と明暗を分け、

¹⁰ ドナルド・キーン著、金関寿夫訳『日本人の美意識』（中央公論社、1990年）139～140頁参照。

¹¹ 伊地知善継、山口一郎監修『孫文年譜』、『孫文選集』第三巻（社会思想社、1989年）463頁。孫中山は10月29日、鄭士良、陳少白らと広州から香港にのがれ、翌11月12日に神戸に到着した。

¹² 李喜所『近代中国的留学生』（北京・人民出版社、1987年）。小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）13頁。

¹³ 当時、東京牛込には清朝の要請で開学した軍事専門の振武学校が1903年に開学していたが、当該校は官費生のみを受け入れていたため、孫中山は私費留学生を収容する目的で陸軍少佐日野熊蔵らの協力を得て東京革命軍事学校を創立した。この学校の創立経緯については馮自由『革命逸史』（台湾商務印書館、1969年）第4集19頁に詳しい説明がある。

¹⁴ 前掲『留日学生の辛亥革命』13頁。

¹⁵ 1886年から1911年までにおける留日清国人学生の人数は、1886年13人、1898年61人、1901年274人、1902年608人、1903年1300人、1904年2400人、1905年8000人、1906年12000人、1907年10000人、1908年5500人、1909年5200人、1910年4000人、1911年3200人である。1907年以前は、李喜所『近代中国的留学生』（人民出版社、1987年）、1908年以降は小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）13頁などを参照。

¹⁶ 前掲『孫文年譜』463頁。小野川秀美『孫文 毛沢東』（中央公論社、1980年）12頁参照。上奏文の内容は軍備の拡充、人材の登用、産業の開発、農政の振興で、農業に関する具申以外に新味はなかったとされる。

広東の無名医師にすぎなかった孫中山の当時における知識人への影響力を示していよう。

孫中山はまた、広州、香港、ハワイで西学を学び、とくに香港の拔翠書院在籍時には米国人宣教師から受洗している。当時の中国ではこうした孫中山の行動は読書人の発想からは出てこない。西洋に軍事技術はあっても学問はない、と考えられていたからである¹⁷。

章炳麟は留日学生が孫中山に抱いていた印象について、「中山先生のところに出入りして同じ志を有していた留学生諸公はわずかに1~2人で、その他は中山先生を骨董でも見るように奇怪な人だと感じ、漢民族を救う気概を持った人だとは考えてもいなかった」¹⁸と、当時の孫中山が留日学生の間では魅力に足る人物とは映っていなかったことを証言している。孫中山と康有為が醸し出したコントラストに接し、留日学生の多くが革命派の蜂起路線を当時の知識人らしく「大逆不道」ととらえて嫌い、穏健な立憲派の主張に与したことは容易に推察できよう。

革命派が劣勢を強いられた理由として、もうひとつ見落としてはならないのはメディア戦略の面で立憲派に遅れをとったことだ。梁啓超は亡命直後の12月にまず横浜で旬刊誌『清議報』¹⁹を創刊して立憲思想の宣伝を開始したが興中会に同様の媒体はなく、『揚州十日記』や『嘉定屠城記』、『明夷待訪録』²⁰の抜粋を印刷配布して清廷の告発資料に使っていた。革命派が機関紙を保有するのは興中会が華興会、光復会と大同団結して中国革命同盟会を設立し、1905年に『民報』を発刊してからのことである。

留日学生のなかで立憲派と革命派の勢力が拮抗し、やがて革命派が優勢になっていく転換点は義和団事件とそれに乗じた唐才常の自立軍蜂起²¹、そして惠州蜂起²²が起こされた1900年にある。8カ国連合軍は北京に入城して義和団を鎮圧したが、頑強な抵抗に遭遇した帝国主義列強はそれまでの「瓜分」政策を「保全」政策に転換して清廷を傀儡とし、李鴻章が全権をつとめた辛丑和約で事件を処理して清朝を「洋人の朝廷」と化した。留日学生の多くはこうした満人政府の体たらくに失望し、国体護持の立憲に疑問を呈して革命派に走る留日学生が漸増していく。この年を画期として立憲派と革命派の分化が顕著になり、それにともない留日学生の中に同郷会的な互助組織と、同郷にこだわらない共同利益や主義を追求した跨省組織が相次いで生まれてくる。その代表的なものとしては、勵志会²³、開智会²⁴、国民会²⁵、青年会²⁶、軍国民教育会²⁷などが挙げられる。また出身省に別れて編集

¹⁷ 前掲『孫文 毛沢東』11頁参照。

¹⁸ 「演説録」『民報』第6号1頁、前掲『革命逸史』223頁。

¹⁹ 『清議報』や、その後の『新民叢報』は日本が吸収した欧米技術、諸学の翻訳普及をはかる媒体だった。

²⁰ 『揚州十日記』、『嘉定屠城記』、『明夷待訪録』はともに、清が明を攻略した際に満人が漢人に与えた凄惨な虐殺を証言した内容である。

²¹ 立憲派の唐才常が康有為の命を受け、西太后に幽閉された光緒帝を擁立し、揚子江の中流域に立憲君主国の樹立を掲げて画策した。8月9日の蜂起は未然に察知されて失敗し、唐才常は捕らえられて処刑された。

²² 革命派が1900年10月に起こした広州起義につぐ2番目の蜂起。孫中山の側近として惠州蜂起に加わり戦死した山田良政は、日本人で最初に中国革命の犠牲になった。

²³ 留日学生の戴翼翬、沈雲翔、金邦平、章宗祥、呉振麟、黎科、傅慈祥、呉祿貞らが1900年に組織した。機関誌『訳書彙編』を発行し、ルソー、モンテスキュー、スペンサーなどの学説を翻訳して啓蒙につとめた。勵志社ともいう。黄福慶『清末留日学生』〔中央研究院近代史研究所專刊(34)、1975年〕227頁参照。

²⁴ 『訳書彙編』が発刊される前に鄭貫公、馮自由、馮斯欒らが横浜で組織した。会報『開智録』を発行し、自由・平等・真理を標榜した。前掲『清末留日学生』229頁参照。

²⁵ 留日学生の泰力山らが1901年5月に組織した。『訳書彙編』の同人楊廷棟、楊蔭杭、雷奮、王寵恵、張継らと機関紙『国民報』を発刊した。自立軍の思想を継承して革命仇満学説をとえ、留日学生のなかで最も早期に革命を鼓吹した。前掲『清末留日学生』230頁参照。

²⁶ 葉澗、董鴻禱、張継、秦毓蓀、汪榮宝、周宏業ら急進派が1902年の下半期、勵志会の穏健派と袂を分かって組織した。

した『遊学訳編』（湖南）や『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』などの月刊誌が1903年ころから東京で相次いで創刊され、留日学生の動向を立憲から排満に誘導した。

清朝は1901年に科挙の試験課目から八股文を廃し、中国政治史の策論に科目を絞った。同時に各省に留学生の派遣を奨励し、学業を全うした者を進士に任ずる教育改革を実施したことから留日学生数が毎年倍増し、留学行動が活性化したことも革命派を増やす要因になった。また、この時期、神田駿河台に留学生会館が建設され、留日学生の政治活動を活発にすることに寄与している。章士釗が宮崎滔天の『三十三年の夢』を『孫逸仙』として中国語に抄訳し、これによって孫中山の革命事績が留日学生に流布されたことも大いに革命派を増やした²⁸。こうした情勢のもとで、後世に孫中山、黄興とともに「革命三尊」となれば称せられ排満民族主義を鼓吹した章炳麟²⁹が来日し、支那亡国二百四十二年記念会を計画して数百人の参加申込者を獲得して留日学生の思潮を一気に立憲から革命に転換した。

清国国内では1903～1904年にかけて、こうした留日学生の動きに歩みを合わせるように東京の軍国民教育界から派遣された黄興、陳天華が劉揆一、楊毓麟、宋教仁らと湖南の長沙で華興会を設立し、上海では章炳麟から思想的影響を受けて日本から帰国した陶成章らが蔡元培と協力して光復会を立ち上げた。いずれも排満革命組織で、やがてこのふたつの組織が孫中山の興中会と合体して中国革命同盟会の母体となり、留日学生を排満革命の渦に巻き込み辛亥革命の後方を担うことになる。

1-2-2 虚無思想とアナキズム

急進的な留日学生は立憲派の国体護持を前提とした改良案、そして孫中山らの革命派が進めた華南各地における武装蜂起に飽き足らないものを感じていた。こうしたなか、革命的テロル³⁰で一気に清廷の転覆をねらう勢力があらわれた。楊篤生、徐錫麟、呉樾らのグループである。

楊篤生は26歳で科挙に合格した挙人だが、拒俄運動³¹を通じて清国に伝播したナロードニキの影響を受け、1902年に来日して早稲田大学に学び、虚無思想で武装した革命派に転向する。呉樾は曾國藩門下の「四高弟」とよばれ、李鴻章の幕臣でもあった呉汝綸を輩出した一族につらなるが、本人は八股文との格闘に敗北して挙人にはなれなかった。保定高等師範学堂に在学中の1904年、帰国した楊篤生に師事して北方暗殺団を結成し、急速にテロリストへの道に踏み込んでいく。戊戌の政変で康有為、梁啓超が失敗した時、多くの知

民族主義、破壊主義を標榜した。留日学生の中で最も早期に設立された革命団体。前掲『清末留日学生』229頁参照。

²⁷ 拒俄運動で解散させられた青年会が1903年に改名して興した組織。前掲『清末留日学生』229頁参照。

²⁸ 前掲『孫文 毛沢東』23頁参照。

²⁹ 日清戦争の敗北に衝撃を受けた章炳麟は1895年、強学会に入会し、上海『時務報』の記者となって変法運動に参加した。義和団事件後、唐才常の国会に加わったが、弁髪を切ってその「勤王」スローガンに反対し、排満民族主義革命の旗印を鮮明にした（湯志鈞編『章太炎年譜長編』上冊（中華書局、1979年）「光緒26年庚子〔1900年〕33歳」の項を参照）。支那亡国二百四十二年記念会は蘇州東吳大学の教員になった際に排満を公言して清朝に追われ、日本へ避難中に計画したが、事前に清国公使に情報が漏れて開会が禁止された。この後、帰国した章炳麟は章士釗が主筆を務めていた『蘇報』で鄒容の『革命軍』に序を寄せ、また『康有為を反駁して革命を論ずる書簡』を発表して反満を称え、章炳麟は監禁3年、鄒容は同2年に処せられ、鄒容は獄死した。

³⁰ 主要人物の暗殺、集団による武装蜂起、軍隊による革命戦争をその手段とする。横山宏章『中国近代政治思想史入門』（研文出版、1987年）122頁。

³¹ 義和団事件の鎮圧を口実に東三省を武装占拠したロシアに対する清国人知識人の反対運動。

識人は康梁二氏のためにこれを嘆いたが、呉樾は酒席に友を招き痛飲した³²。このときすでに反満思想³³を抱いていたのである。呉樾はその後、楊篤生の指示で立憲君主制の視察に訪欧する載沢ら 5 大臣³⁴を北京駅頭で暗殺する計画を立て、1905 年 9 月 24 日午前、企てに失敗し携行した手作り爆弾で北京駅頭に散った。27 年の生涯だった。

呉樾が 5 大臣の暗殺に失敗した年から辛亥革命までの 6 年間に遅々として進まない社会改革あるいは清廷の転覆に焦燥した多くの虚無思想の持ち主には、革命的テロルの手段³⁵で清廷の転覆を企てる者が続出した。ナロードニキの影響を受けた中国人が日本や中国国内で暗殺を主体とする虚無党の運動を展開したのは、東京とパリで無政府主義を奉ずる中国人アナキストグループが活動を始める直前のことだった。ロシア虚無党が掲げた「鼓吹、起義、暗殺」の綱領にしたがった結果といえよう。

中国のアナキズム運動は、早稲田大学に留学した張継³⁶がイタリアのアナキストだったマラテスタ³⁷の著書の日本語訳を中国語に編訳して 1903 年に出版した『無政府主義』（上海鏡今書局、1903 年）³⁸によってその種が蒔かれた。該書は、中国が直面する統一と独立という課題を念頭に置きつつ、アナキズムの思想的そして手段的な有効性を説いた³⁹もので、それはまず留日学生に流布され、彼らを通じて中国国内に紹介された。留日学生の思想的な立脚点が立憲派から革命派に転換する中で、アナキズムが革命派に影響力を及ぼす画期となったのは 1907 年であろう。前年に米国から帰国した幸徳秋水が日本で初めてアナキズム運動を起こし、それに触発されるようにして劉師倍・何震夫妻⁴⁰が主宰するアナキズム雑誌『天義』が創刊し、張継もこれに加わって社会主義講習会の設立につながっていく。張継の『無政府主義』以来、くすぶっていたアナキズムの組織化が進んだのである。劉師倍、何震、張継らは東京アナキスト・グループ⁴¹とよばれる。同年、フランスでも李

³² 横山宏章『清末中国の青年群像』（三省堂、1986 年）86 頁より再引。

³³ 呉樾の反満思想はその書『暗殺時代』の「今日の時代は革命の時代にあらず、実に暗殺の時代なり。漢族を奴隷とするの者は淫婦那拉でなくて誰ぞ。漢族を亡ぼさんとする者は逆賊鉄良でなくて誰ぞ」という記述に見てとることができる。淫婦那拉とは葉赫那拉氏、つまり西太后のことを指す。西順蔵編『原典中国近代思想史』第三冊辛亥革命（岩波書店、1977 年）309 頁。

³⁴ 載沢、徐世昌、紹英、端方、戴鴻慈の 5 大臣を指す。

³⁵ 萬福華事件（1905 年 10 月、前広西巡撫王之春を暗殺）、劉思復事件（1907 年 5 月、水師提督李準を暗殺未遂）、秋瑾・徐錫林事件（1907 年 7 月、安徽巡撫恩銘を暗殺）、熊成基事件（1910 年 1 月、海軍大臣載洵を暗殺未遂）、汪精衛事件（1910 年 4 月、摂政王載灃を暗殺未遂）、李冠慈・陳敬岳事件（1911 年 8 月、水師提督李準を暗殺未遂）など。

³⁶ 張継、字は溥泉、河北省の人（1882～1947）。1899 年に渡日し、翌年義和団事件で一時帰国したが、再来日して早稲田大学で政治学と経済学を学んだ。幸徳秋水、大杉栄ら日本のアナキストと交際し、1905 年に中国革命同盟会が結成されると同時にそれに加入した。嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』（研文出版、1994 年）260～261 頁、R. A. スカラピーノ、G. T. ユー著、丸山松幸訳『中国のアナキズム運動』（紀伊国屋書店、1970 年）62 頁などを参照。

³⁷ マラテスタ（1853-1932）、バクーニンの弟子で アナキズム運動の指導者として積極的に活動した。しばしば投獄・追放の刑を受け、1914 年の北イタリアにおけるゼネスト（赤色週間）では指導的役割を果たした。

³⁸ 馮自由『革命逸史』第三集（台湾商務印書館、1969 年）153 頁、丸山松幸『中国近代の革命思想』（研文出版、1982 年）109 頁などによる。

³⁹ 前掲『近代中国アナキズムの研究』52 頁を参照。

⁴⁰ 劉師倍（光漢＝漢民族を光復する意、1884～1919）、春秋左伝学を修めた学者の名門に生まれ、18 歳で挙人に合格し、国学の天才と持て囃された。章炳麟らと排満思想を宣伝し、1903 年に『攘書』を著わす。1907 年 2 月、章炳麟に招かれて渡日し、東京で同盟会の機関誌『民報』に排満の論陣を張る。同年、張継の紹介で幸徳秋水と交わってアナキストに変身する。その 2 年後、清朝のスパイとなってアナキズムから離脱する。何震は劉師倍の妻で、東京で女子復権会を主宰し、アナキズム雑誌『天義報』は同会の機関誌でもあった。横山宏章『中国近代政治思想史入門』（研文出版、1987 年）172 頁、前掲『近代中国アナキズムの研究』85 頁などを参照。

⁴¹ 劉師倍は、中国の歴代政府は放任を重んじ、干渉を重んじない。お上は人民に親しまず、人民はお上を信じない。法律は空文にすぎず、官吏はお飾りに等しく 1 人として真に権力を持つ者はいない、名前は有政府でも実は無政府と異ならない」と社会主義講習会第 1 回会合で発言し、世界で無政府の実現は中国がもっとも容易、と演説している。西順蔵編『原

石曾、呉稚暉らのパリアナキスト・グループが旗揚げして機関誌『新世紀』を創刊している。

張継は1907年末、東京で社会主義者に対する警察の取り締まりが厳しくなったためパリに拠点を移し、1911年までパリアナキスト・グループと交際を結び、辛亥革命後に帰国して国民党の初代参議⁴²に名を連ねた。劉師倍は『天義』停刊後、後継誌の『衡報』を創刊（1908年4月）したが、10月に発禁処分に遭うとアナキズムの宣伝に意欲を失い、帰国して転向し清廷の高官だった端方のスパイとなって革命を裏切り、東京アナキスト・グループの活動はわずか1年余で挫折する。

1-2-3 軍事留学生

軍事を学びに来た留日学生の状況についても言及しなければならない。蒋介石の日本における留学環境を例にとって検討しよう。

蒋介石は1905年、寧波の箭金公学で革命運動に理解を示す顧清廉から『説文解字』や『曾国藩集』の講義を受け、同時に「兵法を知り、新学を求め、国家を保衛したいと望むなら外国に留学すべきである」⁴³と教えられ、翌年、奉化県の龍津中学に入学して3ヵ月目に日本へ向かう。ところが当時の日本の規定では、中国人学生が日本の軍隊に入って訓練を受けるためには清国陸軍部の推薦が必要だった⁴⁴。蒋介石はやむなく東京の清華学校へ入学し、半年後にはいったん帰国して保定の陸軍部全国陸軍促成学堂（保定軍官学堂）に入り直し、そこで正式に留日陸軍学生の資格をとり、1907年にふたたび赴日して東京の振武学校⁴⁵に入学した。

1903年の『陸軍学生分班遊学章程』は、毎年100名の軍事留学生を中国各省から受け入れると規定している。事実、初年度の学生は入学ベースで107名、3年後には330名（3年制）になり、卒業生数は1904年に49名、1905年には121名、1906年には202名を数えた⁴⁶。以後、辛亥革命前までこのペースで留日軍事学生が日本で学んだ。

振武学校を卒業した蒋介石は、新潟県高田にあった陸軍第十三師団野砲兵第十九連隊に配属された。士官候補生としての入隊だった⁴⁷。厳しい訓練と厳格な規律の中で蒋介石は日本人の精神も学び、とくに軍隊の強さは「大和魂」や「武士道」にあると考え、この精神の由来を中国の陽明学に求めた。後年、蒋介石は「もともと中国が持っていた良い精神と哲学を中国人みずからが保存、応用できず、その一部を盗みとった他人（日本人）がそれをもって中国人を滅ぼそうとしているのは我が民族最大の恥辱である」と語っている⁴⁸。蒋介石はみずからの留学経験とともに、この陽明学の哲理をも蔣経国の幼少年教育に応用した。蔣経国がソ連から帰国して民国政治にデビューした初任地が陽明学の揺籃とも言え

点中国近代思想史』第三冊（岩波書店、1977年）439～440頁参照。

⁴² 劉維開編輯『中国国民党職名録』（中国国民党中央委員会・党史委員会、1994年）11頁。

⁴³ 秦孝儀総編纂『総統 蔣公大事長編初稿』巻一（中正文教基金会、1978年）11頁

⁴⁴ サンケイ新聞社『蒋介石秘録』1（サンケイ新聞出版局、1975年）44頁

⁴⁵ 1903年7月、東京牛込の河田町に創立、陸軍士官学校または陸軍戸山学校に入学する留日学生の準備教育のために清国陸軍との協議を経て設けられた。さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）68頁を参照。

⁴⁶ 前掲『増補 中国人日本留学史』70頁。

⁴⁷ 前掲『総統 蔣公大事長編初稿』巻一 17頁。

⁴⁸ 前掲『蒋介石秘録』2 223～224頁。

る江西省の贛南だった⁴⁹ことは、ただの偶然ではなく蒋介石の子弟教育を貫いた意志の表出に違いない。

留日軍事留学生は軍事技術の摂取にとどまらず、それぞれの立場で立憲派や革命派と濃密な関係を結んだ。蒋介石は最初に日本留学したわずか半年の間に陳其美⁵⁰と知り合い、2回目の留学時には陳其美の紹介で中国革命同盟会に入会し孫中山との知己を得て辛亥革命へと直結していく。

以上が蔣経国誕生前夜、ならびに蒋介石の学齡期における清国人の日本への留学行動にみられる思想状況の概略である。辛亥革命で崩壊した清朝の後には難産ながらも三民主義の中華民国が成立するのだが、その社会・思想環境には中華帝国の残滓が濃厚にあった。やがて辛亥革命をさらに革命する運動が起こり、清朝を支えた儒教を土台とする「天下」的世界観の一掃を目指した新文化運動や文学革命を経て新しい社会の模索が始まる。そうした中で下火になった日本留学に代わり、「勤工儉学」運動すなわちフランスへの留学行動が始まる。

第2節 フランスへの留学行動——赴仏勤工儉学にみる共產主義思想の萌芽

中国人の赴仏勤工儉学運動は、1912年に李石曾、吳稚暉、汪精衛、蔡元培、張静江、褚民誼、張繼、済竺山らパリ・グループとよばれるアナキストたちとその支持者が北京で留仏儉学会を設立して始まった。その名称が示すように、初期の目的は「儉学」すなわちフランスに渡り少ない費用（儉＝儉約）で勉学することにその目的があった。フランスへの留学行動に「勤工」（＝労働に勤める）が加わったのは、五四運動で啓蒙された青年知識層が肉体労働の意義を認識し、マルクス・レーニン主義に従って頭脳労働との調和を図ろうとしたことによる。実際に大量の若者がフランスを目指したのは五四運動前後からで、このためパリ・アナキストグループが目指した留仏儉学と実際にフランス各地で勤工儉学した中国人青年の目的が全面的に一致したわけではない。アナキストグループが留仏儉学でフランスに求めたのがフランス革命の栄光に民国社会の改良を求める気持ちであったとすれば、勤工儉学生の思いは辛亥革命後の混沌とした不安定な政治社会環境のなかでロシア十月革命の光芒に惹かれ、ソ連に留学はできないが革命の祖国フランスには行けるといいう国際情勢を利用し、より直接的、政治的に建国のための知識と救国の実力⁵¹を学びとうとした運動だった。この留学行動は五四運動をはさんでピークをむかえ、数千人の中国人がフランス各地で学びながら働き、労働を通じてマルクス・レーニン主義の洗礼を受け、中国少年共産党の設立あるいは中国共産党旅欧支部の活動に加わり、帰国後は多くが中共の活動家として吸収されていく。

本節はパリ・グループの中心人物である李石曾、吳稚暉、およびみずからも勤工儉学運動に加わって渡仏し、回想録を著した鄭超麟、何長工とその周辺人物の事跡をたどりなが

⁴⁹ 本論第Ⅱ部第6章を参照。

⁵⁰ 中国国民党を牛耳ったCC派の陳果夫、陳立夫は陳其美の甥にあたる。陳果夫は日本に留学し、陳立夫は米国に留学した。

⁵¹ 何長工著『勤工儉学生活回憶』（北京・工人出版社、1958年）1頁。

ら、主に勤工儉学運動の起源や実相、民国政治や社会におよぼした影響について検討する。

2-1 留仏儉学と時代背景

李石曾や呉稚暉らが留仏儉学運動を起こしたのは、中華帝国最後の王朝清国を廃して建国した中華民国が辛亥革命をさらに「革命」する時期にあたる。欧州は第一次大戦の直前だった。李石曾らパリ・アナキストグループが北京に設立した留仏儉学会の会約は、「社会を改良するには、まず教育を重んずる。世界文明を内国に輸入しようとするれば、必ず泰西に留学することが要図である⁵²」と謳っている。フランス革命の故郷で中国人青年を教育し、それを民国の建設に役立てるとというのが儉学運動の趣旨だ。李石曾らにはまた、もうひとつ別の目的もあった。それは米国の対中国文化侵略に対抗しようとするフランス政府の試みに相乗りして留仏儉学生を大量に送り込み、それと引き換えにフランス政府に義和団の乱の賠償金を返還させようとする⁵³ことと関係があった。フランス政府にとってみれば、大量の中国人青年を留学生として受け入れてフランス・シンパを養成すれば、それは中国国内に多数の大学や病院、教会をつくって中華民国の人心を取り込もうとする米国に対して充分に対抗出来ると考えたのだ。フランスはまた北京に中仏大学を設立するとともに、留仏儉学から勤工儉学へと留学行動が推移するとリヨンにも中仏大学（呉稚暉学長＝アナキストの在仏拠点）を認可して勤工儉学生の抱き込みを図った。数千人にのぼった勤工儉学生の数をもってすれば、それは米国の清華大学留米事業に優るとも劣らない文化事業の成果を期待したからである⁵⁴。

李石曾らは1912年に留仏儉学会を設立すると、4月にはフランス留学のための留仏儉学会予備学校を北京の安定門外方家胡同に設立した。これは後に北京大学の学長に就任した蔡元培の尽力で順天高等学堂の旧址を借り受けてつくったもので、ここで儉学候補生に初歩のフランス語を教えたのである⁵⁵。同年11月には第1期生と第2期生の合計40余名がシベリア鉄道でパリに向かった。また翌年6月には、第3期生の40余名が渡仏している。第1期生はモンタルジのモンタルジ中学校に入学し、第2期生は工業職業学校で学んだ。1914年8月に勃発した第一次大戦で儉学生たちは戦火を避けてフランス各地の学校に疎開することを強いられたが、多くが初志をつらぬいてパリ大学やツールーズ大学などに進学し、学位を得て帰国している。この間、辛亥革命を革命する第二革命は袁世凱の再登場で失敗に終り、逮捕令が出た孫中山は9月に日本へ亡命し、李石曾や呉稚暉、蔡元培らはフランスに政治避難した。このため李石曾らは前後2回、合計80余名の儉学生を送り出しただけで、留仏儉学会及び留仏儉学会予備学校の活動を停止せざるを得なかった⁵⁶。

清朝末期、国費留学生には毎月1200元が支給されていた。辛亥革命後とは言え、当時夫婦と子供2人、女中、車夫1人を抱えた中産階級の家庭で毎月の平均生活費が77元前後だった（1912年）物価水準でも、儉学に必要な費用は毎月約600元を必要とした。このことから留仏儉学は主に新生した中華民国の高所得層を形成する子弟を対象にしていたことが

⁵² 「留法儉学会縁起及会約」『民立報』民国元（1912）年5月29日所載。

⁵³ 鄭超麟『鄭超麟回憶錄』（東方出版社＝内部発行、2004年）174頁。

⁵⁴ 森時彦「フランス勤工儉学運動小史」（下）『東方学報』第五十冊（京都大学人文科学研究所、1978年2月）352～353頁。

⁵⁵ 李宗侗「旅法雜憶」『伝記文学』第一期第三期（台湾伝記文学出版社、1962年8月1日）所収。

⁵⁶ 同上「フランス勤工儉学運動小史」（上）197～198頁。

わかる。将来の国家指導層、学者、あるいは上流階層の後継人に相応しい人格と学問を授けようとする留学行動であったことは間違いない。現に、僑学生の中からは憲法学者として大成した鄭毓秀、物理学の李書華、化学の李麟玉、農学の徐延珣、建築学の汪申、蔡元培の長男で獣医学の蔡無忌らブルジョア学者として一流の人材が輩出した⁵⁷。

辛亥革命をさらに革命する運動はやがて討袁運動に発展し、そのころには陳独秀を中心とする思想改革としての新文化運動が起こってくる。徳先生（デモクラシー）と賽先生と（サイエンス）という諧謔の利いた中国語で知識層を巻き込んだこの運動は第一次大戦初期に日本が提出した対華 21 カ条要求の取り消しなどをめぐって五四運動、そして六三運動⁵⁸に発展し、運動が激化する中でいちど下火になった留仏僑学は「勤工」という新たな方法が付加されて復活する。

2-2 勤工僑学と留学生の諸相

ヨーロッパ各国は第一次大戦の長期化で労働力不足に陥り、外国人の労働力を求める土壌が生まれた。これに呼応して欧州各国に渡った中国人労働者は「参戦華工」と呼ばれ、いったん下火になった僑学によるフランスへの留学行動もこの波に乗って新たに「勤工」という手段が付加され、「勤工僑学」運動として再生する。蔣経国は後年、その回想録のなかで最初は勤工僑学運動の影響を受けてフランスへの留学を目指した⁵⁹が、最終的にはモスクワに留学した、と述懐している。蔣経国が大学に入学する年齢に達したころには勤工僑学運動が下火になり、それに代わって革命の聖地ソ連への留学ルートが確立していたからだろう。

「参戦華工」の第 1 陣は 1916 年 8 月 22 日に 1700 余名がマルセイユに到着し、軍需工場や製鉄、造船、鉱山などの現場に配属された。翌年 8 月、中華民国が参戦してからは前線に送られて塹壕掘りや弾薬輸送などの苦役に就かされた。「参戦華工」はまた中華民国が戦後処理の会議で有利な立場を得るために、欧州大戦に参戦したことの証明にも利用された。中華民国の産業界としては、「参戦華工」を利用してフランスの工業技術を国内に移転したい、という目的もあった。

「参戦華工」の募集はフランス陸軍省が管轄し、中華民国政府の影響下にあった惠民公司（梁士詒代表＝袁世凱政権の代理財政総長）、李石曾らアナキストグループがつくった招工組織、そして志願者みずからが山東半島の威海港などからそれぞれ自由に海路で渡仏した三つのルートがあった。フランスで職を得た「参戦華工」の総計は約 15 万人で、惠民会社が 3 万 5 千人、李石曾らの招工組織が約 1 万人、その他は自由渡仏である⁶⁰。パリに拠点を移していた李石曾や呉稚暉、蔡元培らは、これらの「参戦華工」にフランス語の初歩や風俗習慣を教え、同時にフランスと中華民国の学術、文化交流を促進する機関としてパ

⁵⁷ 同上「フランス勤工僑学運動小史」（上）199 頁。

⁵⁸ 六三運動は五四運動の延長線上に位置づけられる。1919 年 6 月 3 日、親日派が牛耳る北京政府は北京の学生が運動の突破口を求めて大規模な街頭行動に出たことに対し大量逮捕などの弾圧で報い、これに対して反政府的な色彩を放った全国的規模の反対運動が引き起こされた。

⁵⁹ 蔣経国「我在蘇聯的日子」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』一冊（行政院新聞局、1992 年）62 頁。

⁶⁰ 陳三井『華工与欧戰』（台湾中央研究院近代史研究所、1986 年）25～30 頁、および同上「フランス勤工僑学運動小史」（上）204～206 頁を参照。

リと北京に中仏教育会とその下部組織である勤工儉学会を設立した。この組織は後に勤工儉学生募集や管理、支援を行う組織となる。

中華民国の国内では新文化運動に触発された青年知識層の中に、ロシア十月革命の時代を先取りする精神に惹かれて五四運動の中核を担う勢力が現れてくる。彼らは勤工儉学運動に社会主義的な肉体労働と頭脳労働の一致という理想の実現を見いだす。こうした風潮のなかですでに北京大学の学長職を得て帰国していた蔡元培は、北京郊外の長辛店にあった京漢鉄道工場や北京大学、保定の育徳中学に留仏勤工儉学予備学校を設けて全国から留仏勤工儉学候補生を募集し、フランス語の初歩教育などを実施した⁶¹。こうして五四運動に前後して予備クラスに学んだ勤工儉学生が一団また一団とフランスに向けて出国し、とくに長辛店の京漢鉄道工場で五四運動や六三運動の中核を担ったグループは先鋭化し、出発前には基礎的なマルクス・レーニン主義の知識を身につけている者まで出現した。

留仏勤工儉学生たちは上海や香港からハイフォン、サイゴン、バンコック、シンガポール、コロンボ、ジプティ（アフリカ東岸）、スエズ運河、マルセイユを経てパリに到着し、モンタルジ（Montargis）やバンドーム（Vendome）、ムラン（Melun）、フォンテンヌブロー（Fontainebleau）など11の中学校や工業実習学校、無線学校、パリ大学、リヨン中仏大学、高等農業学校、農業実習学校、電気学校、飛行機学校、製紙学校、医学校などが入学を受け入れた。一部の教育機関は中国人勤工儉学生の速成科を設けている。1919年から1921年までに渡仏した留仏勤工儉学生の人数とその後の中国現代史に登場する主な顔ぶれは以下の通りである。

◎ 1919 年（勤工儉学生数）

第1期 89 人

第2期 26 人

第3期 60 余人

第4期 61 人

8月 50 人

9月 40 余人

10月 150 人

12月 208 人〔1919年だけで700人（3割が儉学生、残りは勤工儉学生）〕

※各省で出国待ち、その後2年間で約6000人が赴仏したとの資料もある。

◎1920 年（勤工儉学生数）

第10期、第11期の両期に1200人

※1920年代末、1600人に達する。

1921年1月 出国停止（中仏教育会）令が出されるまでに1200人が赴仏した（総計3100人）。

⁶¹ 留仏勤工儉学予備クラスは四川省成都、湖南省長沙、上海、山東省済南など全国諸都市に20カ所余りも設けられ、当時、北京にいた毛沢東も勤工儉学生の募集業務に従事していた。

◎男性留仏勤工儉学生

何長工、趙世炎（少年中国学会）

聶榮臻、陳毅、鄧小平（四川省）、周恩来（天津覚悟社）

呉琢也（労働者＝六三運動を指導して上海求新工場を解雇された）

蔡和森（長沙）、鄭超麟など。

◎女性留仏勤工儉学生（湖南女子留仏勤工儉学）

向警与（蔡和森の配偶者）

蔡暢、蔡葛健豪（蔡兄妹の母）〔長沙周南女学校〕

李志新、熊季光、蕭淑良など。

渡仏した勤工儉学生に対する配属業務は中仏教育会パリ本部学生事務局が担当し、儉学校の選定、工場への就職斡旋、民国政府からの補助金、奨学金の取り次ぎなども行った。同教育会の1920年における統計によれば、勤工儉学生の入学先は各種学校が599人、中学校522人、工業実習学校27人、無線学校21人、その他パリ大学、リヨン中仏大学、高等農業学校、農業実習学校、電気学校、飛行機学校、製紙学校、医学校などにはそれぞれ10人未満となっている。

また、「勤工」先については、大きなところではパリ近郊ビヤンクールにあったルノー自動車工場、クルーズ兵器工場、リヨンの自動車工場、サン・シャモン、サンテ・ティエンヌ、フィルミニイの鉄鋼、機械工場、ビスケー湾に面するラロシェルの造船、化学工場などが勤工儉学生を受け入れた⁶²。

順調に人数を増やしてきた留仏勤工儉学生のフランスにおける生活は1920年の後半から一転して厳しい状況に陥る。第一次大戦が収束して軍需産業が不景気になり、さらに大量の兵士が帰還して労働力がだぶつき始めたからである。それまで引く手あまただった「参戦華工」や勤工儉学生に対する需要が一気に冷え込んだのである。共産主義史研究のアニー・クリーゲルがまとめた統計資料によれば、勤工儉学生2000人中、就職希望者は1600人で、実際に職に就くことができたのは500人（31%）だった。また、勤工儉学生の実感では、10人中8人までが就職できなかった、とされている⁶³。こうした状況下で勤工儉学生は中仏教育会に貸し付け援助を養成するが、その人数が膨れ上がり同教育会の財政状況では対応しきれなくなり、これに業を煮やした中仏教育会では蔡元培が1921年1月16日に勤工儉学生に対する援助を最終的に打ち切る通告を発し、李石曾、呉稚暉らは帰国してパリには責任者が不在になる⁶⁴。

これに対して勤工儉学生側は翌月2月27日、パリのカフェで留仏勤工儉学生代表大会を開き、「労働権、読書権、面包（パン＝生存）権」を要求していくことで一致し、翌28日

⁶² 卡孝萱「留仏勤工儉学資料」『近代史資料』第二期（中国社会科学院、1955年）177頁、および同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）325～326頁。

⁶³ Annie Kriegel “*Communismes au miroir français*” 84頁、および同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）337頁を参照。

⁶⁴ 同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）338～339頁。

に中国公使館にデモをかけ、蔡和森、王若飛、向警与ら 11 人の代表が陳籙公使と面会した。中国公使館はフランス政府と世論の圧力もあり、①すでに入学済みの勤工俟学生に 1 ヶ月分の生活費を補助する、②失業者にはフランス工業界の各種団体と折衝して就職の手だてを講じる、③帰国希望者には費用を与えて帰国させる、ことで学生側をいったん納得させた⁶⁵。陳籙公使らはフランス政府との調整を経て、5 月 14 日に勤工俟学生を救済するための中仏委員会を発足させたが、根本的な解決策を見いだすことはできなかった。また、同年秋にはリヨン中仏大学（呉稚暉学長）でフランス在住の勤工俟学生が入学資格の有無と学費未納を理由に排除されたために「リヨン進軍」と称された紛糾が起こり、フランス各地から勤工俟学生がリヨンに押しかける事態が発生した。リヨン中仏大学は呉稚暉らがフランス政府から義和団の乱の賠償金返還を受け、その一部を使って設立したものである。これら二・二八闘争、あるいはリヨン進軍とよばれた学生の闘争を境にして勤工俟学運動そのものが一気に下火になっていく。

2-3 勤工俟学運動の到達点

留仏勤工俟学生の多くは長辛店の京漢鉄道工場や北京大学、保定の育徳中学に設けられた勤工俟学予備学校で五四運動を経験した知識青年だった。ロシア革命の光芒に触発された五四運動の落し子としての勤工俟学生たちは、渡仏後も新生したソ連に対するあこがれと救国思想の獲得を目的として勤工俟学に励んだ。勤工俟学生はさきの二・二八闘争とリヨン進軍という二つの運動の中で、アナキストとマルクス・レーニン主義者の概ね二つの派閥に別れて闘争した。呉稚暉が学長としてアナキズムの拠点としたリヨン中仏大学における入学資格と学費免除闘争に敗北するなかで、勤工俟学生たちの主流は徐々にマルクス・レーニン主義を信奉する勢力に収斂し、ロシア十月革命をいかに評価し、それを中国の改革とどのように結びつけていくのかをめぐって議論が盛んになっていった。また、初期のコミンテルン（第三インターナショナル）が世界各国の社会主義革命を支援する方針を打ち出したことも、祖国の現状を憂う勤工俟学生を勇気づけている。

こうした情勢のもとで、1921 年冬には、趙世炎、陳延年、王若飛らが共産主義にもとづく青年団の設立準備を進めていた⁶⁶。パリでリヨン進軍の指揮をとった周恩来もその敗北の総括から共産主義組織の必要性を痛感し、ともに渡仏していた覚悟社の仲間と 1921 年以降になって組織の設立に動きはじめた⁶⁷。共産主義の青年団体をつくる話し合いは 1922 年 6 月 3 日、パリ西方にあるブローニュの森で行われた。そこで 18 人の参会者⁶⁸が合議し、中国少年共産党（後に中国共産主義青年団旅欧支部と改称）の設立が決まり、趙世炎が書記長、張伯簡が組織委員長、周恩来が宣伝委員に選出される。

中国少年共産党は成立直後から中国共産党との連携を模索した。旅欧中国共産主義青年

⁶⁵ 同前「フランス勤工俟学運動小史」（下）347～348 頁。

⁶⁶ 何長工『勤工俟学生活回憶』（北京工人出版社、1958 年）73 頁。

⁶⁷ 胡華『青少年時期的周恩来同志』（中国青年出版社、1977 年）95～96 頁。

⁶⁸ 少年共産党の設立大会に出席したのは、趙世炎、袁慶雲（趙世炎の同郷）、王凌漢（四川人）、熊銳（広東人）、任卓宣（四川人）、李維漢（湖南人）、薛世綸（同左）、周恩来（天津人、ドイツ支部）、陳延年（陳独秀の息子）、劉伯堅（ベルギー支部代表）、王若飛（貴州人）、蕭樸生（四川人）、尹寬（安徽人）、李慰農（同左）、熊渭耕、李富春、林鏑蔚、鄭超麟（福建人）で、最後の熊渭耕、李富春、林鏑蔚の 3 人については鄭超麟の記憶が曖昧で人違いの可能性もある。鄭超麟『初期中国共産党群像』1（東洋文庫、2003 年）83 頁。

団報告（第1号）によれば、在フランスの中国共産主義青年団旅欧支部（中国少年共産党から改称）が中国共産党中央、あるいは共産主義青年団中央と正式な関係を樹立するのは1922年末から23年にかけてのことである。これにより、フランスに足場をつくった中国共産党はドイツ、ベルギー、にも支部を置いた。ドイツ支部には周恩来、朱徳、高語罕らが在籍し、ベルギー支部には何長工、聶榮臻らが所属した。

中国共産主義青年団旅欧支部の活動は華工運動、学生運動、出版活動が三本柱だった。なかでも「参戦華工」へのオルグは、プロレタリアートとの結合をめざす共青团にとって最重要の任務となる。共青团の華工運動は旅仏華工総会との連帯を模索し、「参戦華工」に工業プロレタリアートとしての自覚を育てることを目指した。1923年ころの「参戦華工」は3000人前後だった。彼らは戦後も陸軍省の管理下に置かれていたが、フランス政府は「参戦華工」に対しては支給済みの旅費600フランを陸軍省に返還することを条件に自由労働者となることを許可している。「参戦華工」を組織した華工会はパリ講和会議の際に中国公使館を包囲して、陸徴祥、王正廷らの中国代表団が調印に赴くのを阻止した。これは「参戦華工」が行った最初政治運動だった⁶⁹。

結成当時、中国少年共産党の党員は51名だったが、中国共産主義青年団旅欧支部に改称後は中国各省の出身者からなる300名以上の組織に発展している。5000人前後といわれた当時の在仏中国人の数からいえば一大勢力だった。旅欧支部の活動の三本柱のひとつだった出版活動は、出版委員に選出された李富春、劉伯堅、任卓宣、周維禎、範巖、鄧小平ら16名で実施され、機関誌『少年』（1922年8月1日創刊）、その後は『少年』に代わって『赤光』を発行した。アナキズムや社会民主主義に対する批判とマルクス・レーニン主義の理論研究を主な活動内容とした。『赤光』の編集責任者は鄧小平で、その巧みなガリ版作業から「謄写版博士」と愛称された⁷⁰。

中国共産主義青年団旅欧支部はまた、1921年4月にモスクワで開学した東方勤労者共産主義大学（クートベ）に団員を留学させることにも注力した。勤工儉学生がしたためた1923年9月の書簡には「フランスからロシアに赴こうとしている者が20人から25人もいる」と記されている。フランスからソ連に向かった留学の第1陣は、趙世炎、陳延年、熊雄、劉伯堅、聶榮臻らで、帰国後は中国共産党の中核党員となっている⁷¹。

第3節 ソ連への留学行動——共産主義者の養成

長期化する第一次世界大戦で民衆の不満が高まるロシアでは、その隙を突くようにウラジーミル・レーニン率いるボリシェビキが十月革命に成功した。世界初の共産主義革命は英国やドイツなどの発展した資本主義国ではなく、予想に反して経済的に立ち遅れたロシアの大地で起こったのだ。ちょうどそのころ、中国ではデモクラシーとサイエンスを合い言葉に中華帝国の残滓、すなわち儒教を土台とする「天下」的世界観の維持に使われた封

⁶⁹ 同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）399～401頁を参照。

⁷⁰ 同前『勤工儉学生活回憶』75頁、および同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）402頁を参照。

⁷¹ 「卓宣致碩夫同志書」『共産主義研究会通信集』第三集（発行主体不明、1923年）42～44頁、同前『勤工儉学生活回憶』76頁、および同前「フランス勤工儉学運動小史」（下）402～403頁を参照。

建的な道徳や文化を打破し、人道的で進歩的な社会の創出をめざす新文化運動が陳独秀や魯迅、周作人、胡適、李大釗らの知識青年によって展開されていた。この運動はロシア十月革命の波及力を得て発展し、1919年の五四運動そして1921年の中国共産党の創立につながっていく。

内憂外患に呻吟していた中国の青年知識層は共産主義による革命がどのような社会を生んだのかと期待や憧憬を抱いた。民国の領袖孫中山は革命の基地を広州に再建し、十月革命で生まれたソ連の支援を受けながら「ロシア十月革命の経験には見習うべきところがある」と考えた。このような状況に促され、大量の中国人学生が広州から、あるいは上海、北京、天津などの地からシベリアを経由してソ連に向かった⁷²。中国人によるソ連への留学行動の始まりである。

3-1 モスクワの共産大学

中国でロシア十月革命の高揚がいまださめやらない1920年代、モスクワではふたつの共産大学が中国人留学生を受け入れて革命の遂行をになうカードル（幹部）を要請する教育を始める。モスクワ東方労働者共産主義者大学（クートベ＝通称は東方大学、1921年開学、1938年閉学）⁷³と孫逸仙記念中国勤労者大学（クートカ＝通称は中山大学、1925年に開学、1930年閉学）のことである。

東方大学はスターリンが命名し、レーニンの「全世界のプロレタリアートと被抑圧民族は連合せよ」というスローガンのもとに、主に東方各国から入学した留学生を革命幹部に養成する目的で創立した。留学生は中国、朝鮮、インド、エジプトなどアジア・アフリカ諸国出身の70以上の民族からなり、米国黒人やソ連国内の少数民族学生も在籍した。日本人留学生も在籍したこの大学では、盲目の詩人でエスペ란ティストのヴェスィリー・ヤコブレヴィチ・エロシェンコ（1890-1952）が日本語通訳をつとめたこともある。中国人のほとんどは中国共産党が派遣した短期留学生で、革命教育や軍事教育が施された。第1期生には、羅亦農、任弼時、劉少奇、蕭勁光、彭述之、汪壽華らが名をつらねている。中国人留学生は、中国共産党モスクワ支部の管理下にあった。

孫逸仙大学は、黄埔軍官学校と東方大学だけでは激変する中国情勢への対応に足る革命要員の養成が間に合わないと考えたソ連当局が、国共合作をはじめとする孫中山の功績を顕彰し、国民党との合作で創立した大学である。2年間の比較的長期なカリキュラムを組み、国民党派遣の留学生にロシア語を含む総合的な革命理論や軍事理論を教えた。孫大は中国人、それも国民党員（国共合作を経て国民党内における党内合作により個人の資格で国民党に入党した中共黨員も含む）を対象に特別に設立されたものだ。

東方大学と孫逸仙大学はいわゆる一般大学ではなく、マルクス・レーニン主義の理論で短期間に共産党の中高級幹部を養成する革命専門学校というべきだろう。英米仏日などの

⁷² 王覚源『留俄回憶録』（三民文庫、1969年）3頁。

⁷³ クートベは1921年開学し、1938年に閉学した。2年間の課程で、マルクス・レーニン主義、世界史、ロシア共産党史などのほかに軍事訓練も行った。小銃、機関銃、手榴弾などの武器の使用法から部隊の指揮術まで教授した。日本からは毎年数名の労働者が非合法に留学し、通算40～50名に達した。日本共産党が壊滅状態になるたびにここの留学生たちが帰国して組織の再建につとめた。コミンテルンが日本共産党に与えた活動資金とならんで、これが援助項目のなかのもっとも大きなもののひとつである。立花隆『日本共産党の研究』（講談社文庫、1983年）55頁参照。日本人のクートベ留学者では風間丈吉が回想録『モスコー・共産大学の思ひ出』（三元社、1949年）を残している。

帝国主義列強に敵視され、封鎖されていたソビエト政権が国際社会で生き残るため世界に革命運動を波及させ、とくに列強が経営し食指をのばす植民地や後進の資源保有国、あるいは従属国の民族独立運動を支援し、帝国主義の支配を切り崩すというソビエト国家の利益と結びついた戦略の一環でもあった。さらにそれはロシア革命を支持し、その革命理論や運動論を学ぼうとする外国の知識人や革命家の要求でもあった⁷⁴。

上記ふたつの大学以外に、モスクワの国際レーニン学院、赤色教授学院（大学院）、歩兵学校、炮兵学校、工兵学校、そしてレニングラードのトルマトコフ中央軍政学院なども中国から派遣された留学生を受け入れた。国際レーニン学院は主に運動歴の長い中国共産党の幹部、あるいは第一次国共合作の崩壊で地下にもぐった中国共産党員の一時避難者などを受け入れた。赤色教授学院は東方大学や孫逸仙大学を卒業した学生から成績優秀者を選抜してさらに高度な革命理論や運動論を教授する大学院である。その他は中国からの軍事留学生を受け入れた。当時、クリスチャン・ゼネラルとよばれた馮玉祥は、これらの学校に旗下の士官 300 余名を送って訓練を受けさせている。

以下、中国人留学生を専門に受け入れ、在籍生も最多を誇った孫逸仙大学を中心にモスクワの共産大学について考察する。

孫逸仙大学は孫中山逝去（1925 年 3 月 12 日）直後のソ連共産党政治局会議（3 月 19 日）で設立が検討され、8 月 27 日に正式決定された⁷⁵。ソ連当局は孫中山の「聯ソ・容共・扶助工農」の三大政策を永続化させることを狙っていた⁷⁶。同大学はモスクワの中心アラハン街 16 号に立地し、校舎は帝政時代に貴族の子女が通ったギムナジウムが使われた。創立に係わる具体的な検討はブロイド（東方大学長）、ヴォイチンスキー（コミンテルン東方部）、カール・ラデック（前コミンテルン執行委書記）らが中心になって進めた。開学後はトロツキー派の重鎮ラデックが学長に任命され、スターリン派のパヴェール・ミフが副学長として東方大学から移籍してきた。運営はソ連共産党と中国国民党の多頭管理で、ソ共は同時にコミンテルンと中国共産党を代表していた⁷⁷。国民党からは邵力子が理事として理事会（初代理事長：ヨッフエ）に加わっている。開学前後からソ連共産党内で激化してきたスターリンとトロツキーの権力闘争で、ラデックは着任 2 年後に解任されてスターリン派のミフが学長に就任し、ミフの信頼を得ていた中共モスクワ支部の王明が「28 人のボルシェビキ」とよばれる一派を形成して権勢を振るうのである。

開学式は 1925 年 11 月 7 日の革命記念日にトロツキーが主催して挙行された。トロツキーは祝辞で、「たったいまより、いかなるロシア人、それが一人の同志あるいは公民であろうと、軽蔑を含んだ態度で中国の学生に接したり、肩を聳やかしたりしたら、その者はソ連共産党員あるいはソビエト公民とはいえない⁷⁸」と語って中国人留学生を激励している。この発言は、当時のロシア人一般の対中国観をうかがわせて興味深い。

3-2 留学生の諸相

⁷⁴ 前掲「中国人のソ連留学とその遺産」177 頁。

⁷⁵ 同前 178～180 頁。

⁷⁶ 同前 179 頁。

⁷⁷ 唐寶林『中国托派史』（台北・東大図書公司、1994 年）2 頁。

⁷⁸ 同前 2 頁。

第1期生約340人のなかには本論の主人公である蔣経国の他に鄧希賢（小平）、任卓宣、烏蘭夫、張聞天、王明（陳紹禹）、伍修権、鄧文儀、馮洪国、王覚源らの国共両党史を、そしてその後の海峡兩岸における現代史を彩った華麗なメンバーがそろっている。鄧小平と任卓宣はパリで勤工儉学に行き詰まったため東方大学に避難留学し、その後孫逸仙大学に転じた。留学生の出身母体は国民党、共産党、共産主義青年団、国民党左派、孫文主義学会、そして共産党籍を保留したまま「党内合作」で国民党に入党した留学生など多岐にわたっている。

大学別に主な留学生の顔ぶれ⁷⁹を以下にまとめてみよう。

東方共産主義大学（1921～38年、共産党系留学生）

劉少奇、肖勁光、蕭三、王若飛、趙世炎、陳延年（陳独秀の長男）、陳喬年（同次男）、鄭超麟、任弼時、任岳、周昭秋、彭述之、羅亦農、卜士奇、任作民、廖化平、謝文錦、向警予、李一純、楊子烈、（瞿秋白、李仲武＝通訳助教を兼ねる）ら、開学8年間を通じて短期軍事訓練班を含め約500人が在籍した。

孫逸仙記念中国勤労者大学（国民党系、党内合作枠、および左翼反対派＝トロツキスト） 第1期生（1925年秋冬）

蔣経国、馮洪国、馮弗能、王明（陳紹禹）、邵力子、谷正綱、谷正鼎、鄧希賢（小平）、于樹功、鄧文儀、郭紹棠、王覚源、烏蘭夫、沈沢民、王稼祥、伍修権、陳春圃、林柏生、左権、屈武、傅学文、傅汝霖、任卓宣（葉青）、鄭介民、皮以書、馬駿、吳亮平、孫治芳、俞秀松、葉楠、張聞天、張鎮、張元良、李錦蓉、李拔夫、胡木蘭、蕭賛育ら約300名。

第2期生（1926年秋冬）

盛忠亮（盛岳）、張忠実、何漢文、林仲、高承烈、謝懷丹、楊尚昆、俞季女、胡建三、樊警吾、李敬永、李元傑、秦邦憲（博古）、雷通鼎、李竹声、白瑜、韋永成、王公度ら250余名。

第3期生（1927年秋冬）

陳尚友（陳伯達）、孟慶樹、張克俠、その他労働者出身者多数。

第4期生（1928年）

王凡西（双山）、葉劍英、董必武、徐特立、何叔衡、林伯渠、吳玉章、夏曦、楊之華、錢亦石ら東方大学からの移籍生137名、特別班生も含め約600名。

国際レーニン学院

中国班

⁷⁹ 前掲「中国人のソ連留学とその遺産」183頁。

周達文、俞秀松、李立三、李維漢、王若飛、劉仁静、董必武ら若干名。

赤色教授学院（大学院）

東方班（1928 年）

王稼祥、張聞天、沈沢民、郭紹棠ら若干名。

孫逸仙大学の講師陣はほとんど中国語を解さなかったもので、講義は中国語通訳付きのロシア語もしくは英語で行われた。留学生は入学後にロシア名を与えられ、蔣経国はニコライ・ウラジミール・エリザロフとよばれた。後年、蔣経国を迫害した王明のロシア名はゴルビエフ、鄧小平はドゾロフだった。

カリキュラムは東方大学の政治、軍事訓練重視に比べ、語学から歴史、理論、政治論の講義に至るまで 2 年間の在学期間中により高水準の革命教育が目指された。ロシア語以外の教科では、社会構成発展史、連邦共産党（ボリシェビキ）史、西洋革命運動史、政治経済学、史的唯物論、経済地理、レーニン主義、党建設、ソビエト建設、中国問題などのマルクス主義社会科学と党組織論、革命運動論が実践的な討論重視の授業（演習）のなかで教授された⁸⁰。

3-3 留学生の生活

留学生には寄宿舎で 1 日 3 食と 2 回の間食が提供され、寝具、衣服、日用品、食事券とバス券、さらに毎月 20 ルーブルの小遣いが支給された⁸¹。同時期、日本から東方大学に留学した風間丈吉は、クートベで日本人留学生に与えられた小遣いは毎月 10 ルーブルだった⁸²と回想している。当時の国際環境の中で、あるいは経済の不調に呻吟するソ連で、中国人留学生がソ連当局から優遇された事実を示す一例であろう。このことについては蔣経国も、隣接したモスクワ大学のソ連人学生イワノフの朝食が黒パン 1 個とジャガ芋二つだけだったことにショックを受け、「外国人の私は一銭も費やさずに豊かな食生活ができる。それにひきかえ、ソ連人たちの食事は粗末だ⁸³」と、ソ連当局の留学生に対する優遇措置に感謝している。コミンテルン東方書記局の地域別年間予算配分（1926 年）を見ると、中国が 7 万 2000 ルーブル、インド 4 万 8000 ルーブル、日本 3 万ルーブルと、中国予算が突出している。また、東方各国の留学生を受け入れていた東方大学（クートベ）の在籍者総数（1921-1929 年）は中国人以外の留学生が合計で 567 人なのに対し、中国人留学生は 429 人⁸⁴といかに中国の比重が高く、予算的にも優遇されていたかがわかる。

中国人のソ連への留学行動は東方大学の開学からで、中国共産党の創立とともに 1921 年から始まった。同大学は 1938 年に閉学し、これを契機として中国人によるソ連への大規模な留学行動は収束する。孫逸仙大学は 1925 年に開学し、第一次国共合作が崩壊したことにより中華民国とソ連の外交関係が悪化したため 1930 年に閉学した。東方大学で革命を学

⁸⁰ 前掲「中国人のソ連留学とその遺産」190 頁。

⁸¹ 同前 193 頁。

⁸² 風間丈吉『モスクワ・共産大学の思ひ出』（三元社、1949 年）102 頁。

⁸³ 蔣経国先生全集編輯委員会編「我在蘇聯的生活」『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992 年）4 頁。

⁸⁴ 栗原浩英「コミンテルンと東方・植民地」『岩波講座 世界歴史 24』（岩波書店、1998 年）151 頁。

んだ留学生の多くは、帰国後に中国共産党に吸収された。孫逸仙大学の留学生はその派遣母体によって国民党や中国共産党の幹部になったが、左翼反対派として帰国し中国共産党から弾圧追放された者も少なくない。

小結

本章の考察を終えて、以下の4点を検証することができた。

第1点は、清国人の日本への留学行動が蒋介石の学齢期とかさなり、蒋介石が幼年時に受けた教育や日本への留学経験が蔣経国の幼年教育に活かされたということである。日本への留学行動はまた、康有為、梁啓超らの立憲君主（改良）思想、孫中山らが称えた廃滿を基本とする革命思想、そして清朝の転覆を目的とした革命運動の遅延が楊篤生、呉樾、張継、劉師倍らのアナキスト・グループを生み、それと軌を一にしてパリでは李石曾、呉稚暉、汪精衛、蔡元培、張静江、褚民誼、張継、済竺山らパリ・グループとよばれるアナキストが活動を開始し、そのことが第二の留学行動となったフランスへの勤工儉学につながった。

第2点は、パリアナキスト・グループが組織した留仏勤工儉学運動が五四運動を闘った青年知識層に注目され、新たな「勤工」という属性を付加した勤工儉学運動に発展したことである。その運動はフランスやドイツ、ベルギーにおいて中国共産党が支部を確立する契機となり、最終的にはソ連への留学行動を誘因している。

第3点は、留仏勤工儉学運動がきっかけになって始動した中国人のソ連への留学行動が国共合作の波に乗って流行し、数千人の留学生がモスクワを始めとするソ連の共産大学で学び、帰国後は国共両党の中核を担う革命要員に育っていったということだろう。

日本、フランス、ソ連への留学行動に加わった留学生たちが抱いた思想は多岐にわたるが、それらの思想の底流には清朝を覆したあとも漂流をつづける中華民国の政治、社会から封建的な残滓を一掃して祖国を救済したいという救国思想が通底していた。

蔣経国はこのような時代背景の中で生まれて成長し、当然の如くにその時代の先端をいく思想を受容し、モスクワ留学に向かったのであった。本文中では考察しなかったが、本章に登場した幾人かの革命家や関連人物を育んだ中国の酒都、紹興に関係が深く、三つの留学行動に直接的あるいは間接的に係った人物のエピソードを紹介して本章の結びとした。

黄酒の都である紹興は、中国の近代史を大きく転換した知識人を何人も生んだ。その筆頭は日本への留学行動の波に乗って渡日し、医学と文学を学んだ魯迅だろう。魯迅の『薬』という短編小説は、人血饅頭を食えば肺病が治る、という旧社会の迷信をモチーフにした作品である。人血饅頭は、処刑された罪人の生き血を使ってつくられる。魯迅が『薬』の中に登場させた夏瑜という罪人は、女性から男性に性別を変えてあるが、実は清朝打倒を画策して高級官僚の恩銘（安徽巡撫）を暗殺した徐錫麟事件に連座し、みずからも刑死した女性革命家の秋瑾をモデルにしている。

紹興の役人の家に生を受けた秋瑾は、成人して湖南省の豪商の長男である王廷鈞と結婚させられる。親の決めた結婚につまずいた彼女は、その鬱憤を酒（きっと紹興酒であった）に

違いない)で晴らし、夫婦生活が破綻していった。そこから抜け出すために1904年、魯迅とおなじ時期に日本へ留学し、清朝打倒運動に加わったのだ。留学時代に撮った、和服を着て日本刀を構えた写真は有名である。魯迅は同郷とともに革命を志した同志の殉難を悲しみ、小説『薬』に登場させて秋瑾の無念に報いたのだろう。彼女の旧居は、紹興市の中心を貫く解放南路から西に入った和暢堂にある。刑場があった解放北路の軒亭口には、いま秋瑾の革命的行動を顕彰する記念碑が建っている。

秋瑾の刑死を直接に誘引した徐錫麟も、また紹興の人である。徐錫麟は、楊篤生らが組織した軍国民教育会の過激な暗殺団である光復会に属したテロリストだった。安徽巡撫の恩銘を暗殺した彼はその日のうちに捉えられて殺害され、その心臓はくりぬかれて恩銘の家族に渡されたと伝えられる。

中華民国臨時政府の教育総長だった蔡元培も、紹興の出身である。蔡元培は袁世凱の独裁から避難して渡仏し、李石曾らパリ・アナキストグループと結んで華仏教育会を設立し、当時、一世を風靡した留仏儉学および勤工儉学運動を推進した。帰国後は北京大学の学長に就任し、胡適、陳独秀、李大釗らを招聘して同大学を新文化運動の中心に位置づけた。蔡元培は思想的にはアナキズムに近く、同グループは遊郭通い、喫煙、飲酒、賭博などを厳しく戒めていたので、彼が故郷の黄酒を愛したかどうかは定かではない。旧居は紹興駅東南にある西街の路地の内にある。

周恩来の家系もまた代々紹興に居を構え、祖父の代になって江蘇省の淮安に引っ越した。周恩来は天津で生まれているが、みずからはときとして紹興人と称していた。日本の東亜高等予備学校、明治大学などに学ぶ。在仏時には勤工儉学運動とヨーロッパにおける中国共産党の拠点作りに奔走し、後にはソ連への留学行動のなかでも活躍した。この街は中国が近代から現代に転換していく時代に、多くの革命家を輩出したのである。

魯迅、秋瑾、徐錫麟、蔡元培、そして周恩来と5人の紹興人を取り上げたが、彼らに共通するのはともに裕福な家庭に生まれた知識人だったことである。蔡元培にいたっては、科挙に合格して翰林院編集にも任ぜられている。あえてもうひとつの共通点を挙げれば、中国の近代に猛威をふるった反帝愛国運動の大きなうねりのなかで魯迅ら5人は体制に叛旗をひるがえし、ともに出身階級の利益を裏切ったことだろう。

私たちは次章から、そろそろ本稿の主人公である蔣経国のソ連経験についての考察に立ち入らなくてはならない。

第2章 蔣経国のソ連における留学経験

はじめに

蔣経国は1925年、上海浦東中学在籍中に五・三〇運動を頂点とした反帝国主義愛国運動のなかで共産主義の存在を知った。五・三〇事件は蔣経国を学生デモ隊の積極分子に押し上げ、そのことが原因となって浦東中学を除籍処分になる。蒋介石は蔣経国を呉稚暉が北京に創立した海外補修学校に転校させたが、蔣経国はここでも中国共産党北方委員会の李大釗、趙世炎らが発動した北京5万人反帝示威運動に加わり、新興の社会主義国家ソ連に急接近していく。同年10月、蒋介石の同意を取り付けた蔣経国は、孫中山を顕彰してモスクワに創立された孫逸仙記念中国勤労者大学（以下、孫逸仙大学もしくは孫大と略称）に第1期生として留学し、以後12年間、スターリン政権下でソ連に留め置かれる。

本章は蔣経国とトロツキズムとの係わりを中心に、モスクワ孫逸仙大学やトルマトコフ中央軍政学院での人間関係と学業生活、そしてその狭間で起った上海クーデター、江浙同郷会事件、ソ連共産党への入党などを考察しながら、ソ連における蔣経国の留学経験と政治生活を検討する。

第1節 モスクワ孫逸仙大学---中国人トロツキストの源流

ソ連共産党内におけるトロツキーの革命理論を支持した人々が中心になって形成した国際共産主義運動の一支流を左翼反対派運動とよぶ。本節で検討対象とするトロツキズムとは、主にこの左翼反対派に与した中国人留学生が展開した思想的・政治的な営為のことを指している。中国共産党の理論的な起点は、レーニン・トロツキー系のマルクス主義と、儒教を骨格とした伝統を否定する五四運動の思想が連結したところにあり、その思想を受容した中国人はモスクワの共産大学に留学してマルクス主義理論やプロレタリア革命運動の経験を学ぶことで理論水準を強化した。このことは留学生の主体となった年齢が若い中国共産党員や国民党員をボルシェヴィズムで教化すると同時に、彼らにボルシェヴィズムが内包した矛盾や対立、すなわちスターリニズムとトロツキズムの両者をモザイク状に継承させることとなった¹。中国人留学生を主体とする左翼反対派は、みずからを中国ボルシェビキ・レーニン主義者（反対派）と称した。留学生の帰国、あるいは強制送還によってモスクワから中国国内に移植された左翼反対派には大きく分けて「我們的話派」、「十月社」、「戦闘社」、「無産者社」の4派があり、本章は代表的な「我們的話派」を中心に据えて検討する。

ソ連共産党内におけるトロツキーとスターリンの確執は、レーニン亡きあとの政治・経済路線、国際共産主義運動をめぐって激化した²。それは中山艦事件を境にして、それまで

¹ 齊藤哲郎『中国革命と知識人』（研文出版、1998年）15-16頁を参照。

² 詳細は、唐寶林『中国托派史』（台北・東大図書、1994年）4-6頁、および前掲『中国革命と知識人』27-28頁。

の容共から反共へ転じた蒋介石の国民党に対して、それを容認しつつ国共合作を維持していくのか、それとも中国共産党はすみやかに国民党との合作関係を中止して国内に労農ソヴィエトを設立すべきか、などのスターリンとトロツキーの中国革命問題にかかわる議論に発展し、当時、モスクワの小中国と称された東方大学と孫逸仙大学などを巻き込み、そこで学ぶ中国人留学生の多くがトロツキーを支持したことから、幾多の左翼反対派が生まれていく。

1-1 中国人トロツキストの誕生

左翼反対派の形成に弾みをつけたのは、蒋介石が1927年4月12日に発動した上海クーデター（掃共作戦）だ。第1次国共合作を崩壊させたこの事件の詳細がモスクワに伝わり、スターリンは同月21日、ソ連共産党機関誌『プラウダ』第90号に「中国革命の諸問題」³と題する論文を寄せ、あるいは翌月24日のコミンテルン執行委員会第8回総会の演説で「中国革命とコミンテルンの任務」⁴と題する演説をして、中国革命が全民族連合戦線の革命であるあいだは民族ブルジョアジーを利用し、中国国民党内に共産党がとどまることの正当性を主張した。それに対してトロツキー、ジノビエフらは「中国革命とスターリンの政治綱領」、「反対派政治綱領」、「84人宣言」、「15人政治綱領」などのテーゼを発表し、中国の地主階級は実質的なブルジョアジーであり、中国革命の敵はブルジョア階級にほかならない。このため中国革命は世界の資本主義に対する闘争を土台にしてブルジョアジーに対抗すべきと主張し、ソ連共産党中央とコミンテルンの路線を強く批判し、中共がすみやかに中国国内で労農代表ソヴィエトを成立させ、武漢政府と対抗することの必要性を説いた⁵。すなわち、帝国主義の包囲下にある10月革命後のソ連は経済建設だけに邁進することは不可能で、その立ち後れた経済状況では社会主義の実現は困難であり、そこから演繹されたスターリンの一国社会主義とその派生理論としての中国革命論は正しくない、とする考え方だ。

トロツキーのこの主張はスターリン派が牛耳る東方大学よりも、トロツキー派の重鎮ラデックが学長を務めていた中国人専用の孫逸仙大学においてより広範に受け入れられていく。同年11月7日に赤の広場で举行されたロシア革命10周年記念行事において梁幹喬、区芳、陸一淵、史唐、陳亦謀、宋逢春、張特、朱懷徳、楊華波らを中心とする孫逸仙大学の左翼反対派はコミンテルン執行委員会⁶でトロツキーが役職を剥奪されたことに抗議し、反スターリン主義を呼号するデモを敢行して当局に逮捕・監禁され、中国に強制送還された。この騒動によって中国人留学生による左翼反対派のソ連における活動は厳しく規制され、強制送還されたトロツキストによって活動の主要な舞台が中国国内に移っていく⁷。

強制送還された梁幹喬らが中国に戻ると、中共内部は蒋介石の掃共作戦や南昌蜂起、秋

³ イ・ヴェ・スターリン、スターリン全集刊行会訳「中国革命の諸問題」『スターリン全集』第9巻（大月書店、1952年）248-257頁。

⁴ 同上「中国革命とコミンテルンの任務」『スターリン全集』第9巻、311-342頁。

⁵ 前掲『中国托派史』13-38頁。

⁶ 1927年5月18-30日に開催されたコミンテルン執行委員会第8回総会を指す。ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史』上巻（大月書店、1973年）303頁。

⁷ 前掲『中国革命と知識人』28-29頁、および同前『中国托派史』23-24頁。

収蜂起など各地の武装行動の失敗で混乱状態にあった。このためソ連から追放されたトロツキストに対して思想的に対処する余裕がなく、中共がトロツキストの排除に乗り出すのは1929年以降のことである。梁幹喬らはこの状況を奇貨として中国国内における左翼反対派の組織作りに着手し、帰国から約1年後の1928年12月、上海で中国ボルシェビキ・レーニン主義反対派（＝我們的話派）と称するトロツキスト組織を秘密裏に旗揚げして第1回代表大会を開いた。そこで中央機構＝全国総幹事会の陣容を整え、幹事長に史唐、宣伝部長に陸一淵、組織部長に張特任を選出し、華南地域の組織化を梁幹喬、區芳、陳亦謀らが担当し、華北地域は宋逢春、蕭冰洋、李梅五らが、江浙地域を徐正庵が分担することになった。同時に、武漢、香港、蘇州、広州、北京、ハルビンにも順次支部が生まれていった。

中国国内の左翼反対派は上海市四川路に新宇宙書店を開店し、そこを史唐、張師、陸一淵らに経営させた。同書店はソ連からトロツキズムを鼓吹する論文などを仕入れ、一般書の販売に隠れてトロツキーの『レーニン伝』やラデックの『中国の革命問題』などを翻訳・刊行した。おなじく上海市の天馬書店も左翼反対派の拠点になった。店主の樓国華はモスクワ留学経験こそないが、ソ連から帰国した留学生の影響を受けて左翼反対派に加入し、みずからも反中共論文を執筆してトロツキズムを宣伝する。天馬書店は中国における左翼反対派中央機構の活動資金と啓蒙書の出版を担当した。

新生命書店も左翼反対派の拠点になった。ここはもともと国民政府の世論陣地で、陶希聖、奕仲雲が経営していた。国民党は周佛海、戴季陶、陳果夫、陳布雷、邵力子らに編集委員会を組織させて同書店から『新生命月刊』を発行し、三民主義を流布して共産党と青年層の獲得を競った。国民党はやがて反共思想で左翼反対派との一致点を見だし、同派に対して暗黙のうちに新生命書店を活動の場として提供するようになる。新生命書店ではトロツキズム関連の文献や反ソ共と反中共の出版物が販売された。

左翼反対派は学生を組織するために、上海芸術大学を第二の上海大学⁸と見なして拠点を築いていく。同大学の学長は芸術にも政治にも無頓着な周勤豪で、中共から王学文、華漢（陽翰笙）らを、左翼反対派からは劉仁静、王濁清らを教員として招聘した。王学文は鄭超麟、陳独秀、彭述之らと往来があり、やがて左翼反対派に転向した。

左翼反対派は上海の印刷労働者をも組織して工場に支部を設立し、閔蔭昌が書記を務めた。1929年4月にはトロツキーが10月革命前に創刊した地下出版物を手本にして全国総幹事会の機関誌『我們的話』の発行を開始する⁹。

中国共産党は1930年5月、ソ連で進むトロツキスト粛清に歩調を合わせるように呉季嚴、王凡西（＝王文元）、周慶崇の3人を中国共産党六中全会（1928年6月18日、モスクワで開催）の決定に反対し、中共中央とコミンテルンに反旗を翻したという理由で党組織から追放した¹⁰。以後、中共の左翼反対派に対する抑圧は苛烈を極め、中国のトロツキストは地下に潜るか、軍閥などに経済的な庇護を求めて仮面転向し、あるいは拠点を香港やマカオに移して活動を維持した。

⁸ 上海大学は、中国共産党が幹部を養成する学校としての役割を担っていた。

⁹ 以上、中国国内における左翼反対派の組織展開については、前掲『中国托派史』27-31頁。

¹⁰ 同前『中国托派史』101頁。

1-2 蔣経国の苦境

中山艦事件¹¹後、国民党中道派や右派の多くは蒋介石がソ連や共産党と完全に縁を切るものと期待した。しかし、蒋介石は孫中山が果たせなかった北伐を完遂するには、まだ、ソ連の軍事援助が必要なことを知悉していた。孫中山が受け入れた「聯ソ・容共・扶助工農」の三大政策以来、その巧みに打算を隠した親ソ姿勢から、ときには赤い將軍とまでよばれた蒋介石が明確な反共に転じたのは1927年3月10日、武漢政府¹²の国民党左派および中国共産党員が主導した三中全会以降のことである。軍務で出席が間に合わなかった蒋介石ら首脳を抜きにして、国民党顧問のボロディンが会議の開催を急がせ¹³、毛沢東は「1人や2人のために待つ必要などない」¹⁴とボロディンを支持した。この会議で蒋介石は欠席のまま国民党中央執行委員会議長ポストばかりか、軍事評議会議長、軍幹部長の役職さえも剥奪された。故廖仲愷夫人の何香凝が武漢政府の使者として九江までこの報せを伝えるに來たあと、蒋介石は極度の怒りに襲われピストル自殺を図ろうとした¹⁵。その後もボロディンをはじめとする国民党左派と中共が発動した南京事件など反蔣の企ては散発的に続く。こうした状況のなかで蒋介石は白崇禧軍に命じ、同時に辛亥革命後に陳其美を通じて閩の交流が続いていた「青幫三大亨」の杜月笙ら黒社会の支持を得て、上海で全面「清党＝掃共」（4・12上海クーデター）を発動して共産勢力の一掃に乗り出した。これに続く15日には広州で国民革命軍留守総司令の李濟が反共クーデターを起こし、北平を支配していた張作霖はこれよりさき列国公使団黙認のもとでソ連大使館を急襲して李大釗を逮捕処刑していた。掃共の勢いは浙江、福建、広東、広西、安徽、四川、そして北平の各省市にまでおよんだ。

上海クーデターをはじめとする全面的な掃共行動は国共関係に終止符を打ち、その後の北伐と国民党の活動に明確な方向性を与えた。蒋介石は南京国民政府を樹立（4月20日）し、やがて武漢国民政府も共産党員の放逐（7月）に動いて寧漢（南京と武漢両政府）合体（9月）が実現し、一定の市民権を得ていた共産勢力は地下に暗流していった。その波紋は国内にとどまらず、当然のことながら蔣経国が学ぶモスクワの孫逸仙大学にも波及した。スターリンとトロツキーが中国革命の方法をめぐる激しく論争し、その衝撃波が中国人留学生を主体とする孫大を激しく襲ったのだ。

孫逸仙大学はソ連共産党と国民党の多頭管理で、ソ共は同時にコミンテルンと中国共産党を代表していた。国民党員のなかには中共党籍を留保しながら個人の資格で国民党に入党（国民党内における党内合作）し、共産思想を持ったものが多数存在した。モスクワで

¹¹ 1926年3月19日、国民党顧問のボロディンがソヴィエト軍事顧問団員のN.V. キサニカに命令し、蒋介石を中山艦でウラジオストクまで拉致し、なきものにしようとした事件。中山艦は1922年6月、陳炯明の反乱を逃れて孫中山が避難した永豊艦のことで、孫中山の死後、蒋介石はこの船を中山艦と改名して旗艦としていた。

¹² 国民党および国民政府は1926年11月9日の南昌攻略を契機に漢口への移動を窺い、同月26日に武漢遷都を決めた。外交部長がエヴゲーニー・チェン（陳友仁）、財政部長が宋子文で、1927年4月からこれにフランス帰りの汪精衛が主席として加わり、短期間だが「寧漢分裂」とよばれる時期が生じる。

¹³ 秦孝儀他編『總統蔣公大事長編初稿』巻一（財団法人中正文教基金会、1978年）142頁。

¹⁴ 前掲サンケイ新聞社『蒋介石秘録7』78頁。

¹⁵ 陳潔如著、汪凌石約『陳潔如回憶録』（新新聞周刊、1992年）207-210頁。

それまで北伐の英雄だった蒋介石は、上海クーデターを境にソ連と中国の合作関係を瓦解させた「反革命の大罪人」へと立場が急落する。これにともない孫大の、とくに国民党中道あるいは右派に与する留学生の政治的な立場が一気に危うくなったのである。その中でもとくに「反革命の大罪人」の子息だった蔣経国は、もっとも困難な立場に立たされた。上海クーデター直後の孫大におけるみずからの状況について、蔣経国は次のように回想している。

北伐軍が上海を攻略したニュースがモスクワに伝わると、新聞は相次いで号外を出し、民衆はそこそこで（祝賀の）デモを繰り広げた（中略）しかし数日後、上海でもうひとつの事件が発生し、父が共産党とソ連に対する態度を一変させたニュースが伝わった。父が反共・反ソの立場をとったというのだ¹⁶。

蔣経国は当時の状況をごく控えめに記述しているにすぎない。回想は続く。

上海事件発生後、私は相当の時間を使ってソ連と中国の政治事件を詳しく考察してみた。中国の1927年における政局の動揺は中共の指導面の無策が原因で、政策に英知が見られず周到でなかった、という結論に達した。ソ連に関する考察も行ない、このままではソ連で社会主義は成功せず、農民は「プロレタリア独裁」に立ち上がって反対するだろう、と考えた¹⁷。

回想文中の「このままではソ連で社会主義は成功せず、農民はプロレタリア独裁に立ち上がって反対するだろう」というくだりは、あたかもトロツキーの主張の引き写しであり、蔣経国がこの時点ですでにトロツキズムを一定程度に受容していたことが見てとれる。回想録で上海クーデターに言及した部分はこれだけである。周辺資料を使い、当時の状況を史実に即してさらに詳しく再現してみよう。

事件の詳細が入ると孫逸仙大学では学生集会が開かれ、留学生たちは「帝国主義の走狗、反革命の蒋介石とその一味が党の規律に背いて上海の革命的労働者を屠殺した（中略）反革命の蒋介石とそのグループに対する闘争を堅持し、我々が最後の勝利を勝ち取るものと確信する」¹⁸という電報を武漢国民政府に送った。全学糾弾集会では蔣経国が真っ先に演壇に駆け上がって「打倒蒋介石！」のスローガンを叫び、ロシア語で「私はいま蒋介石の息子としてではなく、共産主義青年団の赤子として発言します」と前置きし、次のように演説した。

蒋介石の裏切りは決して意外なことではなく、口先で革命を称揚していたときすでに革命を売り渡し、一心に張作霖、孫伝芳の汚濁に合流しようとしていたのです。

¹⁶ 蔣経国「我在蘇聯的日子」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』一冊（行政院新聞局、1992年）69頁。

¹⁷ 同前「我在蘇聯的日子」69頁。

¹⁸ 『プラウダ』第88巻3620号、1927年4月19日。張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）34頁。

彼の革命事業はすでに終わりました。革命の観点からすれば極刑にも値するでしょう。革命に背いたその刹那から、蒋介石は中国プロレタリア階級の敵になりさりました。過去において、蒋介石は私の父であり、革命の良き友人でありましたが、反革命の陣営に加わったいま、彼は私の敵になったのです¹⁹。

これは蔣経国の「反蔣声明」として、タス通信を通じてソ連国内はもとより全世界に配信され、中国では武漢の『人民論壇報』などの新聞が転載している。蒋介石も、当然これを目にしたはずである。革命の「敵」に対する激越な挑戦状といえよう。

蔣経国はその少年期、主に三つの意識に支配された。それは①幼少期、蒋介石から薫陶を受けた国学の基礎と忠孝の教えにもとづく中国の伝統意識、②五・三〇運動のなかで芽生えた反帝国主義的な感情、そして③モスクワ留学で育んだ共産意識である。蔣経国にとっての激動した各歴史段階で、そのときどきの主要意識が他を統制しバランスを保ってきた。ところが異郷の地で蒋介石が発動した上海クーデターに遭遇し、均衡を保っていたこれらの意識が相互に激しい短絡関係に陥ってしまったのだ。今まで絶対的な存在としてみずからに君臨してきた父親が、こともあろうに自分が憧れて留学したソ連と祖国中国との関係を破壊してしまったのである。畏敬した父親²⁰が「反革命の大罪人」になってしまったのだ。このことは蔣経国を意識の混乱状態に陥れた。危機の中で蔣経国は、短絡状態から抜け出ることを考えた。

孫逸仙大学には中国共産党と国民党の支部が並立していた。蔣経国は孫大に入学後、わずか8週間で共産主義青年団に入団している²¹。一般の留学生なら、共青団員という資格が楯になって上海クーデターの大波をやり過ごすことができたはずである。しかし蔣経国は上海クーデターを発動した蒋介石の直系であったために、もっと大きな効力のある免罪符が必要だった。それが全学糾弾集会で真っ先に演台に駆け上がって「打倒蒋介石！」のスローガンを叫ぶことであり、タス通信を通じて「反蔣声明」を出すことだった。

上海クーデターは、スターリンとトロツキーの路線・権力闘争の真っ只中で起こった。スターリンは蒋介石が発動した上海クーデター後も、まだ、中国共産党と国民党左派の協力関係を継続させることに意義を見出していた。一方、中国革命におけるブルジョアジーの役割を否定するトロツキーは中国共産党員が国民党から直ちに離党して、中国に労農ソヴィエトを作るよう求めた²²。賀竜、葉挺に周恩来、朱徳、張国燾らが合流して発動した南昌蜂起、毛沢東の長沙における秋収蜂起、彭湃や惲代英らの陸豊、海豊における中国最初のソヴィエト政権＝広東コミューンは、こうしたトロツキーの主張を裏切るように一瞬の輝きを放ちながらもことごとく挫折していく。トロツキーが党と政府、コミンテルンのすべての要職を剥奪され、これに反して中国国内では左翼反対派の組織化により中共党員のトロツキズムへの乗り換えが頻繁になってきたため、中国共産党は1930年、左翼反対派

¹⁹ 武漢『人民論壇報』1927年4月24日付け。朱小平他著『蔣氏家族 上』（中国・中国文史出版社、2001年）319頁。

²⁰ 前掲 陳潔如『陳潔如回憶録』137頁。

²¹ 前掲『中国托派史』20頁。

²² 対馬忠行編、山西英一訳「中国革命における階級闘争」『トロツキー選集』6（現代思潮社、1961年）13-16頁。

を党外に追放し、以後同派に対する弾圧を強めていく。ソ連共産党内の路線（あるいは権力）闘争は激変する中国情勢に直面して統一した方向性を見出せないでいたが、スターリン路線がソ連政治に浸透してくると孫逸仙大学の学生、とくに共産党・国民党左派系以外の留学生に対する当局の態度は急冷し、送還・帰国問題が急浮上する。ここでまた蒋経国の回想録に戻ろう。

当時、中共駐モスクワ代表団は、私の帰国は残留よりもっと良くない、と判断した。1927年4月、中山大学を卒業した私は友人たちと帰国を願い出た²³が、私だけは許可されなかった。（中略）幾人かの中共黨員は「蒋経国を帰せば、蒋介石の有力な助手になるに違いない。彼をソ連に留め置くべきだ、と主張した²⁴。

上海クーデター後、国民党籍を有する留学生は送還帰国かモスクワに残留して共産党もしくは共青团に加入する、あるいは投獄またはシベリア追放と明暗が分かれた。このことについてはクーデターの翌年夏、孫逸仙大学に留学した中共黨員の張国燾が「そのころ、これらの純粹国民党員は、中共に走った者を除き、ある者は送還・帰国させられ、またある者はシベリアに送られて苦役に従事した」²⁵と証言している。中共に転向した者だけが、強制送還もしくはシベリア送りを逃れることができたのである。

上海クーデターから1ヵ月余が経過した5月18日、トロツキーの役職を剥奪したコミンテルン執行委員会第8回総会期間中、スターリンは農民運動を中核とした中国革命を実行するために国民党の共産化を指示する密電をボロディンに送った²⁶。その電文の内容を知った汪精衛は、共産黨員が国民党の枠組みのなかで国民革命に協力するという孫中山の容共精神はすでにソ連に踏みにじられたと判断し、7月15日、共産黨員を国民党から追放することを決めて反共に転じ、南京政府と合流する方向に転換した。同月26日、国民党中央執行委員会は孫逸仙大学とのすべての関係を断絶する声明を発し、8月に239名の留学生がこれに従って帰国の途についた。50人は残留を望み、共産党もしくは共青团に加わった。同年12月14日、蒋介石の南京国民政府はソ連との外交関係を断絶する。

1-3 政治化した恋情

蒋経国は留ソ期間中の1935年3月、ウラル重機械工場で副工場長の役職にあったとき、孤児で部下の職工だったファイナと結婚し、長男アラン（Alan＝孝文）をもうけている。ソ連時期における蒋経国の人物研究では、異性との係りあいに関する部分はファイナを中心に語られてきた。ところがソ連崩壊後にロシアが一部の情報開示に踏みきったことで、蒋経国の孫逸仙大学時代における恋情が徐々に明らかになりつつある。馮玉祥の長女、馮弗能との恋の軌跡である。2人の関係は1927年に蒋介石が発動した4・12上海クーデター

²³ 谷正綱、鄧文儀らは、このとき帰国している（李敖「蘇聯時期的蒋経国——訪蒋伝作者江南」『蒋経国研究』李敖出版社、1987年、119頁）。

²⁴ 前掲「我在蘇聯的日子」71頁。

²⁵ 張国燾『我的回憶』二（明報月刊出版社、1973年）795-796頁。

²⁶ ボリス&ドミートリー・スラヴィンスキー著、加藤幸廣訳『中国革命とソ連』（共同通信社、2002年）164-165頁。

に揺さぶられ、政治化して破局を迎えた。

馮玉祥の長男馮洪国、長女馮弗能、次女馮弗伐の兄妹は、1926 年 3 月末、馮玉祥夫妻とともにモスクワへ避難した²⁷。途中、包頭を経由して庫倫（現ウランバートル）に達したとき継母の李徳全が産気づいて馮洪光（3 歳で夭折）を産んだため、3 兄妹は両親を残してソ連人の付き添いとともに一足さきにモスクワへ向かう。馮玉祥夫妻は庫倫で産後を養い、遅れて 5 月 9 日にモスクワ入りしている。馮洪国と馮弗能はまもなく孫逸仙大学に入学し、妹の馮弗伐は 12 歳になったばかりで年齢的に入学が叶わず、航空機製造工場で学徒工になった²⁸。

馮洪国と馮弗能が孫大に学籍登録されたのは 5 月 19 日で、中国からさみだれ式に来ソしていた国民党幹部子弟枠の第 1 期留学生に含まれる。馮弗能の学籍番号は 294 番、馮洪国は 295 番だった。孫大には前年末の 12 月 23 日までに 189 名の中国人留学生が入学手続きを済ませており、蔣経国はこのグループに含まれている。

蔣経国は呉稚暉が北京に創立した海外補習学校時代、馮洪国と同窓だった。それはモスクワ留学の許可をもらいに広州の蒋介石を訪ねた際、「1 人でそんな遠い国に行くのは、まだ若すぎないか」と蒋介石の 2 番目の妻陳潔如が気遣うと、「馮玉祥將軍の息子も一緒です」²⁹と応えているところからも明らかである。革命の聖地モスクワで蔣経国と再会した馮洪国は一緒に入学した妹を紹介し、このとき二人は知り合った。蔣経国 16 歳、馮弗能は 15 歳で、孫大では最年少の高級軍人子弟のカップルだった。

馮弗能のロシア名はニジダノワ、孫逸仙大学では評判の美少女だった。ただ政治的な自覚は高くなく、勉強も熱心とはいえなかったようだ。同じクラスの男子学生は「ニジダノワはただのお嬢様にすぎない」と冷淡である。そんな彼女を中国に帰国させようという動きがあった。それに対して馮弗能は、蔣経国と関係してそれに抵抗している³⁰。

ロシアが開示した資料は、馮弗能を蔣経国の配偶者と記録している。1926 年にソ連で採択された新婚姻法は「事実上の婚姻」を認め、同棲、子供の共同扶育、あるいは第三者の証言があれば婚姻関係を有していると判断された³¹。蔣経国と馮弗能には同棲関係が生じていたのだろう。

留学生は大学の教職員以外にロシア人との交際は少なく、ほとんどが中国人コミュニティのなかだけで生活を送っていた。孤立した集団内における密接な人間関係は親密な交友関係（男女間では多くのカップルが生まれた）を生じさせるとともに、激しい人的対立や派閥闘争を生み出す温床ともなった³²。孫大留学生どうして結婚した者には、王明＋孟慶樹、楊尚昆＋李伯釗、沈沢民＋張琴秀、谷正鼎＋皮以書、邵力子（理事・聴講生）＋傅学

²⁷ 馮玉祥は三・一八惨案後、奉直連合軍（張作霖と呉佩孚）の締め付けを避けて、家族をともないソ連に避難した。サンケイ新聞社『蒋介石秘録 7』（サンケイ出版、1976 年）39 頁。

²⁸ 余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」『中央研究院近代史研究所集刊』（第 29 期、1998 年 6 月）112 頁注 22 参照。

²⁹ 前掲『陳潔如回憶録』136 頁。

³⁰ 前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」112-113 頁。

³¹ 同前「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」113 頁。

³² 土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部、1999 年）194 頁。

文ら多数のカップルが挙げられる。ロシア人との結婚に踏み切った者には、李立三、師哲、唐有章、そして蔣経国らの名前を挙げることができる。ロシア人との結婚は、さまざまな事情で10年以上もソ連に滞在した者に限られていた³³。

蔣経国と馮弗能の交際は、結果的に苦恋に終わった。それは馮弗能の側からいえば、共産主義青年団という政治的自覚を重んじる組織の高いハードルに阻まれた結果であった。一方、蔣経国の側からすれば、蒋介石が発動した上海クーデターの余波からいかにみずからの身を護るのか、という苦悩の中で下された政治的決断だったといえよう。

当時、共産主義青年団を含め、中国共産党の組織内では非共産党員との男女関係は好ましく思われていなかった。そうした雰囲気の中で蔣経国は馮弗能に幾度も共青团への入団を勧めたが、馮弗能は興味を示さなかった。むしろ兄の馮洪国のほうが積極的で、1926年秋には入団している³⁴。馮弗能に共青团への参加を真剣に考えさせたのは、蒋介石が上海で発動した上海クーデターだった。この事件をきっかけにして、孫逸仙大学に在籍する国民党系の学生は自らの政治的な立場を鮮明にする必要に迫られたのだ。馮弗能は蔣経国に宛てた手紙に「学校生活の一切が政治化してしまった」としたため、政治活動に加わらなければ安泰な道はないので入団して学習したい、と訴えている³⁵。ところがせっかく政治学習への積極性を見せ始めた馮弗能の希望は共青团幹部に聞き入れられず、入団申請は却下されてしまう。この時期、南京国民政府に与していた馮玉祥の長女という地位、そしてこれまで一貫して政治への無関心を貫いてきた馮弗能の態度が申請却下を招いたのだ。

蔣経国と馮弗能の苦恋については、もうひとつのエピソードを敷衍しておくべきだろう。それはロシア名をパイコフと名のる中国人留学生在が蔣経国に宛てた書簡³⁶に示されている事実である。それによれば蔣経国は1927年12月、馮弗能との関係を清算した。共青团員ではない馮弗能と蔣経国との交際を心配していたパイコフは、書簡に「良いことだ、私の真の友、真の同志よ！どのように大きな決意と毅力で決心したことか。この決断は苦しみをともなうと思うが、私は関係を断絶したことを無条件に正しいことだと考えている（中略）馮との関係は間違いだったのだ。彼女がいつか共産主義者に成長することを期待して（中略）君は今後、会話に注意し、読書を多くすることが気晴らしの方法だと思う。もしも性の欲求が急であるなら、別の女性をさがすのもよい」³⁷としたためている。

ソ連国家政治保安部（GPU）の資料によれば、蔣経国はパイコフの書簡に先立つ1927年7月、当局に馮弗能との夫婦関係を解消したことを報告する「自白書」を提出した。そのなかで蔣経国は「馮弗能には思想問題がある。彼女は国民党が派遣した監視であり、自分に影響を与えて改造を試みている」と語っている³⁸。その2ヵ月後、馮弗能は蔣経国に手

³³ 前掲「中国人のソ連留学とその遺産」214頁注71参照。

³⁴ 前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁。

³⁵ 『弗能が経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／101頁、1927年9月24日）。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁。

³⁶ 『パイコフが経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／93頁、1928年（推測））。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁。

³⁷ 前掲『パイコフが経国に宛てた書簡』前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁。

³⁸ 謝忠良、王健民、童清峰「KGB 档案重繪青年蔣経国」『亞洲週刊』（香港、1998年1月26日～2月8日合併号）30～33頁。

紙を書き「あなたが相思（両思い）の病に罹った（弗能以外の女性の面影を心に宿したことを指す）、と左権³⁹が話していた」⁴⁰と蔣経国の心変わりをなじっているので、自白書が書かれ、蔣経国が馮弗能との関係を清算した事実はいかにあったのだろう。政治的な自覚が低く、政治に無関心な馮弗能が、国民党が派遣した蔣経国の監視役であり、蔣経国に影響を与えて改造を試みるはずがない。蔣経国の荒唐な作り話だ。なぜ、蔣経国はそのような作り話の自白書を書いたのか。蒋介石の上海クーデターが原因して、微妙な立場におかれた蔣経国の保身から出てきた行動だろう。国民党将軍の子女で、政治的に自覚の低い馮弗能と決別し、共産主義者であることを強力にアピールする必要があったのである。

馮洪国と馮弗能、馮弗伐の兄妹は、上海クーデターに際し馮玉祥が武漢国民政府から蒋介石側に寝返ったため、ソ連当局から厄介者扱いされて一時は人質同然の扱いを受けていたが、1928年5月25日、許されてウラジオストク経由で中国に帰国している⁴¹。

第2節 孫逸仙大学の紛争と蔣経国の政治生活

蒋介石が1927年に発動した4・12上海クーデターは、中共および国民党左派が画策した反蔣運動を敗北に導いた。それは国民革命を再編し、中国革命を操っていたソ連共産党、コミンテルン内の路線闘争における最も深刻な議論のひとつにもなった。単純化していえば、スターリンとトロツキーの路線（あるいは権力）闘争以外のなにものでもない。本節はこの闘争と表裏をなして現象した孫逸仙大学の紛争と「江浙同郷会」事件、そして孫大在籍時などにおける蔣経国の政治生活について検討する。

2-1 王明一派＝「28人のボルシェビキ」の台頭

孫逸仙大学の左派系留学生は上海クーデターに怒りを感じていたが、その気持ちを直接蔣経国にぶつけることはまれだった。清党（掃共）後の政治的な不安定は蔣経国1人の身にかぎったことではなく、孫大に在籍する中国人留学生全般にいえることだったからだ⁴²。そんななかで学友が危惧を感じたのは、むしろ蔣経国とトロツキスト（左翼反対派）との関係だった。左翼反対派はすでにソ連当局と中共モスクワ支部から「反動派」の烙印を押されており、その意味で周囲にとっては蔣経国の思想が「正しい」のかどうか重要だった。

学長を解任される前のラデックはトロツキー派の最重要人物で、孫逸仙大学は同派の拠点になっていた⁴³。上海クーデター以前は、学内のトロツキー派の活動は学術討論、すなわち理論領域の争いの枠組みから逸脱することはなかった。しかしクーデター以降、それ

³⁹ 左権（1905～1942年）、号は叔仁。紀権とも称した。湖南醴陵の人。黄埔軍官学校第一期生、1925年に中国共産党に入党。蔣経国と同じ一期生として孫逸仙大学に留学した。卒業後、モスクワの軍事学院に転じて1930年に帰国。八路軍副参謀長などの要職を歴任し、1942年、山西省で抗日作戦中に戦死した。

⁴⁰ 『弗能が経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／116頁、1927年9月27日）。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」114頁。

⁴¹ 前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」117頁。

⁴² 同前「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」124頁。

⁴³ 同前「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」124頁。

はスターリンとトロツキーの激しい政策論争となり、孫大はその論争の影響をもろに受けることになる。蔣経国は孫大入学以来、ラデックやその他の教員の影響を受け、やがて左翼反対派に加わった。それでは、蔣経国はいつの時点から明確に左翼反対派に与するようになったのか。回想録のなかにその記述がある。

私の観点はトロツキーの政治思想と一致していた。このため多くの人は私がトロツキストのシンパではないかと考えた。事実、彼らの憶測は正しかった。私はそのころリップマン教授の地縁経済学の講義に興味を持ち、教授はいつもトロツキーの透徹した理論を私に教えてくれた。私は数人の中国人学生と密かにトロツキー派の秘密文献を学習するようになった。なかでも「革命の炎で旧世界を焼き尽くそう」という言葉に強い興味を覚えた。私とトロツキー派の関係は日増しに密接になり、とうとう秘密組織に加入した。私の主張に賛同する仲間が増え、彼らは私をトロツキー派のリーダーのように見るようになった。⁴⁴

回想録によれば、蔣経国はこの記述が孫逸仙大学に入学（1925年11月）してから1927年までの間における何れかの時期のここのように記している。蔣経国が加入したと回想しているトロツキー派の秘密組織とは、1928年秋の一日、孫大のトロツキー派留学生がピクニックを装ってモスクワ郊外の松林に赴き、そこで野外会議を開いて立ち上げを決めた中国人初の左翼反対派⁴⁵のことを指している。この時期は蔣経国の回想とは最短で一年ずれるので、蔣経国が加入したと回想する秘密組織とは正式に立ち上げる前の段階で、学内での学術討論会、すなわち理論領域の活動などを行っていた設立準備段階における左翼反対派グループのことを指しているのだろう。

松林の会議は安福が取り仕切った。安福は冒頭、「モスクワの各校（砲兵学校、歩兵学校）とレニングラードのレーニン学院、そして孫大に分散する仲間は56人いる。ソ連の同志からは、早期に秘密組織を立ち上げて活動を急ぐよう求められている。環境が厳しいので、秘密を厳守して欲しい」⁴⁶と語った。秘密組織の幹事会は書記に安福、組織担当に範金標、宣伝担当に王凡西、その他に李平、曾猛、卞福林、謝英の4人がメンバーに推挙された。

会議は、今後、幹事会が中心になってモスクワ在住の中国人留学生を組織し、同時にソ連の左翼反対派の文献（主にトロツキーの著作）を翻訳・学習していくことを決議している。監視の眼が厳しい環境のなかでソ連の左翼反対派と連絡を維持していくこと、中国国内で活動する左翼反対派との連絡を保ち、彼らのために文献を翻訳して送ることなども決められた。秘密組織が活動を始めると、モスクワに在住する留学生400人のなかの150人ほどが加入し、あるいはシンパになって協力した。中国国内との連絡は王凡西が担当した⁴⁷。本論の前段で検討したように、このグループが帰国して中国ボルシェビキ・レーニン主義

⁴⁴ 前掲「我在蘇聯的日子」70頁。

⁴⁵ 前掲『中国托派史』40頁。

⁴⁶ 同然『中国托派史』40頁。

⁴⁷ 同然『中国托派史』40頁。

者（反対派）⁴⁸の中核をなしていくことになる。ふたたび蔣経国回想にもどろう。

私の政治活動は中国共産党（＝中共モスクワ支部）の厳しい監視にさらされた。1928年初、一部の同学たちがトロツキストの組織から離れるよう忠告してくれた。当時、私はトロツキーの理論を信じてよいのか否か完全には確信が持てなかったので、彼らの勧めを受け入れ、以後トロツキストの活動に係わらないようにした。⁴⁹

ラデックは1927年12月に開かれたソ連共産党第15回大会で除名されてシベリア追放になり、上の回想から蔣経国はラデックが除名された後でトロツキー派の組織から身を引いたことがわかる。王凡西はこのあたりの事情について「ラデックが解任され、新学長はスターリン派のミフになり、学内のトロツキー派学生の一部は事実上すでに退学、あるいは党から除名され、処刑を待つ運命にあり、一部は悔い改めて投降（その中には蔣経国もいる）していた」と回想している⁵⁰。王凡西は左翼反対派秘密組織の宣伝担当である。回想録でことさらに蔣経国の「転向」を指摘した背景には、秘密組織のなかで蔣経国に対する期待が大きかったことがうかがわれる。活動に積極的だった蔣経国がモスクワ郊外で開かれた左翼反対派の秘密組織の立ち上げに加わらなかったことに、王凡西は失望したのだろう。

王凡西がいうように、蔣経国がラデック失脚直後にトロツキー派と袂を分ったことを、周囲はトロツキー派からの打算的な転向と見た。この非難に対して蔣経国は回想録のなかで「当時はまだ、自覚が高くなかった」⁵¹と言い訳している。蔣経国はこの回想を執筆した時点で、左翼反対派と別れたことを「自覚が高くなかった」と自省をこめて振り返っているのだ。当時、トロツキー派に与していた留学生の多くが除名や処刑の憂き目に遭ったのに、蔣経国はなぜ同様の追及を受けなかったのか。これは蔣経国がいち早く左翼反対派との距離を置いたことの他に、中国革命を推進するためにはまだ国民党とブルジョアジーに一分の役割が残っている（＝スターリンの中国革命論に由来する）と認識していたソ連当局と中共モスクワ支部が蒋介石との交渉の切り札に使うことを目論み、うまく泳がされていたからだ、と『青年蔣経国』を著した張日新は指摘している⁵²。本論もこの張日新の見方を合理的な判断として採用する。

蔣経国は蒋介石の息子であることが災いして中共モスクワ支部の監視が厳しくなり、以前は検閲こそあったものの郵送可能だった国際郵便も出せなくなり、「中国と完全に隔絶

⁴⁸ ソ連から帰国した左翼反対派は中共に加入するとともに前後して4つの左翼反対派、すなわち「我們的話派」（区芳、陳亦謀）、十月社（劉仁静、王文元、僕一凡）、戦闘社（趙済、劉胤）、無産者社（陳独秀、彭述之、尹寛、鄭超麟らの中共左派反対派）に別れて活動を始めた。前掲『中国革命と知識人』30-31頁。

⁴⁹ 前掲「我在蘇聯的日子」74頁。

⁵⁰ 王凡西『双山回憶録』（北京・当方出版社、内部発行、2004年）50頁。〔矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』（柘植書房、1979年）50頁〕。

⁵¹ 『トルマトコフ軍政党员大会資料』（ロシア文献センター、総ファイル550／目録1／ファイル6／31頁、1929年11月2日）。

⁵² 張日新他『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）43頁。

され」⁵³た。蔣経国は1927年4月に孫逸仙大学を繰り上げ卒業した。ソ連当局から帰国を許されなかったため赤軍を志願し、学徒兵としてモスクワ郊外の第1師団に入団する⁵⁴。ここで1年間ほど野戦術や幕営などを学び、成績が上位5位に入る優秀學員に選ばれ、レニングラードのトルマトコフ中央軍政学院（フルンゼ陸大）に進学した。

同学院のカリキュラムは3年制で、その間、教科書や日用品以外に毎月150ルーブルの生活費⁵⁵が支給された。初年度は戦術、軍隊行政、運輸、地勢学、大砲原理、軍隊政工システムなどの科目を学んだ。2年次で軍事戦略、ロシア内戦史、西欧軍事史、ロシア共産党史が加わり、3年次には戦術・戦略に重点が置かれた。蔣経国の得意科目は戦術・戦略で、在学中に論文『遊撃戦術』を著している。軍事科目以外では政治学、経済学、哲学、とくに唯物弁証法が重視された。蔣経国以外の学生は1人残らずロシア共産黨員だったので、黨員会議には出席できなかった。赤軍および軍政学院での勉学と経験が帰国後の江西省贛南における社会改造政策の立案と実施、そしてみずからの初期派閥の育成、台湾占遷後における軍内政工システムの構築、秘密警察の掌握、そして国防部長の任務をまっとうすることに役立った。

時期は前後するが、ラデックはコミンテルン第5回大会⁵⁶でトロツキーを支持し、それが原因となってロシア共産党中央委員とコミンテルンの指導的地位を解任され、避難的に孫大の創立に係わりトロツキーから初代の学長に任命されたのだった。ラデックは管理職にありながら同時に教壇にも立ち、トロツキーの国際主義の立場に立脚して中国革命運動史を講義し、スターリンとブハーリンの中国政策を批判した⁵⁷。孫逸仙大学の留学生はラデックがトロツキー派の重鎮であり、また、スターリンの一国社会主義よりもトロツキーの国際主義と永続革命のなかに祖国中国を帝国主義から救済する可能性を見出し、トロツキー派を支持する者が圧倒的に多数を占めた。こうしたなか、事態を重く見たスターリンは上海クーデターから1ヵ月後の5月13日に孫大で学生と会談し、中国人留学生から提出された10項目の質問に答えるというかたちでラデックをはじめとするトロツキー派の中国政策に批判を加えた。この10項目の質問は当時モスクワにいた中国人留学生がスターリンとトロツキーの中国問題に関する論争をどのように見ていたのかを如実に示しているので、以下に引用してみよう。

- ① ラデックは中国の農村では、農民闘争が封建制度の残滓に対してよりむしろブルジョアジーに向けられていると断言しているが、なぜその主張が誤っていると思うのか。中国で支配的な地位を占めているのは商業資本主義（＝トロツキーの主張）なのか、それとも封建制度の残滓（＝スターリンの主張）なのか。大工業企業の所有者である軍閥が同時に封建制度の代表者でもある、となぜいえるのか。

⁵³ 同前「我在蘇聯的日子」72頁。

⁵⁴ 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』記事年表上輯（行政院新聞局、1992年）34頁。

⁵⁵ 前掲「我在蘇聯的日子」227頁。

⁵⁶ ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史』上巻（大月書店、1973年）301頁。

⁵⁷ 岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国研究月報』（中国研究所、1992年4月）10頁。

- ② ラデックは、マルクス主義者は複数階級の政党を認めないから国民党は小ブルジョア政党であると主張しているが、その主張のどこが間違っているのか。
- ③ 国民党は共産党と小ブルジョアジーの連盟であるというあなたの評価と、四つの階級の連盟だとするコミンテルンの評価のあいだに矛盾はないか。プロレタリアート独裁のもとで、中国共産党員の国民党入党は可能なのか。
- ④ 武漢政府は、本当にプロレタリアートと農民との民主独裁なのか。もしそうでなければ、今後とるべき民主独裁への道程はどのようなものになるのか。プロレタリアート独裁への移行は「第二」革命なしに可能である、とするマルティノフの主張は正しいのか。それが正しいとすれば、中国における民主独裁とプロレタリアート独裁との境界線はどこにあるのか。
- ⑤ 武漢政府が蒋介石を攻撃せず、張作霖を攻撃しているのはなぜか。武漢政府と蒋介石との北方への同時侵攻は対ブルジョアジー闘争の戦線を抹殺するものではないのか。
- ⑥ ケマル（＝ムスタファ・ケマル・アタテュルク）式革命は、中国では起こりうるのか。
- ⑦ 中国では、いま農民による土地の即時奪取というスローガンを掲げる必要があるのか。湖南農民による土地奪取の事実は、どう評価すべきなのか。
- ⑧ ソヴィエトを組織せよ、という（トロツキーの）呼びかけは、いまなぜ誤りなのか。河南で労働者ソヴィエトが組織されたという事実に関連して、中国共産党は運動の後ろにくっ付いていくという危険に直面してはいないか。
- ⑨ 現在、中国で正規の赤軍を組織することを提起できるだろうか。
- ⑩ 現在、ブルジョアジーと闘っている時期に、中国企業を奪取すべきだというスローガンを出すことは可能だろうか。どのような条件のもとで、中国における外国工場の奪取が可能なのか。それは同時に中国企業をも奪取することにならないか。⁵⁸

上に示した 10 項目の質問はスターリンとトロツキーが中国革命の路線をめぐる争うなか、救国意識を抱いた中国人留学生がトロツキーの主張に準拠して提出した質問で、正鵠を得ている。これに対してスターリンは、武漢政府は当面「革命の中心」であり、現状ではソヴィエトを設立する必要性はない。共産党はさらに国民党と共闘し、武漢政府を擁護すべきで、国民党を離党すべきではない。将来、ブルジョア民主革命がプロレタリア革命に発展したときに労農ソヴィエトをつくり、中国共産党は国民党と労農ソヴィエトが政権の奪い合いを始めときに国民党から離れたらよい。軍隊の編制については、現状の組織を改善して軍の革命化を推進すべきで、赤軍で現軍を代替するのは不可能である、などと回答し、トロツキーの中国革命論に厳しい批判を加えた⁵⁹。

同月 24 日、コミンテルン執行委員会第 8 回総会の席上、スターリンとトロツキーは直接論争し、トロツキーはスターリンに対してみずからの主張を公表するよう求めて否決され、「反党行為」と断罪された。このあと、第 8 回総会はコミンテルンにおけるトロツキーの職務を解任することを決議した⁶⁰。

⁵⁸ スターリン「中山大学の学生との会談」『スターリン全集』第九巻（大月書店、1953 年）266-295 頁参照。

⁵⁹ 同上、前掲『中国托派史』15-16 頁。

⁶⁰ 前掲『コミンテルンの歴史』303 頁、前掲『中国托派史』15-16 頁。

その5日前の19日にはロシア共産党が政治局会議を開き、「孫逸仙大学にイデオロギーの正しい教員を任用するため、大学教授の審査を行う」ことを党書記局に委任し、特にラデック学長とダーリンら教員の即時罷免を決議した⁶¹。副学長のミフが学長に就任するまでは教務主任のアクーヤーが代理学長に任命された。

ミフはこの年の1月、ソ連共産党中央委員会の宣伝工作者ミッションを率いて訪中し、後に「江浙同郷会」事件を捏造する孫大留学生出身（同年4月卒業）の王明（陳紹禹）⁶²が通訳として同行した。二人は上海クーデター後の4月末、漢口で開催された中国共産党5全大会に出席し、7月に上海からハイラル経由モスクワに帰着している。ミフは漢口で王明を陳独秀に会わせ、王は中共の中央宣伝部で刊行物編集の仕事を紹介されたが、この処遇に不満で、4・12以降の国内情勢の激変にも不安を持ち、編集の仕事を早々に辞してミフとモスクワに戻っている。

モスクワに帰ったミフは代理学長に就任したアクーヤー（教務派）が留学生から信頼され人気を集めていることに脅威を抱き、党支部書記のシェドニコフを籠絡して教務派と支部局派の間に矛盾を作り出した。この対立関係に着目した王明は、両者の対立を解消して、さらにミフに孫大の実権を握らせる計略を考え出した。それは教務派と支部局派の両派に中立な第3勢力を味方につけ、同時に支部局派の暴走を防いでミフと王明の影響下に置いたあと、両者が連合して教務派を攻撃するというものだ。ミフはこの案に乗って支部局派を掌握するとともに教務派を打倒し、紛争を解決した功績で同年8月、アクーヤーを排斥して学長に昇進した。陰謀を計画した王明は当然のごとくミフに重用され、学長秘書とコミンテルン東方部の通訳を兼務し、孫逸仙大学の中共支部内に王明派を形成しはじめる⁶³。王明は権力を掌握するのにともない、当時顕著になりつつあった左翼反対派への圧力を強め、同時にみずからの政敵を追い落とすために画策し、4・12クーデター後に思想的な漂流状態に陥っていた孫大留学生の不安を煽って学内をパニックに陥れたのである。当時の王明一派を形容するひとつのエピソードがある。王明が中共モスクワ支部を代表して党員会議にひとつの決議案を提出したところ、100名以上いる党員の中で賛成したのは29人で、あとは全員反対して決議案は否決された。これに腹を立てた王明が「ここにいる28人と2分の1人（徐以新は党員ではなかったので『半人前のボルシェビキ』とよばれていた）こそが真のボルシェビキである」と語ったことから、この当時の王明一派は「28人のボルシェビキ」⁶⁴と称され、孫大留学生から恐れられた⁶⁵。

⁶¹ 前掲「中国人のソ連留学とその遺産」199頁。ラデックは1927年12月に開かれたロシア共産党第15回党大会で75人のトロツキー派とともに党を除名され、シベリアに追放された。

⁶² 王明（陳紹禹、1907-1974年）、上海大学在学中に中国共産党に入党し、1926-27年、孫逸仙大学に留学した。1927-30年、モスクワで中国共産党モスクワ支部の活動に従事。1931年に中共の指導権を掌握し、1932-37年、コミンテルン東方部の中共代表としてモスクワに滞在した。38年に帰国（不在中、遵義会議で毛沢東に指導権を奪われる）し、抗日民族統一戦線の政策をめぐる毛沢東と激しく対立した。1956年、毛沢東に敬遠されてモスクワに避難。以来、帰国のメドが立たず、1974年にモスクワで客死した。

⁶³ 前掲「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」11頁。

⁶⁴ 「28人のボルシェビキ」は資料によって若干の違いはあるが、おおむね以下の28人を指した。王明、張聞天、秦邦憲（博古）、沈沢民（茅盾の弟）、陳昌浩、王稼祥、陳原道、楊尚昆、何子述、汪盛荻、殷鑑、夏曦、李元傑、王盛榮、王雲程、孫濟民、盛岳、李竹声、朱子純、朱阿根、袁家庸、孟慶樹（王明の妻）、杜作祥（沈昌浩の妻）何克全、宋盤民、王宝礼、肖特甫、張琴秋の28人＋徐以新（非党員）。以上のメンバー洗

2-2 「江浙同郷会」事件

蔣経国が1928年、トルマトコフ中央軍政学院へ入学する前後に左翼反対派から離れたことは上述した。ちょうどそのころ、すでにレニングラードに移り住んだ蔣経国にモスクワから1通の手紙がとどいた。それは孫逸仙大学の友人からで、冗談混じりに「今度、江浙同郷会を立ち上げることになり、君が会長に推挙された。以後、会員への経済的援助を惜しまないように」としたためられていたのだ⁶⁶。これは孫大留学生よりも経済的にめぐまれていた蔣経国への羨望と友人間の気楽な戯れから認められたものだった⁶⁷。ところが蔣経国と同室だった国家政治保安部（GPU）のスタッフがこの手紙を発見し、中共モスクワ支部の王明に転送した⁶⁸。これと同じころ孫大では毎週土曜日の夜、孫治方が自室に俞松秀、董亦湘、周達明らを集め、江蘇・浙江方言で大声を出しながら故郷の鍋をつついていた。これを聴きつけた学生会主任の王長熙が「彼らはまるで江浙同郷会を開いているようだ」と支部に報告した⁶⁹。蔣経国が左翼反対派から抜けたため批判の口実を失っていた王明はさっそくこれを材料に、蔣経国が蒋介石の指示と資金援助で俞松秀、董亦湘、周達明、左権らとグルになり、中共モスクワ支部とコミンテルンの離反を画策する「江浙同郷会」とよばれる反革命組織を作っていると触れまわり、蔣経国をはじめとする反王明派を一掃しようと企んだ。これが「江浙同郷会」事件とよばれるものである。

学長のミフもこの「事件」を利用して一気に左翼反対派の一掃をはかることで、王明と利害が一致した。王はミフを通じて国家政治保安部（GPU）に「証拠の発見」を依頼し、モスクワで開催された中共六全大会で総書記に就任したばかりの向忠発に孫大で「江浙同郷会は蒋介石と結び、経済援助を受け、仄聞するところによれば日本領事館とも結託している」から「必ずその組織を壊滅しなければならない」と演説させて多くの学生を逮捕、除名したので、学内は大混乱に陥った⁷⁰。事件が拡大するにつれて王明のセクト主義に対する恐怖が怒りに転じ、ソ連共産党監察委員会などに厳正な調査を依頼する声が高まり、監察委書記のヤロスラフスキーが孫治方、俞松秀、董亦湘、周達明を同席させ、第一通報者の王長熙に真相を聞いたところ、王は「彼らが江蘇・浙江方言で話しているのを聴いただけであり、冗談で江浙の連中が同郷会を開いていると言っただけだ」と答え、孫治方、俞松秀、董亦湘、周達明らも「仲の良い友人と食事をしていた。いかなる政治活動もしていない」と釈明した。また、中共六全大会後にモスクワにやって来た周恩来も孫大を

い出しは、トーマス・キャンペン著、杉田米行訳『毛沢東と周恩来』39頁を参照した。

⁶⁵ 彭哲愚・厳農『蔣経国在莫斯科』（民進書報社、1986年）17頁。

⁶⁶ 前掲『蔣経国在莫斯科』17頁。

⁶⁷ トルマトコフ軍政学院では教科書や日用品以外に毎月150ルーブルの生活費が支給された（前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」227頁参照）。このことは、また、1927年に溪口の母毛福梅が経国に送った金銭の使い道とも関係している。経国は母親が送金してくれたお金の中から40ルーブルを歯科治療費として朱茂榛に貸し、残りを友人たちとの飲食に費やした。このときの遊興を中共モスクワ支部の王明らが反ソ、反共団体の組織化と断定したことも経国が江浙同郷会事件に巻き込まれた原因のひとつに数えられる（前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」125頁）。

⁶⁸ 前掲『蔣経国在莫斯科』17頁

⁶⁹ 前掲「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」13頁。

⁷⁰ 同前14頁。

訪れ、多くの学生から「事件」について聴取し、最終的に「江浙同郷会は存在しない」と断定して紛糾は終息した⁷¹。

「江浙同郷会」事件は蔣経国の立場に立ってみると、中共モスクワ支部から組織的に狙われ、攻撃を受けた初めての経験だった。また、ソ連共産党あるいは国家政治保安部（GPU）などソ連国家を統治する組織の闇の部分に触れた、やはり最初の体験であった。そして、その後の約 10 年間にわたる留ソ期間中を通じ、程度の差はあったものの蔣経国の帰国を阻み、ソ連生活を脅かす中共モスクワ支部、ソ共、コミンテルン、GPU の影は終始つきまとっていた。それは多くの場合、蔣経国を窮地に追い込み、苦しめてきたが、その苦境の中で蔣経国は共産党が組織を統治する方法や敵対勢力を攻撃する手法を学び、同時に追われ、攻撃される立場にあったために間接的に秘密警察が敵を追いつめていくノウハウを熟知していった。このことはモスクワから帰国後、とくに台湾へ遷占したあとの国民党と国民政府が秘密警察組織をひとつの土台として「大陸反攻」を大目標に据えた台湾の「国体」を護持していくうえで蔣経国に大きな優越性をもたらした。国民党・国民政府内には、蔣経国以上にこの方面に秀でた人材がいなかったからだ。それは蒋介石すら予期していなかった台湾統治を支える大きな闇の勢力となったのである。

2-3 入党と党籍剥奪

蔣経国が孫逸仙大学に入学した際、大学が作成した個人ファイルには「1925 年 10 月に国民党入党」と記されている⁷²。蔣経国の回想録にも同様のことが書かれている⁷³。ところが、国民党員のはずであった蔣経国は孫大では国民党支部の活動にはほとんど参加せず、もっぱら中共モスクワ支部との往来が頻繁だった。そして驚くべきことに、当時、蒋介石は蔣経国が留学に出発する直前、林煥庭の紹介を受け、上海で国民党に宣誓・入党した⁷⁴事実を知らなかった。蒋介石は書簡で次のように述べている。

お前は国民党ではなく、いま共産党に入り、共産主義をお前の事業とし、革命をお前の生涯となした。父は共産党に入党したことはなく純粹の国民党員であるが、みずからの一生の事業を革命と心得ている。つまり、私たち父子は終始革命の戦線に立って奮闘するのである。私はお前に対しては父であるが、革命事業においては一人の同志であり、父はそのことに満足している⁷⁵。

この書簡は 1926 年 3 月 16 日にしたためられたものである。書簡の文面からは、蒋介石の共産党に対する不信が感じられない。むしろ共青团に入団した蔣経国を革命の同志として扱い、激励している。蒋介石に反共の第一歩を走らせた中山艦事件は、この書簡が出さ

⁷¹ 同前「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」14-15 頁。

⁷² ロシア文献センター、総ファイル 530/目録 1/ファイル 14/54 頁。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」120 頁。

⁷³ 前掲「我在蘇聯的日子」218 頁。

⁷⁴ 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』（行政院新聞局、1992 年）28 頁。

⁷⁵ 『蒋介石が蔣経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル 530/目録 4/ファイル 49/91~92 頁、1926 年 3 月 16 日）。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」120 頁。

れた直後の3月20日に起こった。これより1ヵ月半ほど前の2月1日に蒋介石から蔣経国に宛てたためられたもう1通の書簡を見てみよう。

氣力、見識、学問、勇氣を備えた聡明で強い革命家になり、我が党の後継となれ（中略）ロシアにあっては必ずその時々の時勢と潮流を掴み、常に向上することを心がけ、とくに民衆の利益を重視し、己の一切の幸福を犠牲にして、国際プロレタリア階級の解放を第一務とすべきである（中略）いずれの党に入ろうとも、それはお前の心の赴くままにすればよい。余はあれこれ強制しない。しかし革命は急進させなくてはならず、革命の性ある団体を重要とする⁷⁶。

1925年10月の上海における蔣経国の国民党入党は、孫逸仙大学への留学資格を満たすための便宜的な処置だったのではないか。ソ連共産党と国民党が運営した孫大に入学するためには国民党籍が必要だったのだ。モスクワ到着後の蔣経国は共青团の活動を通じて急速に左傾していく。この時期の蔣経国が思想的に国民党員になっていたとは考えにくい。中共が主体になって組織した五・三〇事件における反帝愛国運動への積極的な参加、さらには北京で李大釗ら中共北方区委が組織した北京5万人反帝示威運動への関与などの行動からみれば、どちらかといえば思想的には「共産」であったというべきだろう。

国民党の活動には見向きもしなかった蔣経国だが、共青团の活動には積極的に係わっている。以下に列記してみると、孫大俱樂部書記、副主席を務め、同俱樂部の政治委員主席や活動組員にもなっている。さらには中国青年材料収集委員会委員、そして少共小組宣伝部特別委員印刷委員などである⁷⁷。中国青年材料収集委員会とは共青团が青年活動を進めるうえで必要な情報、データの収集組織であろう。「少共」とは少共国際＝青年共産国際とよばれるもので、青少年をコミンテルンの活動に収斂していくための組織と思われる。少共小組宣伝部特別委員印刷委員とは、蔣経国が回想録の中で言及している壁新聞「紅牆」のことだろう⁷⁸。

少共小組の活動のなかに、まだ年少だったが故に犯した蔣経国の失敗などを垣間見ることができ、当時の蔣経国の人となりをうかがうことができ興味深い。ある時期、少共小組の組長だった高維翰は蔣経国の性格について「怒りっぽく、無駄口が多い」⁷⁹と評している。また、大学党部の蔣経国に対する評価は「教育水準は中等程度、よく訓練されたマルクス主義者で、規律を守り、十分に活動的だ。若年に起因する軽率さがみられる」⁸⁰となっている。

⁷⁶ 前掲『蒋介石が蔣経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／86-87頁、1926年2月1日）、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」119頁。

⁷⁷ 前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁。

⁷⁸ 前掲「我在蘇聯的生活」2頁、前掲『蔣経国先生全集』記事年表上輯28頁。

⁷⁹ 『組長報告』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録2／ファイル122&125、『黨員及び団員工作調査表』（総ファイル530／目録38／ファイル20／9頁など、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁。

⁸⁰ 『孫大露共支部書記シトニコフが蔣経国に与えた評価』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録1／ファイル77／44頁、1926年）、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」111頁。

蔣経国はある日、会議で組長と言い争いになり、級友から「会議を混乱させ、クラスを搗乱し、学習態度が散漫、積極分子としての責務を忘れている」と批判されたことを悔いて共青团組織部に自省の書簡をしたため、「個性が強く、計画的な学習が不得手」なので適切な指導をしてほしいと求めている⁸¹。

レニングラードのトルマトコフ軍政学院に入学した翌年の1929年2月以来、蔣経国は数度にわたりソ連共産党への入党申請を出した。同年10月、軍政学院特別班支部は蔣経国の入党申請を審査する党員会議を開き、席上、蔣経国の友人で先にソ共党員になっていた劉鳴先は入党に反対はしなかったが「新規定では5人の申請紹介者の中に少なくとも3人の工場労働者を含むことが求められているが、蔣経国の紹介人はその条件を満たしていない。このことは後に全学会議あるいは党員会議で問題になる恐れがある」と指摘している。出席者の大多数は、蔣経国の学習態度、対人関係が良好なため入党に賛成した。1～2人は「政治的立場」が曖昧なことを危惧した。もう1人は、蔣経国が中国で労働経験がないので申請を保留すべきだと主張した。紹介者の1人ゴージェスは入党を認めるか否かは、「プロレタリア階級のために戦えるのかどうかで判断すべきである。エリザロフ（蔣経国）の出身はプロレタリア階級ではないが、もう子供でもない。彼は優秀な同志であり、彼を党外に放置すべきではない」と補足した⁸²。これらの意見に対して蔣経国は次のように応えている。

私が誰とともに歩むのか、家族かそれとも共産党か。この問題はすでに決着がついています。中国共産党もしくはソ連共産党に入党する件について、秋白同志⁸³は私が候補党員になることに同意しています。私の将来の帰国問題について、秋白同志は私が今後1年間ここに残留し、工場で学習し工作することに賛成しました。私は帰国を恐れてなどいません。政治問題については、ソ連共産党中央監察委員会に私の個人ファイルがあります⁸⁴。

最後に劉鳴先が以下のように締め括っている。

私はエリザロフと知り合って久しく、上海から一緒にモスクワへ来た仲間です。孫大で2年間をともにすごしました。私は彼の共産主義の発展がはやいことを知っています。はやいがために途中で多くの過ちを犯しました。反動派⁸⁵のまちがいもそ

⁸¹ 『蔣経国が少共委員会組織部に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録2／ファイル125）、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁。

⁸² 『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』（ロシア文献センター、総ファイル550／目録1／ファイル6／60頁b、18～21頁、1929年10月21日）。前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126頁。

⁸³ 瞿秋白（1899-1935）、1920年代における中共指導者の一人。1928年にモスクワで開催された中国共産党第6会大会に代表として出席し、1930年まで駐コミンテルン中共代表としてモスクワにとどまった。30年に帰国して政治局委員を務め、李立三路線の清算でその不徹底さを批判され、政治局委員を解任された。35年に国民党軍に捕えられて銃殺された。

⁸⁴ 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126頁。

⁸⁵ 「反動派」は左翼反対派、すなわちトロツキー派のことを指している。

うです。15 回大会後、彼は党に自省書をしたため、みずからの過ちを認めました。軍政学院での 2 年間余、彼は過去の過ちを繰り返していません⁸⁶。

党員会議では、蔣経国への候補党員資格付与に 4 人が賛成して 1 人が反対したため、さらに学院党員大会の議論に委ねることになった。同年 11 月 2 日に開かれた大会では劉鳴先がまず「蔣経国は 10 月 16 日、ソ連共産党候補党員資格を申請し、特別班主席団はこの書類が示すようにそれを承認した」ことを報告した。その後、①党が蔣経国に帰国を求めたら帰国するのか否か、②今後、蒋介石には如何に対応していくのか、③帰国後は家族関係を維持していくのか、④反動派との関係はどうなっているのか、⑤なぜ経歴書に反動派に加わっていたことを書かないのか、などの質問が出された⁸⁷。これに対して蔣経国は次のように答えている。

党が帰国を求めたら、私は当然党の指導に従って帰国します。蒋介石は当然のことながら敵であります（中略）反動派の件については反省しています。私はプロレタリア階級出身ではないので、当然、多くの非プロレタリア思想を身に着けています。だから、知らぬ間に反動派と関係を持ってしまったのです。（現在）家族とは少しの関係も有していません。李大釗との関係については、彼がモスクワ留学を紹介してくれたのです。なぜ、少共に入らなかったのか。あのころ私は 15 歳で、子供でした（中略）私は非プロレタリア階級出身なので、幼稚です。同志の皆さん、今後 2 年間の候補党員期間を見てください⁸⁸。

こうして蔣経国が求めた候補党員資格は、トルマトコフ中央軍政学院の党員大会においてソ連共産党員の賛成 12 票、中国共産党員の賛成 25 票、反対 1 票で承認された。翌 1930 年 3 月 28 日、ソ連共産党レニングラード軍区委員会は蔣経国の候補党員資格を正式に認めた⁸⁹。当時、中国共産党員がソ連共産党に入党する場合、一般的には一段格下げされるのが常だった。中共党員はソ連共産党への入党初期においては候補党員としてしか認められず、一定期間の観察期間が設けられた。蔣経国はソ連で「反革命の大罪人」の汚名を持つ蒋介石と左翼反対派に加わっていたという二つのハンディを抱えながらも中国共産主義青年団員からソ連共産党候補党員に昇格することができた。これは蔣経国の団員としての働きや資質が一定以上に優れていたことの証左といえよう。

蔣経国が上で述べているように候補党員期間は一般的に 2 年間が目安だったようだが、蔣経国はその後の流転の中で党員に昇格することはなかった。それは王明をはじめとする中共モスクワ支部が蔣経国の出自や左翼反対派だった過去を執拗に追及しつづけたからである。蔣経国は 1936 年 9 月、ソ連共産党ウラル党委員会によってウラル重機械工場の助理（補佐）工場長と『重工業日報』編集長の役職とともに、候補党員資格を剥奪された⁹⁰。

⁸⁶ 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126 頁。

⁸⁷ 同前 127 頁。

⁸⁸ 同前。

⁸⁹ 同前。

⁹⁰ 前掲「我在蘇聯的日子」244 頁参照。一方、張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002 年）

1925 年 12 月、孫逸仙大学に入学してわずか 8 週間で共青团に入団して以来の団員、あるいは共産党員としての資格を喪失したのである。

小結

本論の考察を終えて、以下の 5 点を検証することができた。

第 1 点は、蔣経国の在ソ 12 年間における共青团入団、左翼反対派への参加と離脱、ソ連共産党への入党と党籍剥奪の過程を史実に即して敷衍し、蔣経国が孫逸仙大学入学後のある時期から 1927 年 5 月ころまで左翼反対派の秘密組織（準備段階）に加入していたこと、1930 年 3 月から 1936 年 9 月までソ連共産党の候補党員であったことを明らかにすることができた。あわせて、モスクワにおける中国人留学生の左翼反対派の生成と、その中国大陆への移植過程を検証した。

第 2 点は、蔣経国が孫大卒業後もソ連に止まったのはソ連当局と中共モスクワ支部から帰国許可が下りなかったという事実もあったが、それ以外に、中国革命を推進するためにはまだ国民党とブルジョアジーを利用できると考えたソ連当局と中共モスクワ支部が、将来、蔣経国を蒋介石との交渉の切り札に使うことを目論み、うまく泳がされていたことを検証できた。

第 3 点は、蔣経国のソ連における恋情はこれまでの研究でつまびらかにされてきたファイナ（中国名：蔣方良）との関係だけでなく、馮玉祥の長女、馮弗能との間にも濃密な交際があったこと。そして、その恋は蒋介石が発動した 4・12 上海クーデターの影響を受けて政治化し、苦恋に終わったこと。さらに 2 人の恋が破綻した原因は、政治的な自覚が高くなかった馮弗能の存在を共青团が嫌い、同時に、上海クーデターで苦境に陥った蔣経国が彼女との関係を清算することでソ連当局と共青团の好感を調達し、難局を乗り切って保身を図ったことなどを明らかにすることができた。

第 4 点は、上海クーデターをきっかけにして、孫逸仙大学がスターリンとトロツキーの中国問題をめぐる路線闘争に巻き込まれて紛糾し、その争いの中で大学から左翼反対派を一掃しようとする王明一派＝「28 人のボルシェビキ」が第 3 代学長ミフの後ろ盾で台頭してきたこと、あわせて王明が蔣経国を追い詰めるために起こした「江浙同郷会」事件が根拠のないでっち上げだったことを検証した。

第 5 点は、蔣経国が孫大に留学するため、1925 年に上海で国民党に入党していた事実を蒋介石が知らなかったこと。そして、蒋介石自身は上海クーデター以前までの段階で蔣経国が国民党、共産党のいずれに入党することも蔣経国の自由意志に任せていたことを明らかにすることができた。

蔣経国の 12 年間に及んだソ連経験は、その後の蔣経国自身の政治生活に深くコミットす

76-77 頁の記述によれば、蔣経国は 1936 年 11 月 16 日にウラル重機械工場党委員会に対し候補党員から正式党員への格上げを申請し、12 月 7 日に認められてスヴェルドロスク区ソビエト組織部の副部長に昇進した。その後、内政部の監視がつき、西安事変の進展の中で帰国を許され、ソ連共産党における党籍は自然消滅したになっているが、典拠が示されていない。

るものであった。それは帰国後、江西省の贛南で展開したユートピア的なソ連式の社会改造政策や台湾占遷後に秘密警察を掌握して蒋介石の台湾統治を裏から支えた一連の闇の行動などに色濃く反映されている。その意味で、蔣経国の在ソ期間中における軌跡を詳細に検証していくことは、蔣経国研究をさらに発展させるための必須条件であり、そのことは台湾現代史を検討していく上で達成されなければならない重要な課題ともいえるのである。

本論は次章で蔣経国のソ連における労働経験と、スターリンに許されて12年ぶりに帰国するまでの過程を検討する。

第3章 蔣経国のソ連における労働経験

はじめに

蔣経国は1930年5月、レニングラードのトルマトコフ中央軍政学院(フルンゼ陸軍大学)を卒業してソ連における学業をいったん終えた。そこで二度目の帰国願いを出したがやはり認められず、回想録の記述によれば、その後の6年間にレーニン大学の中国人留学生地方視察訪問団の副指導員、モスクワ郊外のティナマ電器廠(Tinama Electrical Plant)、おなじくモスクワ郊外のシコフ村集団農場、スヴェルドロスク(ウラル地方)の駅荷役係、アルタイ金鉱、そしてふたたびスヴェルドロスクのウラル重機械工場と六つの職場を転々としている。駅の荷役係やアルタイ金鉱の坑夫は明らかに苦役で、中共モスクワ支部の王明らが蔣経国に打撃を与えるためにソ連当局に要求して恣意的に手配した仕事だ。敵対関係にあった王明は過去に左翼反対派の活動経験がある蔣経国をモスクワに置いておくのは好ましくないと考え、郊外の農村やウラル、アルタイなど僻遠の地になかば追放した。蔣経国はそれらの地で大学在籍中におけるイデオロギーや軍事の学習、訓練とは別の社会主義建設の熱気や蹉跌、経済5カ年計画で課せられる増産運動、職場の政治運動、農作業、苦役などを通じて社会の現実に触れ、みずからの心のスクリーンにソ連という国家の実像を結んでいった。スターリンが発動した政敵に対する大粛正の波は蔣経国の身边にも及び、政治的に「好ましくない過去」を持つ蔣経国は秘密警察の監視を受け、中共モスクワ支部に迫害され、ソ連共産党候補党員資格とすべての仕事を剥奪される。こうした一連の経験は蔣経国にソ連人民の素朴な厚情を記憶させるとともに、共産党システムが生んだ過酷な独裁体制をも明確に認識させた。これらの経験はすべてひっくり返して、蔣経国が帰国してから江西省贛南で実施した社会改造事業や台湾遷占後に従事した軍隊政工部門、秘密警察、中国青年反共救国団、国防部長、そして行政院長や総統の仕事にまで活かされていく。

本章は6年余にわたった蔣経国の労働経験を2篇の回想録¹の記述にしたがってとり、ソ連国家に対する蔣経国の期待と失望、政治・思想面における起伏を検証しようとするものである。同時に、王明が蒋介石を批判して中国に抗日気運を醸成するために捏造したとされる蔣経国の「生母毛福梅への手紙」の真相を検討し、さらに蔣経国の帰国を実現した西安事変についてもその経緯に検討を加えたい。

¹ 『我在蘇聯的生活』と『我在蘇聯的日子』の2篇を指す。前者の『我在蘇聯的生活』は1925年から1937年まで足掛け13年の日記から、毎年任意の1日の記述を抽出して13篇にしたもの。13篇の内容は①孫逸仙大学(1925年12月3日)、②莫斯科休養所(1926年7月20日)、③紅軍(1927年6月4日)、④列寧城中的一個學校(1928年10月3日)、⑤黑海边上(1929年8月21日)、⑥參觀團(1930年6月21日)、⑦狄拿馬電氣廠(1931年2月8日)、⑧石可夫農村(1932年10月20日)、⑨烏拉山上(1933年3月5日)、⑩第二次五年經濟計劃(1934年6月10日)、⑪新年(1935年12月31日)、⑫報館(1936年5月21日)、⑬新的莫斯科(1937年3月25日)となっている。後者の『我在蘇聯的日子』は編年体で書かれ、①前言、②一九二五年、③一九二五年至一九二七年、④一九二七年至一九三〇年、⑤一九三〇年至一九三二年、⑥一九三二年至一九三五年、⑦一九三六年至一九三七年の7節からなる。2篇ともに、蔣経国先生全集編集委員会編『蔣経国先生全集』第一冊(台灣行政院新聞局、1992年)1-90頁に収録されている。

第1節 国内流転

蔣経国の回想録は2篇ともに帰国直後の1937年に執筆されたものである。その時期の蔣経国の識字力について曹聚仁は、「指を折って数えてみると、覚えている国字は100字に満たなかった」²と指摘している。少々誇張があると思われるが、ソ連生活が12年間もの長きにわたったので、少なくとも中国語の作文能力は留学以前に比べて著しく落ちていたことは間違いない。蒋介石も当時、蔣経国に書き送った書簡のなかで「ソ連滞在報告は他人に頼むよりも自分で翻訳するほうがよい。国文で著せないからといって、他人に依頼するのは恥ずべきことだ。国文で書けるようになるのを待ち、ロシア語がわかる者に添削を求めるべきである」³と記している。蒋介石も当時の蔣経国の作文能力の低下を嘆いていた。

これら2篇の回想録は下書きをロシア語で書き、それを翻訳者の手を借りて中国語に翻訳したか、あるいは下書きも中国語で書き、それをロシア語の解る人に流暢なロシア語で補足説明し、中国語で改稿してもらったかのいずれかであろう。文章はややもすると感傷と美化に流れ、短絡的で叙述不足の箇所が多くみられるが、蔣経国自身が書き残した無二の一次資料として貴重である。以下、2篇の回想録の記述にしたがい蔣経国のソ連における労働経験を敷衍してみよう。

1-1 中国人留学生地方視察訪問団の副指導員

トルマトコフ中央軍政学院を卒業した蔣経国が最初に就いた仕事は、レーニン大学⁴の中国人留学生地方視察訪問団の副指導員（引率係）である。これは帰国を認められなかった蔣経国が次の正式な配属を待つまでの臨時的な仕事で、1930年6月初旬から下旬までの1ヵ月に満たない短い期間だった⁵。学業を終えた中国人留学生が帰国する前にソ連国内を視察する旅行に通訳などをしながら随行する仕事で、ウクライナやコーカサスの黒海沿岸地域に建設された工場、農場、発電所、そして保養地などを訪れた。

ドン河畔に展開する都市ドストフナ・ドヌーの近郊では欧州最大の集団農場を見学した。そこは徹底的に機械化され、小麦の刈り取りや脱穀には当時としては最先端のコンバインが導入され、農場内の通信や輸送には航空機が使われていた。農民は住居から農場まで自動車で送迎され、居住区には農民倶楽部、映画館、病院、学校、公園などが完備されていた。そこで視察団の一行は農民から、農奴だった革命前と奴隷の身分から解放された革命後の生活の明暗を聴かされ、居住条件や医療、子弟の教育、就職がいかに良くなったのかを実地教育されている。この光景は社会主義国が外国人視察団に手配する典型的なプロパガンダのための視察旅行にすぎないが、当時のソ連社会における社会主義建設の熱気に対する蔣経国の感情の高まりが感じられて興味深い。

² 曹聚仁『蔣経国論』（台北・一橋出版社、1997年）95頁。

³ 蔣経国『我的父親』（台北・三民書局、1975年）114～115頁。

⁴ レーニン大学は中国人専門の革命大学だった孫逸仙大学が閉校し、名称を変えて開校した大学である。蔣経国「我在蘇聯的生活」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）77頁。

⁵ 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集 記事年表』上輯（行政院新聞局、1992年）39-40頁。

一行はさらにドイツから設備一式を導入した農業機械製造工場を見たあと、チフリス（現トビリシ）の水力発電所、レーニナカン（現ギュムリ）の大規模紡績工場、高級リゾートとしての保養地などを訪れ、いわゆる社会主義建設の「成果」を見学した。チフリスではまた、スターリンの母親と会う日程が組まれていた。その彼女が「父親というものは必ず子供を愛しています。子供もまた、父母を愛すべきなのです」と語ったことを蔣経国は回想録に書き残している⁶。これは帰国を許されない蔣経国が、スターリンの母親との会話という形式でみずからの父母への慕情、帰国願望を吐露した暗喩であろう。

後段の第6章で詳細に検討するが、蔣経国が帰国後に江西省贛南で実施した社会改造事業や台湾遷占後に十大建設として取り組んだ経済発展計画のなかにこの視察旅行で実地見聞したソ連の経済建設がモデルとして取り込まれていることがわかる。この旅行経験は、多分にその後の蔣経国が社会発展の理想型として抱きつづけた原風景であったことを見てとることができよう。

初めての随行の仕事で疲労した蔣経国は、モスクワに戻った直後に重篤な病を発症して9日間入院した。入院3日目には人事不省の危篤状態に陥っている。この病気で9日間の入院生活を余儀なくされ、療養中にロシア人の友人が3人見舞いに来てくれたが、中国人は1人も来なかった⁷。蒋介石の上海クーデターによる政治的危機、トロツキー派からの離脱にともなう転向疑惑、それに続く「江浙同郷会」事件と、当時の蔣経国をめぐる環境がモスクワの中国人留学生社会のなかにおいて微妙で危うい状況にあったことがこの見舞いの一件からうかがえる。

1-2 ティナマ電器廠

病气から回復した蔣経国は、1930年10月、モスクワ郊外のティナマ電気廠（Tinama Electrical Plant）に配属された⁸。ここは従業員1800人で、25製造部門を擁し、1部門は72人で6グループに別れ、12人で1グループを構成した。生産品目は電車のエンジンとパンタグラフで、1日のノルマはエンジンが16基、パンタグラフはその倍の32台だった。蔣経国の工員番号は865番で、第18製造現場の第4グループに属する。蔣経国は当時のことを次のように回想している。

学校から工場への環境変化は大変だった。それまで肉体労働に従事したことがなかったので、最初の二日で手はむくみ、腰や背中が痛くなった。辛い仕事は自己鍛錬になると考えて我慢した⁹。

ここでは学徒工の身分で、早朝7時に起床し、満員の通勤バスで出勤して午後五時まで働く。毎月の給与はわずか45ルーブルしかなく、生活を維持していくのが難しかった。当時、ソ連は食料不足で物価も高く、主食のパンは配給、魚類や肉類は供給が限られ、いつ

⁶ 中国人留学生地方訪問視察団についての回想は、前掲「我在蘇聯的日子」33-35頁を参照。

⁷ 同上「我在蘇聯的生活」33頁。

⁸ 蔣経国「我在蘇聯的日子」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）75-76頁。

⁹ 同前「我在蘇聯的日子」76頁。

も空腹をかかえて勤務した。さらに回想はつづく。

グループ長は21歳の技師で、かつては工員の互選で選ばれたが、現在は部門長の指名による。工場内で発生する問題もこれまでは工場管理委員会で工員みずからが討議して解決してきたが、現在は工場長に解決を委ねている。工場長の命令は絶対で、これはソ連国家全体の政策の転換に連動したものだ。つまり工員による民主的な管理から、権限が工場当局に集中した結果である¹⁰。

工場の管理方法の変化は、スターリンがトロツキーやその他の政敵との権力闘争に勝利して独裁体制が固められたことと関係しているのだろう。ソ連の政治と社会の全体的な変化がうかがえる。

蔣経国は低賃金を補うために軍政学院の経験を活かし工場内で軍事教練のアルバイトをし、夜8時から11時までは夜間の技術学校に通い、昇進と昇給をめざした。技術学校に入学して少しずつ技術を身につけ、5ヵ月後には身分が学徒工から正規雇いになり、月給は105ルーブルまで上がった。

工場内の各部門は相互に社会主義生産競争に参加し、たとえば以下のようなノルマを課せられた。

- 1、生産計画を100%以上超過達成する。
- 2、品質は優等賞を獲得する。
- 3、電力や機械油などの消費量を減らし、コスト削減を達成する。
- 4、社会活動（地域の奉仕活動や政治学習などを指す）に積極的に参加する。
- 5、工員は、毎月1件以上の改善提案を行う。¹¹

成績が優秀な部門や個人には赤旗や奨励記念品が贈られ、劣った部門や個人は黒板に部門名や氏名が書かれて戒めとされた。蔣経国の第4グループは優秀な成績をおさめて赤旗を授けられ、各個人には革靴切符¹²が配られた。

ソ連はスターリン政権下でネップ（新経済政策）の行き詰まりから経済を転換するために5カ年計画制を導入し、蔣経国がティナマ電器廠に在籍した時期はちょうど最初の第1次5カ年計画の実施時期と重なる。急速な重工業化が進められ、資本主義諸国からの輸入に頼っていた工場や農場の機械類、インフラ設備などの国産化を目指した。蔣経国はこうした社会主義生産競争の熱気のなかで「工員たちはみな落後することを嫌い、寸暇を惜しんで働いた」と回想し¹³、さらに当時のみずからの感情を吐露し「労働の生活があつてこそ自己が鍛錬される。労働生活がなければ社会の構造を理解することは難しく、労働の価

¹⁰ 前掲「我在蘇聯的生活」36-37頁。

¹¹ 同前。

¹² 社会主義の配給制の下では、供給が需要に追いつかない物品や食料品は金銭以外に配給切符がないと購入できなかった。例えばパンやタバコ、油、ミルク、木綿の布など生活物資の多くが配給制で、毎年、一定の量の切符が割り当てられた。

¹³ 前掲「我在蘇聯的生活」37頁。

値や人民の苦しみも解らない」¹⁴と記している。

夜間学校に通って技術を学んだ蔣経国の努力は1年を経ずして報われ、1931年の前半には生産管理部門の副主任に推挙された¹⁵が、中共モスクワ支部の王明らの同意が得られず、結局その役職に就くことはできなかった¹⁶。蔣経国のティナマ電器廠における勤務は1931年の後半までつづいた。

蔣経国は電氣廠に移籍後もレーニン大学の宿舍に起居していた¹⁷。このためふたたび学内の政治問題に巻き込まれ、ある会議で王明を痛烈に批判することになる¹⁸。それを根に持った王明はコミンテルンと計って蔣経国をシベリアに追放することを画策し、アルタイ金鉱への配置転換を主張した。蔣経国は健康上の理由を楯にしてアルタイ行きを拒み、コミンテルン本部もこれを了承する。しかし、王明らは蔣経国を首都から追放することに固執し、モスクワ郊外の農村で最も貧しいシコフ村に配属した。これは、どうせ首都から追放されるなら農村を見てみたいという蔣経国の希望でもあった。第1次5カ年計画の中核として、食料の増産を目指して各地で農村が集団化され始めた数年後のことだった¹⁹。

1-3 シコフ村集団農場

蔣経国がシコフ村に赴任したのは1931年11月のことである。財布には30ルーブルしか貯えがなかった。到着したその日、村人たちは外国人をよそ者扱いして宿泊場所すら与えなかった。蔣経国は仕方なく教会の車庫でボロをまとって寝た。翌朝、東の空が白み始める4時すぎには畑に出た。早朝から「こいつはパンの食べ方を知っているのに、畑を耕すことすらできない」とか「農作業はパンを食うよりも難しいのか」などの嫌みをいわれながら1日の労働を終え、ふたたび車庫の土間で眠った。そのとき1人の老婆が「こんなところに寝ていたら病気になってしまう」と自分の家に連れていき、食物とベッドを用意してくれた。老婆はソフィア（68歳）という名前だった。

蔣経国が志願してやってきたシコフ村は、モスクワ管区内でも最も貧しい農村で、市内とおなじように食料品や日用品が慢性的に欠乏して、魚や肉、砂糖、石鹼、歯磨き粉、靴、靴下などを手に入れるのは難しかった。農村で産する鶏卵や牛乳、肉などはあっても、それは合作社に売って農機具の購入に充てなければならなかったからだ。農民の懐に飛び込むためには、まず彼らの顔役の心をつかまなければならない。蔣経国は老農夫スカラピーノとの関係作りにとりかかった²⁰。

シコフ村での農作業について、蔣経国は次のように回想している。

最初のころ、畑を耕すのはそれほど簡単な仕事ではなかった。しかし少しずつ慣れてくると、たしかに体力は使うがそれほど難しいとは思わなくなった。大変なのは

¹⁴ 同前「我在蘇聯的生活」41頁。

¹⁵ 前掲『蔣経国先生全集 記事年表』上輯42頁。

¹⁶ 前掲「我在蘇聯的日子」77頁。

¹⁷ 戸籍をまだティナマ電器廠に移していなかったか、あるいは工場サイドで宿舍の準備ができていなかったことが原因と思われる。社会主義国では頻繁にみられる現象である。

¹⁸ 前掲『蔣経国先生全集 記事年表』上輯43頁。

¹⁹ 前掲「我在蘇聯的日子」77頁。

²⁰ 前掲「我在蘇聯的生活」42頁。

曲がった畝を切ることで、わたしはいつも湾曲するところを耕し残してしまい、農民からやり直すよう叱られた。²¹

早朝から労を惜しまず働く蔣経国に、村人たちも5日目くらいから心を許すようになる。やがて農作業の合間に行政手続きの知識に乏しい農民のために土地の貸借交渉や農機具の購入、税務などを代行するようになり、そのことが評価されて農村ソヴィエトの副主席に選ばれた。当時、シコフ村にも農業集団化の波が押し寄せていたが、主席が病氣療養中だったために遅々として進んでいなかった。代わりにその仕事を副主席が代行することになり、蔣経国はゆっくり時間をかけて農民と協議した。最初、農民は集団化に大反対で、ほとんど賛成してくれる者はいなかったが、3ヵ月後には集団化に漕ぎ着けることができた。

シコフ村の農業集団化の範囲はそれほど広くなく、農民の数も多いとはいえ、必ずしも難しいものではなかった。しかしこの仕事を通じて得た組織経験、労を厭わずに働く習慣を身につけたことは貴重だった。²²

蔣経国は農作業の疲れから、ここでも重病に罹っている。ソフィア婆さんが自分の家に引き取って看病してくれた。村の多くの仲間も見舞いにきて、身体を案じてくれた²³。

1年後（1932年10月）、モスクワからの指示でシコフ村を離れるころ、蔣経国は村人にとって欠くことのできない重要な仲間になっていた²⁴。いよいよ村を離れるという日の朝、ソフィア婆さんがやって来て、「もう何ヵ月も顔を洗っていないでしょう」と言いながら貴重な石鹸を差し出してくれた。村人たちもリンゴや鶏、アヒルなどを抱えてやって来て、顔役のスカラピーノがお別れの言葉を述べてくれた。蔣経国は最後に、次のように挨拶したと回想している。

皆さんの集団農場は困難を乗り越えて出来上がりました。これは将来、幸福をもたらす組織です。ぜひ、これからも改善してってください。今日は苦しくても、明日はきっと楽しい生活を送ることができます。がんばりましょう！²⁵

シコフ村から最寄りの鉄道駅までは30キロほどの距離があった。農民が三頭立ての馬車（トロイカ）を用意して遠路を送ってくれた。これはソ連の農村で、もっとも鄭重な礼節である。馬車の荷台には村人たちが餞別にくれたリンゴや鶏、アヒルが揺れていた²⁶。

後年、蔣経国が台湾の行政院長から総統に就任してもなお、麦藁帽に作業着姿で地方への視察旅行を繰り返したのは、シコフ村における農民との触れ合いなどが行動の原点となっていたものと推察される。

²¹ 前掲「我在蘇聯的生活」44頁。

²² 同前「我在蘇聯的生活」45頁。

²³ 同前。

²⁴ 以上のシコフ村におけるエピソードは前掲「我在蘇聯的日子」78～79頁と「我在蘇聯的生活」の「石可夫農村」を参照。

²⁵ 前掲「我在蘇聯的生活」46頁。

²⁶ 以上、シコフ村における蔣経国の事跡は「我在蘇聯的生活」と「我在蘇聯的日子」の2篇の回想録に拠る。

1-4 スヴェルドロスクの駅荷役係

蔣経国がモスクワに留学して以来、中共モスクワ支部はソ連共産党とコミンテルン内部で派閥を形成し、優位な立場を維持していた。ソ共の中共に対する態度が鷹揚だったからだ。ところが1930年前後からは中ソ間の交渉事が多くなり、ソ共およびコミンテルン内部で緊張が走ることもあった。モスクワは政治の中心だったので、王明はトロツキストの過去があり、みずからに敵対的で、且つ蒋介石の子息である蔣経国を首都周辺に置いておくのは危険だと感じ、コミンテルン本部に提出した秘密書簡で「蔣経国をシベリアのヤクートかアルタイの金鉱に送ってモスクワから離しておくのが最良の策だが、まちがっても極東地域に送るべきではない」と具申した。極東地域に送ることを反対したのは、同地には中国人が多数居住していて蔣経国に便宜を与えたり、あるいは蔣経国が中国国内に逃亡する可能性があったからだろう。

これに対して王明の言動に概ね満足していたソ連側も、華僑の多くが蔣経国に同情的で、彼をモスクワに残しておいてはいつまた反王明運動を起こされるかわからないと考えたようだ、と蔣経国は回想録に記している²⁷。シコフ村から戻った蔣経国を呼び出したソ共本部は、「あなたがモスクワに残って学業を続けることを望んでいる。しかしあなたは中共モスクワ支部との関係が悪いので、自分のためにはモスクワを離れるのが上策だ。希望するところを自由に選んでください」と告げた²⁸。これに対して蔣経国は、ソ連には帰る家もないのでどこに送られてもいいと考えた。ただ故郷に帰って、両親に会いたいと思っていた。

蔣経国は1932年11月、ウラルに送られて駅の荷役労働者になる²⁹。次の職に就くまで生活費を稼ぐための暫定的な仕事である。そこでまた発病し、25日間入院する。4人の苦役仲間が看病してくれた。彼らはおそらく、蔣経国はもう死ぬだろうと考えていた。病気で駅の荷物運びに従事できないので、一銭の稼ぎも得られなかった。4人の仲間が枕元で蔣経国の好きなロシア民謡を歌ってくれた。

私は死んだ…！

だれかがきっと私を埋葬してくれよう。

しかし、だれも私のお墓がどこにあるのか知らない。

来年の春になれば高麗鶯が飛んできて、私の墓に案内してくれるだろう。

美しいさえずりを聴かせておくれ。

歌い終わったら、お前は飛んでいってしまうのか…。³⁰

この晩、酷寒のウラルの空には大風が吹き荒れ、河面に張った氷がギシギシと音を発てて鳴いた。蔣経国は奇跡的に回復し、体力がつくのを待って「遠い山と山は永遠にまみえ

²⁷ 前掲「我在蘇聯的日子」81頁。

²⁸ 同前。

²⁹ 1932年11月。前掲『蔣経国先生全集』記事年表上輯47頁。

³⁰ 蔣経国「永遠不要掛起白旗来」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）180-181頁。

ることではないが、人は再会する機会があるかもしれない。健康で…！」という言葉仲間に残して次の職場へ向かった³¹。

1-5 アルタイ金鉱

蔣経国は1933年1月、病気から回復すると新しい任地はスヴェルドロスクではなくアルタイ金鉱だと告げられた。王明の執拗な迫害である。金鉱にはモスクワから送られてきた著名な大学教授、学生、デカブリストとよばれた貴族の将校、エンジニア、富農、そして強盗犯らが苦役についていた³²。蔣経国の回想はつづく。

モスクワ大学2年生だった学生は就寝前に「1日が終わった。また、人生の終着点に一步近づいた」と語り、トンプスという名前のエンジニアは「今日もすぎていった。自由になれる日にまた近づいたのだ」と言った。2人の共通点はともに自由を渴望していたことだが、将来に対する希望がまったく異なっていた³³。

アルタイ金鉱では蔣経国に対する管理部門の評価が良好だったため、わずか9ヵ月で過酷な労働から解放された。蔣経国は回想録で、次のようにも述懐している。

私は金鉱の苦役仲間強い友情を感じるようになった。だからアルタイ金鉱を離れることになった今、この地に名残り惜しささえ感じる。地獄のような鉱山労働から解放される喜びと、仲間たちに別れを告げたくないという感情が激しく交差した。³⁴

これからどんな事態が待ち受けているのか。西シベリアでは、いろいろな苦しみを克服してきた。これ以上、どのような苦難があるというのだろう。³⁵

1-6 ウラル重機械工場

蔣経国は1933年10月、ふたたびスヴェルドロスクに戻り³⁶、ウラル重機械工場に技師として採用された。昼間は工場で働き、退勤後は夜学で技術の研鑽につとめた。政治活動から離れ、コミンテルンとの関係もほとんど無くなり、モスクワまで出向くこともまれだった。こうして一年後には副工場長に昇進し、附設の『重工業日報』の編集長も兼務するようになる³⁷。

³¹ 以上の鉄道駅における苦役のエピソードは、前掲「永遠不要掛起白旗来」180-181頁を参照。

³² 前掲「我在蘇聯的日子」82頁。

³³ 同前。

³⁴ 同前。

³⁵ 同前「我在蘇聯的日子」83頁。

³⁶ アルタイ金鉱での労働から解放されウラル重機械工場のあるスヴェルドロスクに向う前、1933年10月頃、蔣経国はシコフ村を再訪してソフィア婆さんを訪ねたが、その2ヵ月前、彼女はすでに天に召されていた。蔣経国はシコフ村で自分を真っ先に受け入れてくれたソフィア婆さんの墓前に野辺で摘んだ花を供え、ひざまづいて男泣きに泣いた（蔣経国「人生的意義到底在什麼地方」『蔣總統経国先生言論著述彙編』1（台北・黎明文化出版、1981年）394頁を参照。

³⁷ 前掲「我在蘇聯的日子」83頁。

ウラル重機械工場における蔣経国の軌跡については、生涯の伴侶となったファイナとの結婚にも言及しておくべきだろう。ファイナは1916年5月15日にシベリアで生まれている。幼児期に両親を失い、姉のアンナに育てられた。1929年、13歳でウラル重機械工場付属労働者技術学校に入学し、3年後に卒業して同工場の旋盤工に採用される³⁸。蔣経国と知り合ったのは翌年1933年のことで、2年間の恋愛を経て1935年3月に結婚する。同年12月14日には長男のアラン（孝文）が生まれ³⁹、精神的にも肉体的にも過酷だったソ連生活でやっと掴んだ幸福の日々だった。

ところが1934年6月、中共モスクワ支部の王明から電報で呼び出されてモスクワに赴くと、蔣経国がすでに帰国したと蒋介石が語ったニュースが中国の新聞に載り、蔣経国を逮捕しようとしていると告げられた。

そのころ蔣経国は、あの文豪マクシム・ゴーリキー（1868-1936）から一通の手紙を受け取っている⁴⁰。1934年6月10日のことなので、ゴーリキーが没する2年ほど前に蔣経国に宛て認められたものである。内容は詳らかでない。モスクワの王明から「母への手紙捏造事件」（後段で詳述）の発端になる電報を受け取る直前の平和な時期だった。蔣経国とゴーリキーとの出会いは1928年秋、水の都レニングラードを大きく蛇行して流れるネヴァ河畔だった⁴¹。蔣経国はトルマトコフ中央軍政学院に入学するためにやって来たこの街でモスクワの友人たち、嵐のように通り過ぎていった「江浙同郷会」事件を振り返り、そしてネヴァ河のゆったりとした流れを見ながら故郷の溪口鎮を流れる清冽な剡溪のせせらぎ、別れて3年になる生母毛福梅に思いを馳せていたのかもしれない。不注意にも前からやってきた老人に気づかないで突き飛ばしてしまった。慌てて抱き起こすと、ゴーリキーだった。それまでに蔣経国は写真や絵で何度となくこの文豪の肖像に接し、その作品『母』をも読んでもいた。これが世界に名を知られたソ連の文豪と蔣経国との出会いだった。それから、折に触れて通信をしていたのだろう。

ウラル重機械工場で蔣経国がゴーリキーからの手紙を受け取ったころ、ソ連はちょうど全国的に第2次経済5ヵ年計画⁴²のまっただなかにあった。第1次5ヵ年計画で打ち立てた社会主義経済の基礎の上に「社会主義社会を創造し、搾取階級を完全に消滅させ、経済・思想の両面で資本主義の残滓を取り除く」⁴³ことが計画の目標だった。そのためにウラル重機械工場は三交代制で稼動し、そうした雰囲気の中で蔣経国もファイナもソ連国家と社会主義建設のために身を粉にして働いていた⁴⁴。蔣経国は主に中共モスクワ支部がソ連当局を動かしたことに起因する政治的な迫害を幾度も受けたが、それまでソ連のどこに追いやられても仕事にありつくことができた。これはシステムとして外国人を拒まなかったソ連国家の国際主義の賜物であろう。

蔣経国はスヴェルドロスクのウラル重機械工場に配属された翌年の1934年8月から11月まで毎日、内政部が放った2人組の密偵に監視される日々がつづく。スターリンが発動

³⁸ 周玉蔻『蔣方良與蔣経国』（台北・麥田出版、1993年）364頁参照。

³⁹ 前掲「我在蘇聯的日子」86頁。

⁴⁰ 前掲「我在蘇聯的生活」54頁。

⁴¹ 張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）37頁参照。

⁴² 第2次経済5ヵ年計画（1933年～1937年）。

⁴³ 前掲「我在蘇聯的生活」54頁。

⁴⁴ 前掲「我在蘇聯的生活」55頁。

した大粛清の渦中で、孫逸仙大学時代にトロツキー派に与したことの蔣経国にふたたび懐疑の目が向けられたのだ。

第2節 毛福梅への手紙

蔣経国がアルタイ金鉱で苦役に従事し、スヴェルドロスクのウラル重機械工場で副工場長などをしていた時期、中国国内では上海クーデター後に地下にもぐって暗流し、各地で蜂起やソヴィエト地区の樹立を進めていた中国共産党に対し、蒋介石が江西省で前後5回にわたる大規模な圍剿（掃共）作戦を展開していた。掃共作戦は一進一退を繰り返しながらも着実に共産軍を江西省の拠点（中華ソヴィエト地区）から駆逐しつつあったが、まず「安内」を掲げて「攘外」を後回しにした結果、日本軍の中国侵略が急速に進んだ。そのことは共産党を中心にして中国国内に抗日気運を盛り上げ、これが蔣経国の帰国を誘導した西安事変を引き起こす原因になっていく。

スヴェルドロスクのウラル重機械工場で蔣経国に対する内政部の監視が一段落すると、1935年1月、今度はモスクワのコミンテルン東方部から呼び出され、そこで王明から「中国ではあなたがソ連で逮捕された、という噂が流れている。仕事も順調で、完全に自由な生活をしていると君の母親に手紙を書いてくれ」と強要された。王明はさらに「あなたがすでに中国語を忘れてしまったのではないかと思い、下書きを用意しておいた」というのだ。内容を見ると、それは蒋介石を徹底的に罵倒する内容であり、蔣経国の意思とはまったく違うことが書かれていた。手紙の内容について王明と数日間議論したが、平行線をたどるばかりだった。そんなとき王明は蔣経国の友人を引っ張り出し「同意すれば将来帰国できるかもしれない。さもなければ生命の危険にさらされるだろう。彼らはいつでも君にどんな罪名でも捏造できるのだから」と語らせ、4日目に蔣経国は仕方なく手紙の内容に同意したと述懐している⁴⁵。その翌日、蔣経国は捏造された手紙を内政部長に見せて王明の横暴を訴えると、内政部長はその非を認め、王明に手紙を廃棄するよう命じた。蔣経国はさっそく自分の本心を手紙にしたため捏造された手紙の返却を求めたが、王明はもう捨ててしまったと嘘をつき、実際にはすでに中国に郵送したあとだった。それを知った蔣経国は上海クーデターの際に出した「反蔣声明」につづき、また父親を非難する手紙が発送されてしまったことにショックを受け、体調をくずして13日間入院した。病気が回復して気を取り直した蔣経国は、王明が捏造して投函した書簡を打ち消すために新しい手紙を書いて陳甫玉という名前の華僑に頼んで蒋介石に届けてもらうよう手配したが、陳は中ソ国共付近のチタで逮捕され手紙は中国に届かなかった⁴⁶。以下、王明が捏造したとされる手紙の内容を見てみよう。手紙は郵送されると同時にレニングラードで『プラウダ』紙に全文が、3ヵ月後の『ニューヨーク・タイムズ』紙には要旨が掲載され⁴⁷、それは中国にも伝えられた。手紙は概ね以下の10項目の内容からなっている。

⁴⁵ 前掲「我在蘇聯的日子」84頁。

⁴⁶ 同前「我在蘇聯的日子」86頁。

⁴⁷ 『プラウダ』は1935年1月、『ニューヨーク・タイムズ』紙は同年4月に掲載した（張日新他著『青年蔣経国』中国・花山文芸出版社、2002年、73頁）。

①中国を離れて10年、私はすでに被抑圧者を解放する知恵を備えた幸福者になったので、あの蒋介石の子供には戻らない。

②共産党員は匪徒、野人ではなく、人民の幸福のために闘争している人々のことだ。

③蒋介石は何万、何十万という同胞を屠殺し、前後3回叛変し、中国人民の利益を売り渡した人民の仇敵である。

④たれがあなたを殴り、追い出し、祖母を打って死に至らしめたのか。それは蒋介石だ。

⑤ 人民の財産を盗み取り、親ソ姿勢から一転帝国主義の走狗に豹変し、帝国主義から借

款して中国の領土を売り渡したのは蒋介石である。

⑥ この手紙を見た人々が中国に起こった一切の事変、罪惡、脅威と混乱の根源がどこにあるのか、素乱と脅威の戦争にたれが責任を負うべきか見定めることを希望する。

⑦ 蒋介石は帝国主義の援助の下に前後6回も中国ソヴィエトを「圍剿」して撲滅しようとし、紅軍を消滅しようとしているが、人民の武装勢力である紅軍は必ず勝利する。

⑧ ソ連はすでに富強な社会主義国家となり、自分も住宅を有して高給を食んでいる。

⑨ ソ連は世界で最も礼節を重んじる国であって、自分はソ連に住んでいることを誇りに思う。中国も独立を勝ちとり、全中国にソヴィエト政權を樹立すべきだ。

⑩ あなたが出国できるのなら、どこの国でも会う準備がある。

1935年1月23日⁴⁸。

一読してわかるように、手紙の内容は蒋介石への罵倒と非難、共産党擁護、ソ連国家の優越性の3点に収斂する。当時の時代背景を敷衍すると、この手紙が出された半年後の1935年7月25日～8月20日にはコミンテルン第7回大会がモスクワの労働組合会館で開催されている。大会には中国共産党から王明、康新、張国燾、康栄、周和生、趙霍新らが出席し、それぞれが演説した⁴⁹。大会は中国問題について「中国共産党は民族解放闘争の戦線を拡大し、日本その他の帝国主義者の強盜的侵攻を撃退する覚悟を持ったすべての民族勢力を民族解放闘争に引き入れるために全力をかたむけなければならない」⁵⁰と決議した。このコミンテルンの決議に呼応するように大会開催期間中の8月1日、中国共産党中央委員会と中華ソヴィエト政府が国共内戦を停戦して国防政府および抗日統一軍を設けるよう呼びかけた電報『抗日救国に関し全国同胞に告ぐ』（八・一宣言）⁵¹をすべての政党と軍に発信している。日本の中国侵略、当時の直近の事件でいえば日本が東北侵略に引き続いて1935年5月からそれぞれ天津と張家口におこった排日運動を口実に梅津・何応欽協定、土肥原・秦徳純協定を強要した⁵²ことなどに反発して、南京政府の降伏政策に批判が集中していた。つまりこの時期、中国の複数地域で広範な抗日気運が高まっていたのである。

⁴⁸ 蔣経国「蔣経国の母への書翰」波多野乾一編『資料集成 中国共産党史』第五卷（時事通信社、1961年）149～157頁を参照。

⁴⁹ 波多野乾一編『資料集成 中国共産党史』第五卷（時事通信社、1961年）46～93頁。

⁵⁰ ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史』下巻（大月書店、1973年）90頁。

⁵¹ 前掲波多野乾一『資料集成 中国共産党史』第五卷713～721頁。

⁵² 野沢豊「中国の抗日民族統一戦線」荒松雄他編『岩波講座 世界歴史』28（岩波書店、1971年）314頁。

こうした状況のなかで、王明は蔣経国が10年ぶりに母親宛てに出したドラマチックな書簡を演出し、その中に蒋介石の欺瞞性を余すところなく盛り込み、ソ連国家の優越性を説き、それに与する中国共産党の正当性を中国の愛国人士に訴え、抗日救国の気運を強力に醸し出そうとしたものにほかならない。聞こえの良い言葉で蒋介石を懐柔するのではなく、罵詈雑言を放って罵倒し、中国の国内世論を「反蔣擁共」に誘導しようと試みたのである。蒋介石は8年前の上海クーデター発動後に蔣経国から挑戦状を突きつけられたのにつづき、2度目の息子の「反乱」に眉をひそめただろうが、掃共の最終段階に向けてせっせと準備を進めていた。しかし、西北剿匪副総司令を拝命した張学良は日本に侵略された東北地方の奪回に動こうともしない蒋介石に業をにやし、西北軍の楊虎城将軍とともに中共の抗日救国の呼びかけに呼応し、それが西安事変へとつながっていく。

蒋介石の南京国民政府は上海クーデター発動後の1927年末、ソ連との外交関係を断絶した。しかし1931年に始まった日本の東北侵略（満州事変＝中国側の呼称9・18事変）を契機に中ソ両国は関係修復に動き出す。1932年6月には秘密協議を経て外交交渉が復活し、半年後の12月には外交関係を復活した。ソ連は対日戦略上の必要から国民政府を必要としたのである。しかし上海クーデターの記憶はそれほど簡単には消えず、スターリンは相変わらず蒋介石を「南京のペテン師」⁵³と蔑み、両国関係はぎくしゃくしていた。

蔣経国は同年9月、ソ連共産党ウラル党委員会によって、ウラル重機械工場副工場長と『重工業日報』編集長の職を解かれ、ソ連共産党候補党員の資格も剥奪された⁵⁴。その理由について蔣経国は次のように述べている。

ウラル党委員会は、私が密かに父母と手紙で通信し、その証拠を発見したというのだ。また、重工業日報社で故意に当局に不満を持つ多くの政敵を採用したというのである。⁵⁵

回想のなかにある「その証拠」というのは、蔣経国が陳甫玉という華僑に託した蒋介石への手紙のことだろう。この時期、ソ連の共産主義運動は1920年代ほどに熱狂的でなくなってきた。こうした状況下で、蔣経国は職業や候補党員の資格も剥奪され、ソ連という国と共産党体制に対する信頼が揺らいでいたことは否めない⁵⁶。このころは蔣経国の12年間にわたる留ソ期間中において、まさに政治・思想面における失意の頂点だったといえよう。

そうしたなか、蒋介石は戦略上の必要から緊密な中ソ協力を復活できないかと模索し始めていた。1934年秋、ソ連指導部の態度を探るために密使として北京大学の教授で歴史学者の蔣廷黻（後にソ連駐在大使）をモスクワに派遣した。蔣廷黻はこのとき蒋介石の意を汲み、ソ連当局に蔣経国の搜索願いも出している。10月16日、蔣廷黻に会ったソ連外務

⁵³ 栗原浩英「コミンテルンと東方・植民地」樺山紘一他編『岩波講座 世界歴史』24（岩波書店、1998年）155頁。

⁵⁴ 同前「我在蘇聯的日子」87頁。

⁵⁵ 同前。

⁵⁶ 李敖「蘇聯時期的蔣経国——訪蔣伝作者江南」『蔣経国研究』（李敖出版社、1987年）123頁。

人民委員会のストモニャコフ次官は、蒋介石が中国政府の首脳であっても中ソ関係の改善を妨げないか、という蔣廷黻の質問に次のように答えている。

今日の中国、特に中国において指導的役割を果たしている蒋介石とわが国との政治的関係を決定するに当たり、我々は過去の出来事や感情から出発するものではなく、両国の共通する利益から出発しており、両国関係の発展と強化を心から望むものです。我々は友好的な国々の指導者に対するのと同じ尊敬の念を持って蒋介石と接したい。いかなる個人的な動機、いかなる偏見も、わが国の立場に影響を与えるものではありません⁵⁷。

また同時期にコミンテルンは、「蒋介石を日本の侵略者と同じようにとらえるのは間違っている（中略）なぜなら中国人民の主要な敵は日本帝国主義であり、現段階においてすべては日本帝国主義との闘争に従属しなければならない」⁵⁸と見ていた。以上からわかるように、ソ連当局は中国共産党とは反対にむしろ蒋介石を抱きこんで味方につける方針だったのである。

第3節 西安事変と蔣経国の帰国

1930年代以降の日中関係に幾多の影響をもたらした西安事変は、蔣経国にとっても大事件であった。事変の渦中で蔣経国はそのことを知るよしもなかったが、12年間の長きにわたって留め置かれたソ連から帰国できた直接のきっかけをつくったのが西安事変だったからである。

蔣経国のもとに西安事変のニュースが伝わったのは、1936年の暮れだった。事変で父親が中共に捕らえられた⁵⁹というのだ。蔣経国はすぐモスクワに出向き、郵政局に勤める友人のゲシルスタンに中国の両親に宛てた手紙の郵送を密かに頼んでみたり、コミンテルン本部やスターリンにも手紙をしたためて帰国を願い出たが、帰国後に中共と敵対して左翼反対派の側に立つのではないかという疑いをかけられ、願いは叶えられなかった⁶⁰。ソ連当局はスピナライと名乗るドイツの共産主義者を蔣経国のもとに送り、いったんウラルに帰るよう説得した。蔣経国の帰国願いが聞き入れられなかった背景には、当局が蔣経国を「安心できない分子」とみなし、「彼はりんごの樹に熟す果実と同じで、やはり蒋介石の息子であることに変わりない。蔣経国が蒋介石の子息であることを忘れるべきでない」と警戒していたからだ、と蔣経国は回想している⁶¹。

みずからは職業、党籍を剥奪され、西安事変で拘束された蒋介石の安否も掴めないまま

⁵⁷ ボリス&ドミートリー・スラヴィンスキー著、加藤幸廣訳『中国革命とソ連』（共同通信社、2002年）280頁。

⁵⁸ 同前『中国革命とソ連』347頁。

⁵⁹ 前掲「我在蘇聯的日子」86頁。

⁶⁰ 同上「我在蘇聯的日子」87頁。

⁶¹ 同前。

数ヵ月を過ごした蔣経国は翌年3月初旬、再度、前便よりも強い調子の手紙をスターリンに出した⁶²。

帰国への道のりはあっけなかった。強い語気をこめて書いたスターリンへの手紙の返事が1週間後に届いたのである。ソ連外務人民委員会（外務省に相当）から、モスクワへ来いという。さっそく出向いてみると、会見に出てきたストモニャコフ次官が「中国政府からあなたを帰国させるよう要請がありました。ソ連政府は、現在、南京政府とその領袖蒋介石総司令がわが国に友好的であると判断します。よって私たちは友人の要請を受け入れ、あなたを中国に帰国させたいと考えます。いかがでしょうか」⁶³といった。蔣経国が即座に同意すると、ストモニャコフ次官は念を入れ、蒋介石に蔣経国の帰国を報せる書簡を書いてくれた。

いったん帰国が決まると、ソ連側の蔣経国に対する態度は掌を返したように好転し、スターリンの密友リヒバトフがわざわざホテルまで訪ねてきたかと思えば、中国駐在ソ連政治代表のD・V・ボゴモロフからも会見の約束が入り、王明さえも懇懇な態度で蔣経国を訪ねてきた。軍隊からは親友のコドフやゴタがお別れにやってきて「日本はソ中両国の共同の敵であり、中国が日本と一戦を交えるのは避けがたいことだ」⁶⁴と当時のソ連における対日観を語っている。外務人民委員会のストモニャコフ次官はあらためて蔣経国と会見し「中ソ関係は日増しに改善されつつある。私たちはいま、南京政府と蔣総司令を深く理解している。中国は最近4～5年来長足の進歩を遂げてきた。将来、地理的ばかりでなく、政治面でも中国と密接な関係を持ちたい」⁶⁵と語った。コミンテルン本部のゲオルギ・ディミトロフ書記長は蔣経国らがモスクワを離れる日に自宅まで招いて「ソヴィエト化で中国を救うという方法は間違いだった」と述べ「共産党は誠意を持って国民党と連合するだろう。蔣総司令が卓越した軍事家であり極めて出色の政治家であることを私たちは知っている。彼は中国人民の偉大な領袖である」と述べ、その意を蒋介石に伝えてくれるよう頼んだ⁶⁶。こうしたソ連当局の激変に対し、蔣経国は「1937年、日本は中国の存続に危機を及ぼし、国共はしぶしぶ再度の合作に動いた。こうした状況の下で共産党から天敵あつかいされてきた父は全国民を団結、抗日に導く領袖と見なされるようになった」と述べ、「そうした状況のなかで帰国するのは、自分のソ連滞在と同じように深い政治的な意義があることだった」と回想している⁶⁷。蔣経国がここでいう「政治的な意義」とは蔣経国自身にとっての意義ではなく、ソ連にとって「意義が深い」といっているのは説明するまでもない。

蔣廷黻は、蔣経国が初めて大使館に訪ねてきたとき「父は私の帰国を望むと思いますか」とたずね、「パスポートも金もなく、ロシア娘と結婚している」と自分に告げた、と回想している。この蔣経国の問いに蔣廷黻は「そのようなことを委員長は意に介さないでしょう」

⁶² 同上「我在蘇聯的日子」88頁。

⁶³ 同前。

⁶⁴ 同前88頁。

⁶⁵ 同上「我在蘇聯的日子」89頁。

⁶⁶ 同前。

⁶⁷ 同前。当時、ソ連は満州（中国東北地方）で日本軍と対峙しており、そうした情勢下で蔣経国を帰国させて蒋介石の歓心を買ひ、抗日戦に積極的にさせることはソ連にとって有利なことだった。

と答えている⁶⁸。蔣経国が心配したのはパスポートや旅費、配偶者となったファイナのことではなく、上海クーデターの直後に公開發表した父への挑戦状や、やはり『プラウダ』、『ニューヨーク・タイムズ』紙で世界に配信された毛福梅への手紙の中で徹底的に罵倒された蒋介石が自分の帰国を望み、許してくれるだろうかということだった。

時代は数年前後するが、蒋介石の圍剿（掃共）作戦の浸透で江西省の瑞金を放棄せざるを得なくなった中共軍の紅軍が「長征」と自称する大西遷を余儀なくされたのは 1934 年 10 月 21 日のことである。瑞金から福建、広東、広西、貴州、雲南、四川などの各省を経て陝西省北部の延安に達する約 1 万 2500 キロの潰走で、中共軍は国民党軍の追尾を受け、人跡未踏の険しい地域を爬行するなかで欠乏、疾病により膨大な兵力が失われた。中央紅軍は 1935 年 10 月、やっと陝西省保安県にたどりつき新しい根拠地延安の再構築を進めている。

紅軍の敗走を危機一髪のところ支えたのは、1930 年代中盤から中国全土に広がった抗日気運であろう。日本は 1935 年末、華北の占領地に傀儡の殷汝耕を首班とする冀東自治政府を設け、徳王（デムチョク・ドンロブ）を長とする内蒙古自治政府を設立し、さらに 1936 年 11 月初めには冀察政務委員会が作られ、その委員会に一連の有名な親日派の政治家と軍人が加わった。圍剿を当面の軍事目標にしていた南京国民政府は日本のこれらの行動をすべて容認した⁶⁹。これに先立つ 1935 年 8 月 1 日、中共の抗日八・一宣言が中国全土に発信されたことは前節で触れたとおりだ。こうした南京政府の日本に対する降伏政策の中で、一気に抗日気運が高まり、蒋介石に対する不満が醸成されていったのである。綏遠事件がおきたのもこのころだ。蒋介石の指令に背いた溥作儀将軍が 11 月 24 日、満州・蒙古軍を大敗させ、徳王の重要拠点である巴林を奪取し、中国軍が日本の侵略者に対抗できることを示して国内に愛国主義的な高揚を呼び覚ましたのである⁷⁰。

こうした情勢のもとで、中国共産党は蒋介石から西北掃匪副総司令に任命された張学良の東北軍（西安に駐留）に入り込み、張学良を抱き込むための宣伝活動を展開した。中共は満州奪回に動かない蒋介石への不満を煽り、張学良に共産党の抗日スローガンを理解させ、紅軍への軍事行動を事実上停止させることに成功した。そして、中共中央委員の周恩来と張学良の数度にわたる会談が実現するのである。最初の周張会談は 1936 年 4 月 9 日、延安のカトリック教会にあった廃屋で行われた⁷¹。このとき張学良は「倒蔣抗日」に固執する周恩来に「擁蔣抗日」を提案し、それでは折り合いがつかず、最終的に「聯蔣抗日」で話がまとまった⁷²。当時、コミンテルンは、中国共産党の急進的な「倒蔣」方針に危機感を抱き、現状では蒋介石を含むすべての勢力が日帝との闘争に従属しなければならない、と判断していた⁷³。この意味で「聯蔣抗日」はコミンテルンの意にも沿うものであった。ここに第 2 次国共合作の土台が築かれたのである。

周恩来は西安に駐留するもう 1 人の将軍、西北軍の楊虎城に対する工作も忘れなかった。

⁶⁸ 新華社国際情報資料中心『台港澳和海外中文報刊資料文化娛樂類』1987 年第 20 期、前掲張日新他著『青年蔣経国』82 頁。

⁶⁹ 前掲『中国革命とソ連』344 頁。

⁷⁰ 同前『中国革命とソ連』344～345 頁。

⁷¹ ハン・スーイン著、川口洋ほか訳『長兄——周恩来の生涯』（新潮社、1996 年）134 頁参照。

⁷² サンケイ新聞社編『蒋介石秘録 11』（サンケイ出版、1976 年）168～169 頁参照。

⁷³ 前掲ボリス&ドミートリー・スラヴィンスキー『中国革命とソ連』347 頁。

ベルリンに留学中の王炳南を1936年2月、アンナ夫人とともに帰国させ、西安に送って楊の秘書につけ親共に誘導した。王炳南は楊虎城の親戚だった。楊虎城も抗日戦争をためらう蒋介石の態度を見て、張学良よりもさらに不満を抱き「こんなことではご先祖さまに顔向けができない」と慨嘆した、とハン・スーインは記している⁷⁴。

周恩来と張学良、楊虎城との接触は蒋介石の耳にも届いた。蒋介石は東北軍と西北軍が共産党軍と馴れ合いになることは目下の情勢では極めて危険なことだと考え、それを阻むため10月24日に西安へ督戦にむかう。蒋介石は張学良と楊虎城の不穏な動きを察知した時点で「張と楊が中共にだまされるか利用されるかして、あえて国家に致命的な打撃を与えようとしたのだ」⁷⁵と考え、「日本は平等と相互利益という条件で協力するように求めているが、こうした要求より共産党の脅威の方がわが国にとってはより現実的であると張学良や楊虎城を説得できないものだろうか」⁷⁶と思案していた。

古来、中国では忠臣が皇帝を諫める場合、まず「言葉」で諫め、それが聞き入れられなければ「涙」で、それも効を奏さない場合に限って「力」で諫めることが許容されてきた。蒋介石は12月4日、その年2度目の西安訪問で張学良らと話し合ったが、圍剿の続行と抗日という相対立する矛盾を埋めることができなかった。蒋介石は12日早朝、西安郊外の臨潼にある華清池の工営の外で張学良の東北軍に身柄を拘束された。言葉も涙も効果がないと知った張学良は、「力」を行使したのである。

張学良が蒋介石を拘束したという報せを受けた延安の朱徳は「まず蔣を殺してから後のことを話そう」と毛沢東に語り、毛の「殺蔣抗日」を指示したと張国燾は回想している⁷⁷。しかし前述したようにコミンテルンは抗日に向けて蒋介石の存在意義を認めていたので、中共中央はコミンテルンの強力な圧力を受け、毛沢東の意志に反して「殺蔣」を放棄した。陳立夫はその回想録で、潘漢年を通じてコミンテルンに毛沢東らの「殺蔣」方針を阻止するよう働きかけた電報を打った⁷⁸、と語っている。

蒋介石は監禁されて3日目の12月15日の日記で宋美齡宛にしたための遺書について触れ「家事に関しては予の言い遺さねばならぬのはただ御身に予の2人の遺子経国と緯国とを御身自身の子供として観て貰いたいということだけである」⁷⁹と書いたことを明らかにしている。これとあたかも呼応するかのように、蒋介石と会談した周恩来は「八カ条の提案⁸⁰への署名などはおくびにも出さず、よもやま話で雰囲気や和んだころあいには蔣になにか指示はないかと尋ね、蔣経国がソ連で「優遇」されていることに触れ、蔣が子を思う親心を覗かせると、周はすかさず父子の再会に力を尽くすことに同意した」⁸¹と張国燾はその回想録で証言している。周恩来は蒋介石に「一致抗日」を認めさせる駆け引きの材料の

⁷⁴ 前掲ハン・スーイン『長兄——周恩来の生涯』135頁。

⁷⁵ 蒋介石著、寺島正訳『中国の中のソ連』（時事通信社、1962年）70～71頁。

⁷⁶ 『南京日報』1936年10月28日、前掲『中国革命とソ連』348頁。

⁷⁷ 張国燾『我的回憶』（明報月刊出版社、1974年）1240頁。

⁷⁸ 陳立夫『成敗之鑑——陳立夫回憶錄』（正中書局、1994年）203頁。

⁷⁹ 蒋介石「西安半月記」蒋介石・宋美齡著、高山洋吉訳『新東亜の初幕』（育生社、1939年）142～143頁。

⁸⁰ ①将来、他の党派やグループの成員も政府に参加して救国に寄与し得るように南京政府を改組する、②一切の内戦の停止、③上海に監禁されている政治的指導者の即時釈放、④政治犯の大赦、⑤集会の自由の保証、⑥民衆愛国運動の自由、⑦総理（孫逸仙）の遺囑の忠実なる遂行、⑧救国会議の即時招集、の8項目を指す。前掲蒋介石「西安半月記」133-134頁。

⁸¹ 前掲『我的回憶』1245頁。

ひとつとして、蔣経国をソ連から帰国させることを提案した。中華民国との外交関係を修復するための切り札としてスターリンが温存、抑留していた蔣経国の帰国に陽が当たってきたのだ。

病氣療養で上海から臨潼の温泉を訪れていたアグネス・スメドレーは蒋介石の到着前、逗留先の寺院を追い出されて西安市内に宿を移し、そこで事変前後の緊迫した雰囲気を経験した。

何百人という藍衣社⁸²が市内のあちこちに秘密本部を設けたことを私は知った⁸³。

蒋介石はほんの 20 人余りの手兵だけを連れて西安を訪れたことになっているが、実際には国民党の特務組織である藍衣社が数百人体制で臨潼の軍事会議を支えていたのである。スメドレーの記述はさらにつづく。

ひとりの藍衣社員が名も名のらず、証明書も見せずに私のところにやってきて、旅券と居留査証を求め（中略）怒り狂った藍衣社員はホテルにとってかえすと、支配人にむかって、もしおまえがあの子を放り出さなければ、このおれがほうり出して、きっちり話をつけてやると言った⁸⁴。

藍衣社のこのような厳しい警戒にもかかわらず西安事変が起こった背景には、中国共産党と張学良、楊虎城らの周到な計画性がうかがえる。事変を発動した張学良は 12 月 25 日、中共と停戦して渋々抗日に同意した蒋介石を解放し、みずからも南京に同行して最高司令官を拘束した罪で軍事裁判にかけられ、特赦を受けたものの、その後ふたたび政治の表舞台に登場することはなかった。西安事変を現場で目撃したスメドレーの以下の記述がこの事件の性格を、そして事変後の中国の状況を如実に物語っている。

西安事件は、地方的には敗北に終わったかもしれないが、それにもかかわらず、全国的には勝利であった。ごくゆっくりと、そして陣痛の苦しみを苦しみながら、統一中国が生まれつつあった⁸⁵。

蔣経国が 12 年間のソ連生活に終止符を打って帰国できたのは、スターリンに宛て強い語気の手紙を出したからでは決してなかった。北京大学の教授で経済学者、その後の中ソ大使をつとめた蔣廷黻がソ連当局に搜索願いを出したからでもない。蒋介石を日本の侵略者と同列にとらえるのは間違いだと考え、中国人民の主要な敵は日本帝国主義であり、すべ

⁸² 藍衣社は国民政府軍事委員会調査統計局（軍統）で、蒋介石がつくりあげた特務機関。中華復興社とも称する。藍衣社設立の発想の発端は既出の『陳潔如回憶録』173 頁に、特務機関の概要については沈醉ほか著『戴笠其人』（中国・中国文史出版社、2001 年）、沈醉『軍統内幕』（中国・中国文史出版社、2001 年）、陳楚君ほか著『特工秘聞』（中国・中国文史出版社、2001 年）、沈美娟『戴笠新伝』（台北・国際村文庫、1996 年）に詳しい。

⁸³ アグネス・スメドレー著、高杉一郎訳『中国の歌ごえ』（みすず書房、1957 年）124 頁。

⁸⁴ 前掲『中国の歌ごえ』124～125 頁。

⁸⁵ 同前 135 頁。

てが日帝との闘争に従属しなければならないと判断したコミンテルンの意向に中国共産党が服従し、その従属させるべき最も大きな対象を抗日にむかわせるために周恩来が考え出した筋書きにスターリンが同意した結果にほかならない。こうして、ウラルの蔣経国のもとにモスクワへの召還通知が届き、蔣経国の12年ぶりの帰国が実現するのである。

小結

本章の検討を終え、以下の3点を明らかにすることができた。

第1点はトルマトコフ中央軍政学院を卒業した蔣経国に対する中共モスクワ支部の監視が続いて帰国を阻まれ、王明のコミンテルンやソ連当局に対する働きかけで就職や昇進が思うように叶わず、その後の6年間にレーニン大学の中国人留学生地方視察訪問団の副指導員、モスクワ郊外のティナマ電器廠、おなじくモスクワ郊外のシコフ村集団農場、スヴェルドロスク（ウラル地方）の駅荷役係、アルタイ金鉱の坑夫、そしてふたたびスヴェルドロスクのウラル重機械工場と苛酷な労働条件の職場を流転し、ソ連における社会生活や政治・思想面で人民の厚情や漂流、蹉跎を味わったこと。同時にそのことが帰国後、江西省贛南の社会改造事業や台湾遷占後に従事した軍隊政工部門、秘密警察、中国青年反共救国団、国防部長、そして行政院長や総統の仕事にまで活かされたと思われることである。

第2点は、蔣経国が毛福梅に出した手紙は王明の捏造で、本格的な対日戦に乗り出そうとしない蒋介石を共産党とともに抗日に誘導するために書かれたものだったこと。

第3点は、蔣経国が12年ぶりに帰国できたのは蔣経国自身がコミンテルンやスターリンに働きかけたからではなく、西安事変で抗日に重い腰を上げた蒋介石に周恩来やスターリンが好感して実現したということである。

蒋介石は蔣経国の帰国後「共産主義に染まってしまった息子」に「しばらく故郷の溪口鎮で蟄居し、農村の状況でも研究している」と命じ、曾文正公の家書や王陽明の伝統中国を持ち出し、蔣経国がソ連で身につけた共産主義思想の払拭につとめた。

次章では、帰国してから民国の政治舞台にデビューするまでの約半年間における蔣経国の思想状況を、蒋介石が蔣経国に書き送った書簡を使って検討する。

第Ⅱ部 ソ連経験の実践——第二次国共合作下の蔣経国

第Ⅱ部の各章では、蔣経国が12年ぶりにソ連から帰国した1937年4月より初任地の江西省贛南(現在の贛州市)で初期派閥の形成を完了してソ連的な色彩の濃い政策を実施し、それが評価されて重慶の臨時国民政府に吸い上げられて行く(1943年末)までの約6年間を検討する。この間、日本軍の中国侵攻が進み、西安事変で抗日を迫られた蒋介石は反共政策を止め、まず日本軍を中国から撃退するための戦列を整え始めた。

盧溝橋事件(1937年7月)で宣戦布告のない戦端が開かれた日中間は、翌月の8月には第二次上海事変が勃発し、これと軌を一にして華北でも本格的な戦闘が始まった。西安事変を経て蒋介石が抗日に方針転換したことで、1927年に崩壊した国民党と共産党との関係が改善されて第二次国共合作(1937年9月)が成り、同時に中ソ関係も復活する。蒋介石は1930年代の初頭から蔣経国の弟である蔣偉国をドイツに軍事留学させる(人質の提供)などして同国との対中借款条約の締結を有利に導き、それを使ってドイツ製の軍需品と兵器プラントを輸入し、対日戦に備えている。

日本国内では太原会戦(1937年11月)や、徐州会戦(同12月～翌年6月)、台兒莊戦役(1938年3月～4月)などを転戦する軍隊への補給を満たす目的で、経済の戦時体制化を実現するために国家総動員法が発令(1938年5月)された。その後日本軍は武漢三鎮¹(1938年10月)を占領し、南昌会戦などを発動して内陸の西南方面に戦列を拡大していく。中華民国はこうした日本軍の攻撃から政府機能を保全するために首都を武漢から重慶に移し、同時に揚子江以北の大学など教育機関は戦火の少ない南方諸都市に聯合大学などを設立して学生を疎開させた。蔣経国が贛南でみずからの初期派閥をつくった際には、北方から避難してきた学生出身の若手幹部が多数参加した。

一方、ソ連ではスターリンが権力闘争に勝ち抜くために進め、蔣経国も在ソ期間中大いにとぼっちりを受けた大粛清が1930年代後半には頂点を迎え、アルマ・アタ、イスタンブルで追放と亡命の生活を転々としたスターリンの最大の政敵レオン・トロツキーが最後の安住の地メキシコで暗殺(1940年7月)され、国際共産主義運動は実質的に崩壊してコミンテルンもその存在意義を失っていく。

日中関係の悪化が国際関係を不安定化させていくと、大国は二重外交を展開することで自国の安全保障を担保することに努めた。たとえばドイツは前述した対中借款条約を結ぶ一方で日本との間に日独防共協定を締結(1936年6月)し、翌年5月にはさらに日独情報交換付属協定を付加して極東外交に二股をかけている。こうしたなか中国はソ連との軍事協定に踏み切り、中ソ軍事航空協定が調印される。欧州やソ連の情勢変化にともない、東アジアの局地戦であった日中戦争は急速に国際化していくのである²。

¹ 武漢三鎮は、武漢を構成した武昌、漢口、漢陽3市の総称である。

² 加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007年)227頁。

第4章 蔣経国の民国二十六年——対ソ感情の動揺

はじめに

蔣経国はその少青年期に留学など12年間のソ連滞在経験があり、そこで共産主義と密接に係わった。ソ連から帰国した前後の時期において、蔣経国には共産主義を堅持するのか、それとも捨てるのかをめぐって感情の動揺が認められる。それは、具体的にどのように現象したのか。

蔣経国がソ連から12年ぶりに帰国できたのは、蒋介石が西安事変に遭遇して掃共から抗日に転じたことにソ連当局が好感した1937（民国26）年4月のことだった。西安事変に大きく命運を左右された人物として、まず張学良、蒋介石の2人を挙げることができる。事変の首謀者と、事変で「一致抗日」を迫られた民国の領袖である。もう一人、西安事変をめぐる中ソ両国の力関係の中で僥倖を得た人物として蔣経国の名前を記しておくべきだろう。張学良とその盟友楊虎城らが発動した西安事変は「安内攘外」に固執して掃共を優先した蒋介石を共産党との「一致抗日」に誘導して国共関係を改善し、1930年代後半以降の中ソ関係、日中関係に少なからぬ影響をあたえた。それは同時に、蔣経国にとってはモスクワ留学以来12年間にわたりソ連に留め置かれたあげくの帰国実現という大事件でもあった。掃共から抗日に転じた蒋介石を評価したスターリンが、西安事変で蒋介石と交渉して事変の画策に深く関与した周恩来の依頼を受け、ソ連国内で12年間も塩漬けにした蔣経国の帰国を許したからである。

蔣経国は帰国を境にして、それまでみずからの思想的な拠り所であった共産主義と決別し「プロレタリア革命の理想を天空の彼方に蹴り跳ばし」¹て、ふたたび中国の伝統思想に回帰したとされる。事実、蔣経国は帰国後に執筆した2篇の回想録のうちの1篇で共産主義への呪詛ともとれる激しい言葉をソ連共産党とソ連国家に投げかけている²。しかしもう1篇の回想録で蔣経国は、同じソ連の党と国家に対する愛惜の感情をあふれさせているのだ³。この矛盾する心情を2編の回想録として並立させた真意はいったいどこにあったのだろうか。これら2篇の回想録を往還する呪詛と愛惜にこそ、当時の蔣経国の思想的な動揺を解明する鍵が隠されているのである。

本章は、蔣経国が12年ぶりに帰国を果たすまでの軌跡をたどり、さらに帰国後の3ヵ月間にソ連で育んだ共産主義思想を蒋介石に払拭され、国民党の枠組みに合う人材に再教育されていく過程について蒋介石書簡などを使って考察する。また、蔣経国が帰国後に著した2篇の回想録を検討し、帰国前後における蔣経国の思想状況を明らかにしたい。

¹ 江南『蔣経国伝』（李敖出版社、1988年）81頁。

² 蔣経国「我在蘇聯的日子」蔣経国先生全集編集委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（台湾行政院新聞局、1992年）

³ 蔣経国「我在蘇聯的生活」蔣経国先生全集編集委員会編『蔣経国先生全集』第一冊（台湾行政院新聞局、1992年）

第1節 帰国の実現

モスクワ駐在中国大使の蔣廷黻⁴は蔣経国の帰国が決まると大使館でお別れの宴を催した。そのときの模様を大使秘書の李能梗は次のように記録している。

7時半、招待された客は盛装して大使官邸に集まり、それを大使が満面に笑みをうかべて招き入れた。皆が席に就いても大使はパーティーの目的を明かさない（中略）そのとき表に車両の到着する音が聞こえ、大使は夫人をともなって車の主人を迎えに出た⁵。

蔣経国がソ連国家の桎梏から解放され、治外法権のある大使館に入り、祖国の懷に回帰した瞬間である。

次に、蔣経国がモスクワを去る日の情景を回想録『我在蘇聯的生活』から再現してみよう。

今日でモスクワとお別れだ。5時に起床して窓の外を見やると、そこにはクレムリンがそびえていた。12年前に初めて見た姿とほとんど同じだったが、屋根を飾る双頭の鷹が宝石で造られた赤い星に変わっていた（中略）孫逸仙大学の門前にあった大礼堂は3年前に壊され、今は労働宮殿を建設中だ（中略）モスクワの地下鉄はすでに開通し、駅の内装は美しく、その美しさは宮殿に匹敵する。車両も清潔だ。街を走る車は10年前の20倍に増え、バス、電車、トロリーなどが運行している。（中略）今日はパスポートを取りに行ったり、汽車の切符を買ったりで、出発の時刻まで大忙しだった。午後2時、シベリア特急2号は北駅からそろそろと動き出した。さようなら、ソ連！⁶

モスクワに対する惜別の情にあふれ、発展するソ連国家への賛歌になっている。ここで、蔣経国が残したもう一篇の回想録『我在蘇聯的日子』の記述を見てみよう。

1937年3月25日、私は家族を連れてモスクワを離れ、12年間の悪夢に最後の幕を降ろした。この12年間、私は人質となり、中共とソ共は中国情勢を操作する中でお互いにある時は主人となり、ある時は客となってその役回りを演じていた。この間の幾星霜、身も心もともに深手を負ったが、コミンテルンの本質やソ共、中共の本来の姿を見抜くことができた。この12年間で私にくれた教訓は深く心に焼き込まれ、それは永遠に薄れていくことがないだろう。⁷

⁴ 中華民国駐ソ連大使。

⁵ 李能梗「外交生涯回憶」『新聞天地周刊』（香港、1965年2月13日～20日号）、張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）83頁。

⁶ 前掲「我在蘇聯的生活」60～61頁、1937年3月25日の日記「新しいモスクワ」より抜粋。

⁷ 前掲「我在蘇聯的日子」247頁。

上の2篇の回想録に示された蔣経国の対ソ観の違いはいったい何だろう。これが、ひとりの人物がひとつの同じ体験を締めくくって書いた文章なのだろうか。この違い、落差にこそ蔣経国のソ連体験がいったい何であったのかという答えを見いだすことができるだろう。そのことについては後段で検討する。

蔣経国は後年（民国31年9月＝1942年）、江西省の贛南に勤務していたとき「人生の意義はいったいどこにあるのか」という文章を書いてソ連時代を回想し「足かけ4年間の国外流浪、奔走、生きるための営みは、なにが悲しみで、なにが幸福であるかを私に認識させた」⁸と記している。江南の「蔣経国のソ連に対する印象を総括してみると、愛と恨みが交叉し、一本の明確な境界線を引くことができない」⁹という指摘はこのことを指しているのだろう。

蔣経国と妻のファイナ、長男アラン（孝文）の3人がシベリア鉄道の終着地ウラジオストクで中国領事館の権世恩総領事らから盛大な歓迎と歓送を受け、海路上海に着いたのは4月19日¹⁰だった。黄浦江の浦西側を演出し、いつもの「表面」と皮肉られた荘重な欧風建築群は、かつて蔣経国がここからモスクワへ旅立った12年前と同じだった。

第2節 民国の政治舞台に登るための共産主義の払拭

ウラジオストクから海路上海に到着した蔣経国とファイナ、長男のアラン（孝文）は、下船するとすぐに弟の蔣緯国が用意した車で蒋介石と宋美齡の待つ杭州へ向かった¹¹。蔣経国らの一行が上海に一泊もしなかったのは、蒋介石の指図であろう。モスクワ留学以来10年以上も音信のなかった息子がソ連から共産主義にかぶれ赤くなって帰ってきたことを、上海のマスコミに晒したくなかったに違いない。

蒋介石の年譜を編んだ秦孝儀は「長男の経国は民国14年10月19日、ロシアに赴いてモスクワ孫文大学に留学し、国を去ること十と二年、諸々の艱難を備歴し、今日ロシアより帰国した」¹²と記し、さらに、蒋介石が「経児が露国より戻った。別れること12年、骨肉がふたたび逢い、母¹³の霊も大いに慰められるだろう¹⁴」と日記に欣然としたためていることを明らかにしている。

蒋介石はモスクワ留学に行ったきり消息のなかった蔣経国が12年ぶりに帰国したこと

⁸ 「足かけ4年間」とあるのは、王明から迫害を受けソ連各地を流浪した期間が在ソ12年間のうちの4年間という意味であろうと思われる。蔣経国「人生的意義到底在什麼地方」『蔣總統経国先生言論著述彙編』1（黎明文化、1981年）394頁。この文章は後に『永遠不要掛起白旗来』と改題されて『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）に収められた。

⁹ 前掲『蔣経国伝』66頁。

¹⁰ 前掲『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』57頁。

¹¹ 同前。

¹² 秦孝儀他編『總統蔣公大事長編初稿卷四上冊』（財団法人中正文教基金会、1978年）31頁。

¹³ ここの母は、蔣経国を可愛がった蒋介石の母親王采玉を指す。

¹⁴ 前掲『總統蔣公大事長編初稿卷四上冊』31頁。

を喜んだが、同時に、共産主義にかぶれてしまった息子にとまどってもいた。つい数カ月前まで掃共に躍起になっていた国民党、中華民国の領袖としての立場である。蔣家の跡取り息子を「更生」させるため、蒋介石は幼年期の教育に使った曾文正公の家書や王陽明の伝統中国をふたたび持ち出し、蔣経国がソ連で身につけた共産主義思想の払拭につとめた。蒋介石が蔣経国に宛てた書簡にその過程をみることができる。

民国 26 年 5 月 6 日の手紙¹⁵

経児、培甥¹⁶へ

経児の 30 日付の手紙を受け取った。文字に進歩が見られる。向学に専心すれば 3 カ月後には旧に復すか、それ以上に進歩するだろう。いま文章を上達させるためには、第 1 に古文に多く接し（中略）各篇を少なくとも百回以上読むべきである（中略）そうすれば 3 カ月後にはおよそ 30 篇の長文を諳んじることができ、文筆がかならず流暢になる。もしも 100 篇の古文を胸中に爛熟させることができれば、文豪にさえなれるのだ（後略） 父舅示す。

蔣経国が 4 月 30 日、杭州の蒋介石に宛てて認めた手紙の返信であることがわかる。蔣経国の帰国後、蒋介石が息子に宛てた第一信だ。この書簡では溪口に住む甥の培風にも訓示（後略部分）しているので、溪口鎮に宛てて出したものだろう。つまり、4 月末から 5 月初、蔣経国はすでに溪口鎮の生母毛福梅のもとにいた。

文中の「旧に復す」とは、蔣経国の幼年教育で蒋介石が課した庭訓の成果を指している。蔣経国は 7 歳で溪口鎮の武山学校に入学し、郷土の国学者であった周東（星垣）に学んだ。翌年には箭金学堂で蒋介石を教えた国学者の顧清廉に師事し、顧は蔣経国の朗誦能力を評価した。12 歳で奉化県の名門竜津学校に入学し、課外には家庭教師の王欧声から『経学』を習い、行儀を仕込まれ、『説文解字』や『爾雅』などの典籍を精読した¹⁷。

民国 26 年 5 月 12 日の手紙¹⁸

経児へ

（前段省略）今後は読書において中国固有の道德、建国精神、およびその哲学に多く留意すべきである。孫文学説の書は実に中国哲学の基礎であり、三民主義は中国哲学を具現したものである。翻訳ではその精神を十分に説明できないだろう。ロシア語の訳本はなおさらその精華が訳出されていない。それ故に孫文学説を 2 回精読し、さらに三民主義の民族、民生、民権の各主義の全文を原書で読むこと。会得した内容と批判点は、それを拾い出して父に報告しなさい。民生主義の中でもマルクス主義を批判した各節はとりわけ重要であるので、客観的な態度で周到に研究すべきだ。三民主義を読了したら、軍人精神教育を読みなさい。同書も中山全集に収録されていよう。以上の各書を理解すれば中国の政治、社会、経済、哲学の基礎的な

¹⁵ 蔣経国『我的父親』（台北・三民書局、1975 年）111 頁。

¹⁶ 培甥は蒋介石の妹蔣瑞蓮の子竺培風（1916～1948）を指す。

¹⁷ 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』（行政院新聞局、1992 年）11～18 頁。

¹⁸ 前掲『我的父親』112～113 頁。

知識を得ることができる（中略）おまえの言う報告書¹⁹は全部を書き終えるのを待つ必要はなく、出来上がったところから送ればそれでよい（後略）。 父母²⁰記す。

蒋介石はこの時期、三民主義と中国の伝統哲学で蔣経国の共産思想を洗い落とすのに躍起だ。蔣経国は「私が帰国したあと、父は曾文正公家書、王陽明全集を読むよう導き、とくに曾文正公家書を重視した。父は曾文正公の子息に対する訓戒は模範になると考え（中略）私の手紙に返信する暇がないときは、家書の特定箇所を指定してそれを返信の代わりにしたこともあった」²¹とも回想している。蒋介石の蔣経国に対する共産主義の払拭はさらにつづく。

民国 26 年 5 月 15 日の手紙²²

経児へ

（前段省略）今は自反録²³を読む必要はない。早急に孫文学説と三民主義の原文を読みなさい。父の思想と言行は、もともと総理の哲学に基づいているのだから。以上の諸書を読了するのを待って、父が最近 5 年間に講義している廬山談話と峨嵋談話の筆記録を一覧すれば革命の大道を識ることができるだろう。父は来週上海を離れる。どこに向うか未定なので、しばらく通信は不要だ。その他のことは後日話そう。 父母記す。

蒋介石は蔣経国の共産思想を洗い落とすのと同時に、ソ連における蔣経国の行動と思想を見極めようとも試み、蔣経国から提案してきた報告に含むべき内容を次の書簡で具体的に指示している。

民国 26 年 5 月 22 日の手紙²⁴

（前略）おまえの学問、経歴、および訪ソから帰国までの 10 余年間、毎月、毎年の個人生活の経過を具体的、系統的に報告しなさい。そして今後おまえは何をしたいのかその志願内容、能力、希望する仕事を言いなさい（中略）中国人はまず中国の歴史、哲学、政治、社会、および経済の事情を熟知してはじめて良民といえることができるのだ（中略）中国の経、史、子、集、各種の書籍は武嶺学校の図書館にみな備わっている（後略）。

上の手紙の「今後おまえは何をしたいのか」という父親の問いに、「蔣経国は政治か工業

¹⁹ 報告書とは、本節後段で検討する『氷天雪地』〔後に「我在蘇聯的日子」と改題〕と『去国十二年』〔後に「我在蘇聯的生活」と改題〕と題された 2 篇の回想録のことを指している。これらの回想録は父親蒋介石にソ連での行動や思想形成を報告するため、1937 年、溪口鎮に蟄居している間に執筆された。

²⁰ 母とは、継母の宋美齡（1897～2003）を指す。

²¹ 前掲『我的父親』89 頁。

²² 同上 113 頁。

²³ 自反録は毛思誠（1873～1939）が整理した蒋介石の言論集。1931 年に上海中華書局から出版された。

²⁴ 前掲『我的父親』90～91 頁。

のどちらか一つ」²⁵と答えた。それについて江南はふたつの理由を挙げ、ひとつは共産党出身の自分が政治問題でこれ以上父親に迷惑をかけたくないということ、もうひとつはソ連で従事した仕事の経験を生かし、誠心誠意国の工業化に貢献したいと思ったからだと指摘²⁶している。これを聞いた蒋介石は、息子に政治の道を選んだ。それをつつがなく実現するために、年内は溪口鎮に蟄居して農村の状況でも研究している、と命じたのである。

民国26年6月4日の手紙²⁷

経児へ

おまえのふたつの報告を読み、感慨深いものがあつた。艱難と痛苦をふりかえり、今後は国内にあって、国にいることの得がたく、尊ぶべきことを噛みしめよ。常に自省するように。報告の原文を送り返す。大切に保管すれば、貴重な資料になるだろう（中略）今年は家で心安らかに読書し、農村の利と弊を研究すべきである（後略）。父記す。

上の書簡と蔣経国の回想から判るように、帰国した共産主義かぶれの息子に蒋介石が課したのは幼少年期の庭訓で使った曾文正公家訓に加え、王陽明全集と孫文の教えを着実に咀嚼することだった。それに、ソ連における行動と思想の報告義務が追加された。これが、当時の複雑な中国の政治環境の中で蔣経国が必要とした最低限の「思想改造」、日本風にいえば「禊」であった。ソ連的なものと共産主義者としての過去を消去したという儀式が政治的に必要だったのである²⁸。この禊の儀式は蔣経国ばかりでなく、これから息子を民国政治の大舞台にデビューさせようとする蒋介石にも父親として必要だったのだ。

西安事変を引き起こした張学良は南京で特赦を受け、1月13日に杭州経由で溪口鎮の武嶺学校に移され、15日から雪竇山の中国旅行社招待所に幽閉されていた²⁹。周玉蔻によれば、蔣経国はみずからソ連から帰国する直接のきっかけを作った張学良とここで会っている³⁰。張学良は、生涯溪口鎮における蔣経国との往来について語らなかったし、管見のかぎり蔣経国もそのことに言及していない。

張学良が発動した西安事変で、国共関係は一進一退を繰り返しながらも着実に「一致抗日」に向かい始めていた。

民国26年6月16日の手紙³¹

経児へ

このところ廬山で甚だ多忙だ。おまえたちの手紙に、文字と思想に進歩があると心が慰められる。倭寇³²が今また騒乱しているので、嫌悪している。いずれ制するだ

²⁵ 前掲『蔣経国伝』86頁。

²⁶ 前掲『蔣経国伝』86頁。

²⁷ 前掲『我的父親』113～114頁。

²⁸ 若林正文『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997年）36頁。

²⁹ 蘇瑋基編著『張学良生平年表』（台北・遠流出版、1996年）377～381頁参照。

³⁰ 周玉蔻『蔣方良與蔣経国』118頁。

³¹ 前掲『我的父親』114頁。

³² 倭寇は、満州事変以来の日本の侵略軍を指している。

ろう。 父示す。

民国 26 年 7 月 24 日の手紙³³

経児へ

（前略）ソ連滞在報告は他人にたのむより自分で翻訳するほうがいい。自分が国文で著せないからといって、他人に依頼するのは恥ずべきことだ。国文で書けるようになるのを待ち、ロシア語がわかる者に添削を依頼すべきである。父が現在そのような人物を物色中なので、いずれ家で会うことになるだろう。おまえは、いま国文の研究と習字、著作に専念すべきで、倭寇の騒乱を心配する必要はない。父が必ず制するだろう（後略）。

上の手紙から蒋経国は帰国当初、中国語を読むことはともかく、まともな文章を記すことができないほどに漢字を書く能力が衰えていたことがわかる。曹聚仁は当時の蒋経国の識字力について「指を折って数えてみると、覚えている中国字は 100 字に満たなかった」³⁴と指摘している。

民国の政局は西安事変を契機に、南京国民政府内でも日本に対する降伏主義を排して抗日を主張する勢力がにわかに活気づく。しかしながら過去 10 年間も争い続けてきた国民党と共産党は簡単に折り合うことができなかった。その膠着した局面を一気に溶解させたのが 1937 年 7 月 7 日に北京郊外で突発した盧溝橋事件であろう。蒋経国に宛てた書簡の中に見える蒋介石の抗日態度もわずか 1 ヶ月余の短期間に「いずれ制する」から「必ず制する」に変化してきている。民国の激動は「一致抗日」の第 2 次国共合作に突入する直前にあった。

蒋経国は同年 10 月、江西省を牛耳る蒋介石の腹心、政学派の熊式輝の引きで家族とともに江西省の南昌に移り住み³⁵、翌 1938 年 1 月 4 日、江西省保安処の副処長に就任した³⁶。蒋経国はこの時点で、蒋家のプリンスとして民国の政治舞台に登場した。民国政治へのデビューを実現したのは、蒋介石が溪口鎮で実施した禊であろう。五・三〇事件で共産主義を発見し、父親の支配圏から離脱してモスクワに留学し共産主義に染まった蒋経国は、12 年後の民国 26（1937）年に帰国を果たし、足掛け 7 ヶ月間の「禊」を経て、再び蒋介石の支配圏に回帰した。このときの蒋経国にとっては、蒋介石の支配圏に回帰することが民国政治の大河に泳ぎ出す唯一の道だったのである。

第 3 節 二篇の回想録に見る蒋経国の相矛盾する対ソ観

蒋経国はモスクワから帰国した直後の 1937 年 5 月 27 日、蒋介石から蟄居を命じられた

³³ 前掲『我的父親』114～115 頁。

³⁴ 曹聚仁『蒋経国論』（台北・一橋出版社、1997 年）95 頁。

³⁵ 前掲『蒋経国先生全集（記事年表上輯）』60 頁。

³⁶ 同前『蒋経国先生全集（記事年表上輯）』61 頁。

溪口鎮の文昌閣³⁷で最初の回想録『我在蘇聯的日子』を書いた。これは父親にソ連時代の行動と思想形成を報告するためのものだった。回想録の前言で蔣経国は「1937年春、私はついに帰国を果たし、故郷の溪口に7ヵ月間滞在した。その間にソ連の経験を一篇の回想録にまとめ、『我在蘇聯的日子』と題した」³⁸と語っている。

上に示した書簡で蒋介石は「おまえの二つの報告を読み、感慨深いものがあつた」³⁹と記している。蒋介石はまた、「おまえのいう報告書は全部を書き終えるのを待つ必要はなく、出来上がったところから送ればそれでよい」⁴⁰と指示しているので、蔣経国は書き終わった順に『我在蘇聯的日子』を前半と後半に分けて蒋介石の一読に供し、それが蒋介石のいう「二つの報告」となったにちがいない。この回想録はロシア語で書かれ、蒋介石に送る直前に第三者が簡易な中国語に訳し、蒋介石はそれを読んだものと推察される。それは蒋介石が書簡で「ソ連滞在報告は他人にたのむより自分で訳すほうがいい（中略）国文で書けるようになるのを待ち、ロシア語が分かる者に添削を依頼すべきである」⁴¹と語っているところから明らかだ。

回想録は蒋介石への報告に供されたあとで蔣経国自身が保管し、それが再び出てきたのは1963年の台北でのことだった。その辺の事情について蔣経国は回想録の前言で「数ヵ月前、棚の本を整理していたとき、この回想録の手書きの原稿を見つけ出したので読んでみた。あのすぎ去って久しい日々を温めていると当時の悲惨な生活を思いだし、感慨深いものがあつた」⁴²と述懐している。蔣経国はこのとき書棚で発見した『我在蘇聯的日子』の原稿を、当時、米国中央情報局(CIA)台北オフィスの責任者であつたRay. S. Clineに渡し、Clineの妻がそれを英訳(My Days in Soviet Russia)した⁴³。蔣経国は英訳された原稿を印刷製本までしたが、出版することはしなかった⁴⁴。この回想録は蔣経国の逝去後、Clineの著作⁴⁵の中国語版『我所知道的蔣経国』の巻末に附録として掲載され、その存在が明らかになった。

もう一篇は1939年12月、溪口鎮を空襲した日本の戦闘機の攻撃に遭って絶命した生母毛福梅の霊を慰めるため、ソ連時代の日記13篇⁴⁶をまとめて回想録にした『我在蘇聯的生活』⁴⁷である。これは蔣経国が自序で「謹んで留ソ13年の日記から13篇を選んで1書に

³⁷ モスクワから帰国した蔣経国一家のために、蒋介石が1937年に溪口鎮の剡溪（溪口鎮を東西に貫く清流）河畔に建てた洋館の名称。現存している。

³⁸ 第3章注1を参照。

³⁹ 前掲『我的父親』113～114頁の「民国26年6月4日の手紙」を参照。

⁴⁰ 前掲『我的父親』112～113頁の「民国26年5月12日の手紙」を参照。

⁴¹ 前掲『我的父親』115頁の「民国26年7月24日の手紙」を参照。

⁴² 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」214頁。Clineの妻は蔣経国の英語の家庭教師だった。

⁴³ 克莱恩著 聯合報國際新聞中心訳『我所知道的蔣経国』（聯経 1990年）67頁 Ray. S. Cline, *Chiang Ching-Kuo Remembered: The Man and His Political Legacy*, Washington, D. C. :United States Global Strategy Council, 1989, p42

⁴⁴ 『我在蘇聯的日子』の中で蔣経国は権力（スターリン）を恐れず、指導者としての才能を具備し、文筆、演説、ロシア語の天賦の才に恵まれた人物として描かれている。これは1960年代前半の「反共抗俄」の冷戦時代にあって、一種の強力なプロパガンダになり得たが、結果的に蔣経国はそれを利用することを控えた。

⁴⁵ Ray. S. Cline, *Chiang Ching-Kuo Remembered: The Man and His Political Legacy*, Washington, D. C. :United States Global Strategy Council, 1989

⁴⁶ 第3章注1を参照。

⁴⁷ 『我在蘇聯的生活』は1947年4月、上海・前鋒出版社から出版された。

まとめ、これを以って吾が母を記念し、無限の哀悼を記す」⁴⁸とその心底を語っているの
で毛福梅の死後に再構成されたことは確かだが、その具体的な期日はわかっていない。

これらふたつの回想録は、まったく同じ時期、同じ内容の経験をもとに書かれたものな
のに、ソ連という国、あるいは共産主義に対する評価がまったく異なっている。蒋介石へ
の報告目的で書かれた『我在蘇聯的日子』には、ソ連への第1歩を印したウラジオストク
からモスクワへ向うシベリア鉄道の途中駅における歓迎会の模様を「パレードはおそらく
恣意的に用意されたもので、一種の抱き込み手段だったにちがいない。彼らは私に、私の
同期留学生に、そして私の祖国にもととなんの興味も感じてなどいなかった」⁴⁹と記し、
帰国する場面を描いた最終章では、「私は家族を連れてモスクワを離れ、12年間の悪夢に
終止符を打った」⁵⁰と徹頭徹尾ネガティブな対ソ観に終始している。

これに対して、生母の墓前にたむけるために編まれた『我在蘇聯的生活』はその第1行
目から「胸を張って、両手を腰に、深く吸って！」⁵¹と入学したばかりの孫逸仙大学にお
ける朝の体操の場面を清々しく描写し、モスクワを離れる最終章では「街を走る自動車は
10年前の20倍で、バスや電車のほかトロリーも走っている（中略）さようなら、ソ連！」
⁵²と発展目覚しい、新しいモスクワとソ連に対する賛歌で終わっている。途中の章節にも
ネガティブな表現は皆無で、蔣経国のソ連国家に対する期待、共産主義に対する信頼感に
溢れた内容に満ちている。

これら2篇の回想録の最初の1篇『我在蘇聯的日子』はソ連国家、共産主義への決別で
あり、もう1篇の『我在蘇聯的生活』はソ連国家、共産主義に対する賛歌、愛惜と言ふこ
とができよう。前者がソ連国家、共産党への決別を示す内容になったのは、蔣経国の思想
を点検し、共産主義を洗い落とそうする蒋介石の試みにおそらく迎合した結果であり、こ
うすることによって溪口鎮での謹慎を解いてもらい、早く中国社会に復帰したいという願
望があったからだろう。一方、母親の霊を慰めるために編んだ回想録は、苛酷だった12
年間のソ連生活を精神的に支えてくれた母親のために楽しく充実したソ連の思い出で満た
したかったにちがいない。

繰り返しになるが、『我在蘇聯的日子』は蒋介石への思想報告であり、『我在蘇聯的生活』
は毛福梅へのソ連における生活報告だった。帰国直後、蒋介石によって進められた「思想
改造」を甘受するなかで書いた『我在蘇聯的日子』は、ソ連国家、共産主義への決別宣言
となった。そして蔣経国は、それから2年以上あとにソ連時代の日記から『我在蘇聯的生
活』を加筆し再構成することによって、前の回想録で示したソ連国家、共産主義への強い
不信と反発を、愛惜と賛歌に翻している。これらソ連および共産主義に対してまったく評
価の異なる2篇の回想録を検討するとき、蔣経国が12年ぶりにソ連から帰国して蒋介石の
支配圏に回帰していった数年間における思想的な揺らぎを読み解くことができる。その揺
らぎとは、多感な少青年期をおくったソ連に対する肯定的な感情と、これから蒋家のプリ
ンスとして民国の政治舞台で生きていく決意を固めつつあった蔣経国の政治的な選択のな

⁴⁸ 前掲「我在蘇聯的生活」1頁参照。

⁴⁹ 前掲「我在蘇聯的日子」220頁。

⁵⁰ 同上247頁。

⁵¹ 前掲「我在蘇聯的生活」2頁。

⁵² 同上61頁。

かで現象した相矛盾する感情の表出であろう。

小結

本章の考察を終えて、以下の4点を指摘することができる。

第1点は、蔣経国がソ連から12年ぶりの帰国を果たすことができたのは、蒋介石が西安事変に遭遇して反共から抗日に転じたことにより、国共関係と中ソ関係が好転し、そのことが契機になったということである。

第2点は、蔣経国の帰国を許可したスターリンは国民政府に秋波を送り、抗日を決意した蒋介石の動きをソ連の対日政策にうまく利用したこと。それを敏感に感じ取った蔣経国はソ連当局のやり方に失望するとともに、もう一方ではソ連という国家と共産主義を愛惜していたことである。

第3点は、蒋介石が蔣経国に対して共産主義の払拭を行った際、蔣経国はみずからの共産思想の発露を抑え、表面上はふたたび蒋介石の支配圏に回帰し、そのことで中華民国の政治舞台にデビューすることができた、ということである。

第4点は、蔣経国が帰国後に前後して2篇の回想録を執筆し、あるいはソ連時代の日記から再構成したこと。そのうち、最初に執筆した『我在蘇聯的日子』は蒋介石への思想報告で、ソ連と共産主義への決別を示した内容になっている。もう1篇のソ連時代に書いた日記から再構成した『我在蘇聯的生活』は毛福梅の死を悼んで墓前に捧げたものであり、ソ連国家と共産主義に対する賛歌、愛惜となっている。この一見矛盾する2篇の回想録が帰国前後の蔣経国の政治的な選択による思想的な動揺を物語っている、ということである。

本章のタイトルに使った民国26（1937）年は、留学終了後約6年間もソ連に留め置かれた蔣経国が帰国を果たしたメモリアルな年であった。それは同時に、第5次掃共作戦まで達成して中共軍に江西省瑞金の根拠地を放棄させた蒋介石が西安事変に遭遇して掃共を断念し、日本の中国猛侵を前にして、第2次国共合作に重い腰をあげた年でもあった。この歴史的事変は民国26年以降の国共両党関係、すなわち中国の国内情勢と中、日、ソ三国関係を始めとする国際情勢に大きな影響をおよぼした。蔣経国にとっての西安事変、そして民国の政治舞台にデビューするための準備をした民国26年という年が、その後の蔣経国の政治生活に深くコミットしたことは間違いない。

私たちはそろそろ蔣経国が江西省の初任地で民国の政治舞台にデビューし、同時に国民党内の複雑な権力の大河を泳いでいくための派閥作りに着手していく過程を考察し、帰国後の蔣経国の行動を検証することにしよう。

第5章 蔣経国の贛南における初期派閥の形成について

はじめに

本章は江西省贛南¹における蔣経国の初期派閥の形成過程を検討するものである。蒋介石が国民党内における諸派閥の力関係を利用して党と中華民国の実権を掌握したように、蔣経国もまた台湾遷占後に「本土化」²をはじめとする諸政策の実施に際しては、みずからの直系派閥を積極的に活用した。ひとつの政党内で活動する派閥を研究するには、党内権力の掌握問題、路線、そして路線から生まれる諸政策の検討を進めるのが一般的だが、本論は蔣経国派閥の形成過程を検討するものであり、国民党内における派閥の諸相は先行研究に譲りたい³。派閥政治で国民党に特徴的なひとつの現象だけをここに記せば、それは国民党の支配グループにおけるクライアンテリズム (clientelism) ⁴が蒋介石を上層の核心とし、その下に諸派閥を管轄する権力構造を構築していたため、蔣経国も派閥を形成しなければ権力の中枢に食い込むことが難しく、また領袖の長子という圧倒的な地位が派閥の構築を容易にしたということである。その意味で蔣経国の派閥形成過程を明らかにすることは、蔣経国が権力構造に組み込まれたあとの台湾政治や蔣経国本人に関する研究の推進に寄与できるものと考えられる。それでは蔣経国の権力行使を支えた直系派閥の基礎は、いつ、どこで、どのような目的の下に、どのようにして構築されたのか。これが本章の達成すべき課題である。

12年間にわたるソ連滞在で思想的に共産主義の影響を受けた蔣経国は帰国直後、故郷の浙江省溪口鎮で蒋介石から5ヵ月間にわたり蟄居を命ぜられ、江西省主席の熊式輝の引きで南昌市に赴任したのが1937年10月のことである。翌年1月に江西省保安処少将副処長に任命され、同年内に青年服務団副団長(3月、任地は南昌)、地方政治講習院学生軍訓総隊長兼訓育処副処長(4月、同上)、保安司令部新兵督練処少将処長(9月、撫州臨川温泉)と矢継ぎ早に省政治のキャリアを積み、最終的には1939年6月、江西省第四行政区行政督察專員として赴任した贛洲に落ち着く⁵。

蔣経国の派閥形成過程は、①江西省贛南における基礎構築期、②重慶における充実期、③南京における挫折期、④台湾遷占後における再構築期に大別されよう⁶。本章は贛南にお

¹ 贛南は現在の江西省贛州市とその下に属する県域を指す。

² 蔣経国の台湾「本土化」政策については幾多の論考が存在する。ここでは代表的なものとして林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス—沖縄・台湾・香港』(明石書店、2005年)、若林正丈『台湾の政治』(東京大学出版会、2008年)の2書を掲げておく。

³ 代表的な論考に、陳明通『派系政治與台湾政治変遷』(新自然主義、1995年)2頁。〔日本語版は若林正丈監訳、陳明通著『台湾現代政治と派閥主義』(東洋経済、1998年)〕、土田哲夫「抗戦期の国民党中央党部」中央大学人文科学研究所編『民国後期中国国民党政権の研究』(中央大学出版部、2005年)、山田辰雄『中国国民党左派の研究』(慶応通信、1980年)、家近亮子『蒋介石と南京国民政府』(慶応義塾大学出版会、2002年)などがある。

⁴ 前掲『派系政治與台湾政治変遷』2頁。同『台湾の政治』11頁などを参照。

⁵ 張瑞成編撰「蔣経国先生記事年表1910～1988」『蔣経国先生全集』記事年表上輯(行政院新聞局、1992年)を参照。

⁶ 台湾遷占後の派閥構築については終章を参照。

ける派閥構築を中心に検討する。蔣経国の初期派閥の構築はここでソ連の経済発展モデルを模倣した「新贛南の建設」⁷とよばれるユートピア的な政策と同時進行し、三民主義青年団江西支団の育成および督察専員公署における督察専員⁸の仕事と並行して進められた。

第1節 新贛南の建設と派閥育成

蔣経国が民国の地方政治にデビューした1938年の10月25日には武漢が陥落し、日本軍は江西省に対する影響力を増すため南昌会戦を発動した。当時、日本軍の空襲は国民党軍の行営があった南昌市を中心とする江西省に集中した⁹ので、蒋介石の「攘外」政策に呼応した各派閥がここに集結して覇を争った。蒋介石は党内権力の獲得と青年を反共に誘導する目的で設立した秘密組織「復興社」と「青白団」が所期の目的を達成したのでそれらを解散させる内部決定¹⁰をして、CC系¹¹や復興社、その他の派閥で活動していた若手を青年組織に収斂することを狙った¹²。蒋介石は復興社の重鎮である康澤、劉健群らに全国規模の青年組織の設立を指示し、党章の修正を経て予備黨員制を廃止し、新たな青年組織で黨員候補を養成する体制を固めた。蒋介石が望んだ青年組織の三民主義青年団は1938年3月、武昌で開催された国民党臨時全国代表大会¹³で復興社を土台として設立が決議され、同年7月に創立した¹⁴。武漢が陥落すると、三民主義青年団とその団員幹部の養成機関である中央青幹班は長沙に撤退し、青幹班の學員は出身省の籌備（準備）支団に配属され、戦況の悪化にともない中央団部はさらに桂林に撤退して、のちに重慶まで後退した。

翌1939年3月、中国国民党中央訓練委員会は陪都となった重慶の浮囃関（後に復興関と改名）に中央訓練団を設立（復興関訓練）して全国党政幹部の養成を開始し、蔣経国は蔣

⁷ 「新贛南の建設」の詳細については次章を参照。

⁸ 序章注12を参照。

⁹ 武月星主編『中国現代史地図集』（中国地図出版社、1999年）146頁の南昌会戦の項などを参照。

¹⁰ 蔡省三・曹雲霞『蔣経国系史話』（香港・天地圖書、1988年）23頁。

¹¹ 陳立夫は回想録でCC系の呼称について、「共産党は、（国民党の）中央には中央俱樂部（Central Club）、略称CCという小組織があると偽りを言っていたが、後に共産党はこの名称で私たち二人の兄弟のことを表すようになった。なぜなら（陳果夫と陳立夫の）Chen+Chenの略称もまたCCになるからである」と語り、中国共産党が国民党の小組織（派閥）跋扈を攻撃する材料としてでっち上げた、と説明している。陳立夫『成敗之鑑——陳立夫回憶錄』（正中書局、1994年）8頁、436頁を参照。日本語版は、松田州二訳『成敗之鑑——陳立夫回憶錄』上・下（原書房、1997年）。

¹² 前掲『成敗之鑑——陳立夫回憶錄』224頁。

¹³ 1938年3月29日～4月1日に武昌で開催され、以下の項目を決議した。①国民党総裁職を新設（蒋介石）、②三民主義青年団の設立（蒋介石団長、王精衛評議長）。関連決議として、③党章の修正、④党内における一切の派閥設立とその活動の禁止を即日CC系と復興社に通知。これら派閥内の青年黨員が三青团に結集した。三青团に主要派閥の構成員を収斂させ、党内の派閥による亀裂の改修を行おうとしたもの。

¹⁴ 三民主義青年団は1938年7月9日に武昌で創立した。中央団部書記長に陳誠が任命され、その他の幹部は蒋介石により各派閥から人選された。中央団部は同年9月、廬山訓練団の後身の中央訓練団内に三民主義青年団幹部訓練班（中央青幹班）が設けられた。第1回臨時中央幹事会（幹事31名）では陳誠が前線にあったため朱家驊（国民党中央秘書長、CC系）が代理書記長、組織処長は胡宗南で康澤（復興社13太保の1人、復興社中央書記長、康澤派）が代理を勤めて組織の大権をにぎった。第1代宣伝処長は黃季陸（CC系で親朱家驊）、第1代訓練処長は譚平山（元共産黨員）、第1代服務処長は陳文淵（米国学留牧師、宋美齡の推薦）、第1代秘書処長には項定栄（CC系）が任命された。この間に汪精衛がハノイに亡命し、その後、南京政府を樹立した。

介石からその第2期（4月17日～5月15日）に参加して研修を受けるよう命じられ、重慶に赴いている。蔣経国の中央訓練団参加には、①国民党内でキャリアを積む正規のステップ（ソ連から帰国後の最初の党内研修）、②国民党籍の回復¹⁵とソ連で共産党員だったことの整理抹消、③三民主義青年団への正式入団、という重要な意味が込められていた。

蔣経国が本格的に派閥の育成を考えたのは贛州に赴任した直後のことと思われる。蔣経国はソ連から帰国後、故郷の浙江省溪口鎮における蟄居を経て江西省の南昌市に赴任し、保安処少将副処長、新兵督練処少将処長など上司の命令を受ける実務補佐職を経て第四行政区行政督察專員に任命され、贛州にやってきた。その間の約1年半は役職に「副」が冠された実務担当で、省政治の権力からは比較的遠いところにいた。熊式輝からあてがわれた数少ない部下¹⁶とソ連留学時代の同学（同窓生）が蔣経国の手兵であったにすぎない。蔣経国が贛南赴任当初に使うことができた留ソ同学には黄中美、高理文、高素明、周百皆、彭建華、徐季元、徐君虎（ともに左翼反対派）らがいたが、ソ連から帰国後に共産主義者の嫌疑を受けて逮捕、監禁された経験があり、中統、軍統からマークされていた¹⁷。贛南はかつて中華ソヴィエト臨時中央政府の所在地¹⁸で、蔣経国の発言にも多くのソ連的な言辞が見られたため国民党部や特務機関は戦々恐々とし、そのため蔣経国はこれらの留ソ同学に多くを頼ることは難しかった¹⁹。そうした状況の中で、蔣経国は国民党と国民政府内に存在する複雑な派閥政治の諸相を見せつけられたに違いない。なぜならば、上に述べたように蒋介石の「攘外」政策に呼応した各派閥が江西省に集結して覇を争ったからである。その観察と実務担当としての経験から、督察專員という省政治の権力の一角に食い入って「新贛南の建設」を実行するためには自派閥を養成する必要があることを痛感したのである。蔣経国はみずからの派閥形成の場所を、新しく設立することになった三民主義青年団江西支団²⁰に求めた。年配の政客や官吏の多くはすでに派閥に属していたので、新贛南の建設には未だ他派閥の手が伸びていない青年層を組織してみずからの派閥を形成する必要があった²¹からだろう。

第2節 三民主義青年団江西支団の設立準備と康澤系の介入

2-1 支団の設立とその主要幹部

三民主義青年団江西支団籌備処の議決・指導機関は、江西支団臨時幹事会である。臨時幹事会のメンバー構成は以下のように国民党各派閥要員の寄せ集めで、軍統、C C系、

¹⁵ 蔣経国はモスクワ孫逸仙大学に留学する直前の1925年10月初旬、林煥庭の紹介を受け、上海環龍路44号の中国国民党上海執行部で宣誓入党している。留学生候補として国民党の推薦を取り付けるために必要な条件のひとつだった。前掲『蔣経国先生記事年表1910～1988』参照。

¹⁶ 督練処から帯同した部下には、後に蔣経国の評伝を著した漆高儒や呉驥、劉德藩らがいた。

¹⁷ 羅旋『蔣経国江西伝記』（台北・曉園出版、1989年）42頁。

¹⁸ 中華ソヴィエト臨時中央政府の関連施設が点在した瑞金や雩都は行政区劃としては贛南に属した。

¹⁹ 前掲『蔣経国江西伝記』42頁。

²⁰ 三民主義青年団江西支団部籌備処は当初、臨時省都の吉安で創立し、そこで蔣経国は籌備処主任に任命された。第四行政区行政督察專員公署は贛州に置かれており、蔣経国もそこに赴任したので、三青团江西支団部も吉安から贛州に移った。

²¹ 前掲『蔣経国江西伝記』43頁。

元老派、政学系、康澤派など主要派閥²²の有力者がバランス良く配置されている。

① 陳宗蚩（幹事兼書記、康澤派）

江西永新県人。ドイツに医学留学した後、復興社に参加。軍政部軍医署江西軍医務処長が本務。1939年夏、中央訓練団党政班の第3期卒業で蔣経国と同期。康澤派が派遣。

② 胡軌（幹事兼書記、黄埔系で蔣経国系の後見人）

江西萍郷人。黄埔第4期卒業で、軍校三分校政治部少将主任が本務。李煥、楚菰秋、易勁秋らは、いずれも胡軌の門下生。台湾で正中書局、幼獅出版社を主宰。

③ 柯建安（幹事、黄埔系の軍統）

江西武寧人、黄埔第3期卒業。江西警保処長、軍統江西站書記が本務。戴笠の側近。

④ 薛秋泉（幹事、江西省のCC系重鎮）

江西南康人。中央党校1期卒業。国民党江西省党部委員兼江西社会処長が本務。

⑤ 劉己達（幹事、復興社の中核で康澤別動隊秘書）

江西人、江西省党部委員、『贛南民国日報』社長が本務。

⑥ 劉愷鐘（幹事、于右任系の元老派）

江西人、欧州留学組。江西省参議会秘書長が本務。

⑦ 胡昌祺（幹事、CC系）

江西南昌人、江西教育厅科長が本務。後に、蔣経国系に合流。

⑧ 万和生（幹事、無派閥）

江西臨川人、臨川中学校長が本務。

⑨ 熊式輝（幹事、政学系重鎮）

江西省主席。蔣経国が民国の政治舞台に上るきっかけを江西省でつくった。

江西支団臨時幹事会は1939年8月28日、三青团江西支団部籌備処（贛州市西津路米汁巷）の設立を決定した。康澤²³は派閥の廃止命令を背景に復興社の各級組織を三青团の内部に移植し、みずから担当した軍校特訓班の卒業生を大量に中央青幹班に送り込んで研修を受けさせ、各級組織の中核に充てていた。三青团各省支団の準備処主任の多くは当該省の党政要員が担当したが、書記処長、組織処長など枢要な役職は康澤派で占められた。康

²² 軍統は1938年に成立した「国民政府軍事委員会調査統計局」の略称で、一個の派閥としては戴笠を指導の核とする特務系統を指す。すなわち革命軍人同志会、革命青年同志会、復興社を隠れ蓑とした力行社のことで、黄埔軍官学校の学友を集めて設立した蒋介石に忠誠を尽くす秘密の特務組織である。蒋介石は黄埔軍官学校卒業生の行動をひきつづき掌握できるよう戴笠が秘密の特務グループ「調査通訊小組」を設立することを特別に許可した。王天木、唐縱、張炎元、徐為彬、胡千秋、周偉龍、黃雍、馬策、鄭錫麟らが成員だった。CC派は陳果夫、陳立夫兄弟を中核とする。二人は蒋介石と義兄弟の契りを結んだ陳其美の甥で、陳が暗殺された後も蒋介石は彼らを身邊にとどめ、党の組織工作を委ねた。元老派は文字通り国民党の元老が集まった派閥で、本章では于右任を中心とするグループを指す。政学系は1916年、北洋政府の「政学会」から生まれた。蒋介石と義兄弟の契りを結んだ張群の仲立ちで政学系首脳の楊永泰が蒋介石の軍事行營の秘書長となり、陳儀が軍政部政務次官、張群も外交部長をつとめたことがある。行政系統で蒋介石を補佐した。康澤派の領袖である康澤は復興社と三民主義青年団の創始者の一人で、同団の人事の大権を握っていた。蔣経国とおなじモスクワ孫逸仙大学に留学し、国民党内ではライバル関係にあった。前掲『派系政治與台湾政治變遷』38-40頁。

²³ 康澤は当時三青团中央団部第二処長で全国の三青团組織に影響力を及ぼし、各省支団および県分団の責任者の多くには康澤が担当した軍校特訓班や三青团中央青幹班第1期卒業生が送り込まれた。詳細は、汪振煌口述「培養嫡系 自建班底」文思主編『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003年）63頁。

澤は江西支団籌備処においても籌備処主任職に自派の要員を充てようとしたが、蔣経国が任命されたため臨時幹事会に復興社の重鎮（劉己達など）を送って蔣経国を牽制し、籌備処の幹部候補も自派の要員で固めて実権を彭朝鈺に握らせ、蔣経国を名目上の主任にして自派の拡張を狙った²⁴。三青团江西支団部籌備処の初代主要幹部²⁵は以下のとおりである。

①籌備主任	： 蔣経国（江西流亡青年招待所総幹事を兼任）	
②書記	： 彭朝鈺（江西吉水人）	康澤特訓班第1期、復興社幹部
③組訓組長	： 黄謨熙（江西臨川人）	復興社学生幹部
④宣伝組長	： 江海東（江西宜春人）	復興社学生幹部
⑤総務組長	： 王制剛（江西安福人）	専員公署少校副官、専員公署職員、 蔣経国が任命
⑥宣伝大隊長	： 蔡希曾（江西横豊人）	中央青幹班学生、無派閥
⑦青年招待所組訓幹事	： 程京震（江西鄱陽人）	康澤特訓班、中央青幹班学生
⑧青年招待所総務幹事	： 王兆中（江西贛県人）	専員公署職員

分団六処の幹部構成は以下のとおりである。

①吉安分団籌備主任	： 楊虞賢（江西泰和人）	康澤特訓班学生、復興社幹部
②萍郷分団籌備主任	： 蔣廉儒（江西宜春人）	中央青幹班学生、復興社学生幹部
③南城分団籌備主任	： 徐日泰（江西崇仁人）	中央青幹班学生、復興社学生幹部
④寧都分団籌備主任	： 沈再成（江西清江人）	康澤特訓班学生、復興社幹部
⑤銅鼓分団籌備主任	： 欧陽栄（江西玉山人）	中央青幹班学生、復興社学生幹部
⑥信豊分団籌備主任	： 李培才（江西信豊人）	康澤特訓班学生、復興社幹部

上の名簿から明らかなように、総務組長の王制剛、宣伝大隊長の蔡希曾、青年招待所総務幹事の王兆中以外はすべて康澤派の要員で固められた。

三青团江西支団部籌備主任の地位に就いた蔣経国は派閥の構築に専心しながら三青团江西支団部籌備処の改組を繰り返し、康澤派要員の排除を進めた。その期間は1939年9月～1943年2月である。

2-2 第1回改組と江西青幹班の創立

蔣経国はまず1939年9月2日、康澤派が多数を占める籌備処の人事を変更するため、贛州梅嶺省訓団で熊式輝の出席を得て臨時幹事会第1回会議を開催する。会議の席上、蔣経国は中央団部（実質は康澤）が派遣した幹部は書記や組長を担当するには経歴、資質に不足がある、という理由で人事の調整を中央に建議することを決議し、新たに選出する老幹部を正職に、康澤派要員からなる青年幹部を副職とする考えを示して承認された。変更

²⁴ 以上は前掲『蔣経国系史話』による。

²⁵ 同上34頁。

後の幹部名簿²⁶は以下のとおりである。

- ①書記 : 陳宗蚩（康澤派）幹事が兼任。彭朝鈺（康澤派）を助理書記に降格。
- ②組訓組長 : 胡軌幹事が兼任。黃謨熙（康澤派）を副組長に降格。
- ③宣伝組長 : 劉愷鐘幹事が兼任。江海東（康澤派）を副組長に降格。
- ④吉安分団主任 : 劉己達幹事（復興社骨幹、康澤別動隊秘書）が兼任。楊虞賢（康澤派）を書記に降格。
- ⑤萍鄉分団主任 : 薛秋泉幹事（江西のCC系重鎮）が兼任。蔣廉儒（康澤派）を書記に降格。
- ⑥南城分団主任 : 万和生幹事（無派閥）が兼任。徐日泰（康澤派）を書記に降格。
- ⑦寧都分団主任 : 胡軌幹事（黃埔系、蔣経国系の重鎮）が兼任。沈再成（康澤派）を書記に降格。
- ⑧銅鼓分団主任 : 柯建安幹事（黃埔系、軍統）が兼任。欧陽栄（康澤派）を書記に降格。

上の名簿から判るように、蔣経国の後見人である胡軌²⁷を新たに幹事会の副主任兼組訓組長などに迎えるとともに、康澤派要員の多くを副組長、あるいは分団主任から書記に降格し、同派の影響力を減衰することに成功している。これと同時に三青团江西支団部の設立を正式に宣言し、さらに三青团江西幹部訓練班（江西青幹班）を10月までに赤硃嶺に創立して12月に第1期生120人²⁸を募集することを決め、蔣経国の直系派閥になる蔣経国系を養成する土台を構築した。当時、贛州は抗日戦の後方だったため、江西省外から複数の高等教育機関が避難移転して来ており、江西青幹班には上海や杭州などの知識青年も数百人が応募して優秀な学生の選抜に寄与した²⁹。

蔣経国は江西青幹班の創立に際し、①内部募集による訓練生の厳選（康澤派など他派閥の排除）、②教官などの厳選（同前）に留意するとともに、みずから赤硃嶺に泊り込んで訓練班の主任を兼任した。実務を担う教官には胡軌の三分校から軍訓大隊長に欧陽欽（第四行政区保安司令部参謀主任）、男性隊長に彭超、女性隊長に夏勁秋（女）、指導員に譚建勛、孔秋泉、許素玉（女）らが派遣され、蔣経国を補佐した。

江西青幹班では精神訓練、政治訓練、業務訓練、軍事訓練（生活の軍事化を含む）などがカリキュラムに組み入れ、蔣経国はみずから精神訓練科目で精神講話課を担当して「団長」³⁰

²⁶ 同上 46-49 頁を参照整理して一覧表にした。

²⁷ 胡軌は中央軍校三分校（零都県＝贛州の隣県）の少将で政治部主任だった。蔣経国は胡軌を江西青幹班の副主任兼組訓組長に迎え、三分校の16期生政訓班から70余名を選んで青幹班に入班させた。その中には王昇、王蘊（王昇の甥）、徐貴庠（蔣経国が青年軍連長をつとめたときの連指導員）、孔秋泉、許素玉、紀宣撫、何檢佐、譚建勛、汪振煌らがいた。蔣経国自身も各県政府の主任秘書、中学の団幹、一般公募などで班生を集め、合計120人を入班させた。郭晨『蔣経国密碼』（北京・団結出版社、2005年）212頁、前掲「培養嫡系 自建班底」64頁、および前掲『蔣経国江西伝記』43頁などを参照。

²⁸ 江西青幹班第1期は1940年1月初旬に訓練を開始し同年4月中旬に終了し、訓練期間は約3ヵ月半だった。前掲「蔣経国先生記事年表 1910～1988」を参照。

²⁹ 郭晨『蔣経国密碼』（団結出版社、2005年）212頁。

³⁰ 三民主義青年团团長は蔣介石が兼任した。

言行」を説き、それは赤硃嶺精神としてまとめられた³¹。赤硃嶺精神とは「団結一致、絶対効忠団長的精神」で、それは蒋介石の威光を背負った蔣経国への絶対的服従を意味した。蔣経国は青幹班で「要做団長の忠実耳目」（団長の忠実な耳目となる）を強調、「耳目」とは特務と情報工作の別称であり、蔣経国系のメンバーとなる条件のひとつだった³²。青幹班はモスクワ孫逸仙大学の管理手法を使い、レーニン主義を三民主義に置き換え、蔣経国が幼年時代に溪口鎮で学んだ中国の伝統精神を注入したものだ。青幹班は政治の黄埔軍校たるべきことを目指した。

2-3 第2回改組と青幹班修了生の連絡網

1940年4月、三青团江西支団部臨時幹事会第2回会議が招集された。これは江西青幹班第1期生が約100日間の訓練を終えた直後に開かれたもので、蔣経国が第1期を通じて自派閥を担う幹部の養成を初歩的に成功させたことを意味している。訓練生の中から王昇、蕭昌榮、樓錫源、章重若³³（女）らの幹部候補生を確保して会議に臨んだのである。

第2回会議では泰和、上高、光澤、瑞金、宜春、清江、永新、臨川地区における贛南8分団の増設と訓練生の就職問題が議題に上った。前回の会議で書記に降格となった康澤派の分団幹部を主任に昇格させ、さらに8分団の設立を決議した。分団を増設し、そこに第1期訓練で吸い上げた終了生を抜擢することで人数的に康澤派を圧倒した。新設8分団の主任リスト³⁴は以下の通りである。各分団の股長には青幹班の男女学生が充てられた。

- ①泰和分団籌備主任：徐貴庠（江西青幹班出身、安徽人、元三分校学生）
- ②上高分団籌備主任：戚国彪（江西青幹班出身、安徽人、元三分校学生）
- ③光澤分団籌備主任：蕭韶（江西青幹班出身、福建人、元三分校学生）
- ④瑞金分団籌備主任：柳新（江西青幹班出身、江西人、元三分校学生）
- ⑤宜春分団籌備主任：曹德大（江西青幹班出身、江西人）
- ⑥清江分団籌備主任：鄒卓（江西青幹班出身、江西人）
- ⑦永新分団籌備主任：樊哲琳（江西青幹班出身、江西人）
- ⑧臨川分団籌備主任：李德廉（江西青幹班出身、江西人）

会議ではさらに陳宗蚩（康澤派）の書記職を解き、胡軌を第2代書記とする決議をした。康澤派の彭朝鈺が助理書記として残っているが、勢力バランスでは問題にならない。第2

³¹ 蔣経国は青幹班のカリキュラムに孫中山の遺訓と団長（＝蒋介石）の言行、および業務知識、軍事訓練を組み込み、青幹班を贛南政治の「民主窓口」とすることを目指した。実際の講義では、中正大学の胡先学長（教授）に生物学を、馬博丁教授には社会科学を依頼し、国民党部からは張治中を招いて三青团の組織と歴史的な使命を講義させ、さらに李宗黄や熊式輝にも講演を依頼した。前掲『蔣経国密碼』213頁。

³² 前掲『蔣経国系史話』40-46頁を参照。

³³ 章重若は後に蔣経国の側室となり桂林で孝嚴、孝慈の双子を設けたが、出産後間もなく謎の死を遂げた。孝嚴と孝慈は国民政府の遷占とともに台湾に移り蔣家の外で養育され、兄は外交官を経て国民党内の枢要な地位（国民党秘書長）に就き、弟は学者の道を歩いて東呉大学の学長になった。蔣孝嚴『蔣家門外的孩子』（天下文化、2006年）40頁などを参照。

³⁴ 前掲『蔣経国系史話』49-52頁を参照整理して一覧表にした。

回会議は蔣経国系が江西省で勢力を伸張する重要な契機となったのである。会議では当然のこととして康澤派の強い抵抗に遭ったが、蔣経国は江西青幹班の訓練生の中から優秀な幹部候補生を選んで会議に臨み、三青团江西支団部籌備処籌備主任の権力を振るって康澤派を斬り、代わりに幹部候補生を後任に据えていった。重要なことは、事後、三民主義青年団中央団部に人事異動の変更を滞りなく行うことだった。中央団部は蒋介石が団長を兼務していたので、蔣経国の意向が拒否されることはなかった。

蔣経国は訓練修了生の配属を重視し、優秀な修了生を県級組織の書記などに抜擢してみずからの派閥に組み入れた³⁵。第1期生の就職では多数の修了生を支団部に配属し、王昇、蕭昌榮、樓錫源の3名を専員公署に配属した。さらに同窓の相互連絡網を組織し、「同学通訊録」を発行して江西青幹班畢業（修了）学生通訊処を立ち上げ、蔣経国と修了生、同窓間の連絡網をつくりあげた。通訊処幹事会の第1回幹事は章亜若（女）、王昇、李徳廉、孔秋泉、許素玉（女）、王蘊、陳亜美（女）らが担当した。通訊処は蔣経国系がつくった最初の組織で、第1期から5期までの江西青幹班を通じて500人以上の組織になっている。これに加えて『太陽報』を発行し、蔣経国と修了生、同窓間の意思疎通を図る媒体とした。『太陽報』の「太陽」は「団長（＝蒋介石）是我們的太陽」を意味するもので、修了生が蔣経国のもとを去った後も蔣経国に対する忠誠³⁶を調達する装置として機能したのである。1945年の抗日戦争勝利後、江西青幹班畢業学生通訊処は南昌に移って正式な公開の社団となり、李徳廉が主宰した。『太陽報』は週刊となって対外発行し、江西青幹班の喉舌（メディア）となり、蔣経国系の機関紙に発展した³⁷。

2-4 第3回改組と複数メディアの創設

1941年4月、三青团江西支団部臨時幹事会第3回会議は、胡軌書記、彭朝鈺助理書記、黄謨熙組訓組長、江海東宣伝組長、王制剛総務組長の職を解き、胡徳馨幹事を兼任書記（第3代）、黄謨熙を助理書記、舒興宇（湖南人、元3分校政治教官）を組訓組長、蔣廉儒を宣伝組長、聶根培（江西清江人、胡徳馨が帯同）を総務組長に任命した。

- ①幹事 : 胡徳馨（江西清江人、無派閥、朱家驊の推薦）
- ②書記 : 胡徳馨（兼任、同上）

³⁵ 修了生の平均年齢は20歳そこそこだったため、40歳以上の人材が占めていた県長や県級幹部は面白くなく、「太子（＝蔣経国）の太子（＝修了生）は元気だが、乳臭さの残るガキにすぎない」と悪口を言い、これに対して蔣経国は幹部会の席上、「乳臭い子供でも悪事に老獪な老鬼よりはるかにましだ」とやり返した。また、三青团江西支団は中央幹部待遇で、県党部の責任者は省級待遇だった。このため支団幹部は各所で国民党の地方幹部よりも優位に立ち、両者間に争いが絶えなかった。前掲「培養嫡系 自建班底」65～68頁参照。

³⁶ 蔣経国は江西青幹班の責任者であり、みずから教壇に立ち、野外訓練もみずから指導に当たり、寝食をとにもする機会も多かったため、訓練生から圧倒的な信頼と支持を得ていた。前掲郭晨『蔣経国密碼』214-223頁参照。

³⁷ 江西青幹班の同窓は二つの「圈子功」（仲間の絆）で結ばれた。それはすなわち同志圏と金蘭（義兄弟）圏で、あたかも「江湖」（黒社会）の義兄弟の雰囲気醸した。こうした状況の中で訓練生の中核だった章亜若、王昇らは「十兄弟」の契りを結んでいく。蔣経国という大きな圏のなかに小さな圏がいくつも存在し、全体はゆっくりと肥大し、相互関係が複雑化し、排他性が強まり、名実ともに派閥の体を成していった。前掲『蔣経国系史話』44-46頁を参照。

- ③助理書記　：黄謨熙（康澤派から分離途中）
- ④組訓組長　：舒興宇（湖南人、元3分校政治教官）
- ⑤宣伝組長　：蔣廉儒（康澤派から分離途中）
- ⑥総務組長　：聶根培（江西清江人、胡德馨が帯同）

黄謨熙、蔣廉儒は康澤が派遣した要員だが、すでに康澤派から分離しつつあった。また康澤派が牛耳っていた6処分団の主任職も次々に江西青幹班出身者と交代させられた。康澤が派遣した彭朝鈺はその後江西省吉水県長に転出し、黄模熙と江海東は軍隊に転属した。ここに三青团江西支団部内における康澤派の勢力はほぼ一掃され、蔣経国の支配構造が磐石になる。

蔣経国は在来メディアの改変や新媒體の創刊などを通じて省内に「蔣青天」³⁸の宣伝攻勢をかけ、派閥の拡大と組織固めにも成功している。蔣経国が組織活動にメディアを積極的に利用したのは、その手法をソ連滞在中に学んだからだろう³⁹。

蔣経国が贛南に赴任する以前から、同地区では江西省党部の機関紙『贛南民国日報』と商業紙の『三民日報』が発行されていたが、蔣経国は新贛南の建設を広報する自前の媒体として新たに『新贛南報』（高素明＝留ソ同学が主宰、蔣経国系の最初の活字メディア）、抗建通訊社（蔣経国系の最初のニュース通信社）、新贛南出版社（蔣経国系の最初の出版社、『新贛南叢刊』を出版）を創設し、新贛南書店なども開店させた。

また、江西三青团が管掌するメディアや組織として『江西青年日報』（蔡省三編集長、1941年2月創刊）⁴⁰、『江西青年月刊』、江西青年文化服務社（書店、月刊『文化服務』を発行）、江西青年劇社、江西青年俱樂部などが創立した。

蔣経国はさらにみずからの政見や政策を地元や江西省全域に巡回宣伝する組織として贛県抗敵後援会宣伝団（巡回宣伝組織）、三青团江西支団宣伝大隊（江西省だけでなく広東、浙江省などの近隣省へも赴く）、江西第四行政区保安司令部政工大隊（政工大隊、各県を巡回、また保安団自衛隊に対する政訓工作）をつくり、贛州中正公園には「中正室」を設け、これは後に新贛南博物館に格上げされた。1941年初には新贛南建設展覧会も開催している。

第3節 初期派閥の確立

1943年初、三青团中央は各省の支団に対して籌備期間を終了して正式設立し、全国大会に代表を派遣するよう通達した。これに呼応し、江西支団部は翌月贛州で第1回全省会議

³⁸ 「蔣青天」は、中国史上もっとも有名な清廉官吏とされる包拯（北宋）の伝記物語「包青天」を振ったもの。江西省贛南で清廉潔白な若手の指導者として登場した蔣経国を賞賛して「蔣青天」の呼称が流布した。

³⁹ 蔣経国はモスクワ孫逸仙大学在学中に壁新聞の編集委員になって積極的に投稿した。ウラル重機械工場の副工場長の役職にあったときは併設の『重工業日報』の編集長を務めた。

⁴⁰ 『江西青年日報』は党報の『贛南民国日報』と事あるごとにコラム蘭などで争っていた。前掲「培養嫡系 自建班底」68頁参照。

を開き、支団部の第2期人事選挙と監察会の新設を発表した。第2期人事⁴¹は以下のとおりである。

- ①幹事会幹事長 : 蔣経国
- ②幹事 : 胡軌、陳宗蚩、胡昌祺、詹純鑑、黃謨熙、欧陽栄、王昇、
許素玉
- ③監察会常務監察 : 劉己達
- 監察 : 柯建安、徐日泰
- ④三青团全国代表大会代表 : 胡軌、陳宗蚩、詹純鑑、王昇、許素玉
- ⑤幹事会書記 : 詹純鑑
- ⑥幹事兼助理書記 : 欧陽栄 (元中央青幹班学生)
- ⑦幹事兼女青年組長 : 許素玉 (江西青幹班修了生)
- ⑧組訓組長 : 李德廉 (江西青幹班第1期修了生)
- ⑨宣伝組長 : 周祥 (江西青幹班第2期修了生)
- ⑩総務組長 : 倪豪 (江西青幹班第1期修了生)

劉己達らは監察会に押し込められ、康澤派およびその他の派閥が枢要な地位を占める状況は一掃された。その後、分団は30余処に増設され、これを契機に蔣経国系が牛耳る三青团江西支団部は全江西省の青年運動を指導することになる。

小結

本章の考察を終えて、以下の諸点を明確に検証することができた。

第1点は、蔣経国は江西省第四行政区行政督察專員という省政治の権力の一角に食い入って「新贛南の建設」を実行するために自派閥を養成する必要があることを痛感し、みずからの派閥形成の場所を新たに設立する三民主義青年団江西支団に求め、未だ他派閥の手が伸びていない青年層を組織してみずからの派閥の基礎を構築したこと。

第2点は、蔣経国派閥の基礎構築が江西省贛南で1939年6月(特察專員就任)～1943年末(重慶赴任)までの4年6ヵ月間に三民主義青年団江西支団で進められたことである。

第3点は、三民主義青年団江西支団における派閥構築過程で蔣経国は主に康澤派(復興社系)の介入を受けたが、青幹班で養成した幹部を自派閥に取り込み、4度にわたる人事改変を断行しながら勢力の伸張を図り、最終的に江西省全域で青年運動を指導する有力派閥に発展したこと、である。

本章では詳論しなかったが、初期派閥の構築過程で康澤派の介入以外にCC系の妨害活動があったことについてもここで簡単に触れておきたい。贛南における蔣経国人気を危惧したCC系は、まず勢力を増しつつある蔣経国に「蔣青天」物語を大いに宣伝させて新聞や雑誌媒体に露出させた。その後、CC系はそれらの切抜きを作り、陳果夫が陳布雷經由

⁴¹ 前掲『蔣経国系史話』54-57頁を参照整理して一覧表にした。

で蒋介石に「太子系が異常に突出してその可否が議論を呼んでいる」とか、「贛政十年の祝賀を挙げるにあたり、蔣青天で贛南第四行政区だけ突出したら残りの9区の立場がない」と熊式輝が憂慮しているなどと注進して、蒋介石が「蔣青天」を抑制することを誘導している⁴²。1940年春、復興社と中統が連合して贛州で共産党の残党分子討伐を実施し、蔣経国系の『新贛南報』の編集長と副刊主編、『抗建通訊社』の編集者、新贛南書店および江西青年文化服務社の経理、江西支団部宣伝組員などが逮捕された⁴³。これによって、宣慰団、政広大隊、宣伝大隊が解散させられ、『新贛南報』が『正気日報』に、新贛南出版社が正気出版社に、『江西青年日報』が『青年報』に改名し、CC系の企ては蔣経国系に一定の打撃を与えた。

改名存続した『正気日報』の総経理兼主筆になったのは蔣経国の孫逸仙大学の同窓で左翼反対派の高理文（高恆）である。高理文はモスクワ留学時代に高恆を名乗り、帰国後は左翼反対派上海滬東区委員会書記兼中央臨時委員会委員を務めたあと、1936年から広西の桂系軍閥の庇護を受け、1939年には贛南で高理文と改名して蔣経国に合流し、第四行政区行政督察専員公署の秘書職に就き、贛南の新政を支えた。新贛南出版社から名称を変えた正気出版社を主宰したのがおなじく左翼反対派の呉季巖と彭桂秋の二人で、当時、贛南の主要なメディアや文化機関は左翼反対派の江西省における拠点の様相を呈していた。高、呉、彭の3人は蔣経国が重慶の三青团中央幹部学校教育長、青年軍編練總監政治主任に転出した際には同行し、抗日戦争後は東北外交特派員として日本が満州に残した武器や資産の接收を担当した際も長春まで行動をともにして『正気日報』の発行を計画し、蔣経国の意向を伝える喉と舌（メディア）としての『正気日報』の発行を計画したことがある。また1948年8月、暴騰する物価を統制するため蔣経国が上海に赴任した際には高理文が呉季巖と嚴霊峰（左翼反対派）を伴って同行し、高は中央信託局顧問に、呉は漁業管理処の高級官吏に就任している。蔣経国が留学時代の同窓だった左翼反対派を優遇した背景には、同派が反中共の一点で国民党との利害が一致したという事情がある。国民党はもともと左翼反対派を中共と同一視して厳しい弾圧を加えていたが、トロツキストの反中共姿勢を理解した後は中国国内における左翼反対派に書店などの拠点を提供して自由な活動を許すようになった。⁴⁴

蔣経国が重慶に転出して三青团中央幹部学校の教育長に就任すると、胡軌も重慶に赴き有力な助手になった。蔣経国はその後、青年軍総政治部主任、三青团中央団部二処長に就任し、中央レベルでも康澤に置き換わった。これにともない、蔣経国の腹心の詹純鑑が江西支団の主任に就任し、王昇が支団書記に昇格している。王昇は後に蔣経国の引きで中央幹校に転勤し、支団書記は江西青幹班修了生の李徳廉に引き継がれた。女青年組が廃された後、組長だった許素玉は江西省信豊県長に昇進し、中国では初めて女性として県長職に

⁴² 蒋介石は1939年10月21日、蔣経国に宛てた書簡で「仕事では当地の実際工作を重視すべきであり、対外宣伝を行う必要はない。我が家の子弟は目立たないほど、人に嫉妬されずにすむ」と諭している。これは江西省で華々しく活動している蔣経国の行動を憂慮し、敵対派閥を刺激しないようにと慮ってのことだろう。書簡は、蔣経国『我的父親』（台北・三民初局、1975年）116頁所載。

⁴³ 前掲『蔣経国系史話』61-63頁を参照整理。

⁴⁴ 以上、贛南、重慶、東北、上海における蔣経国と左翼反対派の関係については、唐寶林『中国托派史』（台北・東大図書、1994年）319-321頁を参照。

就いている⁴⁵。

国民党と三民主義青年団は1946年に合併し、実際は三青团が国民党に吸収される形になった。蔣経国は贛州の基盤を手放すに際して、書記の王昇を戡建六大隊の少将大隊長に任じ、胡軌を戡建総隊の中将総隊長に、詹純鑑を青年軍高級幹部に登用し、周祥、俞諧らの分団幹事は県長職に就き、その他の多くは蔣経国、胡軌、詹純鑑、王昇らに従った。蔣経国はさらに李徳廉を国民党江西省党部に送り込み、書記長の高位に就かせ、派閥発展に抜かりのない布石を打っている⁴⁶。

蔣経国が江西省贛南で進めた派閥の基礎構築は、このあと重慶、南京、そして台湾遷占後は青年反共救国団の養成とつづいて最終的な派閥構築の完成をむかえる。

⁴⁵ 前掲「培養嫡系 自建班底」65頁参照。

⁴⁶ 同上68頁参照。

第6章 新贛南の建設——蔣経国の江西省第四行政区における新政

はじめに

ソ連から12年ぶりに帰国し、故郷の浙江省奉化县溪口镇に塾居していた蔣経国が江西省南昌市に赴任したのは1937年10月のことである¹。翌年1月には江西省保安処少将副処長に任命され、同年内に青年服務団副団長（3月、任地は南昌）、地方政治講習院学生軍訓総隊長兼訓育処副処長（4月、同上）、保安司令部新兵督練処少将処長（9月、撫州臨川温泉）と矢継ぎ早に省政治のキャリアを積んでいく²。この約1年はいわば見習い期間で、蔣経国を江西省の地方政治に引き入れた熊式輝（江西省主席）はソ連から帰国した蒋介石の長子の能力や思想を注意深く観察していた。蔣経国が一定の政治権力を付与され、みずからの政治的心情に基づき能動的に江西省の地方政治にコミットしたのは1939年6月に第四行政区行政督察專員³に任命されてからのことで、贛南とよばれる江西省の南部地区がその仕事の舞台となった。

新贛南の建設は第1期（1940～43年）と第2期（1944～48年）に分けて実施された。その内容は農林業、工鉱業、商業などの各種産業建設、道路敷設や内陸水運、通信、郵便施設の整備を含むインフラ建設、教育、文化、医療衛生、救済⁴、そして政治改革を含む壮大なもので⁵、およそ地方政治にデビューしたばかりの新米職員に打ち上げることができるような簡単な政策ではなかった。では、蔣経国はなぜそのように困難な政治目標を設定したのか。国民党および国民政府の縦糸である職階と横糸として機能した派閥の縛りが厳しい状況の中で、新任の蔣経国が贛南における大胆な改革を断行するための社会・政治環境はどこに存在していたのか。新贛南の建設が目指した改革とは具体的にどのようなものだったのか。これらの疑問を明らかにすることが本論の達成すべき課題である。

第四行政区行政督察專員という役職は蔣経国が民国政治にコミットした実質的な出発点であり、督察專員の任地である贛州で立案実施した新贛南の建設を注意深く検討してゆけば、良くも悪くも蔣経国の思想領域におけるピュアな核心がそこに顕現することは間違いない。その核心の実体をあぶり出すことは、とりもなおさず地方行政を皮切りに民国の政治舞台にデビューし、やがて台湾政治の中枢に玉座を確保して中華民国の再編を断行し、本土化（台湾化）を達成した蔣経国という人物の政治的な土壌の原型を掘り返すことである。それは中国大陆から台湾へと中華民国の歴史を縦走する蔣経国政治の原風景を確認することであり、蔣経国研究を推進するための重要な一里塚と言える。

¹ 張瑞成編撰「蔣経国先生記事年表 1910-1988」、『蔣経国先生全集』記事年表上輯（行政院新聞局、1992年）60頁。

² 同上。

³ 序章注12、第5章注7を参照。

⁴ 貧困対策、売春婦らに対する職業訓練、抗日戦争で生じた孤児や退役軍人に対する社会保障事業を指す。

⁵ 蔣経国先生全集編輯委員会「建設新贛南第一次三年計画」『蔣経国先生全集』第二十冊（行政院新聞局、1992年）138-160頁、および同前「建設新贛南第二次五年計画提綱草案」『蔣経国先生全集』第二十冊 195-199頁。

第1節 新政の前提

江西省贛南の社会と政治をドラスティックに変革することを狙った新贛南の建設の展開過程に踏み込むために、本節ではまず蔣経国に壮大な計画を立案させた動機を解明しなければならない。そして、計画の雛形になったと思われる新生活運動と新贛南の建設の関係について検討し、それぞれの「運動」あるいは「建設」が実施された政治・社会環境に着目して蔣経国の計画に追い風となった要因をさぐっていききたい。

1-1 工業か、それとも政治か——蔣経国が新政を決意した個人的動機

蔣経国はソ連に滞在した12年間に前後2回、蒋介石を厳しく批判する演説や書簡を発表している。それらはタス通信や『プラウダ』紙などのマスコミを通じて中国はもとより全世界に配信された。第1回目の蒋介石批判は蔣経国がモスクワ孫逸仙大学を卒業する直前の1927年4月のことで、全学糾弾集会で発言し、蒋介石が上海で発動した4・12反共クーデターを共産主義青年団の立場から批判したものである。

第2回目の蒋介石批判は、一般的に1935年1月に発生した「母への手紙」捏造事件として知られる母親毛福梅宛ての私信の中で実行され、第1回目の批判以上に蒋介石を人民の敵として厳しく批判している。この手紙は蔣経国が能動的にしたためたものではなく王明が代筆したものとされるのが通説だが、いずれにしても蔣経国の名前で投函され、マスコミにより世界に発表されているので、蒋介石はこれを目にしているはずである。

蔣経国の帰国が1937年4月に実現した背景には、張学良らとともに西安事変で蒋介石を掃共から抗日に誘導した周恩来の依頼を受け、スターリンがソ連国内で12年間も塩漬けにした蔣経国の帰国を許したという経緯がある。上述した内容からもわかるように、蔣経国は帰国後、蒋介石に少なくとも2種類の負い目を感じていた。そのひとつはソ連滞在時、公開の場で2度にわたり蒋介石を罵倒し批判したことである。帰国した蔣経国は、そのことを蒋介石が許してくれるだろうかと危惧していた。ふたつ目は帰国後に判ったことだが、みずからの帰国が蒋介石の翻意、すなわち西安事変による軟禁状態の中で抗日の決断をした蒋介石にスターリンが好感して自分の帰国が実現したという経緯である。

蔣経国は帰国後、故郷の溪口鎮で各地を転戦する蒋介石と書簡のやりとりをするなかで今後の希望（仕事）を問われて「政治か工業のどちらか一つ」を希望し、その理由は共産党出身の自分が政治問題でこれ以上父親に迷惑をかけたくないということ、もうひとつはソ連で従事した仕事の経験を生かし、誠心誠意、国の工業化に貢献したいと思ったからだ⁶とされる。

蒋介石は蔣経国に政治の道を選び、その身柄を江西省主席の熊式輝に託した。蔣経国は江西省に赴任すると、翌年1月には南昌の保安処少将副処長に任命され順調にキャリアを

⁶ 江南『蔣経国伝』（李敖出版社版、1984年）86頁。

積み、やがて江西省第四行政区行政督察專員として赴任した贛洲に落ち着く⁷。そこで「新贛南の建設」計画を温め始めるのだが、その計画が新任の督察專員には荷が重すぎるほどの壮大な計画になったのは、自分を許してくれた蒋介石に報い、ソ連で従事した仕事の経験を生かし、督察專員という政治の仕事を通じて国の工業化に貢献したいと思う気持ちから、計画立案に力がこもったものと推測できる。

1-2 新生活運動と新贛南の建設

新贛南の建設の実際についてはこれから検討を加えていくが、目指した到達点は蒋介石が江西省の南昌を皮切りに全国で展開した新生活運動の発展型だった。江西省第4行政区行政督察專員として贛南に赴任した蔣経国は、捗々しい成果をあげられないでいた新生活運動の現状にみずからの活路を見いだした。贛南民衆の困窮と土豪劣紳の跋扈に直面した蔣経国は新生活運動に新たな味付けをして新贛南の建設構想を打ち出すことになったのである。

新贛南の建設を説明すれば、「人人有飯吃」（人にみな食す飯あり）、「人人有衣穿」（人にみな着る衣服あり）、「人人有屋住」（人にみな住む家あり）、「人人有書読」（人にみな読む書物あり）、「人人有工做」（人にみな就く職あり）の5大目標、つまり贛南民衆の「食、衣、住、教育、職」の問題を3年かけて解決する⁸というものである。これは蒋介石が江西省の南昌を皮切りに全国展開した「食、衣、住、行（教養と礼節のある行い）」を「礼、義、廉、恥」に合致させて「大衆の知識・道德水準を高め、国家と民族を復興させる」ために発動した新生活運動⁹の発展形態である。すでに明らかのように、蔣経国は蒋介石が提唱した「食、衣、住、行」に加えて「職」の創出を新たな達成目標に加え、ソ連の経済発展モデルを模倣して計画の充実を図った。

1-3 新贛南の建設を推進した政治状況の転換

新任の督察專員には相応しくないほど計画が壮大で、展開手法の面でソ連の経済発展モデルに似通っていた新贛南の建設がなぜ当時の国民党内で容認され、若輩といっても過言ではない蔣経国の手によって成果を挙げることができたのか。建設計画の実態を検討する前に、このことを明らかにしておく必要があるだろう。

蒋介石が南昌を起点として新生活運動を全国に号令したのは1934年2月のことである¹⁰。これは第5次掃共作戦（1933年10月16日～1934年10月14日）の最中で、国民党内の主要な政治状況は「反共」だった。つまり、新生活運動は「安内攘外」政策にもとづく反共活動の一環として始まり、推進されたのである。

7 前掲「蔣経国先生記事年表 1910-1988」65頁。

8 蔣経国が新贛南の建設に言及した演説稿や行政文書は多数あるが、ここでは專員公署の部下らに訓示した「樂觀奮闘赤手空拳打天下」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）63頁を挙げておく。なお、新贛南の建設を政策として実施する際に発表したものとしては「建設新贛南第一次三年計画」『蔣経国先生全集』第二十冊（行政院新聞局、1992年）138～160頁が正式な計画書である。

9 段瑞聰『蒋介石と新生活運動』（慶応義塾大学出版会、2006年）46頁。

10 蒋介石は1934年2月19日、南昌行營で「新生活運動之要義」について講述し、推進機関の促進会が設立されて新生活運動がスタートした。秦孝儀総編纂『總統 蔣公大事長編初稿』卷三（財団法人 中正文教基金会、1978年）16頁。

これに対して蔣経国が新贛南の建設を立案したのは第4行政区行政督察専員として贛南に赴任した1939年6月¹¹以降のことであり、計画が実施に移されたのは「建設新贛南第一次三年計画」が通達された1940年12月以後のことである。この時期はすでに西安事変を経て国民党と共産党が「一致抗日」政策の下に第2次国共合作¹²に入った後であり、国民党内の政治状況が表向き「容共」であったことは間違いない。計画の詳細は後段で検討するが、新贛南の建設計画の底流には当時の時代背景を濃厚に反映して、贛南民衆の生活を軍事化する「抗日」思想が流れている。

南昌で江西省の地方政治にデビューした蔣経国がみずからの党内活動を支える基礎派閥の構築¹³に取りかかったのは三民主義青年団江西支団の育成を通じてであり、それは新贛南の建設と時期をひとつにしている。つまり蔣経国が新贛南の建設を推進し始めたときには、まだみずからの政策を実施する強力な支持母体を有していなかったということである。前章で述べたことの繰り返しになるが、武漢陥落後、日本軍の攻撃は江西省にまでおよび国民党軍の行営があった南昌市に集中したので、蒋介石の「攘外」政策に呼応した各派閥はここに集結して覇を争った。こうした時代背景の中で蔣経国は南昌市に赴任した。ソ連から帰国したばかりで国民党内における仕事の進め方よりもソ連的な手法により精通していた蔣経国は多くの共産主義的な言辞や行動が見られたため、党内では共産主義的な人物として注視され、警戒されていたはずである。その党内における弱みが大きく問題化し、建設計画の足かせにならなかったのは、ひとえに当時の政治状況、つまり国共両党の「一致抗日」政策から生まれた第2次国共合作が僥倖したと言えよう。内容面では蒋介石の新生活運動に「贛南民衆の職の確保」という新たな目標を付加した既存運動の継承だったが、その具体的な実施方法や管理手法の面で多分にソ連的な様相を呈した新贛南の建設は、第2次国共合作で国民党内に醸し出された表向きの「容共」気運が追い風になったのである。

第2節 新政の展開

蔣経国は江西省第四行政区行政督察専員として、贛南¹⁴の専員公署に6年間勤務¹⁵した。蔣経国が赴任した当時の贛南は上述したように「民窮財困、土劣横行、文化落後」の状況だった。江西省の化外の地といわれて複数の軍閥が支配し、民間には「天と地と総裁を除けば奴らの天下」¹⁶という言葉が生まれるほど政治や警察の権力が無視されていた。大庾、尋烏、竜南、定南、虔南の広東省と境を接する5県の県長は広東省政府から派遣されてい

¹¹ 前掲「蔣経国先生記事年表1910-1988」65頁。

¹² 第2次国共合作は1937年9月から1946年7月まで維持された。

¹³ 蔣経国が基礎派閥を構築した経緯については次章で行論する。

¹⁴ 贛県、南康、上猶、崇義、大庾、信豊、虔南、竜南、定南、安遠、尋烏の11県を管轄下に抱え、人口は約160万人だった。蔣経国先生全集編輯委員会「吃苦冒險創造建設贛南」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）4頁、前掲「贛南新政、面面俱到」43頁。

¹⁵ 蔣経国の江西省第四行政区行政督察専員としての任期は1939年6月11日から1945年7月までの6年間だが、1943年11月に陪都に新設された中央幹校の教育長として勤務先を重慶に移したので実際に贛南で勤務した期間は4年半弱である。前掲「蔣経国先生記事年表1910-1988」65、108、125頁。

¹⁶ 前掲「吃苦冒險創造建設贛南」15頁。

た。江西省政府の政令がこれらの地まで及んでいなかったのである。それらの地における兵役義務は売買され、米価は奸商につり上げられ、民衆の生活は困窮し、アヘン吸引者の数は20万人以上に達し、賭博場の規模はマカオに次ぐという社会の混乱状況にあった¹⁷。

蔣経国の新政、すなわち新贛南の建設は、こうした社会の旧弊を改め、新しい社会を創出することを目標にした。計画は前期3年計画（「建設新贛南第一次三年計画」＝1940年12月通達、1941～1943年実施）と後期5年計画（「建設新贛南第二次五年計画提綱草案」＝同12月通達、1944～1948年実施）に分けて発表された¹⁸。すでに述べたように、計画は農林業、工鉱業、商業などの各種産業建設、道路敷設や内陸水運、通信、郵便施設の整備を含むインフラ建設、教育、文化、医療衛生、救済、そして政治改革を含む壮大なものだ。個々の詳細を見る前に、まず全体を俯瞰してみよう。

第1期の「建設新贛南第一次三年計画」は以下の内容について、専員公署、県、区、郷鎮、保のそれぞれが主管すべき責任範囲を細分化して規定している。

- ①経済建設：農業、林業（予算は農林合わせて20万元）、工業（民間資金を60%以上とする）、商業（予算は総額245万元）、鉱業、交通
- ②文化建設：学校教育、社会教育、文化事業
- ③政治建設：地方自治、衛生行政、社会救済

計画が完了する3年後までに新たに331工場を開設し、荒地2万畝を開墾し、314の新農場を開き、そこに2995カ所の農業模範区をつくり、3000社の合作社を設立し、6043カ所に水利施設を建設し、321の果樹園を開園し、259棟の新校舎を建設するというものである。そして建設事業の目的は単に工場や学校、農場などの物質建設にあるのではなく、あくまでも物質建設を媒介とした人民生活と心理の改造であり、最終目的は贛南の人口を増やし、人の素質を改造して「人人有工做」、「人人有飯吃」、「人人有衣穿」、「人人有屋住」、「人人有書読」を実現することと規定している¹⁹。

次に第2期の「建設新贛南第二次五年計画提綱草案」を見てみよう。第2期の計画草案では、第1期の最終目標である「職、食、衣、住、行」の達成に加え、「人民」の義務及び権利として「人人要労働」（人はみな労働をすべき）、「人人要読書」（人はみな読書をすべき）、「人人要当兵」（人はみな兵役に就くべき）、「家家穿得暖」（人はみな必要な衣服を持つ）、「家家吃得飽」（人はみな十分に食べる）、「家家住得好」（人はみな快適な住居に住む）を掲げ、経済建設の機械化推進、文化・教育建設の一貫としての科学館や大学の設立などを強調して内容を深化させている。

第1期と第2期に共通しているのは、①抗日のための生活の軍事化、②各建設分野における集団（合作）化、公営化、労働の義務化と建設過程における搾取構造の排除など、その手法はソ連的な色彩が濃厚なことが特徴として挙げられる。それでは以下に新贛南の建設を進めるための前提となった混乱社会の秩序回復（具体的には、地方武装勢力の整頓と兵役制度の改革、アヘン・賭博・売春の取り締まり）、それに新贛南の建設の中核ともいえる農業建設、商業建設、教育・文化建設などの諸点について具体的に見ていくことにしよう。

¹⁷ 前掲「吃苦冒險創造建設贛南」4-40頁、前掲「贛南新政、面面俱到」44頁などを参照。他に方世藻『建設新贛南』上（中国文史出版社、2003年）、郭晨『蔣経国密碼』（團結出版社、2005年）などでも言及している。

¹⁸ 注5を参照。

¹⁹ 前掲「樂觀奮闘赤手空拳打天下」62～63頁。

う。

2-1 地方武装勢力の整頓と兵役制度の改革

蔣経国は新贛南の建設を恙なく実施するために、まず環境整備に着手した。それは政策遂行の後ろ盾となる武装勢力を江西省政府、すなわち第4区保安司令部（蔣経国が保安司令を兼務）の命令系統に組み込むために地方武装勢力（人民自衛隊）を整理・整頓²⁰することであり、それと並行して抗日戦争に潤沢な兵力を供給するための兵役制度の改革を断行することだった。

贛南の地方武装勢力は劉甲第をはじめとする「豪強」と称された地方ボスに牛耳られていたが、保安司令部は贛南11県の人民自衛隊の下士官クラスを合同訓練の名目で訓練団あるいは軍事訓練隊に組織し、2ヵ月間にわたり省軍兵士としての自覚を養うための訓練を施した。さらに贛南全域に45中隊あった人民自衛隊を14中隊に再編し、同時に政工システムを敷いて隊内に政治指導員と政治助理員を配置し命令系統の強化を図った。また、これまで県長が大隊長を兼務した旧習を廃して区に総隊長を新設し、それを保安司令部直属として蔣経国の指揮下に置いたのである。これにより信豊、上猶などに見られた異党活動は保安司令部の清郷隊によって肅清され、それまで各地に存在した地方武装勢力の病根はわずか3ヵ月間で激減した²¹。没収した銃器は1万1543丁を数え²²、以後、地方武装勢力の跋扈は不可能になった。劉甲第らの「豪強」は背骨を抜かれた形になり、贛南の民衆は「悪虎」と呼んで恐れた劉を「紙虎」と軽視するようになり、建設計画開始から2年後には「死虎」という蔑称に変わっていた²³。

蔣経国は新贛南の建設がスタートして半年経った1941年8月1日、第4行政区建設委員会行政会議の開幕の辞で上半期の工作概況を振り返り、「今後、軍法室の業務がなくなることが理想だが、現実はまだほど遠い。しかし昨年とくらべると仕事量は半減しており、土匪は肅清されたといえる」²⁴と述べ、地方武装勢力の整理と整頓が初期の目的を達したことを明らかにしている。

兵役制度の改革は1939年8月、蔣経国が南康県で開催された全区兵役行政会議で提案し、さらに「建設新贛南第三年計画第一年実施準則」の「保安類」の中で「切実整頓兵役」の項に明記されている²⁵。それによれば徴兵事務の遂行に際して「違法徴兵」²⁶を厳罰とし、壮丁の募集を加速し、出征軍人家族の保護救済に力を尽くすというものだ。兵役改革の骨

²⁰ 地方武装勢力を整理・整頓する方針は1939年10月19日に開催された第4行政区治安会議において蔣経国が行った開幕の辞で示された。蔣経国先生全集編輯委員会「整訓自衛隊議決治安方針」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）1-3頁。

²¹ 前掲「贛南新政、面面俱到」47-48頁。

²² 蔣経国先生全集編輯委員会「展開現代化科学化的地方建設」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）156頁。

²³ 前掲「贛南新政、面面俱到」48頁。

²⁴ 前掲蔣経国「展開現代化科学化的地方建設」156-157頁。

²⁵ 蔣経国先生全集編輯委員会「建設新贛南第三年計画第一年実施準則」『蔣経国先生全集』第二十冊（行政院新聞局、1992年）224-225頁。

²⁶ 徴兵事務に関与した「豪強」や腐敗した地方官吏が兵役の売買で不法利益を得る行為を指しているものと思われる。

子²⁷は以下のとおりである。

①精神動員

年末より、徴兵に際し各県政府は兵役法令を大量に印刷して日本侵略者の暴行と前線兵士の英雄抗戦ストーリーを宣伝する。文化教育界も小中学校で抗日兵士の英雄行為を讃える歌謡や芝居を用意し、抗日英雄を招いて講演会を設ける。大量の出版物を発行して「国は私たちの巣であり、家庭は卵のようなもの。巣が壊されれば卵も割れ、国が滅べば家庭を保つことはできない。だから救国を優先しよう」、あるいは「嫁に行くなら兵士のもとへ、戦に勝って凱旋すれば出世する、国を救って嫁を守ろう」などの民謡を改作したスローガン²⁸を流布させ、「好漢は兵隊に行かない」という古い観念を打破し、民衆の抗戦意識を高揚させ、「兵役は無上の光栄」という気運を醸成して応召兵士の数を増やす。

②応召軍人に対する優遇措置

応召兵士の新兵征集所（新兵招待所）における行動に自由を与え、各種娯楽装置や雑誌、画報などを揃え、食費や小遣い金を支給し、前線に赴く際には県長や現地党政団幹部が爆竹を鳴らして歓送する。

③出征軍人家族の保護救済

第4行政区督察專員公署は1940年初、出征抗敵軍人家族優待委員会を設立し、一時的に労働力を失う出征新兵家族を保護救済するための一時金、春秋冬の穀金給付、双十節、太陽節（蒋介石の誕生記念日）の慰労品支給などの優遇措置を決めた。各県政府も同委員会の指導の下、出征家庭の入り口に「光榮之家」の張り紙を出して栄誉を讃えた他、各種の政府関係機関を通じて子女に対する教科書などの無料支給、医療費の無料化、無料分娩、農繁期の託児、農作物の収穫作業の援助、手紙や書類の代書サービスなどを実施している。

こうした兵役制度の改革は一般民衆に対して、兵役に服せば家族が優待されることを広く知らせ、旧来の「好漢は兵隊に行かない」という考え方を改めさせ、徴兵工作に寄与した。具体的には、贛南全域における第1期3年計画の徴兵目標人数が4万3893人だったのに対し、実績は4万2765人でほぼ計画値を達成²⁹している。

2-2 アヘン・賭博・売春の取り締まり

新贛南の建設を実施するための環境整備として、蔣経国は旧習で紊乱した社会状況の改善にも取り組んだ。以下、特徴的な事例としてアヘン、賭博、売春の取り締まりについて見てみよう。

蔣経国は1939年6月30日、アヘン吸引の禁止に関し、賭博、売春とともに厳しく禁ずる公告（三禁令）³⁰を専員公署から出した。1940年11月1日に開かれた第4行政区扩大行政會議の開幕辞で南康県におけるアヘン禍の実態について報告し、街には「高等談話所」

²⁷ 前掲「贛南新政、面面俱到」60-63頁。

²⁸ 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」17-18、26頁。

²⁹ 蔣経国先生全集編輯委員会「用心血来培養革命的幼苗」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）409頁。

³⁰ 前掲「蔣経国先生記事年表1910-1988」66頁。

（アヘン窟）が散在し³¹、吸引常習者の数が約 2 万人、毎年 1 人当りの消費額は 120 円で年間総額が 240 万元に達し、その他の水タバコ、刻みタバコ、捲きタバコを含めると 1 年間に 370 万元が煙になって贛南民衆の健康と財政を蝕んでいたと指摘している³²。これは贛州に隣接する南康県 1 県の数字であり、贛南 11 県の状況を単純計算すれば 22 万人がアヘンに取り憑かれ、そのために 2640 万元の巨費が消費され、「豪強」など地元ボスたちの資金に吸収されていることになる。

こうした状況に対して、蔣経国は前年 7 月からまず贛州最大のアヘン商だった宝成土膏商行や特殊公売処を封鎖し、アヘンを入手できなくなった重度中毒者を新設した「勸戒所」に送って禁断症状を治療した。これについて贛県新志稿は、全国禁アヘン運動に先鞭をつけた、と評価している³³。蔣経国はさらに摘発されたアヘン吸引者、アヘン商、吸引器具販売商らを極刑とする決定を行っている。贛州最大のシルク商、雷慶春のアヘン吸引現場を押さえた際には家族が航空機 1 機を贈呈する条件で熊式輝を買収したにも関わらず、雷を銃殺刑に処し、熊式輝に対しては「特赦の電報を受け取った時、すでに処刑済みだった」と返電した³⁴。江西省主席の特赦要請電報を無視して刑を執行するところに蔣経国が新贛南の建設にかけた決意を見ることができよう。拡大行政会議が開催された 11 月時点で、蔣経国の報告は贛南におけるアヘン吸引の旧習が改められ、状況が大幅に改善されたことを明らかにしている³⁵。

賭博についても 1939 年 6 月の専員公署公告（三禁令）で禁じたが、賭博場側も私設の警備を配してこれに抵抗した。その代表が利民百貨商場賭場を経営する国民党中將の李振球と銀牌響館を主催する「豪強」大紳士の劉甲第らだった。同年 10 月、蔣経国は特務処および省警第 2 大隊を率いて利民百貨商場の賭場と銀牌響館に踏み込み、現金、金塊、宝石など 2 万銀元を押収した。

翌年 7 月 30 日には「禁止各色人等賭博」訓令を出し、博徒に対して 10 月末日までに賭博用具を廃棄するよう命令し、違反者は抗日戦争妨害罪で処断されることを伝えた。それにも拘わらず、専員公署民政課長と鹽務局長の妻が賭博に興じたため逮捕し、贛州公園にある抗日陣亡烈士記念碑の前に赤いベストを着せて 3 日間跪かせ、その後も春節（旧正月）まで刑務所に拘置するという厳しい処置をとっている。1942 年初には第 4 行政区自衛大隊を使って禁賭巡查隊を組織し逮捕された違反者をすべて強民工場に送り強制労働に処し、翌年にはさらに「嚴禁賭博辦法」を定めて街頭に「罪惡板」を設け、違反者は「罪惡板」の横で 3 日間晒し者にされて板上にその氏名を書き入れられた。晒し者の第 1 号は南康県の「豪強」陳泰祖だった³⁶。

売春業は地方政府に登録済みで「花捐」（売春婦税）を納めていたため、取り締まりは上述したアヘンや賭博に比べて困難をきわめたようだ。当時、贛南全域には売春宿が 150 件、

31 蔣経国は贛南 11 県で 259 のアヘン窟があると報告している。前掲「吃苦冒険創造建設贛南」34 頁。

32 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」12-18 頁。

33 文思主編『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003 年）48 頁。

34 前掲「贛南新政、面面俱到」48-49 頁。

35 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」15 頁。

36 前掲「贛南新政、面面俱到」48-49 頁。

売春婦の数は 1000 人³⁷を超え、それを禁止すれば税収が大幅に減るからだ。1939 年 6 月 30 日に専員公署から三禁令（アヘン、賭博、売春の禁止）が出ると、贛県の「三劉」（劉甲第、劉紀雲、劉定全の 3 人）³⁸らが異議を申し立てたが、蔣経国はそれにかまわず売春宿を閉鎖し、各県に対して「花捐」の徴収を停止するよう通達した。そして 2 万元の予算を手当てして婦女工場を設立し、売春婦を落籍させて技能訓練を施した。三禁令を施行して 2 年後、再び布告を出して贛南全域の売春を厳禁した³⁹。

上述したアヘン、賭博、売春の取り締まりは贛州あるいは贛州近隣の比較的繁華な地域が中心だった。湖南、広東省境の上猶、崇義、信豊、竜南など専員公署の政令が及びにくい僻遠の県においては 1939 年 10 月に第 4 行政区保安司令部が清郷委員会⁴⁰を組織し、「政治と教育の力で土匪を消滅する」方策が採られた。「政治と教育の力」とは抗日戦争への協力などを呼びかける清郷活動の中で住民にアヘン吸引や賭博、売春行為を密告させることで、これにより匪賊の頭目 46 人、541 人の土匪が保安司令部に自首した⁴¹。清郷委員会の発足から約 8 ヶ月時点（1940 年 6 月）で専員公署の軍法室が扱った土匪関連の事件は 49 件、翌年 2 月には 37 件、翌々年には 18 件へと減り、アヘンや賭博の案件は激減した⁴²。

蔣経国がアヘン、賭博、売春を禁止したのは紊乱した社会状況を改善して新贛南の建設を実施するための環境作りだったが、その創出すべき環境のひとつに民衆が三毒（アヘン、賭博、売春）で消費する金銭を新政の実行資金に還流させる目論みがあった。上にも触れた 1940 年 11 月 1 日の第 4 行政区拡大行政会議の開幕辞で蔣経国は「今日、私たちは資金も人材も不足しているが、革命的精神を持てばその不足を実際の仕事の中で補うことが可能で、必ず潤沢な資金と人材を獲得することができる」と指摘している⁴³。

2-3 農業建設——贛南全域における合作組織の普及

贛南は開発がおくれた農村社会であり、「靠天靠神」（天神に頼る）、あるいは「聽天由命」（天命にまかせる）などの改革や進歩に対する諦念が民衆の脳裏に充満し、農業生産は完全に自然の支配を受けていた。自然条件に対するこのように受け身な農業現場の蒙昧を是正し、贛南の農業生産を科学的で光明に満ちた軌道に載せよう⁴⁴と試みたのが新贛南の建設の経済建設分野に規定された農業振興政策である。蔣経国にこの農業振興策を急がせたのは、贛南もまた他の農村と同じように、地主や土郷劣紳の農民に対する搾取構造が悲惨を極めていたからだ。蔣経国はソ連から帰国直後、蒋介石から故郷の浙江省奉化县溪口镇で蟄居を言い渡され「農村の利と弊でも研究していよう」と命じられた。あるいはその時の

³⁷ 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」35 頁参照。蔣経国は売春婦 1 人に毎日平均五元支払われ、年間では 180 万元が劣情に消費されていると指摘している。

³⁸ 劉甲第は「豪強」の大紳士で、劉紀雲は江西省国民党部委員兼贛省政府財務委員会委員長、劉定全は贛省政府経征処主任の公職にあった。

³⁹ 前掲「贛南新政、面面俱到」49-50 頁。

⁴⁰ 「清郷」は、地方の保安維持のために匪賊の拠点などを討伐する活動などを指す。

⁴¹ 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」17 頁。

⁴² 前掲「贛南新政、面面俱到」50 頁。

⁴³ 前掲「吃苦冒険創造建設贛南」35 頁。

⁴⁴ 蔣経国先生全集編輯委員会「掀起糧食豐收運動」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992 年）275 頁。

研鑽がこの農村振興政策のヒントになったのだろう。

新贛南の建設第1期3年計画⁴⁵の冒頭に大書された農業建設における達成課題は、①荒地の開墾、②農場の複数開設、③合作組織の普及、④冬耕の推進、⑤植綿の推進、⑥農地と水利の修繕、⑦家畜の病気予防、⑧果樹園の開発、⑨農民新村の建設、⑩農機具の改良の10項目である。この中で農業建設の中核に据えられたのが合作組織の普及で、それを推進するために各県に合作事業促進会を設立して「人民」が合作社を組織するための援助を実施し、県政府と協力して合作事業に関する宣伝、農民訓練、資金調達事務を担当するよう規定している。県の下部組織に当たる郷には郷鎮合作社を、その下の「保」には保分社を設立して合作のネットワークを構築して全民合作化を促し、改良技術の普及、農機具の共同購入、低利融資、農業産品の流通援助などの細目を定めた⁴⁶。そして合作社の育成については、郷鎮合作社の中から中核となる中心合作社を選び、各郷鎮は第1年目に合作組織の3分の1を完成させ、社員は少なくとも4千人に達し、毎年の出資金は8000元とする。2年目には組織の3分の2まで完成させ、社員は少なくとも1万人に達し、出資金も4万元まで増大する。3年目に合作組織は完成し、社員は少なくとも1万5千人に達し、出資金も7万元まで増大するとしている。前段で触れたことの繰り返しになるが、第1期計画の3年以内に荒地2万畝を開墾し、314の新農場を開き、そこに2995カ所の農業示範区⁴⁷をつくり、3000社の合作社を設立し、6043カ所に水利施設を建設し、321の果樹園を開園するという具体的な数値目標も示した。これに対して3年後の実績は657カ所に新農場を開き、荒地の開墾面積は7万9402畝に達し、完全に目標を達成している⁴⁸。これら以外の目標達成状況は資料がないので不明だが、贛南一帯で蔣経国人氣が沸騰し「蔣青天」⁴⁹と称賛された事実があったことを考え合わせると、計画は全体として十分に評価できる成果をあげたものと思われる。

2-4 商業建設——食料・必需品の統制販売を実施

抗日戦争で首都機能が陪都の重慶に移り、それにともない軍隊の兵站が都市部から贛南に移ったことで贛州近隣の人口が増加し、食料の確保が喫緊の課題になってきた。それに加えて新政実施の前年、すなわち1940年には旱魃が発生して穀類の大幅減産を招いたため、奸商が投機を目的に在庫を売り渋って食料価格が暴騰した。新贛南の建設における商業改

⁴⁵ 蔣経国先生全集編輯委員会「建設新贛南第一次三年計画」『蔣経国先生全集』第二十冊（行政院新聞局、1992年）138-141頁。

⁴⁶ 合作社方式の発想、および農機具の共同購入、農民への低利融資の手法は、蔣経国がモスクワ郊外のシコフ村で農村ソヴィエト行政委員会の副主席に選ばれ、農村実務を担当する中で培ったものと思われる。蔣経国先生全集編輯委員会「我在蘇聯的生活」『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）41-46頁、および同「我在蘇聯的日子」77-80頁、

⁴⁷ 農業示範区とは地主に使役される雇農を自作農に転換させて経営する農地を指している。新贛南の建設が実施される以前の贛南各県では雇農比率が60-85%だった。蔣経国はこの現実を是正するため「江西省第4区扶植自耕農辦法大綱」を敷いて私有地を買い上げ、無主の地を接収して農地化し、雇農に低利融資してそれらの農地を購入させて農業示範区とし、自作農の育成を図った。前掲「贛南新政、面面俱到」52-53頁。

⁴⁸ 前掲「用心血來培養革命的幼苗」408頁を。

⁴⁹ 第5章注38を参照。

革は、主に奸商の市場独占を廃することにあつた⁵⁰。

新贛南の建設第1期3年計画は商業改革の目標について、営利を求めない公営商業を創設し、合作制度を普及して、さらに中間商人の搾取を除き、商品流通の管制を強化して物価漲落のバランスを保ち、奸商を消滅して商業の公平を図る⁵¹としている。

改革の核心は流通から奸商を排除するため贛南全域に交易公店を設立するというもので、第1年目にはまず贛県に交易公店総店（資本金 50 万元）を設立し、さらに大庾、信豊、南康、竜南の 4 県に分店（それぞれ資本金 15 万元）を設けて「平民」の需要を満たすための生活必需品を販売する。2年目には総店の資本金を 80 万元まで増資し、上猶、崇義、安遠、虔南、定南、尋烏の 6 県に分店を設ける。3年目には総店の資本金を 100 万元に増やし、県以下の郷鎮に 60 の郷鎮交易公店をつくる、としている⁵²。

交易公店をつくる以外の施策には、①郷鎮レベルまで消費合作社を設立して合作消費ネットワークを構築する、②商人政治訓練班を開設して商店主や店員に民族意識（抗日）や服務精神を教育する、③度量衡制度を統一する、④銀行や商會を連合して行商人、義民（殉教した英雄や義勇の民）やその家族に小額融資を実施し商売や生活を援助する、⑤各県に評価委員会を設け日用品や必需品の販路やコストを調査し、価格つり上げに加担した者を懲罰する、⑥違法な独占商を摘発して厳罰に処し、その商品在庫を没収する、などが含まれている⁵³。

いずれの施策も中間搾取を廃して商品流通を改善し、物価の漲落を防いで奸商の暗躍を防止するもので、民衆に対しては「計口授糧」（家族の人数に応じて食糧を配給する）方式を採用し、管制物資以外の闇商品を購入しなくて生活できるような措置が採られた⁵⁴。

第1次3年計画の末年である 1943 年 8 月時点で蔣経国が行政会議で行った計画達成報告によれば、設立された合作社の総数は 1239 社、社員総数は 23 万 7456 名で、資本金は 899 万 4312 元に達し、交易公店事業については資本金が 850 万元に達している⁵⁵。

2-5 教育文化建設——三民主義による贛南の民衆統合と非識字者の撲滅

贛南の「民窮財困、土劣横行、文化落後」状況を改善する目的で計画した蔣経国の新政はすでに明らかなように、上に述べた農業建設と商業建設などで「民窮財困」に対応し、地方武装勢力の整頓とアヘン・賭博・売春の取り締まりで「土劣横行」の紊乱した社会状況の是正を目指した。文化教育建設は、それらの基礎の上で贛南全域を蝕む「文化落後」状況を突破することを目的としたものである。

教育建設については、総理（孫中山）の遺訓と政治、経済、軍事を融合させて国民教育の普及に努め、地方自治の基礎を養い、民衆に戦時知識を注入し、民衆に対する組織的な訓練を実施することで生産活動を活性化して生計を改善し、非識字者を一掃し、民族意識

⁵⁰ 蔣経国先生全集編輯委員会「發動民力促進地方自治」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992 年）134 頁。

⁵¹ 前掲「建設新贛南第一次三年計画」144～145 頁。

⁵² 前掲「用心血来培養革命的幼苗」408 頁。

⁵³ 同上。

⁵⁴ 前掲「贛南新政、面面俱到」50-52 頁。

⁵⁵ 前掲「用心血来培養革命的幼苗」409 頁。

を醸成し、生活技能の向上を目的とすると謳い上げている⁵⁶。また文化建設について蔣経国は、三民主義に基づいて広く文化政策を展開し、社会に浸透する封建思想を打破し、民族精神を発揚して、民衆の知識水準を向上させ、社会の進歩を促すことを目指す、としている。総理の遺訓とはすなわち三民主義と同義であり、文化教育建設が三民主義を基礎とする初歩的な教育（非識字者の一掃）の普及、民族精神の扶育、抗戦意識を養うための民族主義教育の実施、そして生産促進による民生の向上を目的としていたことがわかる。以下、教育建設と文化建設が目指した具体的な内容について簡潔に見ていこう。

教育建設は以下の 20 項目⁵⁷を計画に挙げている。

① 中学の創設

贛南では未だ 6 県に中学が無く、計画 2 年目までに中学 1 校を設け、3 年目には成績優秀な中学に高中班（高等学校）を設ける。

② 職業学校の創設

計画 2 年目に贛県（蔣経国が県長を兼務）に農業、商業、工業系の職業学校を各 1 校開校し、その他の県では必要に応じて初級実用学校を設ける。

③ 青年訓練の実施

青年訓練大綱および国民精神総動員法に基づき、青年の思想、体格、品格、生活態度を改善するための訓練を実施することを各級学校に促す。

④ 郷鎮の中核小学校に高級班を設け、中心学校と改名する。

⑤ 国民学校の普及

贛南全域には行政区画としての「保」⁵⁸が 2714 あり、「保学」（保が経営する学校）の総数は 2036 校である。計画 1 年目には 728 保学を「保」国民学校に改編し、2 年目には 730 校、3 年目には 578 校をそれぞれ「保」国民学校に改編し、さらに 194 の国民学校を増設する。辺鄙な地区に位置する「保」においては分校あるいは巡回共学班を設け、地域によっては 2～3 「保」毎に 1 校の連合国民学校を開設する。

⑥ 中心学校で各「保」国民学校の教職員に対する資質向上のための研修を実施する。

⑦ 各県で教師に対する夏期・冬期講習や地方自治事務に関する特種講習会を開催し、教育面に限らず地方自治のリーダーとしての研修も実施する。計画 2 年目には贛県に贛南師範学校を創設する。

⑧ 国民学校を経営するための基金を創設する。

⑨ 非識字者の一掃

贛南全区には成人および児童の非識字者が 69 万 2530 人存在し、これに対して 3 年計画による強制就学制度を実施する。計画 1 年目および 2 年目で 20 万人の非識字者に識字教育を施し、3 年目には非識字状況を一掃する。

⑩ 労働教育の実施

江西省中小学生生産労作（＝労働）教育大綱に基づき、各地方の実情に合わせて労働

⁵⁶ 前掲「建設新贛南第一次三年計画」149-153 頁。

⁵⁷ 前掲「建設新贛南第一次三年計画」149-152 頁。

⁵⁸ 保甲制度により定められた行政区劃としての「保」を指す。民国時代の保甲制度は清のそれを受け継いだもので、治安維持を各地方に委ねたために様々な保甲法が実施されたが、おおむね 10 戸を 1 甲とし、10 甲を 1 保とした。

教育を実施し、生産技能や意欲、勤務精神、労働習慣を養う。

⑪校舎の建設

⑫戦時生活指導処を立ち上げ、国民精神総動員体制を確立する。

⑬図書館の整備

計画1年目には各県に蔵書1万冊以上を保有する図書館を最低1館創設し、2年目には各区に、3年目には各郷鎮に図書閲覧室を最低1カ所つくる。

⑭運動場の建設

計画1年目には各県に1カ所、2年目には各区に、3年目には各郷鎮に運動場を最低1カ所建設する。

⑮学校を中心とした音楽とスポーツの奨励

⑯公務員の資質を高めるための研修実施

⑰幼児教育の推進

計画2年目に各県所在地の中心学校に幼稚園あるいは幼稚班を付設し、3年目には郷鎮の中心学校に幼稚班を付設する。

⑱託児所の整備

計画1年目には各県に、2年目には各区に30人収容の託児所を設け、3年目には各郷鎮に20人収容の託児所を創設する。

⑲教育に対する篤志家の寄付を募り、寄付者には最大の栄誉を与える。

⑳奨学金の設置

各中学の成績第1位の学生には学費、食費、雑費の全額を免除する。第2位には前記費用の3分の2を、第3位には3分の1を免除する。女子中学生で成績最優秀の者には学費、食費、雑費の全額を免除する。成績2位の者には半額を免除する。贛南籍で国立の専科以上の学校において成績優秀な5名には毎年200元の奨学金を支給する。

教育建設においてもっとも急を要したのは非識字者の一掃で、1942年2月1日から贛南11県の町や郷鎮で夜間、一斉に「甲」⁵⁹読書会（識字学校）が開始された。およそ1年後、識字学校に通った者は数百字の漢字を読み書きできるようになり、教科書の課文10数課を暗唱できるようになった。最も成果をあげた南康県では年末までに識字学校に通った者のほとんどが文字の世界を獲得し、崇義県では9割が文字の世界を獲得した⁶⁰。贛南全域では識字学校で学んだ53万192人のうち50万3088人が非識字状況から開放された⁶¹。

贛南における初等・中等教育においては、計画実施前には2036校だった「保学」が1942年末までに2353校に増え、巡回共学班や連合国民学校も含めると基本的に各「保」に一校の国民学校を実現した。また計画実施前に全人口の6%だった在校生数は、おなじく1942年末までに13.3%の21万3514人まで増え⁶²、校舎の建設も中心学校が223棟、国民学校が493棟と短期間に満足すべき成果を上げたと言えよう。

⁵⁹ 保甲制度により定められた行政区劃としての「甲」を指す。

⁶⁰ 前掲「贛南新政、面面俱到」57頁。

⁶¹ 蔣経国先生全集編輯委員会「用心血来培養革命的幼苗」『蔣経国先生全集』第三冊（行政院新聞局、1992年）408頁。

⁶² 前掲「贛南新政、面面俱到」59頁。

次に、文化建設を見ていくことにしよう。これに含まれる9項目⁶³の計画内容は以下のとおりである。

①日報（新聞）の発行

各県は計画2年目までに石版印刷で、3年目までに活版印刷で日刊新聞を発行する。

②書店の開設

合作方式で、計画1年目には各県の学校が書店を1軒開設し、2年目には県下の各区が、3年目には区下の各郷鎮が少なくともそれぞれ1軒を開設する。

③印刷所の開設

各県は計画2年目中に石版印刷所を1廠、3年目中に活版印刷所を1廠設ける。

④大衆読物の発行

計画2年目に江西省第4区大衆読物編輯委員会を立ち上げ、大衆読物を刊行する。

⑤民衆公園の建設

計画1年目に各県は民衆公園を1カ所造園し、2年目には各区が、3年目には各郷鎮がそれぞれ1カ所を造園する。

⑥中正室の創設

贛南全域の各機関、団体、学校、部隊は計画2年目までに最低ひとつの中正室を設け、各種新聞、雑誌、図書、娯楽および運動用具を完備し、民衆の余暇に供する。

⑦学術研究の提唱

三民主義を最高綱領とすることを原則として、民衆が各種学術研究会、座談会、講演会を組織することを奨励して思想の統一を図る。

⑧戯曲の改良

戯曲改良委員会を組織し、民間歌曲や旧式戯劇の改良に取り組み、抗戦建国が必要とする戯曲の創出に寄与する。

⑨電化教育の推進

各県は計画1年目にラジオ1台を完備し、人口稠密な郷鎮においては小型拡声器を準備して毎日時事ニュースを放送し、3年目には巡回映画車輛を購入して各県で教育的意義の有る映画を巡回放映する。

教育建設の実施によって初等・中等教育を受ける機会が創出され、識字学校などで非識字者が大幅に削減された。その基礎の上に上記した内容の文化建設が並行して実施され、各種メディアや学術研究会、改良された歌謡や戯劇の上演などを通じて、贛南民衆は膠着する抗日戦争を背景に抗戦建国を要とする国民精神の統合に導かれていくことになる。

小結

本章の冒頭で、①蔣経国はなぜこのように壮大な政治目標を設定したのか、②新任の蔣

⁶³ 前掲「建設新贛南第一次三年計画」153～154頁。

経国が大胆なソ連的改革を断行するための社会・政治環境はどこに存在していたのか、③新贛南の建設が目指した産業・教育・文化建設と救済・政治改革とは具体的にどのようなものだったのか、という3つの問いを立てたが、それらについては考察を終えて、以下の諸点を明らかにすることができた。

第1点は、ソ連滞在中に父親を2度も厳しく非難した自分を許し、また西安事変で「抗日」と「容共」に転じて間接的に帰国の機会をつくってくれた蒋介石に報い、ソ連で従事した仕事の経験を生かし、誠心誠意、国の工業化に貢献したいと思う気持ちから新贛南建設計画の立案に力がこもったということである。

第2点は、蒋介石が発動した「食、衣、住、行」を「礼、義、廉、恥」に合致させて「大衆の知識・道德水準を高め、国家と民族を復興」させる新生活運動に「贛南民衆の職の確保」という新たな目標を付加して発展させた計画が新贛南の建設であり、その具体的な実施方法や管理手法は多分にソ連的な様相を呈したが、それは第2次国共合作で国民党内に醸し出された表向きの「容共」気運によって許容された、ということである。

第3点は、新生活運動が「反共」だったのに対し、新贛南の建設は「抗日」思想が計画の底流に流れ、「抗日」遂行のために社会の各領域を改革しようとしたものだったということである。

本論では深く立ち入らなかった第1期3年計画に続く第2期5年計画（1944～1948年）は、その実施中に日本軍が贛州を占領し⁶⁴、また蔣経国自身も陪都に新設された中央幹校の教育長を兼務して勤務地を重慶に移していたので頓挫した。第1期については目覚ましい成果を収めたがそれは完璧な成功とは言えず、資金や人材の不足、目指したハードルの高さから計画自体に限界性があつたことは否めない。

第1期3年計画と第2期5年計画にかかわる予算措置についてはわずかな資料しかなく、全体像を明らかにできなかったのか心残りである。今後の課題としたい。

最後に、蔣経国が贛州の青年幹部に新贛南の建設を開始するに際して行った演説中の「将来的世界是我們們的」（将来の世界は私たちのものだ）と題する檄文⁶⁵を紹介しよう。

今日、私たちは亡国の徒とならないために、外国人の牛馬奴隸とならないために抗戦建国し、富強康樂の三民主義の新中国を実現するのです。（中略）将来、私たちの偉大な国土には発電所や製鍊所など幾千、幾万もの工場が林立し、幾千、幾万の航空機が祖国の大空に飛翔し、幾千、幾万もの艦艇や潜水艦が祖国の領海を巡視し、幾千、幾万の戦車が祖国の領土から敵に向かって示威するのです。将来、私たちは美食を摂り、良い衣服をまとい、大きな住宅に住み、高等教育を受けるべきなのです。このような理想がなければ、革命など語る必要のないことです。（中略）同志のみなさん、偉大な祖国のために、そして偉大な総裁（＝蒋介石）のために、未来永劫にわたって精神を奮い立たせ、未来を樂觀しましょう。将来の世界は私たちのものであり、将来の祖国は麗しく、偉大なのです！

⁶⁴ 贛州は1945年2月7日、南康、大庾と同時に陥落した。

⁶⁵ 前掲「樂觀奮闘赤手空拳打天下」66-67頁。

蔣経国は新贛南の建設を実行するために、同じ贛州で三民主義青年団江西支団の育成を通じて自らの初期派閥の形成に着手し、それに成功している。新贛南の建設がなければ蔣経国派閥はそれほど早期に成立することはなかっただろうし、蔣経国が臨時首都の重慶に引き上げられ中央政治に関与する時期も、もっと遅れていたであろう。新贛南の建設は民国の政治舞台における蔣経国の基礎を固めた事業だったということができる。

台湾に遷占後の蔣経国は 1972 年体制で国際社会からの孤立という苦境に陥った際、台湾の起死回生と政権の正統性の調達をかけて十大建設を打ち上げたが、それは新贛南の建設という経験があつてはじめて出来た大事業だった。その意味で上に示した美しい檄文は蔣経国政治の開始宣言であり、みずからの事業に課したピュアな核心と言えよう。

終章 蔣経国像の検証

はじめに

独裁政権がみずから民主化を指向した事例は、これまでの歴史のなかでそれほど多くを挙げることはできない。その意味で台湾の権威主義体制を民主「転型」するための土壌を築いた蔣経国の政治的な功績は特筆すべきである。ところがその蔣経国の原点ともいえる青年時代の思想や足跡、業績などに関する研究はきわめて少なく、蔣経国研究にモザイク状の空白を生じさせている。本論の執筆動機は、そのような学術研究から置き去りにされた蔣経国の青年時代を掘り起こすことにある。それを進めるためには、まず第1に蔣経国のソ連経験を検討し、そこに横たわる思想的な源流を詳らかにすることが求められる。第2は江西省贛南における初期派閥の形成過程や社会改造の実践の軌跡を考察し、それがソ連経験といかなる関係にあるのかを突き止める作業のなかで、政治家蔣経国の原点をある程度詳らかにできるものとする。そして、青年時代におけるこれら二つの事跡を明らかにすればその後の蔣経国の政治的な立場や思想および行動の論証にも寄与できるはずで、これにより蔣経国の全貌が明らかになってくるに違いない。

以下、ここまで本論で検討してきた内容を整理するとともに、台湾遷占後における蔣経国の後半生を敷衍し、ソ連経験や贛南の実践と台湾時期における政治的な営為との関係を俯瞰して本論の結論としたい。

第1節 蔣経国のソ連経験にみる共産主義思想の獲得と挫折

ソ連経験を整理する前に、蔣経国はなぜソ連留学に向かったのか、という問いに答えなければならない。

第1章で考察したように、蔣経国は民国前期に中国人のあいだに流行した日本、フランス、ソ連への三つの留学行動の大きな時代環境のなかで生まれ、学齢期をむかえた。これらの留学行動を支えた思想的な背景には清末の中体西用論を中核とした洋務、富強運動にはじまり、立憲思想、排満民族主義、アナキズム、三民主義、そして共産主義国家ソ連の誕生を契機に流布したマルクス・レーニン主義などの沸騰があるが、それらはいずれも救国のための求学活動であったことを顕著な共通点として認めることができる。

蔣経国に物心がつき浦東中学に入学するころには上海で中国共産党が創立し、やがてこの街を中心に周辺の中小都市をも反帝愛国運動が席卷した。その時期はまた、1910年代から流行したフランスへの勤工儉学運動が第一次世界大戦の終息とともに下火になり、モスクワの東方大学や孫逸仙大学が開学してソ連への留学行動が開始された時期とかさなる。中国国内では共産党と国民党の蜜月期ともいえる第一次国共合作が成立し、この留学行動の追い風となった。蔣経国はこの波に乗り、革命の大志をいだいてソ連留学に向かったのである。

1-1 ソ連における留学経験とトロツキズム

蔣経国が入学したモスクワ孫逸仙大学はトロツキー派の重鎮、カール・ラデックが学長をつとめる革命要員の育成を目的とした中国人専用の学校だった。このことが蔣経国のその後のソ連生活における思想的な方向性を決定し、また幾多の苦難をもたらすことにもなった。

蔣経国が留学生生活を始めたちょうどそのころ、ソ連共産党内ではスターリンとトロツキーがレーニン亡きあとの政治・経済路線、国際共産主義運動をめぐる激しく対立していた。それは4・12上海クーデター以降、明確に容共から反共へと転じた蒋介石の国民党に対して、それを容認しつつ国共合作を維持するのか、それとも中国共産党はすみやかに国民党との合作関係を中止すべきか、というスターリンとトロツキーの中国問題にかかわる激論にまで発展し、ラデックの薫陶を受けた中国人留学生の多い孫逸仙大学には多くの左翼反対派（トロツキスト）が生まれていくことになる。蔣経国もそのなかの1人だった。

蔣経国は孫逸仙大学に入学後まもなく共産主義青年団に入団している。このとき蔣経国は正式に共産主義者の仲間入りをした。留学前、中共が深く関与した反帝愛国運動としての五・三〇事件では浦東中学における学生デモ隊のリーダーをつとめ、その後北京の海外補修学校に転じたあとも、ソ連大使館に起居していた中共の李大釗の面識を得て北京5万人反帝示威運動に加わるなど共産主義に親和性があったことは間違いない。蔣経国にモスクワへの留学を勧めたのも李大釗だった。このときすでに共産主義者になる下地は出来ていたといえよう。孫逸仙大学で共産主義青年団に入団したあとの蔣経国はやがて学内に組織された左翼反対派の秘密組織に加わり、トロツキストの学生積極分子として活動した。

トロツキーがスターリンとの路線闘争に敗れると、ラデックも孫逸仙大学の学長の地位を追われ、シベリアに追放された。これを境に共青团のなかに多数存在した左翼反対派の中国人留学生はコミンテルンと中共モスクワ支部から反動派の烙印を押され、強制送還か帰国、あるいは転向、もしくは投獄、シベリア追放などいずれかの選択を迫られた。多くの留学生が帰国の道を選ぶなかで蔣経国は左翼反対派の秘密組織と袂を分ったが、4・12上海クーデターを発動した蒋介石の息子という立場が災いしてソ連当局から帰国を阻まれ、以後6年間（留学期間も含めると12年間）の長きにわたったソ連国内における流浪がはじまる。

孫逸仙大学を繰り上げ卒業した蔣経国はまずモスクワ郊外の赤軍第一師団に入団し、そこからレニングラードのトルマトコフ中央軍政学院に推薦入学し、ソ連共産党への入党を申請した。その間に中共モスクワ支部の王明がトロツキストの一掃を狙い孫逸仙大学で起こした江浙同郷会事件などに遭遇したが、それまでの共青团活動や赤軍第一師団での実績、トルマトコフ中央軍政学院での勉学の成果が評価され、ソ連共産党への入党が認められて候補党員資格を得ることができた。

江浙同郷会事件は蔣経国が中共モスクワ支部から狙われ、攻撃を受けた最初の経験だった。また、ソ連国家を統治する組織の闇の部分に触れたやはり初めての体験でもあった。そしてその後の留ソ期間を通じ、蔣経国の帰国を阻み、ソ連生活を脅かす中共モスクワ支部とコミンテルン、内政部などの影は終始つきまとい続けた。蔣経国はその苦境のなかで共産党が組織を支配する方法や敵対勢力を攻撃する手法を学び、同時に追われ、攻撃される立場にあったために、間接的に秘密警察のノウハウを熟知していったといえる。

孫逸仙大学、赤軍第一師団、トルマトコフ中央軍政学院などにおける留學生活は、蔣経国が上海の五・三〇事件で発見した共産主義を發展させ、共青団員からソ連共産黨員になるまでの過程だった。この期間に得た知識や経験はその後の蔣経国の生涯に深く関与し、思考や行動、発言を大きく規定していく。また、江西省贛南における派閥形成過程で実施した軍隊式の訓練や、台湾遷占後の国防部総政治部政工系統における職務の達成には、赤軍第一師団における訓練やトルマトコフ中央軍政学院での勉学の成果が寄与している。新贛南の建設事業で蔣経国を補佐したのが留學時代の仲間（多くは左翼反対派）であった事実も留意すべきだろう。

1-2 ソ連における労働経験と政治的な挫折

トルマトコフ中央軍政学院を卒業した蔣経国は再び帰国を申請するが許可されず、レーニン大学が組織した中国學生視察訪問団の副指導員（引率）を経て、モスクワ郊外のティナマ電気廠に配属される。過去に労働経験がなかったので、中共モスクワ支部やソ連当局がまず労働を経験させようと選んだ職場だ。学徒工（見習い労働者待遇）の身分だったので給与は低く、蔣経国は軍政学院の経験を活かして軍事教練のアルバイトをしながら夜間の技術学校に通い、知識と技術を身につけて昇進の機会を待った。1年後には生産管理部門の副主任に推薦されたが、王明らの同意を取り付けることが出来ず、結局その役職に就くことは出来なかった。江浙同郷会事件に端を発する中共モスクワ支部の王明の蔣経国に対する迫害が本格的に始まったのである。

蔣経国はティナマ電気廠に在勤中もレーニン大学の宿舎に起居していたために再び学内の政治問題に巻き込まれ、それを利用した王明は政敵の蔣経国をアルタイ金鉱に送るよう画策した。その王明の陰謀を健康問題を楯にしてかわした蔣経国は、今度はモスクワ郊外の近郊でもっとも貧しいシコフ村に送られ、そこで農作業やコルホーズの設立に従事する。当初、蔣経国はここでぞんざいに扱われたが、蔣経国が土地の貸借交渉や農機具の購入、税務など農民には難解な仕事を積極的に引き受けていくうちに農村ソヴィエトの副主席に選ばれ、シコフ村には欠くことのできない人材になっていく。このときの経験などがその後の蔣経国の政治生活において、麦藁帽に作業着姿で地方視察に出かける政治家としての行動の原点になったものと思われる。

1年後、モスクワに呼び戻された蔣経国の次の行き先はウラルのスヴェルドロスクで、まず鉄道駅の荷役労働者になることを強いられた。その後まもなくアルタイ金鉱に移されて苦役に従事する。ここでは蔣経国に対する管理部門の評価が高かったため、1年を待たずに鉱山労働から解放され、ふたたびスヴェルドロスクに戻り、ウラル重機械工場に技師として採用された。1年後には副工場長に昇進し、附設の『重工業日報』の編集長をも兼務することになる。シコフ村での農作業、スヴェルドロスクにおける鉄道駅の荷役作業、アルタイ金鉱での苦役は、すべて中共モスクワ支部の王明らがコミンテルンと組んだ蔣経国に対する迫害だった。ティナマ電気廠の学徒工からウラル重機械工場で職を得るまで、蔣経国はモスクワ郊外や西シベリアで下積み労働や苦役に従事したことになる。恵まれた留學環境では知り得なかったソ連の社会構造、集団労働や共産党組織の功罪、シベリアに追放され苦役に従事するインテリたち、最下層で生きる労働者たちの現状、生活することの悲しみや喜び、ソ連社会の表裏を体得したことが、蔣経国の思想的な土壌のなかに政治

的な方向性を培っていく。

蔣経国はウラル重機械工場に職を得た翌年（1934年8月）から内政部が放った2人組の密偵に監視される日々がつづく。スターリンが発動した大粛清の真っ最中で、孫逸仙大学時代に左翼反対派の秘密組織に加わり、王明と激しく敵対した蔣経国にふたたび迫害の手が伸びてきたのだ。1936年になると中共モスクワ支部やコミンテルンの蔣経国に対する監視は頂点に達し、同年9月、ソ連共産党ウラル党委員会によってウラル重機械工場副工場長と『重工業日報』編集長の職を解かれ、同時にソ連共産党候補党員の資格も剥奪された。この時期、ソ連の共産主義運動は1920年代ほどの熱狂はなくなり、蔣経国のソ連という国と共産主義体制に対する信頼にも揺らぎが生じてきていたことは否めない。このころは蔣経国の12年間にわたる留ソ期間中において、まさに政治・思想面における失意の頂点だったといえよう。

蔣経国は贛南在勤時、みずからの派閥育成、あるいは社会改造事業を推進するなかで「人生の意義はいったいどこにあるのか」¹という講演をしてソ連時代を回想し、「足かけ4年間の国外流浪、奔走、生きるための営みは、なにが悲しみで、なにが幸福であるかを私に認識させた」と部下たちに語りかけている。この述懐はシコフ村で農民からやっと受け入れられた喜び、アルタイやウラルで苦役に従事した仲間たちとの日々、ウラル重機械工場ですべてを失った間の安息と労働の喜び、そして不本意にも職業と党籍を剥奪された悲しみなどのことを指しているのだろう。このことがその後の蔣経国の政治生活にひとつの明確な方向性を与え、言論や行動の土台となっていく。

第2節 贛南の実践

第二次国共合作は、西安事変が契機となって実現したものである。安内攘外を理由に、中国に激しく進攻する日本軍に対して抗日の重い腰を上げようとしない蒋介石に業を煮やした張学良は延安で周恩来と図り、督戦に訪れた蒋介石を楊虎城らと西安郊外の臨潼県で拘束してむりやり抗日に誘導した。第二次国共合作は1937年9月から日本が敗戦して国共両軍が中国大陆の支配権を争い内戦に突入するまでつづき、国民党内にはふたたび容共機運が生まれてくる。

蔣経国がソ連から12年ぶりに帰国したのは、第二次国共合作が成立する直前の1937年4月である。蒋介石は蔣経国の共産主義思想を払拭するために故郷の溪口鎮に蟄居することを命じ、幼年期の教育に使った曾文正公の家書や王陽明の伝統中国、あるいは孫中山の三民主義などを持ち出してきて再教育につとめた。蔣経国は数カ月の溪口鎮滞在中に2篇のソ連回想録を執筆したが、これら二つはおなじ時期、おなじ内容の経験をもとに書かれたものの、ソ連という国家あるいは共産主義に対する評価がまったく異なっていた。最初の1篇『我在蘇聯的日子』は、徹頭徹尾ネガティブな対ソ観に終始していたのに対して、もう1篇の『我在蘇聯的生活』はソ連国家に対する期待と共産主義に対する信頼感に

¹ 全集に収録する際に「永遠不要掛起白旗来」（白旗は永遠に掛けるな）と改題された。蔣経国先生全集編輯委員会『蔣経国先生全集』第一冊（行政院新聞局、1992年）180-186頁。

溢れた内容に満ちている。このとき蔣経国の意識は、ふたたび蒋介石から注入されつつある中国の伝統意識と、みずからが12年間のソ連生活で育んだ共産意識とのはざままで激しく揺れ動いた。

蔣経国が蟄居を解かれて江西省南昌市に赴任したのは1937年10月のことだった。そこで数カ月間の下積みを経たあと、翌年には贛南の第四行政区行政督察專員という省政治に一定の責任を付与された役職に任命され、今後、国民党という組織の枠組みの中で生きて行くための職務に必要な初期派閥の育成に着手するとともに、新贛南の建設と称される新政を実行した。

2-1 初期派閥の育成とソ連経験

政治的にはほとんど裸同然で単身江西省に赴任した蔣経国は、新贛南の建設を実行するに当たりまずみずからの手足となる人材を養成する必要に迫られた。これが蔣経国に自派閥の育成を決意させた動機である。新たに設立する三民主義青年団江西支団に派閥形成の場所を求め、未だ他派閥の手が伸びていない青年層を積極的に組織化していく。

蔣経国は初期派閥の構築過程で主に康澤派（復興社系＝ソ連留学の同窓）の介入を受けている。これに対して、蔣経国は青幹班で養成した幹部を自派閥に取り込み、最終的に江西省全域で青年運動を指導する有力派閥に発展させた。

初期派閥の構築過程では、康澤派の介入以外にCC系の妨害活動にも遭遇している。CC系が贛南における蔣経国の人気を危惧したからだ。また、復興社と中統が連合して贛南地域で中華ソヴィエトの大西遷（＝長征）からこぼれ落ちた共産党の残党分子に対する討伐を実施（1940年春）し、共産党の嫌疑をかけられた蔣経国系の『新贛南報』の編集長と副刊主編、『抗建通訊社』の編集者、新贛南書店および江西青年文化服務社の経理、江西支団部宣伝組員なども逮捕された。これらのメディアや書店、および組織のメンバーの中にはソ連で左翼反対派だったトロツキストが蔣経国を頼って在籍していた。これによって宣慰団、政広大隊、宣伝大隊などが解散させられ、『新贛南報』が『正気日報』に、新贛南出版社が正気出版社に、『江西青年日報』を『青年報』に改名することを余儀なくされた。このことは蔣経国がみずから管掌するメディア組織（蔣経国が組織活動にメディアを積極的に利用したのは、その手法をソ連滞在中にみずから媒体に身を置いて学んだからだ）のなかに共産主義者あるいは左翼反対派を擁していたことを証明している。

贛南の赤硃嶺に創立した三青团江西幹部訓練班（江西青幹班）には、多くの優秀な青年が集まった。当時、贛南は抗日戦の後方だったため、江西省外から複数の高等専門学校が避難移転して来ており、江西青幹班には上海や杭州などの知識青年も数百人が応募して優秀な学生の選抜に寄与した。江西青幹班では精神訓練、政治訓練、業務訓練、軍事訓練（生活の軍事化を含む）などがカリキュラムに組み入れ、蔣経国はみずから精神訓練科目で精神講話課を担当して「団長（蒋介石）言行」を説き、それは班員教育の過程で赤硃嶺精神としてまとめられた。江西青幹班はモスクワ孫逸仙大学の管理手法を使い、レーニン主義を三民主義に置き換え、あわせて蔣経国が幼年時代に溪口鎮で学んだ中国の伝統精神を注入したものだ。青幹班は蒋介石が部下を養成した黄埔軍校たるべきことを目指した。

蔣経国が江西省贛南で進めた派閥の基礎構築は、このあと重慶、南京、そして台湾遷占後は青年反共救国団の養成とつづき、最終的な派閥構築の完成をむかえることになる。

2-2 贛南の新政にみるソ連経験の実践

派閥の育成と新贛南の建設に際して蔣経国がみずからの右腕として頼ったのはモスクワ留学時代に同窓だった黄中美、高理文、高素明、周百皆、彭建華、徐季元、徐君虎らで、彼らも左翼反対派か、もしくはその思想的な影響を色濃く受けていた。

蔣経国は新贛南の建設を実行する際にも、ソ連の経済建設（五カ年計画）の手法を下敷きにして贛南の実情に照らし、模倣できるところは真似て計画を立案・実行している。新贛南の建設に用いた方法がソ連の経済建設に酷似しているのはそのためだ。新贛南の建設を注意深く検討していけば、良くも悪くも蔣経国の思想領域における原点がそこに顕現してくる。

たとえば農業建設における全面的な「合作」組織の普及とか、商業建設における交易「公」店の設立と食料、必需品の「統制」販売など、各所にソ連が社会主義建設の過程で使った経済手法が採用されていることに気付かされる。その一方、教育文化建設では三民主義による贛南の民衆統合と非識字者の撲滅など、孫中山が提唱した方法を前面にうたった政策も混在している。共産主義的な手法と三民主義のそれとが渾然一体となった新贛南の建設を立案実行した蔣経国の当時の思想状況を、どのように捉えるべきなのだろうか。以下に第6章で言及した蔣経国が贛州の青年幹部に新贛南の建設をスタートするに際して行った演説中の「将来的世界是我們の」（将来の世界は私たちのものだ）と題する檄文を、煩をいわずにもういちど咀嚼してみよう。

今日、私たちは亡国の徒とならないために、外国人の牛馬奴隸とならないために抗戦建国し、富強康樂の三民主義の新中国を実現するのです。（中略）将来、私たちの偉大な国土には発電所や製錬所など幾千、幾万もの工場が林立し、幾千、幾万の航空機が祖国の大空に飛翔し、幾千、幾万もの艦艇や潜水艦が祖国の領海を巡視し、幾千、幾万の戦車が祖国の領土から敵に向かって示威するのです。将来、私たちは美食を摂り、良い衣服をまとい、大きな住宅に住み、高等教育を受けるべきなのです。このような理想がなければ、革命など語る必要のないことです。（中略）同志のみなさん、偉大な祖国のために、そして偉大な総裁（＝蒋介石）のために、未来永劫にわたって精神を奮い立たせ、未来を樂觀しましょう。将来の世界は私たちのものであり、将来の祖国は麗しく、偉大なのです！

この美しくうたいあげた檄文は、蔣経国がレーニン大学の中国留学生地方視察訪問団で見聞したウラル、コーカサス地域における「社会主義建設の成果」を彷彿させる内容に満ち、まさに共産主義と三民主義を混合させた、当時における蔣経国の思想状況を如実に表しているものと思われる。第二次国共合作で生まれた国民党内における容共の機運は、新贛南の建設のようなソ連の経済建設に使われた政策や手法をも許容した。蔣経国はソ連から帰国後もソ連留学時代の同窓（多くは左翼反対派）をみずからの片腕として使い、あるいは関係が途切れないう連絡を密にしていたが、中国共産党との往来は管見のかぎり認められない。それは中共が、ソ連留学の中で生まれ、同志として党に所属したトロツキストを徹底的に弾圧して駆逐したためで、このことは蔣経国の共産意識と中共が標榜する共

産主義思想が根本的に相容れなかったからであろう。

以上のことから、蔣経国の初期派閥の形成や新贛南の建設の現場にはソ連で学んだ知識や経験の土台が濃密に存在していたことは明らかであり、贛南における活動はソ連経験の実践の場であったという結論を導くことができよう。

以下、第3節では蔣経国のソ連経験と贛南の実践が台湾遷占後の蔣経国の政治生活に直接的あるいは間接的に影響を及ぼしていく過程をたどり、ソ連時代や贛南の事跡と台湾時期における政治的な営為との関係を俯瞰したい。

第3節 蔣経国の台湾統治と民主「転型」

二十世紀後半は全体主義あるいはポスト全体主義ともいえる権威主義から憲政民主へと体制移行する政治現象、すなわちハンチントンが「第三の波」と喝破した民主化へのムーブメントが南ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アジア、アフリカ、東ヨーロッパ、そして旧ソヴィエト連邦など六十二カ国でグローバルに展開した²。それらには大きく分けて体制外の反政府勢力が独裁政権を打倒して民主政権を樹立した場合と、独裁政権が体制内改革を実施して憲政民主体制に移行した場合のふたつのパターンがある。台湾は後者の代表的な事例であり、暴動や死者を出すことなく平穏裏に民主化が進行した。

蔣経国が蒋介石に代わって台湾統治の大権を握ったのは、行政院長に就任した1971年5月からである。総統として最高権力者の地位にあった蒋介石は、そのころすでに老化と交通事故による体力の衰えが進み、実質的に台湾統治の最高権力を行政院長に就任した蔣経国に託していた。1974年4月、ポルトガルで始まった民主化を樹立するためのクーデターを皮切りに体制移行の波は世紀末にかけて世界を席卷する。蔣経国は行政院長あるいは総統という台湾政治の最高位にあって、こうした世界の趨勢をつぶさに観察していた。

台湾の民主化は蔣経国が最晩年に権威主義体制を捨てて「民主転型」を指向したことが契機となって次の李登輝政権で実現した。蔣経国はなぜ独裁体制を放棄したのか。孫中山が定めた国家建設段階論、すなわち訓政から軍政に進み、最終的に憲政を達成するという方略に従い、期が熟したから民主憲政に踏み切ったのだ、というのがもっとも素直な見方だろう。ところが蔣経国は蒋介石とおなじように国民党の台湾統治期間における半分以上の時間を過酷な準独裁者、あるいは圧倒的な独裁者として君臨した。晩年になって、なぜ政治の民主化を目指したのかという疑問が呈されている。これについては台湾の政治社会状況の民間パワーが国家権力を上まわり、蔣経国はそれに屈服したにすぎない³という見方がある。あるいは台湾社会を継続的に独裁するコストが民主化コストを大きく上まわるため、合理的に判断して民主化容認に舵をきったのだ⁴という考え方も提示されている。

蒋介石とおなじように過酷な独裁を敷いた蔣経国が、歴代の台湾指導者のなかでなぜ今でも圧倒的に評価が高いのか。この疑問に対しては、蔣経国の統治期間中に台湾経済が繁

² Samuel P. Huntington, *THE THIRD WAVE: Democratization in the Late Twentieth Century* (University of Oklahoma, 1991) [坪郷實・中道寿一・薮野祐三訳『第三の波』(三嶺書房、1995年) 日本語版への序文参照]。

³ 呉乃徳「回憶蔣経国、懷念蔣経国」『二十世紀 台湾民主発展』(国史館、2004年) 469頁。

⁴ 張博樹「蔣経国在台湾民主化進程中發揮的作用」『中国憲政改革可行性研究報告』(香港・晨鐘書局、2008年) 166頁。

榮し、そのことに好感した台湾人の記憶に支えられている⁵という観測が存在する。または独裁者が国民に受け入れられるのは、独裁者個人にとって不利な情報の公開が禁止され、有利な情報しか報道されないからだ⁶という指摘もある。

蔣経国が苛酷な準独裁者、あるいは圧倒的な独裁者として台湾社会に君臨した軌跡をたどりながら、最終的に政治面で各種の緩和措置を断行し、李登輝が民主社会を完成させるための土壌を準備した過程を敷衍して、蔣経国の「民主転型」に関わる思考がいかなるものであったのかを検討するのが本節の課題である。

3-1 特務系統の掌握と派閥の育成——蒋介石の台湾統治を支えた闇の存在

国共内戦に破れた国民政府が台湾に遷占したことは、中華民国を統治する蒋介石にとって悪いことばかりではなかった。政権構造や軍隊、特務系統など権力と人間の関係が複雑になりすぎた組織を再構築する機会が生まれたからだ。国民政府は1949年12月7日、政府機構を台湾に移転することを決め、行政院は9日に台北で業務を再開した⁷。蔣経国は蒋介石とともに10日、成都から空路台北に到着した⁸。台北で党務と国務を再開した蒋介石⁹は蔣経国を国防部総政治部主任に任命し、同時に政治行動委員会（總統府機要室資料組）を統括させ、中共諜報員の摘発、国民党内、政府、国軍反対勢力にかかわる情報など特務工作の大半を預けた。

台湾遷占前の大陸期における特務機関には、中国国民党調査統計局（中統）と国府軍軍事委員会調査統計局（軍統）という二つの自律的な組織が存在した。蒋介石はいわゆる訓政実施時期にみずからの権力を制度的に保証する試みに失敗し、そうした不完全な環境のなかで権力の伸張を計らなくてはならなかった。そのために秘密的、私的組織を次々と創設して中央権力に対抗し¹⁰、複数の特務機関を保有した。蒋介石はそれぞれの組織を互いに競争させ、どちらか一方の勢力が増大して脅威になることのないようバランスをとっていた。中統はCC派と呼ばれた陳立夫、陳果夫兄弟を中心に中国共産党の動向調査などを進めた。軍統は戴笠（黄埔軍官学校六期生）を統括責任者に据えて中国大陆における日本の謀略活動、中共の動向、反革命勢力に対する調査活動などを行った。抗日戦争が長引くにつれ、特務組織に対する蒋介石の信頼はどちらかといえば軍統に傾斜していく。それは、①日本関連の軍事情報の重要性が増大したこと、②対米関係において米国が日本の情報を重要視するようになり国府との協力関係が強化されたこと、③軍統は中統に比べて蒋介石の政敵を暗殺することに積極的だった¹¹、ことなどに加え、軍統要員の多くがみずから校

⁵ 前掲「回憶蔣経国、懷念蔣経国」5-6頁。

⁶ Ronald Wintrobe, *The Political Economy of Dictatorship* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000) 337.

⁷ 蒋介石は1948年12月、腹心の陳誠を台湾省主席に任命し、翌49年2月には台湾警備総司令などを兼任させ、台湾遷占の準備をしていた。蔣経国は1948年12月、国民党台湾省党部主任に任命されている。蔣経国先生全集編輯委員会『蔣経国先生全集』記事年表上輯（行政院新聞局、1992年）143頁。

⁸ 同上『蔣経国先生全集』記事年表上輯150頁。

⁹ 国共内戦に失敗して下野していた蒋介石は台湾に遷占した翌月、すなわち1950年1月1日に總統に復帰している。秦孝儀総編集『總統 蔣公大事長編初稿』卷八（愛国法人中正文教基金会、2003年）1頁。

¹⁰ 家近亮子『蒋介石と南京国民政府』（慶応義塾大学出版会、2002年）157頁。

¹¹ 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』（慶応義塾大学出版会、2006年）333-335頁参照。

長を務めた黄埔軍官学校の出身者で固められていたなどの理由による。蒋介石は台湾遷占後、軍の再編とともに特務機関の再構築、すなわち中統の勢力を減衰させて軍統への信頼を深めていく。

3-1-1 国防部総政治部政工系統——軍の再編と監督

蒋介石は民国 12（1923）年 8 月、孫中山の命を受け、沈定一、張太雷、王登雲らを含む 40 人の孫逸仙博士代表団を率いて訪ソし、赤軍および軍隊内の党組織などを視察し、滞在中にトロツキーから赤軍の組織原理などの講義を受けたことがある¹²。政工系統、すなわち軍隊内に党の意を受けた政治委員制度を設けるアイデアはこのときに育み、帰国後、すぐにそれを国府軍に導入している。

台湾遷占直後の 1950 年 3 月、蔣経国が国防部総政治部の主任に任じられた¹³のは、大陸期に一度廃止された政治委員制度を復活させるためだった。総政治部とは軍内党部をつかさどる部署で、将兵の士気を保ち、政治的な自覚を高めて中共スパイの浸透を防ぐことなどを主務とした特務組織だ¹⁴。実際の工作は軍隊内の各部署に配置された政治委員が指揮官を監視し、政治教育を施すことで将兵の士気を維持して軍隊の規律を保証する。蒋介石は再編途上の軍内に政工（政治工作）系統を設け、政治委員制度を復活して党による国軍の統治を推進した。大陸で国府軍が総崩れとなり、大量の将兵が中共軍に寝返ったのは、軍内の政治工作が失敗したことに起因するという反省があったからである。12 年間のソ連滞在期間中に赤軍で軍隊生活を経験し、トルマトコフ中央軍政学院でソ連共産党方式の軍制管理（党軍関係）を学んだ蔣経国に総政治部主任の仕事は適任だった。

軍隊内の特務活動は蒋介石の信頼が厚い軍統が徐々に中統（CC 派）を圧倒する形で進められた。その背景には総政治部主任の地位についての蔣経国と CC 派との間に確執があったことも挙げられる。蔣経国は初任地の江西省贛南で蔣経国系（班底＝自派閥）の養成を進めた際に CC 派の執拗な妨害を受けているので、遷占後の台湾でみずからが特務機関を統括する立場になったとき中統要員の関与を選択的に排除した。また中統は軍統ほど台湾への撤退がうまく進まず、中心人物の陳果夫は病に倒れ、陳立夫は蒋介石に嫌われ、米国に避難していたことなども中統が衰退した¹⁵原因となった。このように台湾遷占後における軍隊の再編過程で、蒋介石は蔣経国を使って軍内特務組織の再建を図り、党による軍の掌握に成功したのだが、これに対して米国軍事顧問団と国軍将校団が強硬に反発している。

米国軍事顧問団のウィリアム・チェース団長（William C. Chase＝陸軍少将、1951 年 4 月～55 年 6 月在任）は政工系統を軍内における二元指揮系統の元凶、各部署に置かれたスパイ組織と断定して廃止を求めた。蒋介石はこの要求に対して、蔣父子に対する誹謗、米国による軍権の掌握を目的とした行為であるとしてこれを退けている。チェースの後任とし

¹² 前掲『總統 蔣公大事長編初稿』巻一、61 頁。

¹³ 蔣経国は総統職に復帰した蒋介石から 1950 年 3 月に国防部総政治部主任に任命された。前掲『蔣経国先生全集』記事年表上輯（行政院新聞局、1992 年）151 頁。

¹⁴ 政治工作システム（政工系統）はフランス革命に起源を有し、ソビエト赤軍で祖型ができあがった。若林正丈『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997 年）83 頁。

¹⁵ 前掲『台湾における一党独裁体制の成立』345 頁。

て来台したジョージ・スマイス陸軍少将 (George W. Smythe、1955 年 7 月～56 年 8 月在任) やフランク・バウアン陸軍少将 (Frank S. Bowan、1956 年 9 月～58 年 7 月在任) らは政工系統の機能をよく理解できず、チェースほど強行には反対しなかった¹⁶。

国軍将校団の反対は直接蔣経国に向けられたものだった。司令官にとってみれば、上意下達の絶対的な指揮命令系統のなかに政工系統が加えられた「二元指揮系統」は受け入れ難たかったのである。それに加えて将校たちの忠誠心は黄埔軍官学校の校長であり「最高の領袖」としての蒋介石にあり、必ずしも息子の蔣経国に向かっていたとは限らなかった¹⁷からだ。このことに対する不満を蒋介石は日記に、「経国が政治部の大任を引き受けて余の犠牲になり、全国軍と将領たちの生命を保全していることを知るべきである。一年余来、経国がこの政工の責務と軍隊再編の督察の任務を負わなかったとしたら、将兵たちの生命はすでになく、革命事業は失敗していただろう。反省すべきである」¹⁸と記している。この日記の「経国が政治部の大任を引き受けて余の犠牲になり」という部分から、蔣経国は軍内特務機関としての政工系統を引き受けることにあまり積極的ではなかったらしいことがうかがえる。だからこそ蒋介石は蔣経国に対する将校団の反発をことさら日記に記して報いたのだろう。政工系統にもっとも強く反対したのは蔣経国のライバルだった陳誠將軍と、米国から蒋介石を排して独立することを持ちかけられたとされる孫立人將軍¹⁹だった。陳誠は蔣経国との出世競争の過程で病を得て早世し、孫立人は部下の「匪諜」を摘発しなかったという嫌疑をかけられて責任をとられ、1955 年から蔣経国が亡くなる 1988 年まで 33 年間も軟禁状態に置かれた。

政工系統の充実をはかるため蔣経国は 1951 年 11 月、台北郊外の復興崗（北投競馬場跡）に政工幹部学校を設立してみずから校長に就任している。これは軍内特務要員を養成する専門学校であるとともに、蔣経国が自身の派閥（班底）を育成する場でもあった。この政工幹部学校の訓導処長を務めたのが、蔣経国が江西省の贛南で三民主義青年団に青年幹部訓練班を組織してみずから養成した王昇である。王昇はその後政工系統で要職を担い、蔣経国系（派閥）の重鎮に成長していく。蒋介石が孫中山のもとで広州郊外の珠江河畔に黄埔軍官学校を設立して校長に就任してみずからの派閥を形成したように、蔣経国も政工幹部学校をおなじ目的で運営した。1975 年に蒋介石が亡くなって大権を引き継ぐと、弟子たちは「水銀が地に滲み込むように財政部門を除く情報・文化娯楽・党・行政・報道などのあらゆる部門に浸透」²⁰して蔣経国の台湾統治を補佐していくことになる。復興崗は蔣経国にとっての黄埔だったのである。

3-1-2 総統府機要室資料組——監視・逮捕・拘禁・白色テロ組織としての政治警察

¹⁶ 同上 304-305 頁参照。

¹⁷ 同上 306-308 頁参照。

¹⁸ 前掲『総統 蔣公大事長編初稿』巻十、239 頁。

¹⁹ 孫立人（1899-1990 年）は米バージニア軍事学校を卒業した親米派將軍である。蒋介石は台湾に遷占して総統に復職すると米軍の支援を獲得する目的で孫を陸軍総司令に任命した。その後、蔣経国と激しく対立し、軟禁生活のなかで不遇な晩年を送った。

²⁰ 江南『蔣経国伝』（美国論壇社出版、1984 年）200-201 頁。〔川上奈穂訳『蔣経国伝』（同成社、1989 年）156-157 頁〕

蔣経国は国軍総政治部で軍内特務機関としての政工系統を整備すると同時に、中共諜報員の摘発、国民党内、政府、国軍にかかわる情報と特務工作のすべてを主管する総統府機要室資料組の統括責任者（主任）にも就任した。これも蒋介石の意向にもとづいた秘密人事である。総統府機要室資料組の前身は1949年8月に台北郊外で非公式に設立した政治行動委員会²¹で、国防部保密局（軍統の後身、後の国防部情報局、現在同軍事情報局）、内政部調査局（中統の後身、後の司法行政部、現在法務部管轄）、憲兵司令部、国防部第二庁、台湾省警務処、台湾省保安司令部（戒嚴令実施機関、後の台湾警備総司令部）の首長ないし次長クラスを委員とし、特務工作を一元的に指揮することを任務とした²²。設立当初は唐縱²³が実質的な統括者だったが、蒋介石は唐縱を陳誠内閣の内政部次長に転出させて総統府機要室資料組を蔣経国に引き渡した。蔣経国はここでも政工系統の場合とおなじように中統（CC派）を抑えて軍統を優遇するかたちで台湾における特務機関の再編強化を断行し、中共諜報員の摘発、党、軍、政府に関わる情報のすべてを掌握して政治警察の頂点に君臨した²⁴。非公式組織としての総統府機要室資料組は1954年になると米国の国家安全保障会議（NSC）を模倣して設立した国防会議（1967年に国家安全会議に改称）傘下の国家安全局として合法化され、蔣経国は国防会議副秘書長に就任して実権を握った。

総統府機要室資料組は政治行動委員会のころから台北郊外に石牌訓練班〔通称：青年敢死隊（青年決死隊）〕とよばれた特務要員の専門訓練校を有していた。蔣経国が主任を務め、沈之岳²⁵が副主任だった。訓練期間は半年で、蔣経国もみずから講義を行った。石牌訓練班は特務の養成を主務としながら、同時に大陸期における江西省贛南の三民主義青年団青年幹部訓練班や重慶の中央幹校研究部、青年軍、そして上述した政工系統の復興崗における政工幹部学校とおなじように蔣経国がみずからの派閥（班底＝蔣経国系）を育成するという隠れた目的があった。

総統府機要室資料組は中共諜報員の摘発、党、軍、政府内における反対勢力の逮捕、拘禁、ときには白色テロを実行したが、いったいどれだけの人間が特務組織の摘発対象になったのだろうか。国防部保密局偵防組長を務めた谷正文は、情報・治安部門が台湾で摘発

²¹ 政治行動委員会は発足当初蔣経国と、おなじく同時期にモスクワへ留学した張師が書記を務めた。1953年には陳大慶（黄埔一期）が香港から台湾に渡って副主任委員になった。張師と陳大慶はともに大陸時期から蔣経国の側近である。蔣経国は総統府機要室資料組を掌握すると贛南における三民主義青年団青年幹部訓練班や重慶の中央幹校研究部や青年軍でみずから養成した部下を集めて組織を固めた。公文の発行や予算措置の必要から名目上総統府に所属させて法的に正規組織化するため、政治行動委員会から総統府機要室資料組に名称を変更した。前掲『台湾における一党独裁体制の成立』346頁。

²² 政治行動委員会から総統府機要室資料組に名称が変わったのは指揮、連絡の上で公文を発する必要があったからで、蒋介石が台湾に遷占して総統に復職後はこの名前が用いられた。前掲『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997年）80頁参照。

²³ 唐縱（1905-1981）は湖南省炎陵県人。黄埔軍官学校（第六期）を卒業後、国民党中央情報処、建国日報、復興社などを経て1944年に国民党中央執行委員、中常委に選ばれる。その後、内政部警察総署長、国防保安局中将局長などを歴任し、台湾遷占後は総統府国策顧問などを務めた。一貫して内政部畑を歩む。

²⁴ 若林正文『台湾の政治』（東京大学出版会、2008年）84頁。

²⁵ 沈之岳は後に調査局（中統の後身）の初代局長に栄転する。沈は台湾に遷占する以前、戴笠の命を受け、身分を偽って延安の抗日軍政大学に入学し、卒業後は毛沢東の機要秘書、江青の付き人、新四軍の政治委員などを務めて「解放区」から中共の動向を軍統本部の戴笠に報告してきたと言われる。蔣経国の信頼が厚く、局長として調査局に送り込まれた背景には中統の残滓勢力一掃を狙う蔣経国の強い願望があったものと思われる。李世傑『調査局研究』（李敖出版社、1988年）51-96頁参照。

した共産スパイのうち本物は約2千人で、その他の大多数は捏造だった。つまり台湾で捕まった者の95%以上は冤罪だったと回想している。この証言に従えば4万人以上が摘発され、その大半が不当逮捕だったということになる²⁶。

台湾省主席で台湾省保安司令を兼務した呉国禎は亡命中の米国ロードアイランド州プロビデンスでおなじく亡命中の胡適と面談し、台湾で政治犯として逮捕された人の数は10万人を上まわると胡適が証言したことを明らかにしている²⁷。

谷正文が示した数字は中共スパイに関わる摘発人数であり、胡適の数字は政治犯全般で逮捕された人の数である。蔣経国が統括した特務組織が膨大な数の人に嫌疑をかけ逮捕拘禁し、そのうちの大半が冤罪事件であったことが見てとれる。それではいったいなぜこのように多くの冤罪事件が発生したのか。それは密告に賞金を与える「戡乱時期検肅匪諜条例」第十四条の存在があったからだと言われる。身辺に疑わしい者がいる場合は密告をしないと逆に罪に問われ、密告すれば賞金を与えられ、特務要員は嘘の密告や捏造をしても咎められないという特務組織による不当な逮捕、拘禁、白色テロを後押しする条例である²⁸。中共スパイだけではなく、蒋介石や蔣経国に反対する勢力や政敵をなかば思いのままに摘発できる独裁政権が編み出した無敵の装置とも言えよう。

蔣経国は蒋介石からこのような特務組織の統括を命じられ、その政治的なキャリアに消すことのできない瑕疵をつくったことはたしかな事実である。蔣経国が特務組織を統括することで、政工幹部学校、石牌訓練班で派閥の養成を行い、特務機関を通じて台湾統治の実権を掌握してできるのは得失の「得」の部分であり、それにとまって負のイメージが醸成されるのは「失」以外のなにものでもない。この暗いイメージをいかに払拭し、蒋介石没後の台湾で最高権力者としての正統性をどのように調達していくのか、それは国家安全局から国防部長を経て行政院長に就任し、名実ともに台湾政治の大権を掌握してからの重要な課題となった。

3-1-3 中国青年反共救国団——台湾における蔣経国系（派閥）の養成

台湾遷占後における青少年を対象とした蔣経国派閥の育成は、中国青年反共救国団（以下、救国団と称する）で実施された。同団の前身は1950年4月に設立された中国青年反共抗俄聯合会（青聯会）で、翌々年3月の青年節（青年の日）に蒋介石が「全国青年に告ぐる書」を発して救国団の設立を全国に号令し、10月に正式発足すると同時に青聯会は救国団に吸収合併される。救国団は当初、復興崗にあった政工幹部学校の木造三部屋を間借りして校舎とし、12月に台北市の中山北路に転居した²⁹。

²⁶ 前掲『台湾における一党独裁体制の成立』359頁。

²⁷ 呉国禎（1903-1984年）は米プリンストン大学政治学博士で「民主先生」と称された親米派である。帰国後、大陸期には漢口市長、国府外交部政務次長、上海市長などを歴任し、台湾遷占後は行政院長に栄転した陳誠の後任として台湾省主席に就任した。これは米国の援助をつなぎ止めようと目論んだ蒋介石の政治的な人事だった。特務の暗躍に反対して蔣経国と激しく対立し、1953年3月に台湾省主席を辞任して米国に避難して胡適と面談している。呉国禎『従上海市長到台湾省主席』（上海人民出版社、1999年）222-223頁参照。

²⁸ 李宣鋒等主編「谷正文先生訪談紀錄」『台湾地区戒嚴時期五〇年代政治案件資料彙編』五（付録）220頁（前掲『台湾における一党独裁体制の成立』359頁）。

²⁹ 中国青年反共救国団総団部編印『緑旗漂揚三十年』（中国青年反共救国団総団部、1982年）55-56頁参照。

救国団の初代主任³⁰は蔣経国で、胡軌³¹、謝東閔³²を副主任、李煥³³を主任秘書に任命した。胡軌は蔣経国が江西省の贛南に赴任して派閥の育成と新政に取り組んだ際の後見人、謝東閔は台湾出身だが光復以前に20年以上大陸活動経験がある「半山」³⁴人士、李煥は蔣経国が重慶の中央幹校研究部で育てた俊才である。蔣経国の意向が十分に反映された人事だ。救国団の設立目的はこの組織の創立を青年運動の起点とし、光復後の混乱にある青少年を組織化し、日本統治下で育った若者を「反攻大陸」を国是とする台湾社会に相応しい人材に育成することで、軍隊式の教育が施された。具体的には蔣経国によって、①反共抗ソの心理作戦部隊、②大陸を奪還するための戦地政務部隊、③中華を再建する中核部隊となることが求められた³⁵。それらの任務は反攻前と後で三段階に分けられ、まず反攻前においては各種訓練に参加し、社会的な服務工作に従事し、文化宣伝や社会調査に協力し、政令や義務労働を発動し、従軍して総動員運動に参加すること。反攻時には軍隊に協力して兵站の支援や情報通信、民衆に対する軍事訓練、戸籍調査、社会秩序の維持、および戦時工作で求められた任務に従事すること。反攻に成功して大陸奪還を実現した暁には政府に協力して教育、地方自治、土地行政、および各種復興事業に加わることとされた。要するに戦時体制で軍隊に準じた活動が求められたのである。これに対して各種メディアを中心にさまざまな反発が起こり、もっとも激しく反対をとねえたのは雑誌『自由中国』で、「第二の三民主義青年団であり、国民党の予備隊に等しく、青少年を政治に巻き込み、勉学の時間を犠牲にさせることはまことに不幸なことだ」³⁶と訴えた。この批判に蔣経国は「救国団は政治面の責任を負っているが、政治的な欲望は抱いていない。反共復国の立場と目標を堅持する以外、いかなる政治的、地方的な紛争にも係らない。救国団に加わる同志は貢献と犠牲のみがあることを肝に銘じるべきである」³⁷として雑誌『自由中国』の主張を押さえ込んでいた。

救国団は高級中学（高校）以上の生徒については全員参加とし、16歳以上25歳以下の職業青年は入会条件を満たせば参加できた。設立の翌々月までに22市県に準備小組を設けて129校の高級中学大隊が成立し、その中に387個中隊、1003区隊、4012分隊が生まれ、

³⁰ 蔣経国は行政院長に就任後の1973年まで21年間にわたり主任を務めた。第二代主任は李煥、第三代には李元簇が就任した。

³¹ 胡軌（1903-1988）は江西省萍鄉出身で日本の陸軍歩兵学校を卒業し、帰国後は国府軍侍従室秘書などを務め復興社参加。台湾遷占後は救国団を経て退役後、幼獅文化事業公司董事長、中正書局董事長、中国廣播公司監察などを歴任し、一貫して蒋介石と蔣経国に仕えた。

³² 謝東閔（1908-2001）は台湾生まれだが、光復以前の約20年間を大陸で過ごした。帰台後は救国団を経て考試院典試委員、台北医学院校長、行政院文化建設委员会主任委員、副総統などの要職を歴任した。蔣経国が登用した台湾人の嚆矢である。

³³ 李煥（1917-2010）は湖北省漢口出身。蔣経国が重慶の中央幹校研究部で育成した蔣経国系の重要人物である。台湾遷占後は長期にわたり蔣経国から抜擢され、救国団を経て教育部部長、行政委員長などを歴任した。

³⁴ 「半山」とは日本の植民地統治期に台湾から大陸に渡り、光復後に帰台した台湾人のことを指す差別的な語感をはらんだ台湾語である。大陸人を指す「阿山」に対応する言葉で、「半台湾人半大陸人」の意味がある。

³⁵ 前掲『緑旗漂揚三十年』75頁。

³⁶ 自由中国社編「今日の問題」『自由中国』（台北・自由中国社、1958年）139-141頁。雑誌『自由中国』は1949年11月、当時のリベラリストが結集して創刊した。創刊号には胡適が自由と反共を主張する文章を寄せた。救国団問題にとどまらず、蒋介石の総統三期連任、反攻大陸政策の放棄などを訴えた。

³⁷ 前掲『緑旗漂揚三十年』55-56頁。

4万2230人が入団した³⁸。

社会大隊は翌年12月までに30個大隊が成立し、7201人の職業青年が入団し、職種の内訳は小中学教師、自由業者（個人経営）、退役軍人、労働者、農民などで山地同胞（原住少数民族）の比率が高かった。これは現住少数民族に対する社会的な平等が確立されていなかった状況で、救国団は山地同胞の子弟が台湾社会の中で出世していくひとつの有力な足がかりになると見なされたからだろう。この他にも、大学や専門学校で支隊組織の組織化が進んだ。

台湾本島の組織化が一段落すると、大陸との最前線に位置する島嶼部の金門島で1953年5月までに準備小組が成立し、7月までに支隊および学校大隊、社会大隊各1隊が生まれ、522人が入団している。大陳島でもおなじく5月までに支隊設立準備小組が成立し、8月までに支隊と学校大隊、社会大隊各1隊が生まれ、292人が入団した³⁹。

救国団はまた独自の出版や教育、宣伝、啓蒙事業なども推進した。たとえば青年叢書を刊行し、『国父対青年遺教』（国父が青年に残した教え）、『総統対青年訓詞』（総統の青年に与える訓示）、『蔣総統行誼』（総統の品行道德）、『領袖』、『中国国民党史』、『帝俄侵華史』（帝政ロシアの中国侵略史）、『実幹苦幹』、『滅共復国』、『革命歌集』などの書籍を出版した。同時に青少年向けの啓蒙月刊誌『幼獅月刊』、『青年周刊』、などを出版、発行している。教育・宣伝面では団員向けの時事講習会や啓蒙スローガンの街頭への掲出などを行うとともに、毎月軍隊の放送局と協力して教養講座やラジオのタベなどを主催し、著名学者による青年問題の講座、放送コンサート、詩歌の朗詠、説話、ドラマなどを流した。また、作文コンテストなども行っている⁴⁰。

蔣経国は大陸時期における青年の組織化の方法論を反省して、次のように持論を展開している。

青年救国団を成功させるには、青年による青年の指導が不可欠です。青年による指導とは青年の立場や要求、利益を組織に反映させることです。たとえば地上に水が流れ、空に太陽が昇って水を照らせば水蒸気が湧き上がり、それが雨となって地上に降り、ふたたび水となるのです。このような循環が大きな力を生みだします。これまでの青年運動は、太陽だけ照って水の反応がなかったのです。いま、青年が立ち上がることができるか否かは、団員が救国団を自分のものとして認識できるかどうかに係っているのです⁴¹。

蔣経国はみずから教壇に立ち、団員に向かってこのように語りかけて檄をとばした。中国青年反共救国団は江西省贛南の三民主義青年団青年幹部訓練班や重慶の中央幹校研究部、青年軍につづき、上述した政工系統の復興崗における政工幹部学校とともに台湾における蔣経国の派閥育成の拠点となった。蔣経国はみずから育てあげた腹心を党、政、軍、メディア、国民党傘下企業、社会組織、特務機関などの要所に配置して最高権力の掌握に手を

³⁸ 同上 68-69 頁。

³⁹ 前掲『緑旗漂揚三十年』『緑旗漂揚三十年』68-69 頁。

⁴⁰ 同上 68-69 頁。

⁴¹ 同上 64 頁。

かけていった。

以上が蔣経国が台湾に遷占してから行政院長に就任するまでの期間に蒋介石の党と政府、軍隊を防衛するために主管した特務工作と自派閥育成の概要である。特に闇の組織としての特務機関で共産スパイの摘発や政敵排除に際して採った、法律さえをも超越した強引な逮捕拘禁や白色テロは恐怖の記憶として台湾人の脳裏に焼き付いている。蒋介石の老化を補う形で行政院長に就任し、そして蒋介石の没後の総統に就任した蔣経国は特務組織における闇の権力者から一転名実ともに台湾を代表する最高権力者として国政を采配することになる。その過程で経済の高度成長、そして選挙制度の改革による憲政の充実、最後には権威主義体制を放棄して段階的に民主「転型」への布石を打っていくことになるのだが、その詳細は以下に明らかになるだろう。

3-2 権威主義体制の解体と政権内部からの民主「転型」

第二次大戦の集結は世界に東と西の陣営を生じさせ、そこに覆いかぶさった冷戦構造のなかで1953年にソ連のスターリンが死去すると、権力の掌握に成功したフルシチョフ⁴²は1956年2月に開催されたソ連共産党第二十回党大会でスターリン批判⁴³を開始した。そのことが契機となって中国とソ連のあいだにイデオロギー分野で亀裂が走り、それがやがて1970年代初頭の米中接近につながっていく。当時、忍者外交とよばれたキッシンジャー大統領補佐官による秘密裏の交渉によって米国と中国の国交回復にむけた水面下の協議が繰り返された。1971年10月の国連総会では国連の中国代表権に関するアルバニア案が通過し、台湾に代わって中華人民共和国が中国を代表することが決議された。

翌1972年2月21日、ニクソン大統領の北京訪問が劇的に実現し、米中両国は上海コミュニケを発表して台湾が「中国」の一部であることを確認しあい、米国は対中外交承認の対象を台湾から中華人民共和国に切り替えた。こうした情勢下で日本の田中角栄内閣も中国との外交関係の樹立を急ぎ、同年9月25日から訪中して4日後の29日には日中共同声明の調印にこぎつけ、日本と中華人民共和国の外交関係が樹立される。台湾は国連議席の喪失、米国、日本との断交を皮切りに中華人民共和国へと外交承認を切り替えた世界の多数の国との関係を断絶し、ここにいわゆる「1972年体制」が生まれた。

ここで、蔣経国が日中国交回復交渉に示した対応を見ておこう。この年5月、蔣経国は行政院長に就任し、病氣療養中の蒋介石に代わり実質的に最高権力を行使していた。蔣経国は1972年7月20日、中華民国駐在日本国大使館の宇山厚大使に接見し、日本が中国と国交を回復することに中華民国政府として厳しい立場を表明している⁴⁴。このあと蔣経国は8月3日、行政院で外交部に既定の国策に従って日本の対中国交回復を断念させるための対策を經濟部、教育部、新聞局とともに練るよう指示⁴⁵を出した。そして8日には日本

⁴² ニキータ・フルシチョフ（1894-1971）はスターリン死後、ソ連共産党中央委員会第一書記（1953-1964）、1958年からは首相を兼任、対米接近とソ米による世界秩序維持を中心とする対外政策を推進、中国との対立を決定的にした。エドアルド・シェワルナゼ著、朝日新聞外報部訳『希望』（朝日新聞社、1991年）52-54頁参照。

⁴³ フルシチョフはスターリンの個人崇拜、大粛清、大国主義などを批判した。同大会で第一副首相のミコヤンが社会主義国と資本主義国の平和共存政策を発表して内外に衝撃を与えた。これらのことが他の社会主義国に動揺と混乱を与え、ポーランド暴動、ハンガリー動乱、中ソ論争から対立への原因となった。同前『希望』52-54頁参照。

⁴⁴ 同上『蔣経国先生全集』第17冊388頁。

⁴⁵ 前掲『蔣経国先生全集』第13冊282頁。

政府の媚共政策を厳しく避難する談話⁴⁶を發表した。2日後の10日にはさらに行政院で、日本の対中華民国政策がどのように変わろうとも国家の前途は国民の努力にあるので、①経済発展を維持して人民の生活を向上させる、②政治改革を進め、国民へのサービスの質を高める、③進歩のなかで社会秩序を安定させる、④国家の安全を強固にして国防を充実する、という指示を發した⁴⁷。日本の対台湾政策の変更を対中警戒心の向上、政治改革、経済発展のテコに利用している。

こうした情勢下で田中角栄内閣は自民党副総裁の椎名悦三郎を特使として台湾に派遣し、地ならしを試みている。9月17日に訪台した椎名特使一行は翌日にまず嚴家淦副総統、沈昌煥外交部長、何応欽將軍らと会談し、19日、蔣経国との会談が実現した。席上、椎名は「中華民國との関係は深いので、従来の関係をそのまま維持することを念頭に日中正常化の審議に臨む」という自民党日中正常化協議会の考え方を伝えた⁴⁸。これは田中首相や大平正芳外相が目指す方針と完全には一致しなかった。椎名は訪台まえに田中首相を訪ねて台湾になにを伝えるべきかを問うたが、田中は具体的なことは大平外相にまかせてあるという理由で確たる方針を伝えようとしなかった。次に大平を訪ねると、「分裂国家の一方を認めたら、もう一方を認めるわけにはいかない。それが近代外交の原則になっている」とだけ言って、あとは口ごもってしまった⁴⁹。田中も大平も自民党の重鎮で、台湾との関係が深い椎名に本音を強いることをはばかったのである。察してくれ、ということであろう。

これに対して蔣経国は「台日間の一切の関係は1952年に調印した中日和約（日華平和条約）に依拠するもので、日本政府がその基礎を崩せば、その全責任を負わなければならない」とあくまでも原則論だけを述べた⁵⁰。要するに、椎名は中国との国交回復前に台湾を刺激せず、田中と大平の国交回復方針に対してもじゃまをしない自民党としての方針だけを伝え、蔣経国もすべてを呑みこんで椎名を困らせないよう従来の原則を繰り返すに止めたのである。椎名特使一行に随行した中江要介外務省アジア局外務参事官はこのときの蔣経国の発言について、「弁慶の勸進帳に似ている」⁵¹と評している。椎名が弁慶を演じ、蔣経国が関守の富樫左衛門となって日台関係の将来のため互いに虚構で白をきったのである⁵²。

田中首相は1972年9月25日に大平外相をともなって訪中し、4日後の29日中華人民共和国とのあいだに日中共同声明を發表し、それと同時に日華平和条約は消滅して日本は台湾と断交した。これを受け、蔣経国も行政院で「我が政府の中日外交関係に対する基本的な立場」と題する指示を發し、日台間が断絶に至ったすべての責任は日本側にあることを表明して日本との外交関係を絶つことを發表した⁵³。

その後、日台関係はあたかも椎名悦三郎特使が蔣経国に語った「従来の関係をそのまま維持する」かのように着地し、同年12月1日に日本側は対台湾窓口として交流協会が発足

⁴⁶ 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯7頁。

⁴⁷ 前掲『蔣経国先生全集』第17冊389-390頁。

⁴⁸ 服部龍二『日中国交正常化』（中公新書、2011年）118頁。

⁴⁹ 同前『日中国交正常化』102頁。

⁵⁰ 前掲『蔣経国先生全集』13冊286-287頁。

⁵¹ 中江要介『アジア外交 動と静』（蒼天社出版、2010年）139-140頁。

⁵² 前掲『日中国交正常化』121頁。

⁵³ 前掲『蔣経国先生全集』17冊409-410頁。

し、台湾側は翌2日に対日本窓口機関として亜東関係協会を設け、両組織は相互に台北や東京、大阪、福岡に事務所を設けて民間関係の維持につとめ今日に至っている。

当時、世界は三つの経済危機に襲われた。すなわち1971年の米ドル下落に起因した国際金融危機、1972年のソ連農業の凶作が引き起こした穀物の大量買い占めによる価格の大幅変動、そして1973年の第4次中東戦争による石油価格の高騰などである。これらの台湾への影響はインフレの亢進として現象し、1972年末から1974年2月にかけて台湾の物価は66.5%も高騰した。

1960年代から黒字を計上してきた台湾の貿易収支は赤字に転落し、1974年には13.27億米ドルの入超になった。これにともない同年の経済成長率は1972年にくらべて13.31%下落し、失業率が急上昇した

台湾に危急存亡の苦難をもたらした「1972年体制」と経済危機は、同時に台湾経済を発展させる起爆剤にもなった。蔣経国は台湾の前途に悲観して起りつつあった人材や資本の海外流出を食い止めるために、大規模国家投資＝「十大建設」を推進して経済の浮揚をはかったのである。そのことはまた、戦後の台湾で蔣経国が蒋介石の意を受け、秘密警察や軍隊内で実施した特務系統の掌握とその実践で傷ついたイメージを修復し、最高指導者としての正統性と支持の調達に寄与したことも否めない。

3-2-1 大規模国家投資＝「十大建設」と選挙制度の改革、「党外」勢力の誕生

蔣経国が実行した「十大建設」は、台湾の工業発展に見合う産業基盤の整備と重化学工業の振興を目的とした。それは1973～78年の五年間に実施された国家建設プロジェクトで、その内訳は①南北高速道路の建設、②西部縦貫鉄道の電化、③北回り鉄道路線の敷設、④桃園国際空港の建設、⑤台中港築港、⑥蘇澳港拡張、⑦鉄鋼一貫生産企業としての中国鉄鋼の創設、⑧中国造船の創設、⑨石油化学プラントの創設、⑩原発三基を含む発電所建設の十項目で、総投資額は58億ドルだった⁵⁴。1977年9月には上述した十項目に加え、さらに文化建設が付加される。それは台湾のすべての県と市に図書館、博物館、音楽ホールを備えた文化センターを建設すること、行政院に文化建設委員会を増設して台湾史跡の保護、台湾民俗芸能の奨励などをはかることの二項目で、これらふたつの内容が追加されたことで大規模国家投資は最終的に十二大建設と称されるようになる⁵⁵。追加された文化建設は蒋介石時代には許容されなかった台湾の歴史や風俗習慣の発掘と保護であり、それは本省人の立場に立ってみれば政権から押し付けられた中華ナショナリズムのなかに台湾ナショナリズムを包摂していく過程とも言え、後述する本省人の地方政治への進出から生まれた「党外」運動への追い風になっていく。

この巨大建設プロジェクトの実施とその達成は台湾社会の工業化と近代化に寄与して庶民の生活レベルを押し上げ、大陸との経済格差を広げて「1972年体制」に苦悩した台湾人の自信を回復させた。これを契機に蔣経国の政策が台湾人にプラスのイメージとして記憶されるようになるのである。現在でも台湾人の口の端にのぼる「人民が蒋介石を養い、蔣経国は人民を養った」という謠言は、この時期以降における蔣経国の台湾経済と産業の発

⁵⁴ 若林正丈『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997年）123-124頁。

⁵⁵ 若林正丈『台湾の政治』（東京大学出版会、2008年）135頁。

展に対する貢献を謡ったものであろう。

中華民国が台湾に遷占して以来、台湾を統治する国民党の脅威は中国共産党とその統治下にある中華人民共和国であり、同時に外来政権としての国民党に批判的な政治化した土着の本省人勢力だった。国民党政権は政治の中核領域から本省人勢力を排除しつつも、周辺領域としての地方政治では本省人を登用した。その対象となったのは地方派閥と有力資本家だった。統治の正統性を図ろうとする国民党政権にとって、地方政治とその代表を選ぶ公職選挙は本省人社会から支持をとりつける絶好の機会だったのだ⁵⁶。

台湾の選挙制度改革は国民大会第一期議員(国会議員)の欠員補充選挙や増加定員選挙、あるいは地方公職選挙というかたちで漸進的に進められた。中華民国憲法の規定によれば、国会議員の任期は国民大会代表と監察委員が6年、立法委員が3年だが、国共内戦による混乱により台湾では1949年5月20日に戒厳令が施行され、国民大会で反乱鎮定動員時期臨時条項(動員戡乱時期臨時条款)が制定されたために憲政そのものが塩漬けにされ、中華民国の台湾遷占後も国共内戦期に選出された国民大会第一期議員と欠員補充選挙で選出された議員は改選しないで議員をつづけるという不正常的な事態がつづいた。増加定員選挙は「法統」⁵⁷の範囲内でこうした状況をいくらかでも是正するために実施されたもので、国民政府が実効支配する自由地区と海外華僑枠の定員を大幅に増やし、前者は普通選挙で、後者は総統の指名で選出された⁵⁸。

蔣経国は本省人の「青年俊才」を地方政治に登用することで民意の掌握をねらった。俊才の登用拡大政策は1971年10月28日に開かれた国民党の第十期臨党会議で決議され、12月の中常委で人材獲得拡大法案を決定した。蔣経国は腹心の李煥に行政院青年輔導委员会主任、中国青年反共救国团主任、革命实践研究院(国民党の上級研修機関)主任、国民党中央党部組織工作部門などの青年関連部門や組織部門の要職を兼任させて人材獲得拡大法案を実施に移させた。地方統治を地方派閥から党が育成した人材による統治に転換するためだった。この政策に従い、蔣経国は台湾省主席に「半山」の謝東閔、その後は謝の後任として本省人の林洋港、李登輝、邱創煥らを同ポストに就けた。蔣経国は1976年11月、蒋介石に代わって国民党十一全大会で主席に選出される⁵⁹と、中央委員と中央常務委員の人数を増やして本省人党員を中央に登用し、本省人閣僚の人数も増やしている⁶⁰。

本省人の党、国家、地方政治への進出が進むにつれ、台湾社会の民主化を求める動きが活発になってくる。1975年には雑誌『台湾政論』が創刊され、民意代表、中産階級、インテリが競って時論を発表して自由と人権、戒厳令の解除、党禁の解除などを訴えた。この雑誌は五号まで発行して発禁処分となった⁶¹。1970年代の対外危機に直面した蔣経国が権力の正統性を調達する目的で実施した「青年俊才」の登用、十二大建設にともなう産業の

⁵⁶ 松本充豊「台湾」岸川毅、岩崎政洋編『アクセス地域研究1 民主化の多様な姿』(日本経済評論社、2004年)138頁。

⁵⁷ 「法統」とは、中華民国において憲法に則った政府の編成を行うことを指す。

⁵⁸ 1960年代後半から1980年代にかけて7回の選挙が実施されている。その内訳は1969年に欠員補充選挙、1972年増加定員選挙、1977年地方選挙、1978年増加定員選挙、1979年増加定員選挙、1981年地方選挙、1983年増加定員選挙となっている。

⁵⁹ 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯124頁。

⁶⁰ 前掲『台湾の政治』132-133頁。

⁶¹ 同上143頁。

発展、台湾の歴史や文化重視などの政策は党外人士、民主化要求言論に新しい発展の条件を与えた。その象徴的な活動が選挙で、選挙期間中は言論、政治活動への取り締まりが緩んで(民主のための休日)党外活動が活発化し、選挙で当選した者に対しては当局も政治面で一定程度尊重する態度を維持した⁶²。1977年には全国の党外人士が地方五項目公職人員選挙に立候補し、これに対抗した国民党が票の操作を行ったために怒った民衆と衝突して中壢事件⁶³に発展した。この選挙で多数の党外人士が県、市の首長、省議会議員に当選し、台湾政治の版図を塗り替えた⁶⁴。

1978年の増額中央民意代表選挙(増加定員選挙)では台湾党外人士助選団が成立して党外活動がいよいよ活発になったが、政府は米国が中華人民共和国と国交樹立を決めたことによる外交の挫折で選挙を延期した。これに対して党外人士は政府に対して憲政の維持を求め、軍事統治の誘惑に陥らないよう要求し、助選団を基礎にして党外の組織化を進め、国連に復帰して国際的な地位の維持を図るよう求める声明を発している⁶⁵。1978年8月には黄信介らが雑誌『美麗島』を発刊して民主政治の実現を訴え、美麗島雑誌社名で全国に服務処(読者サービスセンター)を設け、その本部は党外組織の中核となっていく。党外は「党名のない党」として組織を拡大するなか高雄で発生した「暴動」を口実に政府によって封鎖され(高雄事件=美麗島事件)、運動は弾圧されながら1970年代を終える⁶⁶。

政府は延期していた増加定員選挙を世論の圧力で1980年に再開する。党外はふたたび候補者を擁立し、美麗島事件で逮捕された活動家の家族が多く当選した。選挙で勝利したことにより勢いづいた党外人士は戒厳令の解除、中央民意代表(国会議員)の全面改選、結党の自由などを政府に要求していく。これに対して政府は、①戒厳令の施行面積は中国全体の3%(国民政府が実効支配する台湾とその周辺の島嶼を指している)であり人民生活に悪影響を及ぼさない、②戒厳令を解除すれば中共が浸透してくることは明らかである、③国内にはすでに国民党、民社党、青年党が存在して多党政治が実施されているのでこれ以上の政党は必要ない、などとして要求を退けた。これに対して党外は選挙のたびに後援会、編聯会、公政会などの組織をつくり、地方政治を中心に急速に政治への浸透を図っていく⁶⁷。

党外の結党運動に直面した蔣経国は1986年3月、国民党十二期三中全会で「政治革新」を決議して党内に「政治革新十二人小組」⁶⁸を組織し、「党禁」の解除を含む政治改革の具体的な検討に入った。この動きを察知した党外選挙後援会は同年9月27日、台北の丸山飯店で開催中だった党外選挙後援会の候補推薦大会の席上、急遽民進党の結党宣言に踏み切り、蔣経国もこれを黙認した⁶⁹。これは台湾で生まれた最初の政党であり、政党政治に新

⁶² 同上 141-142 頁。

⁶³ 中壢市内の小学校の施設を借りた投票所で責任者の小学校校長が許信良票を故意に汚して無効票にしている現場を発見され、追及を逃れようと警察署に逃げ込んだため、1万人を超える市民が包囲して焼き討ちにした事件。

⁶⁴ 程玉・李福鐘編注『戦後台湾民主運動資料集編(四) 国会改造』(国史館、2001年) 6-7 頁参照。

⁶⁵ 同上 7 頁。

⁶⁶ 同上。

⁶⁷ 同上 8 頁。

⁶⁸ 政治革新十二人小組のメンバーは、嚴家淦、李登輝、俞国華、谷正綱、黄少谷、倪文亜、吳伯雄、宋長志、邱創煥、徐亨、黄尊秋、王亜権の12名。前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯 410 頁。

⁶⁹ 前掲『台湾の政治』157 頁。

しい時代を開き、政治の世界に台湾人の台頭を促した⁷⁰。

青年俊才の登用拡大政策は民意の調達という蔣経国の目的を超え、最終的には自由と民主、台湾ナショナリズムを中心理念とする党外勢力——民進党として結実することになる。言葉を換えて表現すれば、台湾の社会状況が蔣経国の権力を凌駕したと考えるべきで、このことを敏感に察知して民主化にむかった蔣経国の功績とも言えよう。

3-2-2 戒厳令の解除、「報禁」、「党禁」、大陸里帰り訪問の解禁

民進党の結党を黙認した蔣経国は翌 1987 年、台湾における政治と社会の民主化プロセスを矢継ぎ早に進めた。それは中華民国が台湾に遷占して以来、蒋介石が構築した強固な権威主義体制によって組み立てられた中国大陆をも含む幻想としての「中華民国国家体制」を台湾化して現実に合わせての試みであり、それは同時に憲政の確立であり、国民党と中華民国政府の内部から進めた民主「転型」へのプロセスの始動でもあった。7 月 15 日、反乱鎮定動員時期臨時条項（動員戡乱時期臨時條款）を廃止して新たに反乱鎮定動員時期国家安全法（動員戡乱時期国家的安全法）を制定し、1949 年 5 月 20 日以来 38 年間にわたって施行されつづけた戒厳令や「党禁」⁷¹を解除し⁷²、同年 12 月 2 日には翌年 1 月元旦をもって「報禁」（新聞、雑誌の新規発行禁止）も廃止することを決議し、11 月 3 日には大陸への旅行や里帰り訪問が解禁された⁷³。これら一連の民主化プロセスについては、蔣経国はすでに 1982 年、在台米国協会（AIT）台北事務所長の J・リリーに、①台湾を民主化する、②それは「台湾プロセス」として実行する、③みずからの使命として経済的な繁栄を維持する、④対中開放政策を実施する、と語っていた⁷⁴。

蔣経国は 1987 年 7 月 27 日、副総統の李登輝⁷⁵に命じて全国の父老 12 名を茶会に招き、地方の民衆の労をねぎらって意見交換をした。その際、「わたしは台湾に住んで 40 年、もう台湾人です。もちろん中国人でもあります」⁷⁶とみずからの台湾意識を語っている。死去する半年前のことである。

1984 年から 1989 年まで蔣経国政権下で行政院長の重責を担った俞国華は 1996 年 8 月 20 日、中央日報編集長、同副社長、行政院顧問、国立政治大学顧問などを務めた薛心鎔の著作に序を寄せ、蔣経国が総統に在任して最高権力を掌握した時期における台湾の経済発展については具体的な数値を挙げて以下のように評価している。

⁷⁰ 前掲『戦後台湾民主運動資料彙編（四）国会改造』8 頁。

⁷¹ 「党禁」の解除方針は 1986 年 10 月 7 日、蔣経国が『ワシントン・ポスト』紙社主の C・グラハム女史と会見した際に明らかにされた。薛月順・曾品滄・許瑞浩編注『戦後台湾民主運動資料彙編（一）從戒嚴到解嚴』（国史館、2000 年）437-438 頁。

⁷² 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯 463 頁。

⁷³ 若林正丈『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997 年）176 頁。

⁷⁴ Tucker B.Nancy, *China Confidential: American Diplomats and Sino-American Relations 1945-1996*, Columbia University Press, New York, 2002, 420-421.

⁷⁵ 李登輝は 1984 年 3 月 22 日、国民大会で第七代副総統に任命された。前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯 347 頁。

⁷⁶ 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯（行政院新聞局、1992 年）465 頁、吳伯卿主編『蔣故総統経国先生年表』（中国国民党中央委員会党史委員会、1990 年）158 頁、漆高儒『蔣経国評伝——我是台湾人』（正中書局、1997 年）244 頁。このときの父老 12 人は、黄運金、陳啓清、林茂盛、陳章慶、黄崇西、魏火曜、許金特、陳望雄、蔡鴻文、張文正、吳修齊、呂安特の各氏。

民国 73 (1984) 年から 78 (1989) 年にかけて世界経済の振れ幅は甚大で、各国は幾度も不景気の波に襲われた。その間も我が国の経済は堅調に推移し、5 年連続の高成長、低物価、低失業率を達成した。民国 75 (1986) 年の経済成長率は 12.57% で空前の好況を実現し、外貨準備も 74 (1985) 年の約 225 億米ドルから約 463 億米ドルに激増し、76 (1977) 年以降は毎年 700 億米ドル超を維持してきた。物価は安定し、失業率は民国 76 年以来 2% 以下を保った。国民一人当たりの GDP は米ドル換算で民国 72 (1983) 年に 2823 ドル、73 年は 3167 ドルだった。この年 9 月の立法院における施政報告で 77 年の一人当たり GDP は 6000 米ドルに達するだろうと予測したが、その数字は 77 年には 6333 米ドルとなり、予測は繰り上げ達成された⁷⁷。

俞国華はまた台湾の民主化について、国民政府が台湾に遷占して以来止むことのなかった中国大陆（共産党）との厳しい対立状況をふりかえりながら、

民主憲政の推進ということ言えばこれは国民党の一貫した政策で、ただ国家が戦乱のなかに置かれていたために完全には実現できないでいた。過去の 40 年間、台湾は幸運にも安定を保って発展を享受してきたが、依然として共産党の脅威を受け、それがために国家の安全を確保する目的で民主憲政は慎重な態度で漸進的に進めてきた。政府は民主推進の努力を怠ったことはなく、ついに戒嚴令の解除を達成し、党禁を止め、民主選挙を拡大した⁷⁸。

と述べ、蔣経国が権威主義を捨てて民主「転型」を実行したプロセスについて以下のよう証言している。

この間、政府は多年にわたった戒嚴令を解除し、民主政治の目標に邁進し、経済の自由化と国際化を推し進め、我が国を世界の経済状況に適合させ繁栄と成長を維持した。兩岸関係でも大陸への里帰りを開放し、長期の隔離状態を打破した。こうした変化の時期、すなわち国家体質の転型期には幾多の深刻な困難に遭遇しながらも政府の決定と行動は社会の発展と国家の前途に対して決定的な影響を与えた⁷⁹。

蔣経国の地方視察好きは有名だ。ジャンパーに麦藁帽子を被り、ほんの数人の側近をつれて全国の村や町に出かけて行っは屋台で庶民とともに麺や粥をすすって現地情勢や民心の把握につとめた。青年期からソ連で農村ソヴィエトの副主席や工場の副工場長、新聞社の編集長などの職に就いた経験があるので、一党独裁国家では社会末端の状況が粉飾されて上部には正確に伝わらないことを知悉していたのだろう。俞国華はそんな蔣経国が総統在任期間中も平服で全国をめぐり、市井の人たちの意見を聴いてまわったことに言及し、

⁷⁷ 俞国華「序」薛心鎔『変局中的躍進』（正中書局、1996 年）序 4-5 頁。

⁷⁸ 同上『変局中的躍進』序 3 頁。

⁷⁹ 同上序 1 頁。

蔣経国先生はまさにこの精神（＝民主憲政の実現）の体現者で、体力を惜しむことなく各地を巡歴して民衆と親しみ、「人の飢えはみずからの飢え、人の困難はみずからの困難」という気持ちを忘れず、また党内においては同志や政府官員に対し身を粉にして民衆と協力することを説いてまわった⁸⁰。

と証言している。

蔣経国は島嶼部にも頻繁に出かけていた。基隆から船で北西に一晩ほど航行した台湾海峡北部のまっただ中に馬祖列島のもっとも台湾本島寄りの島である東引島がある。東引島の北西約1キロの海上には西引島があり、両島は中柱堤防でつながれている。堤防の中央には中国式の亭（ちん）があり、そこに蔣経国像が鎮座している。蔣経国は国防相に就任してから頻繁に東引島や大陸の福建省に近接した北竿島、南竿島、東莒島、西莒島の最前線に赴き、防衛任務に就く軍民の慰労につとめた。それぞれの島にはやはり蔣経国を顕彰する民族色豊かな建築物や座像があちこちに建立され、島民の蔣経国に対する評判も良い。本島から周辺の島嶼に至るまで庶民に親しまれた最高権力者の人柄がうかがえるエピソードであり、風景である⁸¹。

蔣経国は後継者問題についても生前に確固とした原則を決めていた。1985年12月25日、中華民国七四年行憲記念大会、国民大会憲政研討委員会第二十回全体会議、国民大会代表七四年度年会は共同式典を開催し、そこで蔣経国は談話を発表し「中華民国総統の継承は憲法と選挙で行われ、蔣家の者が選挙で選ばれることはない。我が国は今後軍政による統治を実施することもない」と明言している⁸²。民主「転型」に舵を切り、憲政の発展を希求した蔣経国の矜持であろう。

それを裏付けるように、郭柏村⁸³は「彼（＝蔣経国）は制度の遵守を強調し、誰に後継させ、誰がそれに適任かは語らなかった。後継者を選ぶ意志はなかったようだ」と証言している⁸⁴。蔣経国は後継者の選抜について、あくまでも国民の選挙による選出を考えていた。この方針は1996年3月、初の民選総統として李登輝が第9代総統に選出されて実現した。

党禁、戒厳令の解除、大陸への里帰り旅行、対中貿易の解禁と矢継ぎ早に民主化プロセスを進めた蔣経国は1988年1月元旦、報禁の解除を見届けてから12日目の1月13日午前11時に体調の異変を訴え、午後、大量に吐血して3時50分に永眠した。次のような遺言が残された。

経国は全国国民の付託を受け、三民主義で中国を統一する大業に力を注ぎ、それを国

⁸⁰ 同上序4頁。

⁸¹ 筆者が2009年3月～4月にかけて現地を取材して見聞した。

⁸² 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯（行政院新聞局、1992年）396頁

⁸³ 郭柏村は民国8（1919）年、江蘇省塩城に生まれる。中央陸軍軍官学校砲科、陸軍大学20期、三軍聯合参謀大学、米
国陸軍砲学校高級班、米
国陸軍参謀大学などを卒業。総統府侍従長（民国54年）、国防部作戦参謀次長（民国62年）、同
副参謀長（民国66年）、陸軍総司令（民国67年）、国防部参謀総長（民国71年）、国民党中央常務委員（民国73年）、国
防部長（民国78年）、行政院長（民国79年）、総統府資政・国民党副主席（民国82年）などを歴任した。

⁸⁴ 郭柏村著、王力行採編 『郭総長日記中的蔣経国先生晩年』（天下文化出版、1995年）409頁。

民とともに奮闘することを目標としてきた。万が一に余の天年が尽きたら政府と民衆は反共復国の方策を堅守し、一貫して積極的に民主憲政を推進して欲しい。全国の軍民は国父の三民主義と先の総統の遺訓の指導のもとで一致団結し、最後まで奮闘して大陸の光復を加速し、三民主義で中国を統一する大業を完成させなければならない。このことをとくに遺言する⁸⁵。

この遺囑は逝去する8日前、正月5日に総統府秘書室主任の王家驊によって口述筆記されていた。蔣経国は遺言を口述した際、みずからの寿命がこれほど切迫していたとは考えていなかったと言われる。

蔣経国が逝去した13日晚、中国国民党中央常務委員会は臨時会議を招集し、憲法の規定に従って副総統の李登輝を後継総統に選出した。蔣経国がその最晩年に蒋介石が構築した強固な権威主義体制の土壌を突き崩し、種をまき、その民主化のプロセスは李登輝によって引き継がれ、台湾は動乱も流血も経ることなく政権内部からの意志によって民主「転型」を達成したのである。

小結

本節の冒頭で、蔣経国は晩年になってなぜ政治の民主化を目指したのかという問いを立て、それについては台湾の政治社会状況が国家権力を上まわり、蔣経国はそれに屈服したのではないかという見方と、台湾社会を継続的に独裁するコストが民主化コストを大きく上まわるため、合理的に判断して民主化容認に舵をきったのだ、というふたつの仮説を提示した。1960年代の後半から始まった選挙制度の改革にともなう党外運動の活発化はたしかに独裁政権に対して民主化要求を突きつけ、蔣経国はそれに対して国民党内に「政治革新十二人小組」をつくって改革の方案を探らせ、最終的には民進党の結党を容認した。台湾社会を継続的に独裁するコストが民主化コストを大きく上まわるというのも厳然とした事実で、蔣経国がこのことを真剣に考慮したことも間違いない。また俞国華が証言しているように、民主憲政の推進は孫中山以来国民党の一貫した課題だったが、国家が中共との対峙のなかにおかれていたためにその実現が遅れた、というのもこの間の台湾の歴史をふり返ってみれば事実といえよう。おそらくこれらの要因が時代の進展のなかで複雑に作用しあい、その結果として台湾の政権内部からの民主化が実現したのだろう。いずれにしてもその最終的な決定を下したのは蔣経国本人であり、その意味で台湾の民主「転型」は蔣経国の功績といえよう。

国民政府が台湾に遷占してから民主「転型」を達成する長い過程で、蔣経国はまず国防部総政治部で政工系統としての特務組織を確立し、党による軍隊の掌握につとめた。これは12年間のソ連滞在中に赤軍で軍隊生活を経験し、トルマトコフ中央軍政学院でソ連共産党方式の軍制管理（党軍関係）を学んだことに着目した蒋介石が蔣経国に課した任務だった。同時に政治警察としての総統府機要室資料組を管掌して中共諜報員の摘発や党、軍、

⁸⁵ 前掲『蔣経国先生全集』記事年表下輯 485-486 頁。

政府内における反対勢力の逮捕、拘禁、白色テロなどを秘密裏に実行し、政府に対する転覆活動や蒋介石の政敵排除にもつとめたが、それは蔣経国がソ連時代に左翼反対派の秘密組織に加わって中共モスクワ支部の王明から敵対され、ソ連内政部の密偵に監視され、追われた経験のなかで秘密警察の行動原理を熟知していったからこそ担当できた職務といえる。中国反共救国団を設立して国家と軍隊に貢献する台湾青少年の教育を行い、政工幹部学校とおなじように自派閥を育てる拠点としたことには、江西省贛南における初期派閥の育成時に培った経験が活かされている。蔣経国はまた、「1972 年体制」の苦境から脱するために十大建設を推進して経済の浮揚をはかり権力者としての正統性の調達にも成功しているが、この壮大な建設事業はその雛形がソ連の五カ年計画と新贛南の建設にあったことは明らかである。このように蔣経国の台湾における政治的な功績を振り返ると、多くがソ連経験や贛南の実践のなかにそのベースが存在していることが明確に見えてくる。これが、本論を政治家蔣経国の原点——ソ連経験と贛南の実践とした所以である。

参考文献一覧

1、先行研究 A 類（蔣経国を直接の研究対象としているもの）

< 日本語 >

江南著、川上奈穂訳『蔣経国伝』（同成社 1989 年）

小谷豪治郎『蔣経國傳』（プレジデント社、1990 年）

若林正丈『蔣経国と李登輝』（岩波書店、1997 年）

< 中国語 >

郭晨『蔣経国密碼』（团结出版社、2005 年）

江南『蔣経国伝』（李敖出版社、1988 年）

克莱恩（Ray・S・Cline）編著、聯合報國際新聞中心訳『我所知道的蔣経国』（聯経出版、1990 年）

吳乃德「回憶蔣経国、懷念蔣経国」『二十世紀 台湾民主發展』（国史館、2004 年）407-501 頁。

漆高儒『蔣経国評伝——我是台湾人』（正中書局、1997 年）

朱小平・呉金良『蔣氏家族』上（中国・中国文史出版社、2001 年）

周玉蔻『蔣方良與蔣経国』（台北・麥田出版、1993 年）

蔡省三・曹雲霞『蔣経国系史話』（香港・利通図書、1988 年）

曾聚仁『蔣経国論』（台北・一橋出版、1997 年）

陶涵著、林添貴訳『台湾現代化的推手——蔣経国伝』（台北・時報文化出版、2000 年）

張日新・蔡德予・蔣自強・余福美『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002 年）

張博樹「蔣経国在台湾民主化進程中發揮的作用」『中国憲政改革可行性研究報告』（香港・晨鐘書局、2008 年）156-167 頁。

文思主編『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003 年）

茅家琦『蔣経国的一生與他的思想演变』（台湾商務印書館、2003 年）

方世藻口述「贛南新政、面面俱到」文思主編『我所知道的蔣経国』（中国文史出版社、2003 年）42-63 頁。

方世藻『建設新贛南』上（中国文史出版社、2003 年）

彭哲愚・嚴農『蔣経国在莫斯科』（台北・民進書報社、1986 年）

余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」『中央研究院近代史研究所集刊』（第 29 期、1998 年 6 月）107-130 頁。

余敏令「國際主義在莫斯科中山大学、1925-1930」『中央研究院近代史研究所集刊』（第 26 期、1996 年 12 月）235-264 頁。

羅旋『蔣経国江西伝記』（台北・曉園出版、1989 年）

李敖「蘇聯時期的蔣経国——訪蔣伝作者江南」『蔣経国研究』（李敖出版社、1987 年）113-124 頁。

< 英語 >

Jay Taylor, *The Generalissimo's Son: Chiang Ching-Kuo and the revolutions in China and Taiwan*, HARVARD UNIVERSITY PRESS, 2000

Rai S. Cline, *Chiang Ching-Kuo Remembered: The Man and His Political Legacy*, US Global Strategy Council, 1989

2、先行研究 B 類（蔣経国を直接の研究対象としていないもの）

< 日本語 >

家近亮子『蒋介石と南京国民政府』（慶応義塾大学出版会、2002 年）

岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国研究月報』（中国研究所、1992 年 4 月）8-18 頁。

栗原浩英「コミンテルンと東方・植民地」『岩波講座 世界歴史』24（岩波書店、1998 年）143-162 頁。

段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶応義塾大学出版会、2006 年）

土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部、1999 年）173-219 頁。

土田哲夫「抗戦期の国民党中央党部」中央大学人文科学研究所編『民国後期中国国民党政権の研究』（中央大学出版部、2005 年）105-155 頁。

野沢豊「中国の抗日民族統一戦線」荒松雄他編『岩波講座 世界歴史』28（岩波書店、1971 年）305-338 頁。

ボリス&ドミートリー・スラヴィンスキー著、加藤幸廣訳『中国革命とソ連』（共同通信社、2002 年）

山田辰雄『中国国民党左派の研究』（慶応通信、1980 年）

横山宏章『清末中国の青年群像』（三省堂、1986 年）

林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクスー沖縄・台湾・香港』

松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』（慶応義塾大学出版会、2006 年）

若林正丈監訳、陳明通著『台湾現代政治と派閥主義』（東洋経済、1998 年）]

若林正丈『台湾の政治』（東京大学出版会、2008 年）

< 中国語 >

陳明通『派系政治與台湾政治変遷』（新自然主義、1995 年）

唐寶林『中国托派史』（台北・東大圖書公司、1994 年）

武月星主編『中国現代史地図集』（中国地図出版社、1999 年）

< 英語 >

Alexander Pantsov, *The Bolsheviks and The Chinese Revolution*, UK Curzon Press, 2000

3、一次資料

< 日本語 >

イ・ヴェ・スターリン「中山大学の学生との会談」『スターリン全集』第九卷（大月書店、1953 年）266-295 頁。

イ・ヴェ・スターリン、スターリン「東方人民大学の政治的任務について」『スターリン全集』第七卷（大月書店、1952 年）144-161 頁。

伊地知善継、山口一郎監修『孫文選集』（社会思想社、1989 年）

王覚源『留俄回憶録』（三民文庫、1969 年）

王凡西著、矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』（柘植書房、1979 年）

小野川秀美責任編集「大アジア主義」『孫文 毛沢東』（中央公論社、1980 年）

風間丈吉『モスクー・共産大学の思ひ出』（三元社、昭和 24 年）

何長工著、河田悌一・森時彦訳『フランス勤工儉学の回想』（岩波新書、1976 年）

蒋介石「西安半月記」蒋介石・宋美齡著、高山洋吉訳『新東亜の初幕』（育生社、1939 年）

蒋介石著、寺島正訳『中国の中のソ連』（時事通信社、1962 年）

蔣經國「蔣經國之母への書翰」波多野乾一編『資料集成中国共産党史 第五卷』（時事通信社、1961年）149-157頁。

秦孝儀総編纂『総統 蔣公大事長編初稿』巻一（中正文教基金会、1978年）

宋美齡「西安事変回憶録」蔣介石・宋美齡著、高山洋吉訳『新東亜の初幕』（育生社、1939年）

孫中山「犬養毅への書簡」『孫文選集第』三巻（社会思想社、1989年）319-329頁。

陳立夫著、松田洲二訳『成敗の鑑』上・下（原書房、1997年）

鄭超麟著、長堀祐造ほか訳『初期中国共産党群像1』（東洋文庫、2003年）

対馬忠行編、山西英一訳「中国革命における階級闘争」『トロツキー選集』6（現代思潮社、1961年）1-16頁。

森時彦「フランス勤工儉学運動小史」『東方学報』第五十冊（京都大学人文科学研究所、1978年）

西順蔵編『原典中国近代思想史』（岩波書店、1977年）

ピョートル・ウラジミロフ『延安日記』上（サイマル出版会、1973年）

< 中国語 >

王覚源『留俄回憶録』（三民文庫、1969年）

汪振煌口述「培養嫡系 自建班底」文思・主編『我所知道的蔣經國』（中国文史出版社、2003年）

王凡西著『双山回憶録』（東方出版社＝内部発行、2004年）

郭柏村著、王力行採編『郭総長日記中の蔣經國先生晩年』（天下文化出版、1995年）

何長工著『勤工儉学生活回憶』（北京・工人出版社、1958年）

呉国禎『從上海市長到台湾省主席』（上海人民出版社、1999年）

The People's Tribune(HanKow) 24 April, 1927（『人民論壇報第一版』漢口・1927年4月24日＝蔣經國先生全集編輯委員会編『蔣經國先生全集』全27冊（台湾行政院新聞局、民国81年）

蔣經國「我在蘇聯的日子」克莱恩（Cline）編著、聯合報國際新聞中心訳『我所知道的蔣經國』（聯經出版、民1990年）

蔣經國『蔣総統経國先生言論著述彙編』全15冊（台北・黎明文化、1981年）

蔣經國『蔣総統経國言論選集』全9輯（中央日報、1988年）

蔣經國「我所受的庭訓」『我的父親』（三民書局、1975年）

蔣經國『我的父親』（台北・三民書局、1975年）

沈雲龍編、張之洞著「勸学篇」『近代中國資料叢刊』第9輯（台北・文海出版社、1968年）

秦孝儀他編『総統蔣公大事長編初稿』（財団法人中正文教基金会、1978年）

曾国藩『曾国藩家書 第一巻』（中国・華僑出版社、2000年）

蘇燈基編著『張学良生平年表』（台北・遠流出版、1996年）

漱流「張学良・西安事変懺悔録」『明報月刊』（香港・明報月刊出版社、1968年3-8～10号）

鄭超麟『鄭超麟回憶録』（東方出版社＝内部発行、2004年）

張学良「西安事変懺悔録」『明報月刊』（香港・明報月刊出版社、1968年3-9号）

張国燾『我的回憶』（香港・明報月刊社、1973年）

陳潔如著、汪凌石訳『陳潔如回憶録』（新新聞周刊、1992年）

陳立夫『成敗之鑑——陳立夫回憶録』（台北・正中書局、1994年）

中国第二歴史檔案館編『蒋介石年譜初稿』（檔案出版社、1992年）

卞孝萱「留仏勤工儉学資料」『近代史資料』第二期（中国社会科学院、1955年）

編者不明「卓宣致碩夫同志書」『共産主義研究会通信集』第三集（発行主体不明、1923年）

毛思誠『民国十五年以前之蒋介石先生』（香港龍門書店、1965年影印初版）

毛沢東『毛沢東選集』（人民出版社、1991年）

李能梗「外交生涯回憶」『新聞天地周刊』（香港、1965年2月13日～20日号）

劉維開編輯『中国国民党職名録』(中国国民党中央委員会・党史委員会、1994 年)

魯迅『魯迅全集』(北京・人民文学出版社、1973 年)

4、二次資料

<日本語>

アグネス・スメドレー著、高杉一郎訳『中国の歌ごえ』(みすず書房、1957 年)

エドアルド・シェワルナゼ著、朝日新聞外報部訳『希望』(朝日新聞社、1991 年)

NHK 取材班・臼井勝美『張学良の昭和最後の証言』(角川文庫、1995 年)

小野川秀美『孫文 毛沢東』(中央公論社、1980 年)

風間文吉『モスコー・共産大学の思ひ出』(三元社、1949 年)

加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007 年)

北岡伸一『後藤新平』(中公新書、1988 年)

小島淑男『留日学生の辛亥革命』(青木書店、1989 年)

斉藤哲郎『中国革命と知識人』(研文出版、1998 年)

嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』(研文出版、1994 年)

さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』(くろしお出版、1970 年)

サンケイ新聞社編『蒋介石秘録』(サンケイ出版、1975 年)

島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波新書、1967 年)

スカラピーノ R. A、ユ－G. T 著、丸山松幸訳『中国のアナキズム運動』(紀伊国屋書店、1970 年)

ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史』上
巻(大月書店、1973 年)

立花隆『日本共産党の研究』(講談社文庫、1983 年)

鄭超麟『初期中国共産党群像』(東洋文庫、2003 年)

董穎光著、寺島正他訳『蒋介石』(日本外政学会、昭和 31 年)

ドナルド・キーン著、金関寿夫訳『日本人の美意識』(中公文庫、199 年)

ハン・スーイン著、川口洋訳『長兄——周恩来の生涯』(新潮社、1996 年)

松谷浩尚『イスタンブールを愛した人々』(中公新書、1998 年)

松本充豊「台湾」岸川毅、岩崎政洋編『アクセス地域研究 1 民主化の多様な姿』(日本経済評論社、
2004 年) 133-154 頁。

丸山松幸『中国近代の革命思想』(研文出版、1982 年)

宮崎市定『中国文明の歴史 11 中国のめざめ』(中公文庫、2000 年)

村田雄二郎「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」西村成雄編『現代中国の構造変動』
3 (東京大学出版会、2000 年) 35-68 頁。

山室信一『思想課題としてのアジア』(岩波書店、2001 年)

横山宏章『清末中国の青年群像』(三省堂、1986 年)

横山宏章『中国近代政治思想史入門』(研文出版、1987 年)

丸山松幸『中国近代の革命思想』(研文出版、1982 年)

劉維開編輯『中国国民党職名録』(中国国民党中央委員会・党史委員会、1994 年)

<中国語>

何長工著『勤工儉学生活回憶』(北京・工人出版社、1958 年)

胡華『青少年時期的周恩来同志』(中国青年出版社、1977 年)

黄福慶『清末留日学生』〔中央研究院近代史研究所專刊 (34)、1975 年〕

謝忠良、王健民、童清峰「KGB 档案重繪青年蔣経国」『亞洲週刊』(香港、1998 年 1 月 26 日～2 月 8
日合併号)

自由中国社編「今日の問題」『自由中国』（台北・自由中国社、1958年）
陳三井『華工与欧戰』（台湾中央研究院近代史研究所、1986年）
沈醉著『戴笠其人』（中国・中国文史出版社、2001年）
沈醉『軍統内幕』（中国・中国文史出版社、2001年）
朱小平他著『蒋氏家族』（中国・中国文史出版社、2001年）
盛岳『莫斯科中山大学和中国革命』（中国・東方出版社、内部発行、2004年）
周玉蔻『蒋方良與蒋經国』（台北・麥田出版、1993年）
中国青年反共救国团總团部編印『綠旗漂揚三十年』（中国青年反共救国团總团部、1982年）
程玉・李福鐘編注『戰後台湾民主運動資料彙編 国会改造』（国史館、2001年）
趙淑敏『吳稚暉伝』（雨墨文化、1994年）
陳美娟『戴笠新伝』（台北・国際村文庫、1996年）
陳三井『華工与欧戰』（台湾中央研究院近代史研究所、1986年）
陳楚君著『特工秘聞』（中国・中国文史出版社、2001年）
唐寶林『中国托派史』（台北・東大圖書公司、1994年）
馮自由『革命逸史』（台湾商務印書館、1969年）
武月星主編『中国現代史地図集』（中国地図出版社、1999年）
俞国華「序」薛心鎔『変局中的躍進』（正中書局、1996年）
李喜所『近代中国的留学生』（北京・人民出版社、1987年）
李世傑『調查局研究』（李敖出版社、1988年）
李宗侗「旅法雜憶」『伝記文学』第一期第三期（台湾伝記文学出版社、1962年8月1日）
黎東方『蒋公介石序伝』（台北・聯經出版、1976年）

< 英語 >

Samuel P. Huntington, *THE THIRD WAVE: Democratization in the Late Twentieth Century* (University of Oklahoma, 1991) 〔坪郷實・中道寿一・薮野祐三訳『第三の波』（三嶺書房、1995年）
Tucker B. Nancy, *China Confidential: American Diplomats and Sino-American Relations 1945-1996*, Columbia University Press, New York, 2002, 420-421.